浦東地区開発計画に伴う価値意識の変化に関する研究

－日本・中国の国民性比較のための基礎研究－

課題番号：07041047

平成７年度～平成９年度文部省科学研究費補助金
国際学術研究　研究成果報告書

平成１０年３月

研究代表者　　飽　戸　　弘
（東洋英和女学院大学）

謝辞

本報告書は、文部省科学研究費補助金（国際学術研究）及び、二十一世紀文化学術財団の学術奨励金を受けて行われた研究をまとめたものであり、深く感謝いたします。

また、この研究を進めるにあたり、研究協力者のほか、中国からの留学生の方々に大変お世話になった。特に、東洋英和女学院大学大学院生　楊静佳には、ケーススタディ報告などの翻訳ばかりでなく、様々な上海と東京の連絡を助けていただいた。東洋大学大学院生　戴智軻には、たくさんの翻訳や、東京会議の通訳をしていただいた。劉啓宇（埼玉大学卒業生）、慶応大学大学院生　杜新　は、上海会議、東京会議で通訳をしていただいた。これらの諸氏の助けなくては、報告書の完成に至らなかった。その他にも、日中研究者間の研究連絡のための通訳翻訳などを、何人かの留学生諸氏に手伝っていただいた。心から感謝している。また、同僚の東洋英和女学院大学専任講師　韓敏氏、東京女子大学非常勤講師　西条正氏、など、その他にも大勢の方にお世話になった。御礼申し上げます。

研究メンバー

研究代表者	飽戸　弘
共同研究者	林　知己夫
	鈴木　裕久
	岩男　寿美子
	林　文
	中村　雅子
	是永　論
	Godwin C. Chu
	呉　聖苓
	胡　申生
研究協力者	仇　立平
	国広　陽子
	佐渡　真紀子

目　次

序　本研究の目的と経緯　　飽戸弘　1

第Ⅰ部　浦東住民調査と上海工場従業員調査

1．浦東新区の歴史的概観　　胡申生　9

2．調査方法とデータの質の検討　　林　文
2.1　浦東住民調査の地点の特性　15
2.2　上海工場従業員調査の特性　22
2.3　浦東住民調査と工場従業員調査の比較上の注意　26
2.4　まとめ　32

3．浦東住民の意見と態度と意識構造（浦東住民調査）
3.1　浦東住民調査の概要　35
3.2　家族のなかの人間関係　　岩男寿美子　36
3.3　職場・リーダーシップ　　林　知己夫　46
3.4　家族関係と価値意識　　中村雅子　50
3.5　カウンターカルチャー　　飽戸　弘　56

4．工場従業員の意見と態度と意識構造（上海工場従業員調査）
4.1　上海工場従業員調査の概要　63
4.2　結婚・家庭・男女　　岩男寿美子　64
4.3　宗教　　岩男寿美子　74
4.4　社会における人間関係　　鈴木裕久　76
4.5　勤労観　　国広陽子
佐渡真紀子　83
4.6　職場の人間関係　　仇　立平　99
4.7　リーダーシップ　　林　知己夫　110
4.8　家族関係と価値意識　　中村雅子　113
4.9　カウンターカルチャー　　飽戸　弘　119
4.10　カウンターカルチャー共感尺度　　飽戸　弘　120

5．諸調査の比較・国際比較から見える中国の姿

5.1　上海・浦東調査の時系列変化　飽戸　弘　Godwin C. Chu　127

5.2　ライフスタイルの基本構造　飽戸　弘　140

5.3　家族関係と価値意識　中村雅子　146

5.4　結婚、家庭　岩男寿美子　152

5.5　リーダーシップ　林　知己夫　157

5.6　回答選択率からみた地域差　林　文　173

第Ⅱ部　ケーススタディにみる浦東住民意識の変化

1．Social Impact of Rapid Economic Development
-Micro and Macro Ramifications of Pudong Study-　Godwin C. Chu, Hiroshi Akuto　180

2．中国側研究者によるケーススタディ分析　呉　聖苓　胡　申生

2.1　「私は浦東人だ」　197

2.2　「私たちは浦東開発開放の受益者だ」　201

2.3　「調和安定は浦東新区家庭夫婦関係の実態　206

2.4　睦まじい家庭は万事うまくいく　210

2.5　近隣関係：地域社会の精神文明度を測る物差し　213

2.6　その他　216

資料編

浦東住民調査質問票日本語簡訳と単純集計　219

工場従業員調査質問票日本語簡訳と単純集計　227

調査質問票オリジナル　247

序　本研究の目的と背景

中国は、今、激動のなかにある。鄧小平の改革開放政策によって、毎年、２桁台のＧＤＰの伸びを示すという驚異的経済成長を遂げ、都市部での生活はここ４－５年で、まったく見違えるように、豊かになった。しかし、農村部の経済状況は以前とあまり変化なく、貧しいまま残され、都市と農村との経済格差、生活状況のギャップが、大きな民衆の不満を呼んでいる。政治への関心も薄れ、政治より経済、という層が増えてきているようだ。北京から離れるほど、政治への関心は希薄になるとも言われている。こうして、中国は、生活実態、価値・ライフスタイルのすべてにおいて、いま、大きく変化しようとしている。このような時期に、浦東調査調査は企画され、実施された。従って、浦東調査は、激動の中国を見事にとらえた画期的研究となった、と自負している。

本研究は、さまざまな困難の中で実施されたが、浦東地区の開発の初期から発展に至る経過を、とらえることができた。はじめに本研究の経緯について、簡単に触れておこう。

本研究は、本研究とほぼ同じメンバーにより、行われた「上海調査」からの発展として、１９９０年に、スタートしたものである。「上海調査」は、１９８７年、共同研究者の一人、East West CenterのGodwin C.Chuと、当時、復旦大学に在職していた Shengling Wu を中心に、復旦大学の研究グループによって行われた Cultural Valuesに関する包括的意識調査であった。その結果は、Godwin Chu& Yanan Ju, The Great Wall in Ruins, 1993.として、出版されている。

上海調査の実施された直後に、Chuは、この調査をふまえて、Cultural Valuesについての日中比較の研究をスタートさせる可能性を打診するために、日本を訪れている。飽戸弘と林知己夫が日本調査のチーム作りと準備、その他、全面的に協力して、日中比較研究がスタートする事となった。そして、１９９０年に「東京調査」を実施する事ができた。この「東京調査」の概略については、Hiroshi Akuto, Godwin Chu, & Chikio Hayashi, Continuity and Change in Japanese Culture, Journal of Communication Arts, 1991.として刊行されている。

こうして、この日中比較研究の第一報は、「上海調査」と「東京調査」を比較した、当時としては画期的なレポートとなったが、これが、Godwin Chu, Chikio Hayashi, & Hiroshi Akuto, Comparative Analysis of Chinese and Japanese Cultural Values, Behaviormetrika, Vol.22, NO.1, pp.1-35, 1995.である。

これらの研究によって、予想通り、同じアジアの中の２つの国、日本と中国が、価値・ライフスタイルに関しては、著しく異なる国民であることが、確認された。日本と中国で

の価値・ライフスタイルの違いは、日本とアメリカよりも遙かに大きな違いが見られることも、明らかにされている。

しかも登小平による改革開放路線によって、当時、中国における価値・ライフスタイルはさらに大きく変化していくであろうことは、十分、予想されていた。そこで、改革開放の一つのモデル地区として発展が大いに期待さてていた先進的地域、浦東地区において、価値意識の研究を行なうことにより、先行の上海調査と併せて、中国人の意識の変化を、より的確に捉え、予想することができる、と考えた。

こうして、われわれの浦東調査の計画がスタートし、文部省の科学研究費補助金（国際学術研究）、および二十一世紀文化学術財団の援助により、その実現が可能となった。

本研究は、１９９５－１９９７年の３年間、国際学術研究の援助を受けて、２回の東京会議、４回の上海会議の準備、企画会議を経て、３つの調査が行われた。

＜第１調査＞　「事例研究」

以下のすべての研究の出発点となる、詳細な事例研究が、浦東地区住民に対して、行なわれた。浦東地区に住む人たちの、生活実態、家族状況、仕事と余暇、そして人生観など多岐にわたる価値・ライフスタイルについて、１２０ケースの「詳細面接」調査を行なっている。

＜第２調査＞　「浦東調査」

これが浦東住民、１０００サンプルに対する価値・ライフスタイルに関する包括的な意識調査である。事例研究から得られたさまざまな仮説を実証的に検証するとともに、１０年前の「上海調査」、及び、日本で行われた「東京調査」とも、比較できるように設計されている。

＜第３調査＞　「工場調査」

これは、国有企業、集体工場・企業、合資企業に働く人々、１０５４名に対し、価値・ライフスタイルについて、特に勤労観、職場観に重点をおいて、さまざまな職場での人々の意識の差を検討することを目的にした意識調査である。

国有企業の従業員は、政府や党の意向にもっとも忠実な人々と考えられる。集体工場・企業は、主として農民や労働者が自分たちで始めた小規模な工場、商売のために働いている人々で、比較的考え方も柔軟で、自由であると、考えられる。合資企業は、日本、アメリカ、香港、台湾などが、中国政府と協力して始めたベンチャービジネスに勤める人々。外国の価値・ライフスタイルの影響を受けた、もっとも意識の柔軟な人々と考えられた。

このような職場環境の違い、より広く社会環境の違いは、人々の価値・ライフスタイルに影響を与えるであろう。特に、合資企業などの人々で意識の変化が起こり、それが一般大衆に広がって行くのではないかと考えられた。そうした意識の落差、そしてその伝搬の

様相についても追跡していきたい、これが工場調査の意図である。

次章で検討しているように、上海調査、浦東調査、工場調査は、いずれもサンプリングや調査対象者の構成などにおいて、若干のずれが生じていて、厳密な比較は難しいという側面はある。しかし、ここ、１０年間での意識の激動、そして、諸外国との比較における、中国人の特徴は、そのような誤差や偏りを遙かに越えた、驚くべき差異であり、本報告所におけるような基本的考察においては、ほとんど問題はないと考えている。ただし、詳細な比較を試みるようなときには、データの質についての慎重な配慮が必要であろう。

報告書は、原則として、第Ｉ部、浦東住民調査、工場従業員調査、比較研究、第Ⅱ部、事例研究、と、分けてまとめることにした。これは上述のように、各調査それぞれ、対象、サンプリングなどがずれているため、それぞれ別々に、考察することにした。ただし、主題によっては、浦東調査を中心にし、工場調査は、ごく簡単に参照した考察、または逆に、工場調査を中心に、浦東調査は簡単に比較参照した程度の考察もある。主題によってそれぞれ特徴があるので、その趣旨を理解いただいて、読み進まれたい。

本研究はその後、韓国、台湾など、その他のアジア諸国においても、実施されており、現在膨大な資料の分析中である。また中国においても、上海以外の地域へと広げて行く計画である。今後の発展を期待されたい。

本研究が、アジアにおける相互理解の増進と、相互誤解の回避、低減に役立つ研究となることを期待し、こうした研究をさらに刺激することができるよう、祈念している。

＜文献＞

Godwin Chu& Yanan Ju, The Great Wall in Ruins, --- Communication and Cultural Change in China, State University of New York Press. 1993.

Hiroshi Akuto, Godwin Chu, and Chikio Hayashi, Continuity and Change in Japanese Culture, Journal of Communication Arts, pp.91-96, 1991.

Godwin Chu, Chikio Hayashi, & Hiroshi Akuto, Comparative Analysis of Chinese and Japanese Cultural Values, Behaviormetrika, Vol.22, NO.1, pp.1-35, 1995.

第Ⅰ部　浦東住民調査と上海工場調査

1．浦東新区の歴史的概観

胡　申生

1．浦東新区の歴史的概観

胡　申生

1990年４月18日に李鵬総理は中国政府の代表として浦東開発開放することを宣言した。1993年１月１日浦東新区行政区を正式に設立、浦東新区の大部分の面積を占める川沙県を廃止した。浦東新区に関する統計数字はこの 1993年１月から始まる。

1.1　行政区沿革

浦東新区は、元来の川沙県に属する 29個の郷と鎮、上海県管轄の１つの郷及び上海市の楊浦、黄浦、南市の３つの区からなっている。浦東新区は周家渡 11街道、高橋鎮などの５鎮と施湾など 27の郷にわけられ、さらに、高橋保税区など５つの開発区がある。総面積は 522.75平方キロメータである。

浦東環境は、1810年（清嘉慶15年）川沙民庁設立、その後、１庁（川沙庁）と３県（上海、南汇、宝山）に分けて管理されている。1928年（民国 17年）上海特別市成立後、西は楊思、東は高橋川沿い（黄浦江）地区、上海特別市に属する。1949年後、南汇県の北部地区川沙県に加入した。このとき３区２県となった。1952年、楊思、洋涇区川沿い一帯は東昌区となった。1956年、楊思、洋涇、高橋、３区あわせて東郊区とした。1958年、東郊、東昌あわせて浦東県が成立した。同時に上海と川沙両県は、もとの江蘇県から上海市に所属することになった。すなわち、上海市の浦東、川沙、上海３県になった。1961年、浦東県を廃止、農村地区は川沙県管轄下となった。川沿いの地区は上海市の南市と黄浦、楊浦３区として管轄する他、他の地区は川沙と上海両県に属することになった。これから３０年間、制度は基本的に変化がない。1992年、上海県と閔行区を合併して閔行区が成立、今日に至るまで現新区は４区１県に分属している。1993年１月１日から、国務院は、元来の４区１県管轄地を浦東新区に管轄することを批准した。同時に浦東管委員会が成立した。

浦東新区の農村地区は主に旧川沙県を指す。1957年、川沙県は１鎮 13郷。1958年、公社(農村)運動があったとき、11の人民公社に改訂された。1961年、浦東県を廃止し、10の人民公社と高橋など３鎮の管轄となった。浦東新区管轄以前、川沙県が管轄したのは、城厢、高橋２県に属する鎮、北蔡１つの郷級の鎮と施湾等26郷である。

1.2　人口

1993年の統計によると、浦東の総戸数 486,325戸、143.73万人、各戸平均３人、全区の人口の密度は１平方キロあたり 2749人である。

1994年の統計によると、浦東総人口 146.20万人、全市人口の 11.26%を占める。社会労働者人口は 105万人、新区の総人数の 71.82%を占める。そのうち、国営企業労働者数は

76.71万人、個人労働者は 3.57万人、農村集体労働者 24.71万人、105万人の労働者の就業構造から見ると、第1次産業は 4.43%、第2次産業は 59.0%を占める（その中、製造業は 49.74%、建築業は 6.41%）。第3次産業は 36.57%であるが、その中、社会サービス業の占める率は高く 34.27%であり、次が交通運輸、郵便通信、銀行で 10.83%、卸（小卸）、飲食は 20.49%、教育と文化芸術、マスコミ 7.06%である。

1995年の統計によると、新区全体の人口は 148.2万人、城鎮人口（戸籍に基づく、以下同様）は 118.1万人、農村人口 30.1万人、同期人口総数に占める割合は、それぞれ 79.2%と、20.3%で、城鎮人口の割合は、新区成立時の 57.3%から 79.7%に上昇、上昇率は 22.4%、農村人口は新区成立時の 42.7%から 20.3%に下がり、その率は 22.4%である。

城鎮人口の増加の主な理由が2つある。1つは転入人口であり、国の政策で浦東の建設計画のため立ち退き住民を浦東へ移転させたことである。1994年に浦東に転入した住民数は計 52953人、1995年は計 54560人、人口転入率は1994年は 16.02%、1995年も前年とほぼ同じである。第2の理由として、1995年3月に郷が鎮に変わったため、28万人が農村戸籍から城鎮戸籍になったことである。1995年の城鎮人口は1994年の総人口より 19.5%増え、同期人口の増加率は大変大きい。

人口の集中と構成ははっきり層別される。半数近い人口、すなわち総人口の 47.3%、城鎮人口の 59.3%が、新区総面積の 6.49%に住んでおり、面積 33平方キロの古い城区の人口密度は1平方キロあたり 1.2万人である。これらの地区はもともと市区管轄で、浦西と川一つで隔てられているが、社会と経済の発展は浦西とほとんど変わらない。これはもともと都市化地区であり、建成区とみてもよい。

残りの 40%の城鎮人口は、32の建制鎮に住んでいる。そのうち、工業化城鎮、高橋鎮は城鎮人口の 99.97%であり、人口密度は1平方キロあたり 1.9万人、都市化地区の人口密度に近い。

新区の大部分の土地は農地で、農業人口の割合は、年毎に下がっている。1990年、新区には 52.27万人、総人口の 39.0%から1995年の農業人口 38.9万人に減少した。同期総人口の 26.2%、減少率は 12.7%である。農業人口が非農業人口になったのは、農地を接収して農民を城鎮人口にさせたことが大きい。1995年、農地を接収された農民は 1.69万人、6年合計すると農業人口から吸収し、工場に分配、あるいは年金を支給するようになった農業人口は 11.93万人である。

わが国の戸籍制度の特殊性と郷鎮企業の発展によって、農村労働力の中に、実際に農業を営む人は農村労働力よりはるかに低い。1994年、新区の社会労働者数は 105万人で、そのうち、農村労働者は 24.7万人だが、農業・林業・牧畜業・漁業に従事する農業労働者数はわずか 4.46万人、社会労働力総数の 4.5%を占めるにすぎない。1995年、社会労働者数は 108万人に増加しているが、そのうち農村労働者は 24.26万人、農業労働者は 4.76万人

で、農業労働者数はわずかに上昇しているが、割合では1994年より 0.1%下がっている。

1.3 収入

統計によると、1994年の浦東新区労働者の収入総額は 80.30億元、前の年より 32.22%増加した。一人当たりの収入は 9995元で 26.4%増加した。同期農民総額は 20.60億元で、1人あたり 4148元、16.4%増加した。1978年以前は、浦東新区は上海や全国の他の所と同じであり、国家幹部は行政級別俸給制度、労働者は8級の工資俸給制度を実施し、農村の農民は、联産承包（一定以上は生産高により増額される俸給制度）である。これによって社会全体に収入が低かった。1979年から1990年の浦東開発開放前まで、浦東は中国の他の地方と同じだったが、改革開放後、都市の住民も農民も収入は明らかに高くなり、家庭の経済状況も明らかに良くなった。1990年4月18日、政府が浦東開発開放を宣言して以来、浦東新区の範囲に入る労働者と住民の収入は大きく変化し、特に金融、保険、商業、貿易等に働いている労働者の収入は大幅に変わった。例えば、ケーススタディの 129番では、改革開放前（1979年）の夫婦の総収入は 6,000元、改革解放後（1994年）の夫婦の総収入は 60,000元、その差は10倍である。浦東新区の住民の収入は、1978年以前＜1979年～1990年＜1990年以降、というようにみることができる。国家の改革開放政策と浦東の改革開放は、浦東新区住民の生活改善に新しい活力を与えたのである。

２．調査方法とデータの質の検討

林　文

2.1　浦東住民調査の地点の特性
2.2　上海工場従業員調査の特性
2.3　浦東住民調査と上海工場従業員調査の比較上の注意
2.4　まとめ

2．調査方法とデータの質の検討

2.1　浦東住民調査の地点の特性

(1)　調査実施の概要

浦東住民調査は、上海浦東新区の８つの地域をとりあげて、各地域の住民約125人ずつ計1000を対象とした調査である。調査実施は1995年３月から４月にかけて、調査票に基づく訪問面接聴取法でなされた。８つの地域の選択、それぞれの地域でのサンプル抽出、調査実施は、上海チームがあたった。日本チームは、統計的標本抽出法に基づく調査を期待し、ランダム抽出の方法を中国チームに依頼した。地域毎の住民名簿も用いることができるということであり、個人単位で等間隔に抽出するようサンプリング方法について了解を得ていた。しかし、実際には日本チームは多少の疑問を持っている。つまり、回収された1000サンプルは、対象者の不在や拒否などによる調査不能が全くなく、回収率が100%という報告であることも、日本におけるランダムサンプル調査では考えにくいものである。上海チームによると、無記名調査であったため拒否が無かったという説明であった。実際のサンプリング手順について日本チームに納得のいく説明報告がなされないのは、中国の諸事情によって計画したランダム抽出ができなかった可能性も否めない。年齢分布をみると40歳台が多いことなど、住民全体の年齢分布からは偏っていると考えられる。名簿を使って等間隔に対象者を選んだにしても、個人単位ではなく、世帯単位であり、世帯主世代が多くなったようである。ただし、男女は偏らないように注意して割り当ててあり、各地域125人程度に達するまで回答者を集めた、ということではないだろうか。（全く恣意的に回答者を選んだものでもないようである。）

この８地域は、中国チームが社会学的な観察からつかんでいた特性によって、選択されている。その特性および調査結果による回答者の様々な属性分布からみた特性を(2)(3)にまとめることとする。

また、それぞれの地域の母集団であるべき範囲も人口も明らかにされていないので、各地域の抽出率がわからず、８地域のサンプル全てを足した1000サンプルでの集計は８地域全体の住民の回答を予測できない。まして浦東住民全体の回答を示すものでもない。しかし、各地域での特徴を比較することはでき、合計はその各地域の大きさが同じと考えたときの平均値として見ることはできる。各地域の違いがそう大きくなければ、浦東住民全体とそう違った比率ではない、という程度のものと考えるべきである。

調査対象に選ばれたのは次のＡ～Ｈの８地点であり、上海共同研究者によって次のような特徴があげられている。数字はサンプル数で、合計1000人である。

A 100人：崂山東路（高層建築群、住民の家庭の経済的条件と文化水準は比較的に良く高い）

B 149人：東昌路（旧式の町、平屋。浦東の黄浦江一帯の地域にある。住民はほとんどごく普通の庶民。職業は様々で、経済条件は中程度）

C 125人：滬東新村（市営団地で多層建築、住民の大部分が普通労働者で、生活水準は普通。文化水準も高くない）

D 124人：金楊路（住民は皆、以前は金橋郷の農民である。農地は買収されたが、住居はまだ移ってない。浦東の市民の身分になっているが、生活方式はまだ農民的）

E 126人：周家渡（ほとんどが簡単な平屋。住民の多くが貧困である。職業も社会的に知られていない仕事ばかりである。生活条件は悪く、文化水準も低い）

F 124人：洋泾（以前は農村の一つの鎮であり、都市と農村の結合部、一方では、浦東改革開放以後、多くの浦西住民が入っており、海運学院の一部教職員もここに住んでいる）

G 125人：浦東大道高庙地域（住民は元来は農民。沿江に住んでいるので、農民も工場労働者もいる家庭になった。自分達で造った平屋は後に政府が資金を出して建て直され、多層ビルになった。この住民は互いによく知っており、住居の構造が変わっても人間関係の変化はほとんどなし）

H 127人：潍坊（新しい団地、ほとんど多層住ビル）

注）高層ビルとは７階以上、多層ビルとは６階までをいう

(2) 地域別の調査対象サンプルの基本属性

８つの地域の特徴は調査質問項目の地域に関する回答から知ることができるが、その回答者がどのような個人特性を持っているかをみておかねばならない。

まず、全体1000サンプルの年齢分布をみると、20歳未満3%、20歳台12%、30歳台22%、40歳台31%、50歳台14%、60歳以上18%であり、世帯主世代が多く調査されている。これは８つの地域どこでも同じ傾向で、30歳代が30%程度から40%程度と、その世代に集中している。Ｇ地域のサンプルは年齢の高い方に偏り、Ｆ地域のサンプルは若い方に偏っている。性別は全体1000サンプルでは男女半々だが、Ｆ地域では男性が６割強、Ｄ地域とＥ地域では女性が６割弱というのが目立った差である。さらに性別×年齢分布をみると、50歳以上での男女の割合の差が大きく、Ｅ地域とＧ地域の50歳以上は３分の２以上が女性、Ａ地域とＦ地域では３分の２が男性である。しかし、それぞれの年代における男女比のこの程度の偏りは、ランダムサンプルだとして起こり得る程度の差をわずかに外れる程度である。

このような性別年齢別分布の特徴を持ったサンプルであることを認識して、その回答か

ら地域別サンプルのその他の特徴を読みとることとする。

まず、職業であるが、全体1000サンプルで最も多いのが工員34%であり、次に多いのが退職者あるいは休職者で19%、以下、管理職が12%、商業者7%、教師4%、学生4%、公務員4%、技術者3%、企業家2%、医療者2%、司法関係1%、その他が8%である。

地域別の特徴をまとめるとつぎのようになる。A地域は他の地域よりも工員が少なく公務員や教師や管理職が多い。C地域とE地域は工員が他地域より多い。D地域は「その他」が非常に多く3割もある。F地域は工員は少な目で、商業者が他地域より多い。教師や学生も他地域と比べて多い方であり、少ない司法関係者は1人を除いてこの地域に属する。G地域は退職者休職者が多く3割を占めるが、この地域のサンプルは年齢が高い方、しかも女性に偏っており、それと関連した特徴といえる。B地域、H地域は平均的である。

学歴はどうか。A地域は大学卒以上が43%、高等中学卒が44%、初等中学卒までは13%で、目立って学歴が高い。サンプルの学歴の高い順に地域を並べると、F、H、G、B、C、E、Dである。D地域は小学卒までが28%、初等中学卒が52%、高等中学卒が14%、大学卒以上は5%である。A地域とD地域のサンプルの学歴分布の差は非常に大きい。

(3) 調査結果からみる8地域の特徴

調査対象に選ばれたA～Hの8地点の特徴は、上海共同研究者によってあらかじめ掴んであったのであるが、調査結果としてサンプルの回答から、それぞれの地域の特徴を確認する必要がある。

まず、住宅の形態、転入以前の身分、転入の時期については図表2-1-1のとおりである。住宅形態は、旧式の平屋の密集地域や、新しく建設された中高層住宅地域など、大きな差があり、地域特性として重要である。

D地域は、改革開放で浦東が農村から都市となり、もとは地元の農民であった住民が市民となり、新しく建設された多層住宅に転入したということである。B地域、E地域、F地域は、改革開放政策の計画以前からの転入者が、密集した平屋に住んでいるところである。F地域は、中国研究者による特徴として一部は浦西からの居住者とあったが、実際にはあまり多くない。G地域、H地域は、1980年代の浦西や浦東からの転入者だが、G地域は立ち退き地域となり、近隣関係をほぼそのままに新しい多層住宅に入ったところである。H地域は多層住宅だが、新しい建築とそうでない建築のところを含む。

住まいの広さを地域別の平均値でみると(図表2-1-2)、D地域、F地域は他に比べて広い。E地域、F地域は平屋である。D地域は新しい多層住宅である。高層住宅のA地域も一人当たりの面積は広い方である。

図表2-1-1　地域別居住状況（転入以前の身分、転入時期）　（%）

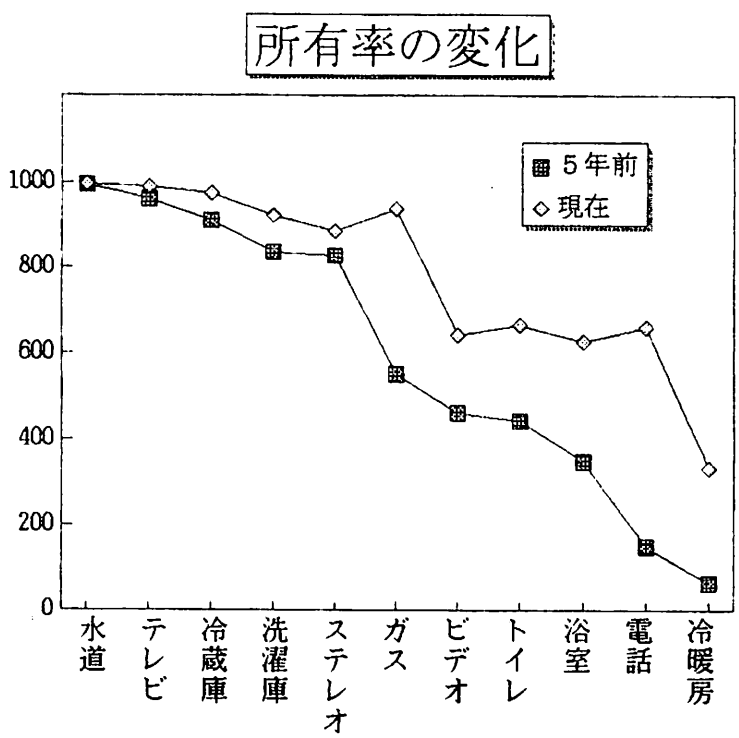
		A	B	C	D	E	F	G	H
調査対象人数		100	149	125	124	126	124	125	127
住宅の形態	長屋	0	3	0	2	0	3	0	1
	平屋	1	79	0	0	98	90	0	1
	多層住宅	0	1	100	97	1	4	100	95
	高層住宅	99	17	0	0	0	0	0	2
	仮設住宅	0	1	0	0	0	2	0	0
	その他・不明	0	0	0	2	1	2	0	2
転入前の身分	地元農民	1	0	2	87	1	0	0	2
	浦西住民	69	27	25	2	15	7	47	55
	浦東市民	22	62	67	9	64	86	50	37
	他省住民	7	9	3	0	8	5	0	1
	他・不明	1	1	2	2	12	2	2	4
転入時期	1981年以前	0	64	32	0	82	69	0	2
	1982～1991年	4	12	24	7	14	19	86	91
	1992年以降	96	21	44	93	5	9	14	6
	不明	0	3	0	0	0	3	0	0

図表2-1-2　地域別住宅の広さ

		A	B	C	D	E	F	G	H
調査対象人数		100	149	125	124	126	124	125	127
部屋数	平均(室)	2.03	2.13	1.70	2.60	2.39	2.47	1.99	1.91
	最小	1	1	1	1	1	1	1	1
	最大	4	8	4	8	6	9	3	4
延べ面積	平均(㎡)	28.3	28.6	23.1	37.0	42.3	36.3	27.4	24.9
	最小	14	10	13	12	9	6	14	12
	最大	68	100	69	240	150	170	52	50
面積／人	平均(㎡)	9.22	7.54	7.46	11.07	10.21	9.84	7.71	6.70
	最小	5	2	3	4	3	2	4	3
	最大	27	30	20	50	50	34	17	15

家の設備はどうであろうか。５年前と現在の地域別の普及状況を図表2-1-3に示した。水道はどの地域も５年前から普及しており、ほぼ完全に行き渡っている。ガス／ＬＰは５年前はＧ地域ではほぼ普及しており、Ｂ地域やＥ地域では２割程度と地域によってかなりばらつきがあったが、現在はどの地域でも９割近くに普及した。トイレは、平屋のＢ地域、Ｅ地域、Ｆ地域では２割程度しかなく、その他の地域ではほぼ全戸に普及している。Ｇ地域とＨ地域は５年前から９割前後あったが、Ａ地域とＣ地域では７割弱であった。浴室も似た傾向で、５年前はＧ地域が９割とＨ地域が８割、Ａ地域が５割程度、その他は３割以下であったものが、現在は、Ｇ、Ｈ、ＡとＤ地域が９割以上、Ｃ地域が７割である。Ｄ地域はこの５年の間に、これらの設置された新しい多層住宅になったところなのである。空調は現在でもＡ地域、Ｇ地域、Ｈ地域で５割程度であり、５年前はＡ地域とＨ地域でも２割に満たなかった。冷蔵庫や洗濯機の普及率は５年前からどの地域でも比較的高く７割以上であり、現在は９割程度以上である。テレビの普及率は非常に高く、現在はほぼ全戸に普及し、ラジカセも８割以上である。ビデオも５割以下の地域はない。電話は普及率が著しく進んでいる時期にある。５年前はＡ地域の36%というのが最高であったが、現在はＡ地域は95%、最も低いのがＢ地域の38%である。

図表2-1-3　地域別５年前と調査時点の設備・備品普及状況



また、５年間の家庭における変化でみると、Ａ地域とＤ地域は９割が引っ越しをしているが、Ａ地域は浦西や浦東の他の地域から高層住宅への引っ越し、Ｄ地域は農家からの多層住宅への引っ越しである。それに伴う家族構成員の減少は、Ｂ地域の３割を最高に、他の地域でも１割から２割が変化があったと答えている。家族の集まる回数の変化については、農家から多層住宅に引っ越したＤ地域では４割強が変化ありと答えている。Ｇ地域は変化の最も少ない地域である。友人隣人とつきあう回数についても似た様相である。冠婚葬祭のやり方の変化をあげるものもＣ地域、Ｄ地域、Ｅ地域に多く３割から４割ある。家族の誰かが大学に入学したとの答えはＤ地域が最も少ない5%で、他は１割から２割である。Ｄ地域は学歴でみても８地域中最も低いところである。家族の誰かの転職をあげる者は２割から４割である。旅行に行く人は以前はあまりいなかったということであるが、Ｃ地域、Ｄ地域、Ｅ地域で３割から４割、他は５割以上が旅行をしたと答えている。

次に様々な社会的な変化を、現在を５年前と比較して「改善した」という住民による評価でみていこう。家計については、Ｄ地域で３割が悪くなったと評価しているのが最悪であり、改善したという回答が半数に満たないのはこのＤ地域とＣ地域である。住宅についてみると、Ｄ地域は農家から多層住宅に入った人たちであるが、改善したという評価が３割に至らず、悪くなったという評価が半数近くある。高層住宅のＡ地域は改善したという評価が非常に高い。交通事情については、最もよくないＥ地域でも６割が「大きく改善した」あるいは「改善した」と答えている。治安については、Ｂ地域とＨ地域は改善したとの認識が高く７割程度あるが、Ｃ地域、Ｄ地域は３割程度で、悪くなったという評価の方が多い。住宅の周辺の商店は「（大いに）改善された」あるいは「変わらない」という評価が多い。文化施設は、Ｂ地域とＨ地域では「（大いに）改善された」という評価が高く、Ａ地域、Ｃ地域、Ｆ地域も比較的「改善された」と評価されているが、Ｇ地域では「悪くなった」という回答が多い。学校の入学条件、教育の質については、悪くなったという評価は少なく、どの地域でも１割に満たない。家庭に対する公的なサービスは「変わらない」という評価が多いが、「改善」の方よりも「悪くなった」方の回答が多いのはＤ地域のみである。隣人との助け合いについては、「悪くなった」という方の評価はＡ地域の２割が最高であり、大勢は「改善」あるいは「変わらない」という評価である。封建的風潮・迷信はＤ地域は「変わらない」という回答が６割以上で、「（大いに）悪くなった」という回答が３割近い。Ａ地域、Ｅ地域、Ｆ地域でも、「変わらない」という評価が４割から５割で、「（大いに）悪くなった」という評価の方が「（大いに）改善された」という評価よりも多い。

以上、各地域の特徴はつぎのようにまとめられるだろう。

A：高層住宅地域で、住民の７割は1992年以降に主に浦西からの転入者であり、周辺の変化に対してプラスの評価をしている。サンプルの学歴は８地域中最も高い。

B：８割が平屋、２割弱が高層住宅で、1981年以前の転入者と1992年以降の転入者がある。転入者の３割弱は浦西からの転入者である。この５年間に電化製品は普及したが、トイレや風呂の設備は少ない。また、電話の普及率は他地域と比べて低い。住民は、周辺の社会的環境に対してプラスの評価をしている。

C：多層住宅。住民は1992年以降の転入者が４割、1982年前の転入者も３割ある。７割弱が浦東からの転入である。他地域と比較して、家庭生活の変化が多いか、多く感じている。社会的な変化は改善されたと評価される面と悪くなったと評価される面がある。

D：浦東の農家から多層住宅に1992年以降に引っ越したところである。家庭生活の変化も大きく、住宅の設備も飛躍的に整ったが、かえって「悪くなった」という評価が多い。家庭経済が他地域と比べて良くなっておらず、社会的な変化に対してプラスの評価が少ない。この地域のサンプルの学歴は８地域中最も低い。

E：1982年以前に転入した住民の多い平屋の地域である。トイレや風呂の設備がなく、５年間の変化は少ない方である。サンプルの学歴はDに次いで低い。

F：Eと似た様相であるが、Eよりももともと浦東住民が多い。浦西からの転入者は海運学院の教職員が多いようで、５年間の変化で比較的多いのが、家族の大学進学、転職、旅行である。社会変化に対してあまり悪い評価はしていない。

G：多層住宅で、住民は1982年から1991年の間に浦東と浦西から転入している。住宅の設備が５年前からすでに整っているものが多い。従って、この５年間の家庭の変化も最も少ない。この地域のサンプルは少し年齢の高い女性に偏っており、退職者休職者が多い。隣人との助け合いが「改善された」とする率はこの地域のみ非常に高いが、退職者が多いことによるのかも知れない。交通事情に対しては多くが「（大いに）改善された」と評価しているが、文化施設については、「悪くなった」という評価が多い。

H：多層住宅で住民の構成はG地域と似ている。しかし、家族の集まる回数や友人・隣人とつきあう回数などの変化を上げるものが比較的多くある。治安に対してや住宅周辺の商店に対して、改善されたとする評価が多いなど、全てのことにプラスの評価をするものが多い。

こうしてみると、上海共同研究者の掴んでいた特徴をほぼ現している。調査計画における対象地域範囲の設定があいまいであり、調査対象サンプル抽出もランダムとは言い難いことは前に述べたが、あまり細部の分析に至らない限り、この調査は調査時点の浦東住民の状況を把握しうるものと考えている。

2.2 上海工場従業員調査の特性

(1) 工場従業員調査の実施概要

工場従業員調査は、工場を単位にいくつか抽出し、そこから従業員を抽出して行われた。対象とする工場を選択するにあたって、その経済形態によって３つの層に層別し、各層からいくつかの工場を選択、合計で各層同人数となるように計画した。

中国の工場は、国有の企業ばかりでなく、いくつかの経済形態の種類がある。集体企業、株式企業、外国資本企業、中外合資企業、などである。集体企業は、地方の組織（区や郷や鎮など）の集団所有企業で、経済改革以前から国営とともにあった公有の形態である。規模は様々で、農民が農業のかたわら工場労働に従事している場合が多い。1978年の改革解放以降、国有と改められた国営企業は、企業の数も従業員数も減少してきており、経営状態も思わしくない状況が続いている。これに対して、個人企業や外資系企業が増加している。上海市は1980年代半ばに経済特別区として解放され、1990年頃から、浦東地区を中心に、外国資本や中外合資企業が多数設立された。これらの経済の形態別の統計は1996年の上海経済年間によると 図表2-2-1 の様になっている。

図表2-2-1　中国統計年鑑による企業経営形態統計

上海統計年鑑96	表10-3 1995年 個数	人数		表10-1 1995年 個数	1994年 個数	年鑑95 1994年 個数	人数
総計	39908	416.43 (万人)		15877	14375	14375	338.52 (万人)
a 国有	3713	162.08		国有 3713	4015	4015	168.78
b 集体	17227	123.98		集体 7871	7129	7129	83.08
c 連関	2257	34.27		他 4293	3231	1293	28.57
d 株式	46	21.98				46	22.74
e 中外合資	1488	26.84	2068 (e+f+i)			933	19.92 (外商投資)
f 中外合作	353	4.31					
g 香港ﾏｶｵ台湾華僑合資	1292	17.99	1844 (g+h+j)			928	14.99 (香港ﾏｶｵ台湾投資)
h 香港ﾏｶｵ台湾華僑合作	339	3.80					
i 外資	227	2.57					
j 香港ﾏｶｵ台湾独資	213	1.82					
k その他	102	2.35				31	0.44 (その他)
l 計	27257	401.99		15877	14375	14375	338.52 〔計〕

前頁表2-2-1 注）

年鑑96の表10-3の総計と合計の差が企業個数で 12651、雇用人数で 14.44万人の差があるのは、年鑑のとおり。また、合資企業の合計は企業数 3472、雇用人数 52.94万人、外資企業の合計は企業数 440、雇用人数 4.39万人である。

これらの経済形態の種類により、その従業員の待遇も異なり、意識も異なることが予想され、従業員調査は工場の種類による層別サンプリングの計画をたてた。しかし、純然たる外国資本の企業は調査を依頼することが困難なことから、国有企業、集体企業、中外合資企業の３つの種類を対象とすることになった。この３つの層からそれぞれからほぼ同数のサンプルを選ぶこととした。それぞれの中から適当な企業を複数選び、種別にほぼ 350人ずつ、合計 1050人を計画した。

以下、調査実施は上海共同研究者にまかせられたが、上海大学の研究協力者、仇立平助教授の基本報告によると次のようになっている。

上海の研究者が調査を依頼することができた工場は、国有企業として２社、上海回力靴業総工場と上海第七紡績機械工場、集体企業は１社で上海浦東新区唐鎮服装工場、合資企業は６社で、上海オリース輸入車整備有限会社（カナダとの合資）、上海浦東新区金協服飾有限会社（香港との合資）、上海上菱冷蔵庫工場（日本との合資）、上海良工ＫＶＣバルブ（シンガポールとの合資）、上海甲克試験機有限会社（ドイツとの合資）、上海フォルクスワーゲン自動車有限会社（ドイツとの合資）である。浦東の工場は２社のみで、あとの７社は浦西にある。対象個人は、それぞれ社員名簿から抽出した。対象人数は、調査協力の度合いによって、国有企業２社は200人と154人、集体企業は350人となり、合資企業は企業規模に基づいて標本数を定め、上海フォルクスワーゲン自動車有限会社の170人のほかは30人から40人ずつとし、合計1054人となっている。

調査方法は、面接法と自記式の２つの方法が使い分けられた。つまり、対象者の学歴が低く年配者の場合は面接法で行い（全体の約４分の１）、学歴が高く読み書きに不自由のない場合は調査員の指導の下に自記式で行われた。自記式の後も監督指導員がチェックして疑問点は訂正させるなどし、回収率は100%である。

工場のサンプリングについては、結果から考察すると、完全な人的コネクションによるもので、かなり偏っていると考えざるを得ない。中外合資企業には、台湾やマカオの華僑との合弁もある程度含まれ、母集団としてどこまで含んでいるかはっきりしていない。個別にどの企業からのサンプルであるかの記録もないため、国有企業や中外合資の中の企業

の差について考察をすることができないのが残念である。調査方法については、個別面接法と自記式が混ざっているが、自記式の後も監督指導員のチェックによって疑問点を訂正させている点で、面接調査に近い結果を導いているとも考えられる。面接法と自記式とどちらの方法で行われたかの個別の記録がないことも、反省点として残った。これらの点も、中国におけるサンプリング調査の限界と考えねばならないだろう。

(2) 企業経済形態別の調査対象サンプルの基本属性

それぞれの層（経済形態別）にまとめて、層としての回答者の属性などの特性を見ておく(図表2-2-2)。層内でも選出された工場それぞれによって異なるであろうが、その総合としての特性である。しかし、これがその経済形態の企業従業員の代表となるかというと疑問がある。例えば、集体企業の工場は１つしか調査されておらず、それが服装工場のため、女性が圧倒的に多く、集体企業の工場従業員を代表するサンプルとは言い難い。また、このような回答者の意識から、国有、集体、合資の３形態の従業員の意識を比較しようとすると、様々なウェイトづけ集計が必要である。しかし例えば、性別をそろえるとすると、集体企業の男性はわずか53人であり、それにウェイトをかけることは、様々な誤差が拡大される恐れがある。そこで、ここではウェイト付けせずに、これらの特性をもった集団として、経済形態別の単純な集計を示しておく。

年齢別では、いずれも20歳台が多いが、国有企業のサンプルは半数近くが20歳台であり、集体企業のサンプルは40歳台も多い。性別と年齢の関係でみると、国有と合資のサンプルはそれぞれ男女の年齢構成がほぼ同じである。集体のサンプルは女性が圧倒的に多く、特に40歳台の割合がこの集体の女性サンプルでは多い。

学歴はこの性別年齢別や職種と関連がある。集体のサンプルは７割が中学校卒業、２割強が小学校卒業である。国有のサンプルは半数が中学校卒業である。合資企業のサンプルは高等学校と大学以上の学歴を持つ者が３割ずつある。職業上の地位は、国有と集体では、一般労働者が過半数を占め、普通職員が４分の１である。合資では一般労働者と普通職員とその他（部課長・専門技術者）が３分の１ずつとなっている。これらとの関連もあると思われるが、収入は、集体のサンプルの収入は最も低く平均収入約380元、国有のサンプルの平均収入は約630元、合資のサンプルでは平均収入約1200元と、その差は非常に大きい。この違いは合資のサンプルが年齢が高く学歴が高いためばかりではない。年齢別に収入を比較すると、どの年代でも、集体、国有、合資の順に収入が多くなっている。また、年齢別に学歴別の収入をみても、どの学歴層でも、企業の経済形態による同様の収入の違いが見られる。

図表2-2-2　経済形態別回答者の属性分布

（数字は実数、カッコ内は縦比率）

	国有企業	集体企業	中外合資企業
回答者総数	354(100)	350(100)	350(100)
女	202(57)	297(85)	140(40)
年齢 -19	42(12)	33(9)	6(2)
20-29	156(44)	117(33)	127(36)
30-39	57(16)	66(19)	82(23)
40-49	65(18)	112(32)	93(27)
50-	27(8)	14(4)	36(10)
D.K.	7(2)	8(2)	6(2)
男年齢 -19	14(9)	4(8)	3(1)
20-29	67(44)	24(45)	73(35)
30-39	21(14)	9(17)	51(24)
40-49	29(19)	10(19)	51(24)
50-	17(11)	6(11)	29(14)
不明	4(3)	-(-)	3(1)
女年齢 -19	28(14)	29(10)	3(2)
20-29	89(44)	93(31)	54(39)
30-39	36(18)	57(19)	31(22)
40-49	36(18)	102(34)	42(30)
50-59	10(5)	8(3)	7(5)
不明	3(1)	8(3)	3(2)
学歴 小学校	32(9)	79(23)	5(1)
中学校	182(51)	244(70)	136(39)
高等学校	93(26)	26(7)	105(30)
大学以上	45(13)	-(-)	102(29)
D.K.	2(1)	1(0)	2(1)
収入 -300元	21(6)	115(33)	4(1)
301-400	104(29)	118(34)	5(1)
401-500	89(25)	80(23)	24(7)
501-1000	81(23)	34(10)	108(31)
1001-1500	50(14)	1(0)	127(36)
1501-2000	4(1)	-(-)	40(11)
2001-	5(1)	-(-)	42(12)
D.K.	-(-)	2(1)	-(-)

（つづく）

（図表2-2-2つづき）

	国有企業	集体企業	中外合資企業
職種 重役	5(1)	0(0)	1(0)
部課長	25(7)	20(6)	57(16)
普通職員	85(24)	94(27)	121(35)
専門技術	35(10)	7(2)	49(14)
労働者	198(56)	225(64)	119(34)
その他	5(1)	3(1)	3(1)
D.K.	1(0)	1(0)	-(-)
入社年 -1979	55(16)	28(8)	78(22)
1980-1989	45(13)	110(31)	56(16)
1990-1994	80(23)	86(25)	64(18)
1995-1997	172(49)	120(34)	149(43)
D.K.	2(1)	6(2)	3(1)

入社年をみると、1995年からの新しい従業員が多いが、集体のサンプルは国有や合資と比べて1980年代が多く、それ以前が少ない。これは、1980年に工場を拡大したなどの理由があるものと考えられる。合資企業は改革解放以降の新設ばかりではないようで、1995年以降入社の多い一方、1980年以前からの従業員も２割以上ある。

つまり、国有企業及び集体企業の従業員と中外合資企業の従業員では年齢分布の違いだけではない違いがある。合資企業の従業員は、収入や学歴が他の国有や集体の従業員の同じ年齢層に比べて高いことである。

これらの属性分布をみてくると、それぞれの経済形態別の層から工場を選び、そこから個人を抽出しているが、そうして調査されたサンプルは、その経済形態を代表するものとは考えにくい。経済形態も調査対象サンプルの属する企業の一つの属性として見た方がよさそうである。

2.3 浦東住民調査と工場従業員調査の比較上の注意

(1) 調査対象サンプルの属性比較

浦東調査と工場従業員調査では、共通の質問がいくつかあり、比較が可能である。しかし、次の項で述べる質問文や回答肢の違いにも注意が必要であると同時に、サンプルの基本属性の偏りによる違いにも注意しなければならない。２．工場従業員調査の最初に述べたように工場間でもサンプルの偏りがあったが、浦東住民調査との違いはかなり大きいの

で、注意が必要である。特に、工場従業員との比較を考えるには、浦東住民の職業別のうち、工人に属する 338名を比較の対象とすることも妥当であろう。そこで、工場従業員全体と浦東住民全体および浦東の工人について、基本属性の分布を表2.4に示す。

工場調査では20代が非常に多いが、中間年齢層に偏っている浦東調査の中で、工人は、より30歳代と40歳代に集中していて、20歳代は多くない。工場調査のサンプルが、女性に、若い年齢層に、偏っていることは注意しなければならない。学歴は工場調査と浦東調査の工人とは中学卒が半数以上を占める点では似ている。

図表2-3-1　経済形態別工場従業員と浦東住民で工人の回答者の属性分布
（数字は実数、カッコ内は縦比率）

	工場従業員 Total	浦東住民 工人	浦東住民 Total
回答者総数	1054(100)	338(100)	1000(100)
性別　男	415(39)	178(53)	499(50)
女	639(61)	160(47)	497(50)
不明	-	-	4(0.4)
年齢　-19	81(8)	1(0.3)	31(3)
20-29	400(38)	36(11)	124(12)
30-39	205(19)	111(33)	221(22)
40-49	270(26)	147(43)	313(31)
50-59	72(7)	26(8)	142(14)
60-	5(0.5)	17(5)	169(17)
不明	21(2)	-	-
男年齢　-19	21(5)	1(1)	14(3)
20-29	164(40)	16(9)	61(12)
30-39	81(20)	47(26)	97(19)
40-49	90(22)	87(49)	186(37)
50-59	47(11)	15(8)	66(13)
60-	5(1)	12(7)	75(15)
不明	7(2)	-	-
女年齢　-19	60(9)	-	17(3)
20-29	236(37)	20(13)	80(16)
30-39	124(19)	64(40)	124(25)
40-49	180(28)	60(38)	127(26)
50-59	25(4)	11(7)	73(15)
60-	-	5(3)	93(19)
不明	14(2)	-	-

（つづく）

（前頁図表2-3-1よりつづく）

	工場従業員 Total	浦東住民 工人	浦東住民 Total
学歴　小学校	116(11)	39(12)	150(15)
中学校	562(53)	171(51)	339(34)
高等学校	224(21)	123(36)	347(35)
大学以上	147(14)	5(1)	164(16)
D.K.	5(0.5)	-	-

(2)　調査質問項目及び質問文の比較対照

浦東調査および工場調査の質問項目は、旧上海調査から台湾調査、日本（首都圏）調査と続けられてきた質問項目と、その他の研究で用いられて来た質問、新たに作成された質問で構成されている。質問一つ一つの履歴は別項に示す。

旧上海調査の質問票はそのまま用いたものもあるが、変更されたものもある。小さな変更は、言葉の上だけで意味は殆どかわらないものである。比較的大きな変更は、日中研究者が検討して変更したものの他、日本側研究者の提案が、実施を担当した中国研究者によって変更されてしまったものもある。

浦東住民調査は工場従業員調査の１年前に行われ、プリテスト的な役割を果たした。浦東調査では、以前から継続してあった質問など、比較のために同一の形式で調査するように提案したが、中国側研究者は、実体を知るという目前の目的にのみ注目し、実体にあわせた選択肢に置き換えるなどの変更を提案した。これに対して従来からの比較、あるいは他の調査との比較の重要性を説得し、もとに戻すなど相互検討して調査票を決定したが、不徹底なところがかなり残った。

工場調査では、浦東調査の結果から、再度検討し充実した調査票を作成した。しかし、これも検討が不徹底で、旧来からの比較が困難になったものもあるのは、残念である。

旧来の質問との違いも含めて、浦東調査と工場調査の共通質問について、質問形式が同じかどこが違うかを、次にあげておく。まず、浦東調査を中心にまとめると次のようになっている。

浦東調査の問９は、別の日米の比較調査からの質問である。工場調査では問６として、質問に入る前の導入の文章を除いて、浦東調査と完全に同じ形で使われている。

浦東調査の問10、工場調査の問３は、旧上海調査からの質問で、台湾調査、日本調査もあるが、浦東調査と工場調査では回答肢がそれぞれ異なっている。もともとは、「１．離婚すべきである」と「２．離婚してはいけない」の２肢とその他であったが、中国側研究

者が新たな回答肢を、浦東調査では「３．まず調停すべきだ」「４．子供の年齢による」を、工場調査では「３．子供が成長していればよい」を追加してしまっている。このため、この回答の様々な調査間の比較はできない。

浦東調査の問11、工場調査の問13は、これも旧上海調査からの質問で、台湾調査、日本調査もある。回答肢はいくつか異なるが、複数回答のため、回答肢の異なったことによる影響は少ないようである。

旧上海調査＝日本調査	浦東調査	工場調査
1. 住宅問題	1. 住宅問題	1. 住宅問題
2. 嫁-姑問題	2. 嫁-姑問題	2. 嫁-姑(婿-舅)問題
3. 子供の教育	3. 婿-舅問題	3. 夫婦間の感情のもめごと
4. 日々の支出	4. 子供の教育	4. 子供の教育
5. 年老いた親の面倒	5. 日々の支出	5. 親子間のもめ事
6. 娯楽	6. 年老いた親の面倒	6. 日々の支出
7. 生活の仕方	7. 娯楽	7. 年老いた親の面倒
8. 性格の不一致	8. 性格の不一致	8. 娯楽
9. 財産	9. 財産問題	9. 生活の仕方
	10. 生活の仕方	10. 性格の不一致
		11. 財産問題

浦東調査の問13は、工場調査の問41とほぼ同じである。浦東調査は８選択肢、工場調査は６選択肢から１つを選ぶ。回答選択肢は浦東調査では、「1. 興味が持てること」「2. 才能を表せるチャンス」「3. 収入がよいこと」「4. 余暇時間が多いこと」「5. 仕事が楽であること」「6. 仕事仲間とうまくやれること」「7. 通勤の便」「8. 昇進の機会が多いこと」である。このうち 5. と 7. は、旧上海調査、日本調査の回答選択肢に加えられたものである。工場調査ではこの２肢を除き、「1. 興味が持てること」「2. 才能を表せるチャンス」「3. 収入がよいこと」「4. 余暇時間が多いこと」「5. 仕事仲間とうまくやれること」「6. 昇進の機会が多いこと」の６選択肢に戻した。

浦東調査の問15と、工場調査の問37は、日本側研究者から他の研究と同じ形式を提案したものである。しかし、浦東調査では、提案通り、賛成の度合いを訪ねる回答選択肢の順序が「1. 賛成」「2. ある程度賛成」「2. あまり賛成でない」「4. 全く賛成できない」と「5. わからない」であったが、工場調査では「わからない」が５段階の中心として置かれた。そのため、「わからない」の意味が異なり、それが調査の結果に現れ、諸調査との比較ができなくなった。また、工場調査の(7)は中国側が追加した新たな問である。「自分中心に考えないと天罰を受けるという考えは今でも有効である」というもので、日本側研究者にとっては、理解しにくいものであり、中国の一つの考え方を知ることとなった。

浦東調査の問16、工場調査の問30は、日本側研究者の提案通りに同様に調査されている。

浦東調査の問17、工場調査の問49も、旧上海調査からの質問で、台湾と日本の調査もある。この質問形式は全く同様に継続され、問題はない。

浦東調査の問18、工場調査の問19は、これも旧上海調査からの質問で、道徳項目それぞれについて誇りに思うかなどを問うている。しかし、その選択肢の順序が工場調査のみ変わっている。すなわち、浦東調査で旧上海調査、日本調査と同様、「1. 誇りに思う」「2. なくしてしまいたい」「3. どちらともいえない」の選択であったが、工場調査では、「２. どちらともいえない」「3. なくしてしまいたい」と変更された。これも「どちらともいえない」の意味が異なってしまい残念であるが、「誇りに思う」に対する回答は比較可能と判断した。道徳項目については、旧上海調査から「１８道徳」と略称していた項目のうち「ａ.歴史悠久」と「ｑ. 伝統尊重」は削除され、新たに、(17)「己所不欲、勿施干人」と(18)「礼尚従来」、(19)「人不為己、天誅地滅」が加えられた。道徳項目を並べる順序は、旧上海調査からは大幅に変更されているが、あまり問題がないと考えられる。浦東調査と工場調査では道徳項目の順序はほぼ同一であるが、新たな３つの道徳については、浦東調査の上記(17)と(18)が工場調査では順序が逆になっている。なお、(19)は、工場調査の問37(7)でも用いられており（上記）、中国研究者にとって注目すべき概念であることがわかる。

(3) 回答選択率の比較のためのウェイト付けについて

浦東調査の８地域の比較は、それぞれの地域のサンプルの属性別分布がそれほどは違わないので、そのまま比較することとした。

工場調査の３つの経済形態種類別に属性分布に大きな違いがある。特に性別は、集体企業は女性が 85%を占め、年齢分布や学歴の分布も異なり、収入もかなり異なることは前述のとおりである。様々な意識は性別や年齢別によって異なるので、各問選択肢への回答率を比較するためには、それらの属性分布をそろえるウェイト付けが必要と考えられる。

集体企業の性別分布は大変偏っているので、次のように、種類別に性別のウェイトづけすることを試みた。合資企業の男女比に近づけたことになる。

国有は 男性：2，女性：1，集体は 男性：8，女性：1，合資は 男性：1，女性：1

こうして、まず他の属性分布をみると、年齢分布も比較的揃っており、他の属性分布もそれほど偏りがないことが見いだされた。表2-4-1 は上記のウェイト付けを行った属性分布である。

図表2-4-1　性別によるウェイト付けを行った属性分布

		国有企業	集体企業	合資企業	Total	
	Total	506	721	350	1577	
性別	男	60.1	58.8	60.0	938	59.5
	女	39.9	41.2	40.0	639	40.5
（欠測を除く）	Total	495	713	344	1552	
年齢区分別	20歳未満	11.3	8.6	1.7	123	7.9
	20-29歳	45.1	40.0	36.9	635	40.9
	30-39歳	15.8	18.1	23.8	289	18.6
	40-49歳	19.0	25.5	27.0	369	23.8
	50歳以上-	8.9	7.9	10.5	136	8.8
性別×年齢別	男　-29	32.7	31.4	22.1	462	29.8
	30-39	8.5	10.1	14.8	165	10.6
	40-	18.6	18.0	23.3	300	19.3
	女　-29	23.6	17.1	16.6	296	19.1
	30-39	7.3	8.0	9.0	124	8.0
	40-49	9.3	15.4	14.2	205	13.2

このウェイトで全ての質問回肢についての結果をみていくと、国有企業の結果はさほど変化しない。集体企業では男性のデータを８倍にもしたため、かなりの差が出てくる。しかし、性別のウェイト付けしたことによって、必ずしも近くなるわけではない。他の属性によるウェイト付けも考えることができるが、様々な属性によって意見の違い方も様々で、複雑なウェイト付けをすれば、誤差を膨らませることとなり、簡単なウェイト付けでも意味がない。従って、工場種類別の比較をするにも、属性分布の違いはあるが、あえてウェイト付けせず、常に属性分布の異なることを念頭に置いて、分析結果をみていくこととした。

工場調査と浦東調査の比較については、工場間の比較以上に属性分布が異なっているため、安易な比較はできない。属性分布もかなり異なる。特に異なるのは年齢分布である。浦東調査では３０歳代と４０歳代が多いが、工場調査では圧倒的に２０歳代が多い。しかし、年齢分布によるウェイト付けをしても、他の要因（他の属性分布の違いや、質問文の微妙な違い、調査の仕方の違い、工場という集団内調査の特殊性など）による違いが大きく、ウェイト付けをしないこととした。

2.4 まとめ

浦東住民調査と工場従業員調査のデータの質について、実施概要と調査結果から見てきた。どちらも調査対象者の母集団がはっきりせず、ランダムサンプルとは異なることは、中国の現状での限界と考えられる。このようなデータであるので、詳細に分析することは、あまり意味がないと考えなくてはならない。調査された属性分布の様子などを考慮しながら、細かなところにとらわれずに分析結果を理解していく必要があるだろう。

浦東調査において、地域別は、属性からみるとよく特徴を現しており、その回答の比較はできが、総合として現すものが浦東住民全体を現しているとはいえない。工場調査についても、工場の経済形態種類別に選ばれた工場が何を代表しているのか、はっきりしないし、その総合も浦東を含む上海の工場従業員全体の代表となっているともいえない。

また、この浦東調査と工場調査とは、調査設計がことなり、全く種類の違う調査であると考えねばならず、従って、本報告書では、両調査の比較の項は設けていない。

他の調査、1987年の上海調査（これもきちんとした標本調査ではない）や日本での比較調査との比較も、安易な比較は危険である。しかし、それぞれの調査内のグループ別も同様に、非常に大きな違いについては、それなりの意味を見いだせる。

３．浦東住民の意見と態度と意識構造
（浦東住民調査）

3.1　浦東住民調査の概要

3.2　家族のなかの人間関係　岩男寿美子

3.3　職場・リーダーシップ　林　知己夫

3.4　家族関係と価値意識　中村　雅子

3.5　カウンターカルチャー　飽戸　弘

地域名の表示について：

浦東８地域の名称は、2.1 のとおりであるが、日本語ワープロでは出てこない漢字がいくつかあり、担当執筆者がそれぞれ、似た漢字で代用している。手書きの修正が行き届かないところもあるので、８地域の地名に読み替えていただきたい。

3.1　浦東住民調査の概要

・調査対象　　中華人民共和国上海市浦東新区の住民１０００名
　　（８地域ほぼ各１２５名ずつ抽出）
・調査方法　　アンケート用紙に基づく訪問面接聴取法
・調査時期　　１９９５年３月～４月
・回収率　　１００％

・調査票の設計

住民の社会的特性（性別，年齢，職業，学歴，転入時期，転入前の身分，家族状況
居住状況，生活備品）

５年間の生活変化（転出・入，家族構成，進学，転職，旅行等）

家族についての意識（親密度，家庭円満の要素，離婚観，トラブル，

職場・労働についての意識（転職，職探し，よい上司の条件）

価値意識（価値意識についての影響，カウンターカルチャー，伝統的価値）

・回答者の社会的特性の概要

性別　男性　49.9%　女性　49.7%　（不明0.4%）

年齢	２０歳未満	3.1%
	２０歳代	12.4%
	３０歳代	22.1%
	４０歳代	31.3%
	５０歳代	14.2%
	６０歳代以上	16.9%

学歴	なし	4.6%
	小学	10.4%
	初中	33.9%
	高中	34.7%
	大学以上	16.4%

・調査票および単純集計結果は巻末資料を参照のこと

3.2　家族のなかの人間関係

中国には家庭内の好ましくないことは外に見せない（家丑不可外楊）という表現がある。恐らく、中国人のプライドや面子に関係するのものと思われるが、外面を良く見せたいという中国人の意識が今回の調査結果の背景にあることは否定できない。特に改革開放路線に沿って世界に門戸を開いて以来、中国の優れた点をアピールし、後進性を隠そうとする意図が見え隠れする。

しかし、ここでとりあげる家族に関する質問項目は、同居する家族との親密度を尋ねた項目を除くと一般的意見を求めるもので、「あなたの家庭ではどうか」という回答者の個人的状況につについて尋ねるものではないから、本調査結果のうち、家族のなかの人間関係に関する部分については特に割り引いた解釈が必要だとは思われない。なおこの調査と並行して実施した面接調査の内容には優等生的回答が多くみられ、ここで取り上げる質問紙調査結果の方が実態に近いものと思われる。しかし、回答者が社会調査に回答することに全く不慣れな人々であることには留意する必要がある。中国側共同研究者からは問題なしとの回答を得てはいるが、果たして問いの意味が回答者に充分理解できたかどうか疑問が残る部分があることは否定できない。こうした問題点に留意しながら家族のなかの人間関係に関する４つの問に対する回答結果をみていこう。

(1)　良い結婚の条件（問９）

家族を大切にすることは美徳と考える中国人にとって、良好な夫婦関係の維持は極めて重要であるに違いない。満足いくような結婚にとって提示した１５項目それぞれの重要度を「非常に重要」、「やや重要」、「あまり重要でない」、「まったく重要でない」の４件法で聞いている。なお、「相手の欠点を我慢できる」と「相手にプライバシイを許す」の２つの項目は、もともと日米両国で用いられた１３項目に中国側共同研究者が独自に付け加えたものである。従って、これらの項目は今日中国人が夫婦円満にとって重要な条件と考えるものを表わしていると思われる。特に狭い住居のなかで常に夫婦が鼻突き合わせて暮らす現状では、個人のプライバシイなど無いに等しいに違いない。帰宅途中に飲み屋に寄ったりパチンコしたりできる日本とは異なり気晴らしの機会が限られている中国人夫婦にとって、プライバシイへの要求が切実なものになることは想像に難くない。欠点を我慢することが夫婦円満の必須条件となることも限られた空間では相手の欠点が鼻につき我慢できにくいことに由来するのではないだろうか。特に昨今の一人っ子政策の影響で兄弟のいない、あるいは少ない若者が増え、彼らのわがままが夫婦間に問題を引き起こしがちな現実を踏まえて追加された質問ということができる。

全体的傾向としては、１５項目中「非常に重要」という回答が最も多かったのが「お互

いに貞節であること」であり、回答者の８１％に達している。中国では既婚者の不倫に対する社会的制裁が引き続き厳しいといわれるが、これを支持する結果となっている。

反対に「非常に重要」という判断が最も少なかったのが「結婚相手があなたが毎日していることに対して理解していること」（１６％）であり、回答者の３３％が「あまり重要でない」としている。つまり、未だに生活が比較的単純で相手の行動が手に取るようにわかり、プライバシイが欲しくなる位だから改めて理解を問題にするまでもないということであろう。「同じような環境で育ってきたこと」という項目についても３割が「あまり重要でない」と回答している。夫婦関係が夫婦の情緒的な結びつきを重視するだけのゆとりがあるところまではいっていない中国の現状を反映した結果といえるのではないだろうか。たとえ制度上は男女平等の中国であっても完全に平等が達成されているわけではないから良い結婚の条件には性差があると予想される。そこで次に男女の回答結果を比較しよう（図表３－２－１）。

図表3－2－1 良い結婚の条件(「非常に重要」を選択した割合)

	男	女
同じような生活が好きであること	50	47
愛し合っていること	79	73
恋人気分を持ち続けること	76	73
子供がいること	61	67
子供の養育について同じ考え	58	66
性生活がうまくいくこと	53	52
お互いに貞節であること	81	83
お金の使い方について似た考えをもっていること	36	41
経済的に安定していること	58	64
同じような環境で育ってきたこと	21	21
お互いの気持ちを話し合えること	61	62
結婚の相手が、あなたが毎日していることに対し理解していること	17	16
共に物事をユーモアを持ってみることができること	31	33
相手の欠点を我慢する	55	51
相手にプライバシイを許す	42	41

回答結果は、子供がらみの「子供がいること」と「子供の養育について同じ考え」の２項目と、お金に関係する「経済的に安定していること」と「お金の使い方について似た考えをもっていること」の２項目の合わせて４項目を除くと性差は極めて小さいことがわかる。未婚者と既婚者では結果に差がある可能性があるが、今回は未・既婚を尋ねていないので、代わりに年齢によって回答結果をみることにする。

図表３－２－２から明らかなように、全体としてかなり大きな世代差が認められ、中国における価値観の変化、とくに結婚観が急速に変化している様子を窺うことができる。

夫婦関係の情緒的結びつき特に愛情に関する項目である「愛し合っていること」、「恋人気分を持ち続けること」、夫婦間のコミュニケーションに関する項目の「お互いの気持ちを話し合えること」、「共に物事をユーモアをもってみることができること」、性的関係に関わる「性生活がうまくいくこと」、夫と妻の個人としての自立要求を表わす「相手にプライバシイを許す」といった項目について顕著な世代差がみられ、一貫して若い回答者ほどこれらの項目を「非常に重要」と捉える傾向があることがわかる。つまり若者の結婚観はよりアメリカ人の考え方に近い。２９歳以下の層と６０歳以上を比べるとこれらの項目における差はいずれも２０ポイント程度と大きい。

他方、子供に関する項目「子供がいること」について未婚者が集中していると予想される２９歳以下と既婚者層と思われる３０代以上で大きな違いがみられ、更に３０代と古い子供観をもつと思われる４０代以上との間に差が認められる。

子供に関する項目である「子供の養育について同じ考えであること」については世代による差がみられないのは、回答者の多くにとって養育に関する多様性など存在しない現状を反映しているのではないだろうか。

また、「同じような生活が好きであること」は生活の選択肢が複数利用可能になって始めて意味をなす項目であり、同様に「お金の使い方について似た考えを持っていること」についても使い方に複数の可能性が許されるだけのゆとりができて始めて意味をもつ項目と思われるが、この２項目いずれについても重要度が低く、はっきりした世代差が得られなかったことは、中国の現状の一面を雄弁に語っているのではないだろうか。つまり、まだこうした項目に回答できる状況以前にあるということだろう。また「貞節」と「経済的安定」はすべての世代にとってよい結婚生活を維持していくためには不可欠な条件といえるようだ。

「結婚の相手が、あなたが毎日していることに対し、理解していること」という項目については既に述べたように「非常に重要」とされる割合が最も低く、若い層でも夫婦を独立した個人として捉え、その間のパートナーシップを重視するという考えを理解するところには至っていないとえる。また「同じような環境で育ってきたこと」については、２９歳以下では３割近い回答者が重要視しているが、他の層は２割と他の項目に比べて重要視されておらず、もっと現実的なことで大切な条件が他にたくさんあるということではないだろうか。

「相手の欠点を我慢する」については一貫して若い層ほど重要視しており、２９歳以下と６０歳以上では３４ポイントもの差があるが、その理由は既に述べたように、自己中心的なわがまがな若者が増え、彼ら自身「相手の欠点を我慢する」ことの重要性を強く認識しているほど問題が顕在化しているものと思われる。

図表3－2－2 良い結婚の条件（「非常に重要」を選択した割合）

	29歳以下		30代		40代		50代		60代以上	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
同じような生活が好きであること	49	48	44	48	53	47	48	57	53	38
愛し合っていること	81	81	79	81	79	75	83	68	73	55
恋人気分を持ち続けること	87	83	78	78	73	76	83	68	63	58
子供がいること	39	49	67	59	65	76	64	75	61	73
子供の養育について同じ考え	57	64	59	65	56	72	65	67	59	61
性生活がうまくいくこと	69	56	60	56	49	55	52	50	40	38
お互いに貞節であること	83	84	83	85	81	84	82	79	77	80
お金の使い方について似た考えをもっていること	36	39	31	43	39	50	36	39	36	30
経済的に安定していること	59	69	52	65	61	66	64	61	56	58
同じような環境で育ってきたこと	25	33	18	18	17	24	27	14	23	18
お互いの気持ちを話し合えること	75	71	65	64	59	68	58	54	53	52
結婚の相手が、あなたが毎日していることに対し理解していること	24	23	15	14	14	21	20	6	17	12
共に物事をユーモアを持ってみることができること	48	53	35	32	27	38	27	24	23	20
相手の欠点を我慢する	77	64	50	59	51	60	61	39	47	27
相手にプライバシイを許す	57	58	40	46	41	47	42	25	32	27

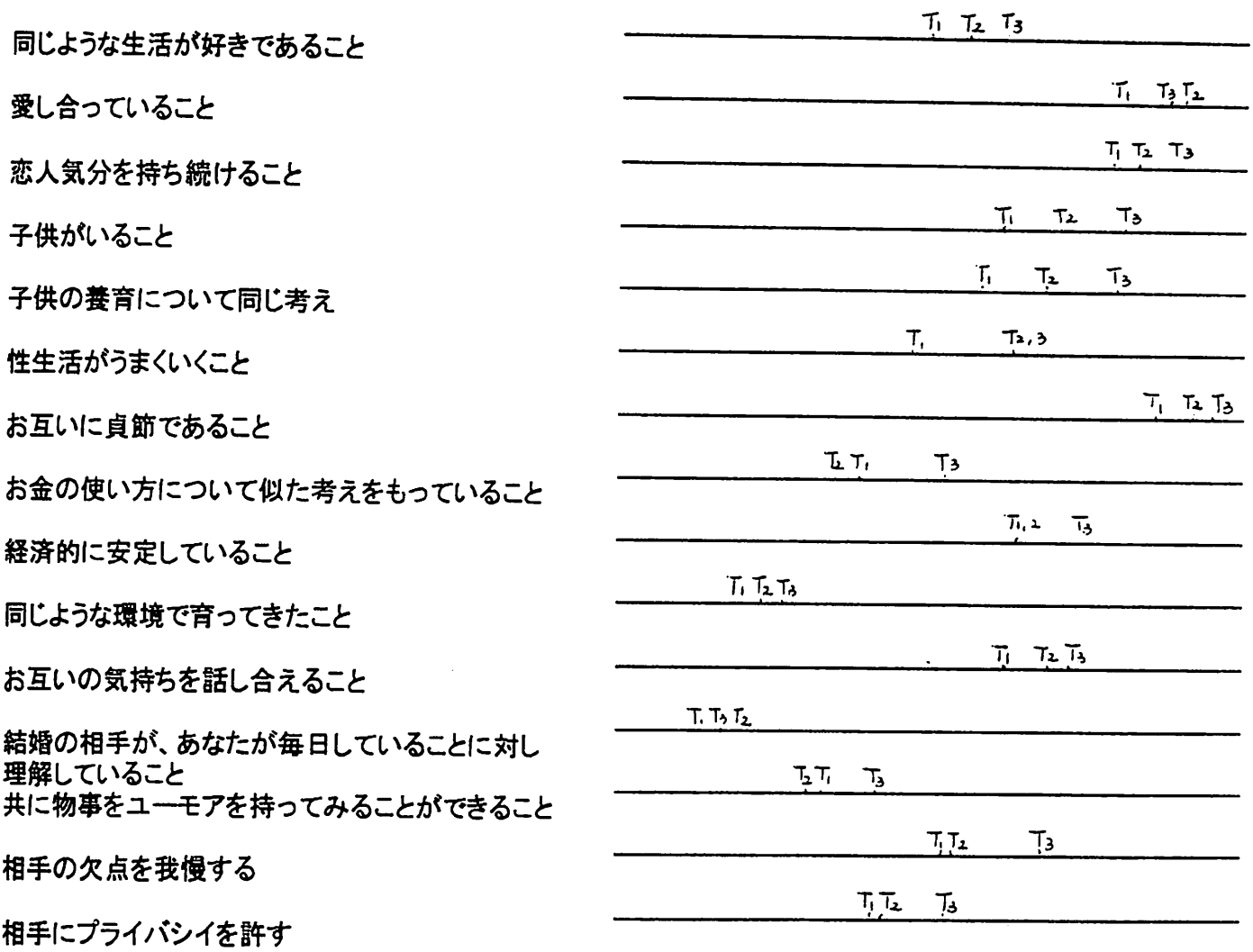
次に浦東地区への転入時期との関係をみてみよう。結果は図表３－２－３、３－２－４から明らかなように、転入時期が新しいほど良い結婚生活にとってこれらの項目が重要とする割合が高い。つまり、新しい転入者ほどより欧米的な結婚観（夫婦観）をもっているといえそうである。

更に居住地域別に結果をみてみよう。図表３－２－５をみるとかなり大きな地域差があることがわかる。しかし各居住地域の詳細な特性が明らかではないために労山東路（高層ビル）次いで浦東大道高廟地区に最も近代的な夫婦観をもつ住民が多く、反対に東昌路（平屋、旧式集合住宅）に古い考えの住民が比較的多いように推測できると述べるに止めておく。

図表3－2－3 良い結婚の条件(「非常に重要」を選択した割合)

	転入時期		
	'89	82-'91	92-
同じような生活が好きであること	43	49	54
愛し合っていること	71	79	78
恋人気分を持ち続けること	71	74	80
子供がいること	55	63	73
子供の養育について同じ考え	53	62	72
性生活がうまくいくこと	43	57	57
お互いに貞節であること	78	83	86
お金の使い方について似た考えをもっていること	36	32	48
経済的に安定していること	58	58	67
同じような環境で育ってきたこと	18	21	24
お互いの気持ちを話し合えること	57	63	66
結婚の相手が、あなたが毎日していることに対し理解していること	14	19	16
共に物事をユーモアを持ってみることができること	30	29	38
相手の欠点を我慢する	48	49	62
相手にプライバシイを許す	38	39	48

図表３－２－４　良い結婚の条件（「非常に重要」を選択した割合）



T1＝1981年以前からの住民、T2＝'82－'91年、T3＝'92年以降

図表3－2－5 良い結婚の条件（「非常に重要」を選択した割合）

	居住地域							
	崂山東路	東昌路	湾東新村	金楊路	周家渡	洋泾鎮	浦東大道	潍坊
同じような生活が好きであること	56	45	52	48	48	37	56	52
愛し合っていること	95	66	78	63	73	76	86	77
恋人気分を持ち続けること	90	63	80	66	75	76	80	72
子供がいること	72	61	62	76	62	47	76	58
子供の養育について同じ考え	76	51	58	74	65	51	81	49
性生活がうまくいくこと	72	50	28	52	41	61	71	49
お互いに貞節であること	94	70	85	79	85	79	90	80
お金の使い方について似た考えをもっていること	48	28	42	48	51	40	22	36
経済的に安定していること	68	55	64	66	66	59	67	49
同じような環境で育ってきたこと	32	19	18	16	24	23	15	24
お互いの気持ちを話し合えること	82	48	71	57	62	56	67	59
結婚の相手が、あなたが毎日していることに対し理解していること	20	15	12	14	15	17	10	27
共に物事をユーモアを持ってみることができること	46	30	31	35	33	32	23	32
相手の欠点を我慢する	74	66	53	61	53	49	36	56
相手にプライバシイを許す	60	48	33	51	36	40	23	44

⑵　離婚観（問１０）

離婚観は「子供のいる夫婦の離婚についてどう思いますか」という問によって捉えている。図表３－２－６から明らかなように、５割強が「まず調停すべき」と回答しているが、２割強は離婚に対して肯定的である。回答には全く性差がみられない。しかし世代差は大きく、若い層ほど離婚に肯定的で、上の世代ほど「離婚すべきでない」という意見が多い（図表３－２－７）。子供の年齢が離婚観に大きな影響を与えないのはなぜであろうか。親が離婚した場合に子供の養育はどうなるのだろうか。公的な機関がみるから離婚した親が心配する必要がないために「子供の年齢による」と答える者が少ないのかもしれない。

ここでも居住地域による差は大きく、殆どの回答者が「まず調停すべき」とする浦東大路高廟地区から「離婚すべき」が４割と突出している劣山東路まで地域による回答のばらつきは大きく、調査対象地域によって回答者の特性がかなり異なるものと思われる。

図表3－2－6 離婚観
子供のいる夫婦の離婚についてどう思いますか。

	男	女
離婚すべき	24	23
離婚すべきでない	16	17
まず調停すべき	53	54
子供の年齢にもよる	5	5

図表3－2－7 離婚観
子供のいる夫婦の離婚についてどう思いますか。

	29歳以下	30代	40代	50代	60歳以上	全体
離婚すべき	32	30	25	23	5	24
離婚すべきでない	10	16	16	15	26	17
まず調停すべき	51	46	53	56	63	53
子供の年齢にもよる	6	6	4	5	4	5

⑶　もめごと（問１１）とその解決方法（問１２）

「親類友人の中で比較的に多く見られるトラブルは何に起因するものですか」という問に対し、「住居」、「嫁・姑」など１０項目を提示した中から、５項目を選んで回答するよう求めている。更に、トラブルの解決方法として「話し合い」をはじめとする６項目のなかから一つ選ぶように設計した。

回答の多かった８項目の結果は図表３－２－８に示す通りである。もめごとには性差が

あり、男女とも「性格の不一致」に起因するもめごとをあげるものが多いが、女性の場合は「子供の教育」がらみのもめごとが「性格の不一致」以上に多く、回答者の８割弱に達している。男性の場合は女性の半分の４割弱と両者の差は極めて大きいが、その理由は明らかではない。女性が子供の教育に熱心であることに対して男性が調子をあわせてくれず、それが夫婦間のトラブルのもとになっているのだろうか。今日の中国で子弟の教育問題が夫婦間のトラブルになるほど教育熱がたかまっているとしても、それは極く限られた人々の話ではないだろうか。

「財産・相続」に関するもめごとの内容は親の住まいをめぐる争いで、住宅事情の悪さを反映しこれをあげる回答者はかなりの数に達している。

「娯楽」がもめごとの原因になることは他の項目よりも少ないが、これは回答者にとって娯楽と呼べるものが極めて限られているなかで生活しているせいで、もめごととしては非現実的だということであろう。

居住地域別にもめごとの主なものをみると、すべてのもめごとについて、かなり大きな地域差が観察される。例えば金楊路や浦東大道高廟地区は、住宅事情は深刻な問題ではないようだが、お金の使い方はトラブルのもとになっているし、親との同居が一般的なのか両親の扶養もトラブルの原因であり、特に金楊路は浦東のなかでも農村の色彩が濃い地域のようだ（図表３－２－９）。

もめごとの解決方法としては男女とも８割が「話し合い」を選んでいる。ほとんど選ばれなかった他の選択肢として「年長者や一族のなかの実力者による調停」、「町内会による仲介」、「職場の上司による仲介」、「司法解決をめざす」などが提示されているが、「町内会による仲介」のように日本では考えられない解決方法がふくまれているところがいかにも中国らしい。しかし、とりあげたトラブルの性質が家庭内の問題で「話し合い」以外の解決方法はそぐわないものだから得られた結果は当然といえる。

以上の結果を通して明らかなことは、浦東地区の住民の家族をめぐる意識は多様で、世代差に加えて転入時期や居住地域によってかなり差があることがわかる。更に、強く感じられるのは中国のゆとりのなさである。日本人は貧しい時代にも伝統行事を貧しいなりに工夫して守り、生活に潤いを絶やさず、人間関係に奥床しさを失わなかったように思う。貧しくても本音をむき出しにしなかったのは、ほぼ１００％の識字率をはじめとする均質的な教育水準の高さに起因する部分が大きいのではないだろうか。中国の格差の大きさに比べ日本の均質性が改めて浮き彫りになった。何はともあれ和を大切にする集団主義的な家族観や強い排他性と裏腹の内を大切にする気持ちなどが戦後の日本と中国を比べた際の大きな違いを生んだのではないだろうか。

図表3－2－8 もめごと

親戚友人のなかで比較的に多く見られるトラブルは何ですか。

	男	女
住居	45	46
嫁と姑	58	55
子供の教育	39	79
お金の使い方	47	50
両親の扶養	57	61
娯楽	30	26
性格の不一致	74	76
財産・相続	68	58

図表3－2－9 もめごと
親戚友人のなかで比較的に多く見られるトラブルは何ですか。

	居住地域							
	崂山東路	東昌路	湯東新村	金楊路	周家渡	洋泾鎮	浦東大道	潍坊
住居	59	56	43	29	47	53	24	56
嫁と姑	73	76	48	27	37	71	67	58
子供の教育	54	43	22	29	43	36	51	38
お金の使い方	23	25	36	86	88	31	77	40
両親の扶養	51	60	53	78	68	49	69	61

3.3　職場・リーダーシップ

質問は、問13、14、17である。 職場に関する問13、14から始めよう。

(1)　転職の際の判断基準（問13）

転職の際の判断基準（一つ選んで下さい）

1. 個人の趣味と一致（　）　2. 自分の才能が発揮できそう（　）　3. 高収入（　）
4. 余暇が多い（　）　5. 仕事が楽　（　）　6. 同僚と上下関係（　）
7. 通勤の便（　）　8. 昇進の機会が多い（　）　9. その他（　）

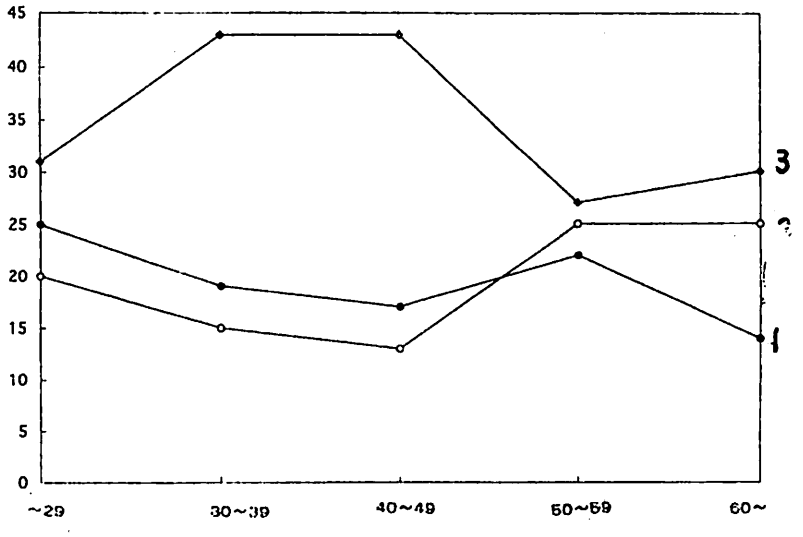
転職するとすれば、その判断基準は何かを質問したものである。結果は図表３－３－１に示す。

図表３－３－１　転職の判断基準 %

1	2	3	4	5	6	7	8	9
19	19	37	1	8	6	6	3	1

高収入が１／３強で最も高く、あと「個人の趣味と一致」、「自分の才能発揮」がそれぞれ約２割で他は少数意見である。この大勢は年齢別にも大きな差はないが「高収入」が30～ 50才の間に高い傾向が見られる。50才　に、趣味・才能、60才以上に趣味が30　50才の年齢層にくらべ多いことが見られる。 20才台は50才台に近い。（図表３－３－２）

図表３－３－２　高支持率カテゴリーの年齢別傾向



職業別にみたのが図表３－３－３である。

図表３－３－３ 職業別分布　実数（%）

	1.（%）工人	2.（%）2~7 専門	3.（%）8~11 商.企	4.（%）学生	5.（%）休職 退職	6.（%）管理	7.（%）他 DK	合計（%）
0.	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	2（ 1.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	2（ 0.2
1.	57（16.9）	33（23.7）	11（12.5）	9（20.9）	46（24.0）	22（19.0）	8（ 9.5）	186（18.6
2.	46（13.6）	34（24.5）	20（22.7）	18（41.9）	28（14.6）	34（29.3）	8（ 9.5）	188（18.8
3.	157（46.4）	38（27.3）	37（42.0）	7（16.3）	62（32.3）	32（27.6）	34（40.5）	367（36.7
4.	4（ 1.2）	5（ 3.6）	1（ 1.1）	1（ 2.3）	2（ 1.0）	0（ 0.0）	1（ 1.2）	14（ 1.4
5.	27（ 8.0）	6（ 4.3）	5（ 5.7）	2（ 4.7）	17（ 8.9）	6（ 5.2）	16（19.0）	79（ 7.9
6.	17（ 5.0）	9（ 6.5）	1（ 1.1）	2（ 4.7）	12（ 6.3）	14（12.1）	3（ 3.6）	58（ 5.8
7.	21（ 6.2）	6（ 4.3）	8（ 9.1）	1（ 2.3）	17（ 8.9）	0（ 0.0）	5（ 6.0）	58（ 5.8
8.	8（ 2.4）	6（ 4.3）	5（ 5.7）	2（ 4.7）	5（ 2.6）	7（ 6.0）	2（ 2.4）	35（ 3.5
9.	1（ 0.3）	2（ 1.4）	0（ 0.0）	1（ 2.3）	1（ 0.5）	1（ 0.9）	7（ 8.3）	13（ 1.3
合計	338(100.0)	139(100.0)	88(100.0)	43(100.0)	192(100.0)	116(100.0)	84(100.0)	1000(100.0

男女別にみると、「趣味」は同じ傾向であるが、「才能」が男にやや多く（男23%、女14%）、収入に女がやや多い（男35%、女39%）という傾向は見出せる。

(2) 職探しのとき頼る先（問14）

質問は次の通りである。

職を探す時にうまくいかなかった場合、誰の力を借りるか。

1) 会ったこともないいとこ

2) 同じ町、同じ村の人でかつて会ったことのない人

3) 中学、高校の先輩（見知らぬ人）

4) 職安（町）、パート

5) 職安（町）、職業

回答は、図表３－３－４のようになる。

図表３－３－４　回答分布（%）

	1	2	3	4	5
回答	8	5	7	53	62

回答は、「職安」に集中している。 これは性・年齢別に大差はない。

(3)リーダーシップ（問17）

質問は次の通りである。

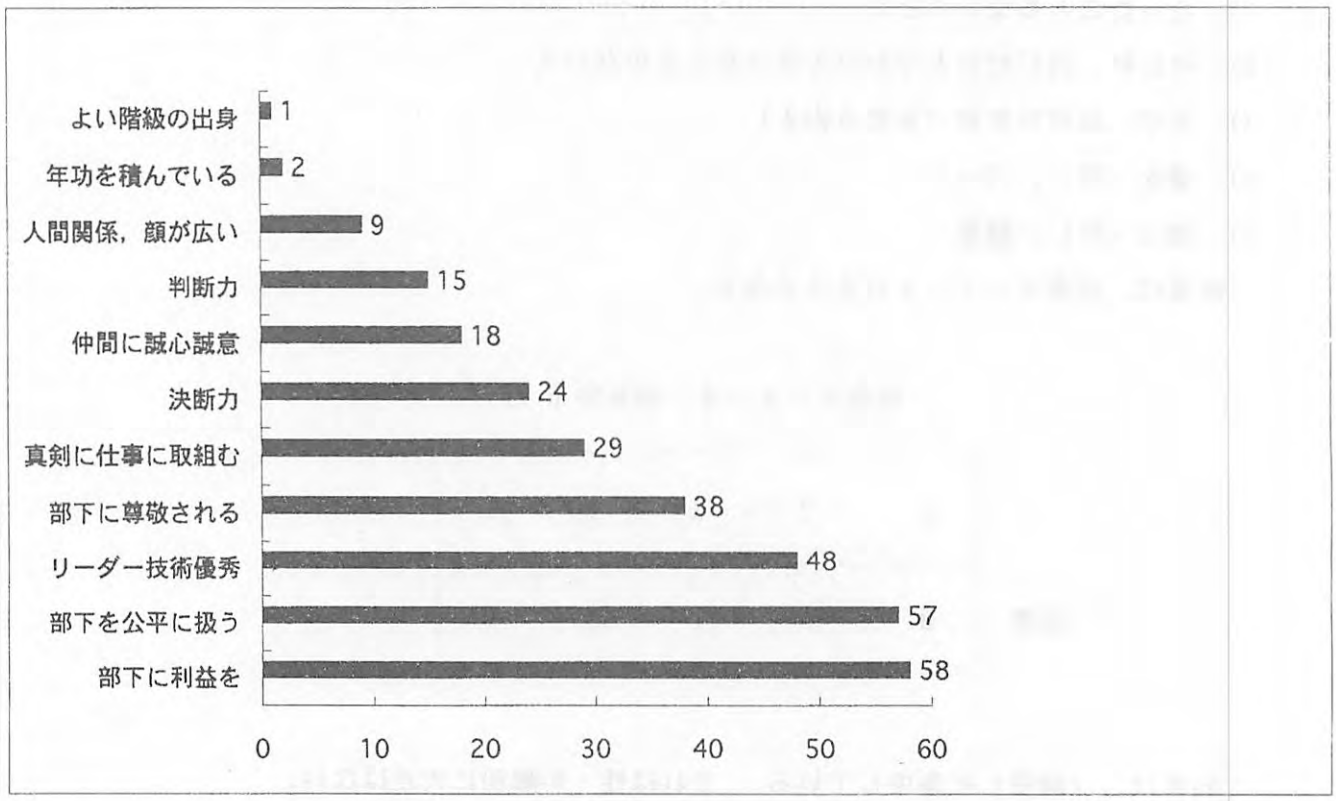
あなたの職場では良きリーダーはどんな資質を持っているべきでしょうか。

最も重要でないもの3つを次の中か選んで下さい。

（項目のリストを提示して回答をとる）

1) 技術的に優れていること
2) 部下を公平に扱うこと
3) 部下に尊敬され、好かれていること
4) 真剣に仕事に取り組むこと
5) 人間関係がよい、顔が広いこと
6) 仕事仲間に誠心誠意、接すること
7) 決断力がある、断固としていること
8) 判断力が優れていること
9) 部下に利益をもたらすこと
10) 年功をつんでいること
11) よい階級の出身であること

図表３－３－５



「重要であるという」の回答のみとりあげる。 結果は図表３－３－５に示す通りである。「部下に利益をもたらす」が58％あり多いのは、他の中国系の調査とくらべ、中国の特色であると言える。「部下を公平に扱う」「技術優秀」も半数程度である。男女別にみて10％程度差のあるものに、「部下を公平に扱う」（男52％、女63％）、「部下に利益をもたらす」（男53％、女63％）が見出される。年齢別にみて、30才未満の若い層で「部下に利益をもたらす」が43％と低いのが目につく。

3.4　家族関係と価値意識

この節では、価値意識の世代的な変化について、その影響源としての家族（両親）の認知された役割を手がかりに検討する。浦東調査では13の価値意識関連項目を質問した。回答は「大賛成」「ある程度賛成」「あまり賛成できない」「全く賛成できない」および「どちらともいえない」の５選択肢であり、それぞれの意見を聞いた後でその意見が何の影響を受けたものかを質問し、「両親の教え」「両親の行動」「マスコミ」「学校教育」「何ともいえない」「その他」の６選択肢から選んでもらった。「両親の教え」は言語的・明示的な家庭内での価値の伝達を、また「両親の行動」は非言語的・暗示的な両親の影響を受けたことを示しており、これらの家族内で価値意識が伝達されるルート以外に、「マスコミ」「学校教育」「その他」という価値意識の社会化のエージェントが選択肢に加えられている。

(1)　価値意識項目の意見分布の特徴

最も肯定された意識項目は「他人の恩を忘れてはならない(Q15-2)」で、９割以上が「大賛成」あるいは「ある程度賛成」し、次いで「社会のために個人の利益をある程度犠牲にすべきだ(Q15-4)」も８割が賛成している。これらは社会的望ましさが高い項目なので、建前的な回答が得られた可能性もあるが、「受けた好意を返す」という互報的なルールはどのような社会でも普遍的なものと考えられる。

物質的な志向を示す「金さえあれば何でもできる(Q15-1)」に賛成という回答が54.3%で過半数を超えている。かなり一般的に広がっている意識と考えられる。「人間はこの世で数十年生きられるに過ぎないから、できるだけ楽しむべきだ(Q15-5)」という現在志向も三分の一以上が支持している。社会的望ましさが低いと考えられる「できるだけ多く稼ぐこと、そうすればよい生活が得られる。だから稼ぐ手段を考えなくてもよい(Q15-7)」や「個人の衣食住確保で、困っている人のことをかまうことはない(Q15-6)」に対しても、２割弱ではあるが賛成している。「庶民は金を多く稼ぎ自分の生活だけを考えればよく、政治のことを心配する必要がない(Q15-8)」も3割が肯定しており、これらの項目は互いに相関が高く、非社会的で現在志向や享楽主義と結びついた＜私利益主義＞と呼べるグループを形成している。

一方、家族との関係では「稼いだお金は自分で使うべきで、家族のことを構わなくてもよい(Q15-9)」「結婚後最も大事なことは、子供の楽しみを考えることで、両親のことはあまり関心を寄せなくてもよい(Q15-10)」には賛成する者は「大賛成」「ある程度賛成」を合わせても１割未満で、社会に背を向けて自己の利益を追求するという一方で、最も基本的な互助的共同体としての家族に対する価値意識は、依然として明確であることが分かる。むしろ＜私利益主義＞によって社会や他人との関係が敵対的あるいは非援助的なものと意識

されることで、家族に対する期待や価値が高まってくる可能性も論理的にはありうるが、実際には次の若者文化の許容に見られるように、家族に関する価値意識も家族の一体感に否定的な方向に動きつつある。

同じ家族という共同体に関わる意識でも、「結婚後浮気をしたら離婚させるべきで、干渉する必要がない(Q15-13)」には3割弱が賛成している。若者の（従来の見方では）逸脱的な行動である「カラオケ・ロックは刺激をもたらしてくれるので若者は好きなように聞けばよい、他人の評価を気にしなくてよい(Q15-11)」には2割強、「若者がセックスを楽しむのは当たり前のことであまり干渉する必要がない(Q15-12)」には1割強しか賛成者がいないが、離婚に関する意識も含めて、これらの項目で特徴的なのは「分からない」という回答が多いことで、特に「浮気したら離婚」には2割近くの回答者が「分からない」としている。

若い世代の行動に対して従来の基準を当てはめることに対する躊躇は特に年配の世代で強い。これには2つの原因が考えられる。一つは50代以上ではすでに子供が成人して、自分自身の子供のしつけ・教育の問題でなくなり、関心が低くなっているというライフステージの影響である。またもうひとつの要因は世代的な要因である。今回調査で50歳以上の世代は66―69年の文化大革命時代に20代を送っている。その後、改革開放(79年から)、天安門事件(89年)、その後の改革開放の再活性化と浦東地域の開発など、社会的・経済的な方針の大きな振幅を経験し、過去の枠組で現在の若者に対する批判を行う根拠が乏しいと感じて判断を保留している可能性である。

(2) 価値意識の構造

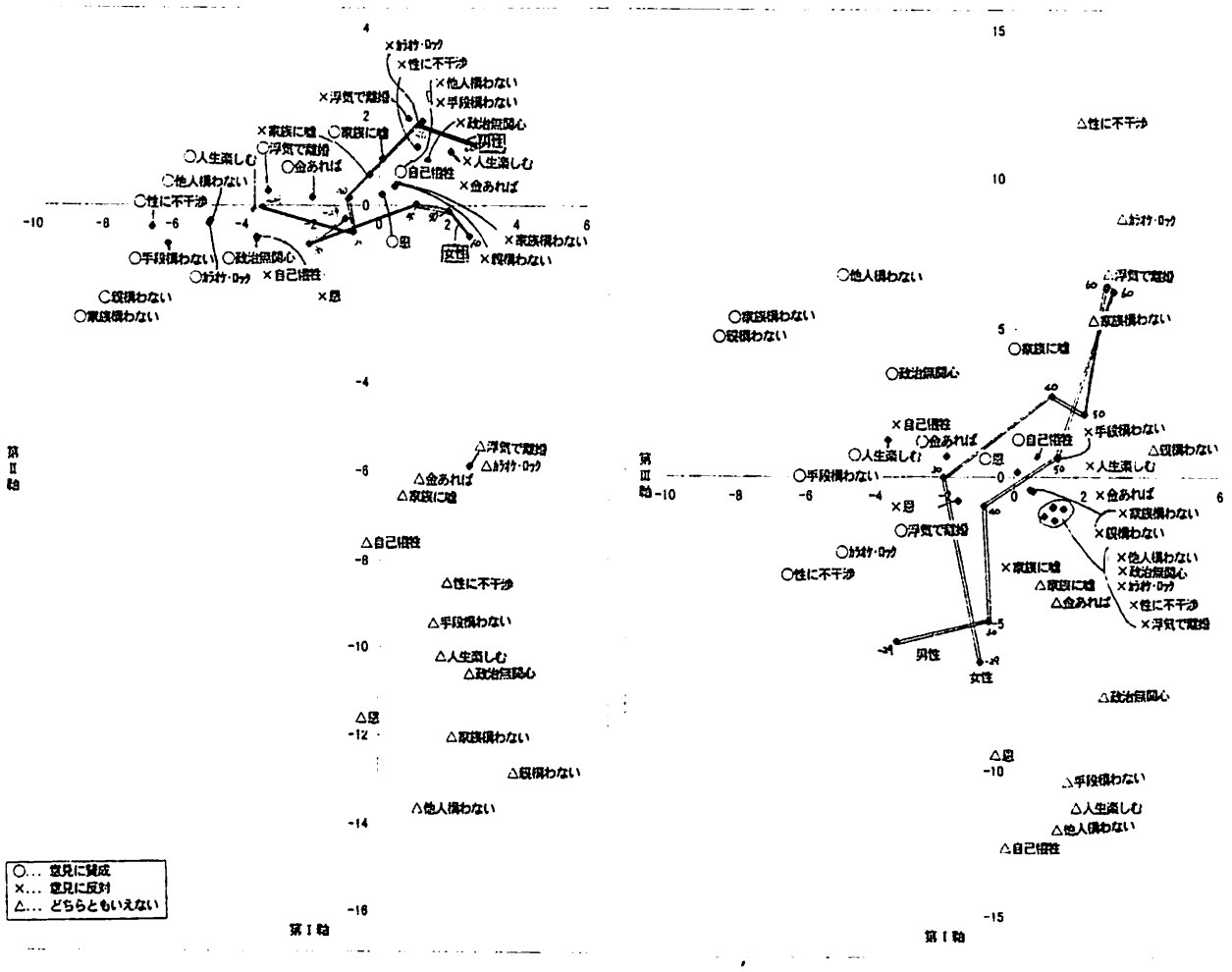
価値意識の相互関連と世代の関係を見るために数量化Ⅲ類の分析を性・年齢層を含めて行ったのが図表3-4-1である。価値意識への回答は「大賛成」「ある程度賛成」を＜賛成＞にまとめ、「あまり賛成できない」「全く賛成できない」を＜反対＞にまとめて「分からない」を含め3段階に変換してある。「分からない」は項目によっては回答率が僅かだが、Ⅳ－7と比較する意味もあって独立のカテゴリーとした。また世代的な変化を考えるために年代をやや細かい10代刻みにして男女別計10カテゴリーにして投入した。

この結果、価値意識に関する限り男女より年代的な対立が大きいことが明らかになった。第Ⅰ軸は＜私利益主義＞と家族への経済的責任を負わないという意味での＜脱家族志向＞を肯定する項目がマイナス側に位置し、それに対して反対または態度保留する＜伝統的倫理志向＞が分かれる軸と解釈できる。第Ⅱ軸は「どちらともいえない」という回答の比率が低い事も影響して、判断を保留する回答をマイナスの方向にはじき出す軸になった。また第Ⅲ軸はプラス方向に若者の行動への判断保留、マイナス方向に＜私利益主義＞への判断保留が分かれた（各軸の固有値は、第1軸が0.206、第Ⅱ軸が0.191、第Ⅲ軸が0.111）。

性・年齢別のグループのこの空間内への配置を見ると、(1)では男性・女性とも比較的若い層が図左側の＜私利益主義＞＜脱家族志向＞の項目に近く、年配層ではこれらに反対・判断保留する＜伝統的倫理志向＞に近い位置を占めている。また第Ⅰ、第Ⅲ軸を組み合わせた(2)図では男女ともほぼ年齢に沿って左下から右上に並んでいる。第Ⅲ軸では年配層で若者文化に対して判断保留に近い位置にあるのに対して、若い層は「恩」「自己犠牲」や＜私利益主義＞の項目に対して判断保留に近い位置にある。なお、「仕事に必要があれば家族の信頼を裏切ってもよい（家族に嘘）」は、仕事と家族という2つの要素が含まれているためか他の家族に関わる項目とは違った動きをしている。

図表 3-4-1　価値意識項目の数量化Ⅲ類

(1)第Ⅰ軸×第Ⅱ軸　　(2)第Ⅰ軸×第Ⅲ軸



(3)　その他の属性による違い

浦東のどの地域に住んでいるかでかなり価値意識が異なる。「金さえあれば」「人生を楽しむ」「性に不干渉」など、＜私利益主義＞＜若者文化許容＞にたいしては経済水準・生活水準が低い周家渡で最も賛成が多かった。逆に＜私利益主義＞に対して否定的なのは、高廟地区および最も生活水準が高い労山である。特に高廟地区では「金さえあれば」に対して

7割が反対するなど、特徴的な回答傾向を示している。この地区では50代以上の回答者が43%あり、高齢化地区のためかとも思われるが、全体で見た50代以上の層の回答よりも、若い人も含めたこの地区の「反対」比率の方が多いことから単に年齢的な影響だけとは考えにくい。この地区では旧来の親しい近隣関係が温存されていると指摘されており、このようなコミュニティの安定が、改革開放の直接の影響と思われる＜私利益主義＞への変化を抑制している可能性が示唆される。単に居住年数が長いだけでなく、そこでコミュニティが機能していることが重要であるのは、居住年数だけをみると、古くから浦東に住む（1979年以前から居住）者の方が、＜私利益主義＞に肯定的であることから分かる。これは浦東の物理的な発展と変化を目の当たりにしたことで、「変化にとり残される」という危機意識が生じたためであろう。

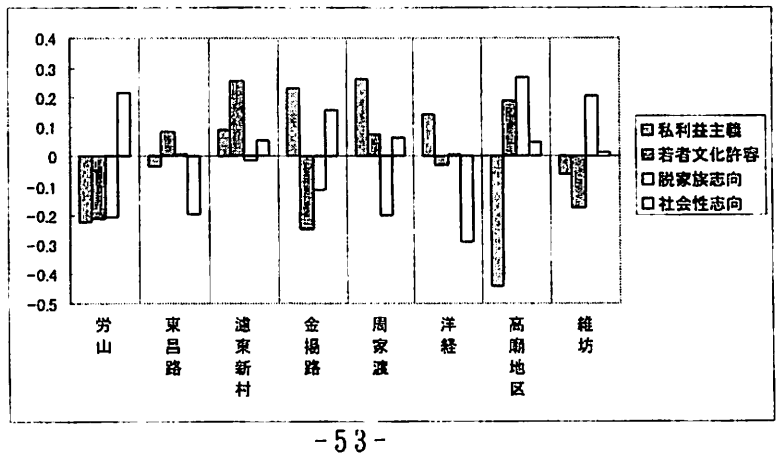
地域別の特徴をより明確に示すために因子分析を行って項目をまとめた。因子構造は図表3-4-2の通りで4因子構造であり、意味的にも分かりやすい結果が得られたが、因子得点で地区別の比較を行うことで、上述の特徴がより明確に確認できる。なお、職業別では教職や公務に就くものでは「自己犠牲」や「恩を忘れない」のような社会性志向の項目への肯定率がやや高く、逆に商業従事者では「自己犠牲」に否定的な者の割合が相対的に高く「重要なのは楽しむこと」という享楽志向が強く、職業による違いも大きいことが確認できた。

図表 3-4-2　価値意識項目の因子分析

項目	私利益主義	若者文化許容	脱家庭志向	社会性志向
金さえあれば何でもできる	59	-1	3	8
恩を忘れてはならない	2	-4	-8	50
仕事のために家族に嘘	-4	8	28	13
社会のために犠牲になるべき	-37	-9	5	30
重要なのは楽しむこと	59	22	0	7
困っている人をかまう必要ない	54	5	33	-15
手段を選ばず稼ぐべき	48	23	5	-16
政治を心配する必要ない	42	18	31	0
稼いだ金は自分で使う	14	15	59	-15
結婚後は両親のことは構わない	13	17	56	-19
ｶﾗｵｹ･ﾛｯｸは好きに聞けばよい	16	62	14	1
若者のセックスに干渉しない	13	73	13	-19
浮気をしたら離婚させてよい	9	39	15	2
寄与率	1.625	1.272	1.014	0.511

注：反復推定のある主因子法バリマックス回転後の値(100倍し小数点以下を四捨五入)。5段階評定として扱った。

図表 3-4-3　地区別に見た因子得点の違い



(4) 価値意識の影響源

価値意識に影響を与えた影響源は、価値意識の内容によって大きく異なっている。「恩」「両親に構わない」「稼いだ金は自分で使う」のように、意見分布が大きく偏り、従来型の価値意識が堅持されている部分については、「両親の教え」「両親の行動」が過半数を占め、家庭内でそのような家族共同体に関する価値や基本的な対人関係に関する価値が伝達されていると見なせる。一方、これら以外の項目では家庭外のマスコミや学校教育が挙げられる度合いが高く、また若者文化に属する部分では、意識に対する判断保留が多いことも反映して影響源でも「その他」と「分からない」が合わせて半数を占めている。

影響源は意見への賛否と関連が深く、図表3-4-4のように、向社会的な回答を挙げる場合には両親や学校教育の影響を受けたという回答が多い。しかしその関係は必ずしも強い場合ばかりではなく、反社会的な意識の影響を両親から受けたとする回答や、逆にマスコミから向社会的な影響を受けたとする回答も一定の割合で見られる。数量化Ⅲ類で項目ごとの影響源の相互関係を検討した結果では（図表省略）、第Ⅰ軸・第Ⅱ軸の空間でメディアごとのグループが生じ、1つの項目に両親から影響を受けたと答えた者は他の項目についても両親の影響を挙げるというような相関関係が見られた。

全体の傾向としてはマスコミから影響を受けた回答者は＜私利益主義＞的な意識をもつ回答者に多く、またそのような意識は若い年代の方が多い。しかし私利益主義に関わる項目では、賛成にせよ反対にせよ年配層の方がマスコミを挙げる者が多い。社会主義体制では政策によって社会的・経済的状況が大きく変動するために、意見の根拠を過去の経験や上の世代からの連続性に求めにくく、マスコミに情報を依存するためと考えられる。

(5) 若年層に対する親世代の影響

両親と同居することで両親からの影響が大きくなるのかを検討した。しかし中国都市部の住宅事情もあって、30代までの回答者のうち未婚者はほとんどが親と同居している（既婚者の場合は6割が別居）。したがって未婚者に対して同居している親世代が価値意識に与える影響を独立して見ることはできなかった。30代までの既婚者に限って両親との同居の有無で比較した場合、上の世代との同居・別居による意識や影響源の違いはあまり大きくなく、むしろ未既婚によって世帯の中心になっているかどうかの違いのほうが大きかった。30代までの未婚者と既婚者を比較すると、「他人に構わない」「稼ぐのに手段を選ばない」や「カラオケ・ロック」「性に不干渉」など、＜私利益主義＞や＜若者文化＞に対しては未婚者で支持が多かった（特に＜若者文化＞に対しては、20代までの男性で他の性・年齢グループと比べて顕著に支持者が多い）。経済的共同体としての家族の相互扶助を否定する＜脱家族志向＞についてはどちらでも賛成が少なく顕著な差は見られなかった。

(6)影響源としてのマスコミ

＜私利益主義＞的な傾向に対しては、社会的望ましさが低いと予想されるにも関わらず、かなり一般的に容認・肯定されているという結果が得られた。またこのような傾向はもともと伝統的に家族の中で伝達されているものというよりは、マスコミによるものと回答者自身は答えている。しかしマスコミが受け手である浦東住民に一方的に利己主義を煽っているという見方には留保が必要だと思われる。社会主義国家ではマスメディアのコンテンツが政策を反映していることが受け手に強く意識されているものと考えられる。＜私利益主義＞がもともと今回調査の回答者に以前から持たれていた価値意識であっても、マスコミを影響源と答えることで、国家からの暗黙の了解があることを意見の正当化の根拠として挙げると考えられる。いずれにせよ、利益を追求して成功することが必ずしも悪ではなく、積極的に肯定しても許されるという意識が生まれており、マスコミの報道が私利益追求を正当化する内容であることを示唆している。これと対照的に、家族の相互扶助に関する意識では、マスコミが同様の主張をしているとしても、もともと社会的望ましさの高い意識であえて正当化の必要がないため、「両親の教え」「両親の行動」という家庭内の伝達が強く意識されているという側面があるだろう。

図表 3-4-4　価値意識と影響源の関係

意識	意見	両親の教え	両親の行動	マスコミ	学校教育	分からない	その他
恩を忘れない	賛成(937)	43.8	18.6	17.4	6.1	7.2	7.0
	反対(50)	8.0	8.0	**28.0**	14.0	**40.0**	2.0
	ＤＫ(11)	9.1	0.0	**36.4**	0.0	**54.5**	0.0
	全体	41.6	17.8	18.1	6.4	9.3	6.7
社会のために自己犠牲	賛成(793)	8.3	6.6	27.5	40.1	12.1	5.4
	反対(144)	2.8	4.9	36.8	15.3	**29.9**	10.4
	ＤＫ(61)	0.0	0.0	23.0	0.0	**70.5**	6.6
	全体	7.0	5.9	28.6	34.1	18.2	6.2
金さえあれば何でもできる	賛成(542)	5.4	2.6	**57.9**	2.0	20.7	11.4
	反対(414)	17.4	8.7	28.0	**19.3**	18.6	8.0
	ＤＫ(42)	2.4	0.0	21.4	0.0	**66.7**	9.5
	全体	10.2	5.0	44.0	9.1	21.7	9.9
人生を楽しむ	賛成(359)	4.5	4.7	**40.4**	3.9	28.4	18.1
	反対(575)	12.7	13.2	20.0	20.2	23.7	10.3
	ＤＫ(63)	4.8	1.6	11.1	0.0	**74.6**	7.9
	全体	9.3	9.4	26.8	13.0	28.6	12.9
浮気で離婚してよい	賛成(287)	1.0	2.8	30.3	4.9	45.6	15.3
	反対(519)	6.6	2.3	35.1	6.0	34.3	15.8
	ＤＫ(191)	2.1	0.0	9.4	0.5	**78.0**	9.9
	全体	4.1	2.0	28.9	4.6	45.9	14.5
結婚後は両親構わない	賛成(74)	12.2	6.8	**44.6**	6.8	21.6	8.1
	反対(899)	23.1	32.7	15.2	8.3	12.8	7.8
	ＤＫ(24)	4.2	12.5	8.3	4.2	**70.8**	0.0
	全体	21.9	30.3	17.3	8.1	14.8	7.6

注：全体の平均より 10 ポイント以上高い値をゴチックで示した。また「大賛成」「ある程度賛成」を賛成、「あまり賛成できない」「まったく賛成できない」を反対にまとめ、「どちらともいえない」をＤＫで示した（％）。

3.5　カウンターカルチャー

価値・ライフスタイルの激動期においては、新しい価値を受容する人、受容しようとする人が、その時代の古い、伝統的価値・ライフスタイルや慣習を打破し、新しい価値・ライフスタイルを取り入れていく、いわばイノベーター、改革推進志向の中心となることが多くの国で確認されている。そこで中国でもそうした文化の改革者、新しい文化の推進者、とでもいうべき人たちがいるのではないかと考える。また、そのような人は、どんな人たちであろうか。今回はそうした新しい価値・ライフスタイルを、カウンターカルチャーという視点から、設定し、調査、検討を加えることができた。以下、カウンターカルチャーの主要な側面にどんな次元があるか、また、そのような視点を支持する人々の社会的分布についても、見てみよう。

まず、カウンターカルチャー的意識やライフスタイルと考えられるものを集め、整理、分類してみたものが、図表３－５－１である。この結果より、一口に「カウンターカルチャー」といっても、ややニュアンスの異なる、３つの次元があることが明らかになっている。すなわち、因子分析の結果、以下の３因子が析出された。

図表3-5-1　浦東調査、counter-culture、因子分析（回転後の成分行列）

	因子		
	1	2	3
A1501 金さえあれば	.061	.492	.020
A1509 人生楽しめ	.169	.537	.114
A1511 たくさん稼げ	.040	.532	.362
A1513 稼ぐ手段不問	.299	.465	.117
A1515 政治関係ない	.128	.397	.303
A1517 家族かまわず	.080	.117	.593
A1519 両親関係ない	.119	.132	.612
A1521 カラオケ OK	.612	.204	.031
A1523 セックス OK	.775	.051	.181
A1525 浮気 OK	.515	.138	.078
因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法			
a 6 回の反復で回転が収束しました。			

第１因子：<人生享受・刹那主義>、金さえあれば何でもできる A1501、人生数十年楽しむべきだA1509、困っている人のことをかまっている必要ないA1511、できるだけ稼げ手段はなんでもいいA1513、など、お金を稼いで人生を楽しめ、という因子。

第２因子：<自分中心主義>、子供が大事で両親のことはあまり気にしなくて良いA1519、稼いだお金は自分で使い家族のことはあまりかまわなくていいA1517、庶民は自分の暮らしを考えればよく政治のことは関係ない A1515　自分のことで精一杯、親も家族も政治も関係ないという、いわば、自己中心・自分中心主義の因子。

第３因子：<カウンターカルチャーへの共感>、カラオケもロックも結構 A1521、若者のセックスにも干渉する必要はない A1523、結婚後浮気をしたら離婚させるが（それ以外は）干渉しない A1525、など、若者文化、カウンターカルチャーへの共感を示す因子。

同様の調査、分析を、工場調査でも行った。結果が図表３－５－２である。各因子、若干ニュアンスを異にするが、基本的にはよく似た３因子構造が得られている。

図表３－５－２　浦東調査、counter-culture、因子分析（回転後の成分行列）

	因子		
	1	2	3
A3701A 金さえあれば　1*	.406	.172	-.039
A3705A 人生楽しめ　1	.388	.102	.227
A3706A 他人かまうな　1	.608	.240	.106
A3707A 稼ぐ手段問わず　1	.444	.070	.164
A3708A 政治関係ない　1, 2	.484	.334	.174
A3709A 家族かまわず　2	.359	.350	.144
A3710A 両親関係ない　2	.202	.795	.152
A3711A カラオケ OK　3	.279	.401	.166
A3712A セックス OK　3	.086	.139	.538
A3713A 離婚赦す？　3	.157	.110	.705
因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法			

(*)　は、浦東調査での因子。

すなわち、第１因子が、<人生享受>であることは変わらないが、浦東調査では自分中心と人生享受と両方で負荷量の高かった「政治はわれわれの生活には関係ない」という項目が、前半の、庶民は金を稼いで良い生活をすればよい、の方に引っ張られたのであろうか、人生享受因子の方に入っていることと、浦東調査では、カラオケがカウンターカルチャーの代表であったが、今度はむしろ第２因子の<自分中心>因子の方に入っていることが、注目される。

工場調査の方は、女性が多いため、セックスと浮気が非常に近いと判定され、カラオケはむしろ少し離れて感じられたのであろうか、第３因子は「カウンターカルチャー」というより、「性の自由」とでも言うような因子となっているが、これもカウンターカルチャーの重要な指標の一つであることには変わりがないので、カウンターカルチャー因子と呼んで差し支えなかろう。

こうして、浦東調査と工場調査では、それぞれの因子が、若干ニュアンスを異にする面もあるが、基本的には、工場調査の結果も、浦東調査の３因子構造とよく似ているため、因子の名称は、浦東調査にあわせて、第１因子、人生享受因子、第２因子、自分中心因子、第３因子、カウンターカルチャー因子、と呼ぶことにしたい。従って、以下、この３因子で考察していくことにしたい。

(1) カウンターカルチャーの社会的分布

ではこうした新しい価値・ライフスタイル、それも伝統的価値や現体制に反発するような価値は、どんな人たちから信奉されているのであろうか。まず、浦東調査について、析出された３つの因子の因子得点の平均点を、男女別、世代別、そして学歴別などで平均、分散などを算出し、デモグラフィック要因によって比較した結果が、図表３－５－３から、３－５－５である。

性別では、人生享受の傾向は男性で強く、女性では弱い。これは諸外国でも共通の現象といえよう。自分中心、カウンターカルチャーについては、あまり大きな性差は見られない。強いて言えば、女性では自分中心傾向が、男性ではカウンターカルチャー志向が、それぞれやや強いというくらいであろう。（図表３－５－３）

図表３－５－３　浦東調査、因子得点

A19　性別		factor score 1 人生享受	factor score 2 自分中心	factorscore 3 ｶｳﾝﾀｰｶﾙﾁｬｰ
1 男	平均値	-.108	.018	-.027
	N	496	496	496
	標準偏差	.867	.789	.748
2 女	平均値	.100	-.019	.034
	N	495	495	495
	標準偏差	.802	.751	.746
合計	平均値	-.004	0	.003
	N	991	991	991
	標準偏差	.841	.770	.747

世代差は、あまり一貫した傾向はみられないが、部分的にいろいろな興味深い差異が認められる。人生享受志向では、一貫した傾向が認められる。すなわち、若者は人生享受、年をとるほど堅実志向という傾向が、はっきり見られる。特に２０代がもっとも人生享受志向が強く（-0.459と極めて高い）、１０代、３０代がそれに次ぎ、やや人生享受、４０代でやや堅実志向へ転換、５０代、６０代では、かなりはっきりと人生享受を否定している。５０代で、0.1746０代では0.277と、堅実志向が顕著である。

自分中心志向では、ハイテイーンはむしろ批判的 (0.185) だが、２０代でやや自分中心に転向、３０代がもっとも自分中心的（-0.133）。４０代でまた自分中心志向は弱まり、５０代、６０歳以上では明らかに自分中心には批判的 (0.107, 0.113) という結果である。３０代は、子育てなど、もっとも家計が苦しい時代で、人のことを考える余裕がないということであろうか。さらに、年を取るとまた、自分中心ではいけないと言うところへ戻って行くところが、大変興味深い。（図表３－５－４）

図表３－５－４　浦東調査、因子得点

A20　年齢		factor score 1 人生享受	factor score 2 自分中心	factor score 3 ｶｳﾝﾀｰｶﾙﾁｬｰ
１～２０歳	平均値	-.180	.185	.180
	N	31	31	31
	標準偏差	.656	.724	.765
２２０代	平均値	-.459	-.059	.058
	N	124	124	124
	標準偏差	1.011	.802	.882
３３０代	平均値	-.107	-.133	-.002
	N	219	219	219
	標準偏差	.859	.820	.745
４４０代	平均値	.047	-.010	-.033
	N	313	313	313
	標準偏差	.775	.788	.730
５５０代	平均値	.174	.107	-.009
	N	140	140	140
	標準偏差	.744	.711	.728
６６０歳～	平均値	.277	.113	.006
	N	168	168	168
	標準偏差	.761	.666	.691
合計	平均値	0	0	0
	N	995	995	995
	標準偏差	.844	.769	.749

カウンターカルチャーに関しては、ハイテーンで、はっきり共感、（0.180）、２０代で、やや共感（0.058）と言う結果である。あとは、カウンターカルチャーに反対、と言うことではなく、ほとんど世代とカウンターカルチャー志向とは関係がない（0.00）、と言う結果である。若者文化という特徴がはっきり出ているところがおもしろい。

学歴との関係では、人生享受は、低学歴（無学、小学校）のところで積極的に反対が多く（0.563, 0.274）、中学歴で中間、高学歴（高校卒、大卒以上）で、人生享受志向が高い。欧米型の新しい価値・ライフスタイルであるため、学歴の高い層から入っていく、と言うことのようである。

自分中心は、低学歴で高く、ほかはあまり明確な特徴はない。カウンターカルチャー中学歴でやや共感、低学歴と、高学歴の、両極で、ともに批判的と言う結果だ。（図表３－５－５）

図表３－５－５　浦東調査、因子得点

A22　学歴		factor score 1 人生享受	factor score2 自分中心	factor score 3 ｶｳﾝﾀｰｶﾙﾁｬｰ
1　無学	平均値	.563	-.137	.207
	N	46	46	46
	標準偏差	.761	.720	.681
2　小学校	平均値	.274	-014	-.081
	N	103	103	103
	標準偏差	.905	.753	.764
3　中学校	平均値	.058	-.057	-.031
	N	337	337	337
	標準偏差	.830	.835	.741
4 高校	平均値	-.169	.040	-.026
	N	345	345	345
	標準偏差	.798	.721	.777
5 大学以上	平均値	-.094	.081	.113
	N	164	164	164
	標準偏差	.831	.744	.700
合計	平均値	0	0	0
	N	995	995	995
	標準偏差	.844	.769	.749

4．工場従業員の意見と態度と意識構造
（上海工場従業員調査）

4.1	上海工場従業員調査の概要	
4.2	結婚・家庭・男女	岩男寿美子
4.3	宗教	岩男寿美子
4.4	社会における人間関係	鈴木　裕久
4.5	勤労観	国広陽子　佐渡真紀子
4.6	職場の人間関係	仇　立平
4.7	リーダーシップ	林　知己夫
4.8	家族関係と価値意識	中村　雅子
4.9	カウンターカルチャー	飽戸　弘

4.1 上海工場従業員調査の概要

・調査対象　中華人民共和国上海市の工場従業員１０５４名
経営形態（国有企業，集体企業，中外合資企業）ごとに工場を選び、
ほぼ３５０名ずつ）

・調査方法　アンケート用紙に基づく訪問面接法と自記式の併用（調査対象の読み書き能力による。面接法が約４分の１）

・調査時期　１９９７年３月～４月

・回収率　１００％

・調査票の設計

従業員の社会的属性（性別，年齢，結婚，学歴，職階，企業形態，収入，勤続年数）

家族・結婚についての実態と意識

価値意識（伝統的価値，カウンターカルチャー，信仰，価値意識についての影響）

職場・労働についての意識（勤労観，よい上司の条件，転職，職場のリーダーシップなど）

・回答者の社会的特性の概要

性別	男性	39.4%	女性	60.6%
結婚	既婚	36.1%	未婚	63.3%
年齢	２０歳未満	7.6%		
	２０歳代	38.0%		
	３０歳代	19.4%		
	４０歳代	25.6%		
	５０歳代	6.8%		
	６０歳代以上	0.5%		
	不明	2.0%		
学歴	小学校以下（なしを含む）	11.0%		
	初中	53.2%		
	高中	21.3%		
	大学以上	13.9%		

・調査票および単純集計結果は巻末資料を参照のこと

4.2 結婚、家庭、男女

このセクションでは家族関係と男女のあり方に関する問に対する回答結果を検討する。こうした問題の回答に対して工場の形態はほとんど関係しないと思われるので婚姻状況、性別、世代などによる分析を中心に行うことにする。

(1) 婚姻状況（問１）

まず、回答者の婚姻状況による構成をみると次のようになっている。

	男	女
未婚	１６０	２２１
既婚	２５３	４１４
離別・死別	２	４

なお、離・死別者はごく少数なので以下の分析からは除外した。

(2) 親子関係

(a) 子供観（問２）

「一般的に言って、こどもはどのような存在だと思いますか」という問に対し、図表４－２－１に挙げた６つのこどもの捉え方を提示し、それぞれについて「そう思う」、「どちらともいえない」、「そうは思わない」のいずれか１つを選び回答するよう求めた。

図表4－2－1 子供観
一般的に言って、こどもとはどのような存在だと思いますか。次のそれぞれについて、そう思うか、そう思わないかをお答え下さい。

		男		女	
		未婚	既婚	未婚	既婚
家を継ぐもの	そう思う	56	75	43	71
	どちらとも言えない	19	9	25	14
	そう思わない	26	15	32	14
次の社会を担うもの	そう思う	58	74	60	78
	どちらとも言えない	21	17	17	18
	そう思わない	21	8	22	5
お金のかかる存在	そう思う	72	84	53	87
	どちらとも言えない	5	8	12	5
	そう思わない	23	8	34	8
家族の稼ぎ手として役に立つ存在	そう思う	20	19	23	48
	どちらとも言えない	49	53	40	35
	そう思わない	31	27	37	16
老後の経済的な支えになるもの	そう思う	14	23	33	53
	どちらとも言えない	47	41	32	33
	そう思わない	39	36	35	14
老後の精神的な支えになるもの	そう思う	78	82	66	85
	どちらとも言えない	10	13	19	12
	そう思わない	13	4	15	3

結果は性差よりも婚姻状況による違いが大きいことを明らかにしている。性差は「家族の稼ぎ手として役に立つ存在」、「老後の経済的な支えになるもの」の２項目においてみられ、女性は自分の腹を痛め、苦労して養育した子供にはその見返りを求めるきわめて実利的な子供観を形成しているのに対し、男性は否定的あるいは「どちらともいえない」という中間回答が多い。男性の方が体面を取り繕う傾向が強いためであろうか。あるいは女性は子供に頼らざるを得ない弱い立場にあるという現実を反映していると解釈すれば、中国残留孤児の日本への帰国に当って生じた孤児と中国人養母とのトラブルも理解できる。

未・既婚別にみると、すべての項目において既婚者の方が未婚者よりも「そう思う」と賛成する割合が高い。恐らく、未婚者は自分を子供の立場において回答し、既婚者は親の立場から回答しているためであろう。特に未婚女性の家意識の弱さが目につく。また婚姻状況による違いは男性よりも女性において顕著である。

(b) 老親のめんどう（問８）

「年とった親は子供がみるべきだと思いますか、それとも自分でなんとかすべきだと思いますか」という質問に、「子供が面倒を見るべき」、「親がじぶんでなんとかすべき」、「わからない」、「場合による」の４つの選択肢から一つを選んで回答させたところ、子供観にも現れていたように、女性は「子供が面倒を見るべき」が５７％、「場合による」が３７％となっているが、男性は丁度その逆で「子供が面倒をみるべき」が３７％、「場合による」が５７％となっている。男女とも「親が自分でなんとかすべき」という回答は極めて少ない。

「子供が面倒を見るべき」という回答はむしろ若い世代ほど多くなっている。まだ親をみるような立場にはないばかりでなく、日本ほど平均寿命が長くなく、ひとりっ子の夫婦が４人の親をみなければならない状況はまだ現実的ではないせいであろうか。

(3) 結婚観・離婚観・同棲の許容度

(a) 結婚相手の条件（問４）

「外見」から「年齢」まで１１の条件のなかから、若者が結婚相手を選ぶ時に重要とされることを３つまで選ばせている。最も多くの回答者が選んだ条件は「気が合うこと」、次いで「学歴」、「道徳的にしっかりしていること」となっている。かつて中国では学歴は必ずしも高収入や高い地位と結びついてはいなかったが改革開放以来学歴がものを言うようになったのであろうか。道徳面の重要性は次に取り上げる良い結婚の条件としての貞節の重要性とも一致している。

男女差は男性が結婚相手の「外見」をより重視し、女性は相手の「仕事の能力」を重視する点にみられ、未・既婚の差は未婚者は「気が合うこと」や「愛情」といったロマンチックな情緒面をより重視し、既婚者は「職業」や「家族の経済的状況」といった実利的条

件をより重視していることに示されている（図表４－２－２、４－２－３）。

図表4－2－2 結婚相手の条件
若者が結婚相手を選ぶ時に重要なことはどれだと思いますか。

	男	女
外見	28	18
学歴	42	43
職業	30	25
仕事の能力	14	25
家族の経済的状況	25	18
家族の社会的地位	7	6
趣味が合うこと	36	37
気が合うこと	49	51
道徳的にしっかりしている	37	45
愛情	21	18
年齢	7	9

図表4－2－3 結婚相手の条件
若者が結婚相手を選ぶ時に重要なことはどれだと思いますか。

	未婚	既婚
外見	21	23
学歴	38	45
職業	20	31
仕事の能力	22	20
家族の経済的状況	16	23
家族の社会的地位	6	7
趣味が合うこと	39	35
気が合うこと	56	47
道徳的にしっかりしている	44	41
愛情	27	15
年齢	8	8

(b) 良い結婚の条件（問６）

家庭調査と同様、１５項目の良い結婚の条件それぞれの重要度を評定した結果のうち「非常に重要」とされた回答を性と婚姻状況別に示したのが図表４－２－４である。男女共に最も多くの回答者が「非常に重要」としたのは「お互いに貞節であること」である。全般的に女性の方が各条件を「非常に重要」とする割合が大きい。

図表4－2－4 良い結婚の条件（「非常に重要」を選択した割合）

	男		女	
	未婚	既婚	未婚	既婚
同じような生活が好きであること	29	23	24	32
愛し合っていること	69	61	78	78
恋人気分を持ち続けること	78	69	84	76
子供がいること	25	45	35	65
子供の養育について同じ考え	43	54	50	70
性生活がうまくいくこと	43	40	38	38
お互いに貞節であること	71	79	75	82
お金の使い方について似た考えをもっていること	14	23	24	36
経済的に安定していること	46	56	42	53
同じような環境で育ってきたこと	9	13	14	20
お互いの気持ちを話し合えること	76	64	70	57
結婚の相手が、あなたが毎日していることに対し理解していること	3	7	7	11
共に物事をユーモアを持ってみることができること	21	17	22	18
相手の欠点を我慢する	53	39	60	34
相手にプライバシイを許す	38	24	44	24

特に性差が顕著な項目は「愛し合っていること」、「子供がいること」、「子供の養育について同じ考えをすること」、「お金の使い方について似た考えをもっていること」などでいずれも女性の方が高率である。なお「相手があなたが毎日していることに対し理解していること」というパートナーシップを意味する項目は男女共に２８％が「全く重要でない」としている。解釈については家庭調査結果のなかで触れたのでここでは繰り返さない。

未・既婚による顕著な違いは、未婚者の方が「恋人気分を持ち続けること」、「相手の欠点を我慢する」、「相手にプライバシイを許す」など夫婦の情緒的つながりを「非常に重要」とする割合が高く、また既婚者の方が子供に関わる項目や経済的安定や金銭感覚の一致を「非常に重要」とする割合が高い。

また項目によっては顕著な世代差が認められる。夫婦の情緒的及び肉体的な結びつきに触れた項目（「恋人気分を持ち続けること」、「お互いの気持ちを話し合えること」、「相手の欠点を我慢する」、「相手にプライバシイを許す」、「性生活がうまくいくこと」）については、若い層ほど「非常に重要」と判定する割合が高く、結婚観の変化を窺うことができる。

(c) 離婚観（問３）

工場調査では子供がいる夫婦の離婚という条件つきで離婚観を尋ねている。回答者の約５割が「子供が成人していればよい」とうまくいかなくなった夫婦の離婚を容認している。性差は殆どないが、「離婚してはいけない」という離婚に対する否定的意見は女性で２割、男性で１割と女性の方に多い。

(d)同棲に対する態度（問５、問７）

同棲に対する態度はその善悪を「別に構わない」、「よくないことだ」、「その他」、「わからない」のいずれかで判断する質問と、「個人の問題であり、干渉する必要はない」、「社会道徳に反することであり、反対すべき」、「愛さえあればよい」、「わからない」のいずれかを選んで回答する質問の２つの形式で尋ねている。結果は男性の方が同棲に対しより肯定的で、反対に女性はより否定的な傾向を示している。性道徳が未だに厳しい中国では未婚男女間のセックスは決して珍しくはないが同棲は一般的ではないし、同棲した後で破局を迎え、結婚しないことになると世間の非難の目にが向けられ、女性の方がより傷つくことになる。だからどうしても女性の方が否定的になるのだろう。

(4) 結婚後の居住方式：理想と現実（問９、問１０）

結婚後の理想的な居住方式について、まず理想を次いで現状を図表４－２－５、４－２－６に挙げた３つの選択肢を用いて尋ねた。現状は親との同居が５割強、夫婦だけが４割強で親との近居をしている者は殆どいない。しかし理想は親との近居がトップ、次いで夫婦だけとなっている。親との近居を理想とする割合には際立った性差があり、男性の支持が多いのは次に取り上げるもめごとからもわかるように嫁・姑のもめごとが多く、男性は同居で嫁・姑の板挟みになることを恐れているからではないだろうか。しかし親から遠く離れて住むのも気がかりであるために近居を理想とするものと思われる。

図表4－2－5 居住方式
結婚後の理想的な居住方式についてどう思いますか。

	男	女
夫婦は独立して住む	21	26
父母(義父母)と同居	13	25
父母とは別居し、近居	66	48

図表4－2－6 居住方式
あなたの現在の家庭の居住方法はどちらですか。

	男	女
夫婦は独立して住む	45	42
父母(義父母)と同居	53	55
父母とは別居し、近居	2	3

(5) 家庭の中のもめごと（問１３）

親戚や友達の間では、どんなことで問題が多く起こるかを図表４－２－７に挙げた選択肢のなかから５つまで選ばせるという形で家庭の中のもめごとを調べている。家庭調査にも同様の設問が含まれているが、家庭調査にあった「婿・義父」の代わりに「夫婦間の感情のもめごと」と「親子間のもめごと」が選択肢に加えられている。最も選択率の高かったのが「嫁・姑問題」、次いで「夫婦間の感情」と「財産」であった。際立った性差は認められない。

図表4－2－7 もめごと
あなたの親戚や友達の間では、どんなことで問題が多く起こるか。

	男	女
住居問題	43	46
嫁、姑問題	57	57
夫婦間の感情	47	51
子供の教育	45	41
親子間	30	24
日々の支出	26	34
老親の面倒	30	24
娯楽	20	20
生活の仕方	33	28
性格の不一致	47	51
財産	20	31

(6) 家庭内の力関係

(a) お金の管理（問１１）

「お宅ではお金の管理は主にどなたがしていますか」という質問に６つの選択肢のいずれかで回答する形式になっている。結果は「夫婦二人で」を選択した人が男４８％、女６５％と群を抜いて多いが、性差と婚姻状況による差が歴然とあり、女性と既婚者に「夫婦二人で」が多くなっている（図表４－２－８）。若干女性の願望も含まれているのだろうか。男性は妻(全て＋主に)が財布の紐を握っているとする者が３０％に対し、そう思われている女性の回答は１８％と両者の受け止め方にはずれがあるようだ。しかし今回の調査は夫婦をペアにして別々に回答を得ているわけではないから、断定的なことは言えない。

図表4－2－8 お金の管理
お宅ではお金の管理は主にどなたがしていますか。

	男		女	
	未婚	既婚	未婚	既婚
全て妻	16	12	7	5
主に妻	15	18	14	12
夫婦二人で	38	55	53	71
主に夫	9	7	12	6
全て夫	6	4	4	3
その他	16	3	10	3

(b)　重大事項の決定(問１２)

マイホームや家電の購入などの重大事項の決定を誰がするかを尋ねているが、「夫婦」あるいは「家族全員」が相談して決めるという優等生的回答がなされ、重大事項決定の機会などきわめて限られている状況下ではあまり適切な質問ではなかったように思われる。

(c)まとまったお金の使途(問１６)

「高級品」、「子供の結婚式」など７つの選択肢(その他を除く)を提示して、まとまったお金の使い方を１つ選ばせている。図表４－２－９に示すように、結果には性差と未・既婚による違いが認められる。未婚者は男女とも「いざという時に備える」という回答が最も多く、ついで男性は「家を建てる」、「子供の教育」、女性は「子供の教育」、「家を建てる」の順になっている。結婚に際し、住まいは男性が用意するものという考えが残っているようだ。また住居がないために結婚できない若者が多数いることから未婚の男性にとっては「家を建てる」が切実な願いを反映しているのだろう。他方未婚の女性は「いざという時に備える」が４４％とずば抜けて多い。その一方で既婚者にはほとんどみられなかった「商売を始める」を選んだ男女がおり、未婚者の堅実さと同時に夢を追う姿も見受けられる。

既婚者の回答は男女共に「子供の教育」がトップとなっているが、ここでも女性の教育熱心が示されている。

図表4－2－9 まとまったお金の使途
まとまったお金があるとします。どう使いますか。

	男		女	
	未婚	既婚	未婚	既婚
高級品	7	6	4	2
子供の結婚式	1	9	1	11
子供の教育	20	35	24	46
家を建てる	24	15	13	10
いざという時に備える	31	26	44	25
貸して利子を得る	2	4	5	4
商売を始める	15	5	10	1

(7)　男女の力関係

制度上は男女平等の筈ではあるが、伝統的に存在した男尊女卑の意識はすっかり変わったのだろうか。男女のどちらが有利とみなしているか、男女どちらに生まれ変わりたいかという２問でとらえている。

(a) 男女どちらが有利か（問１５）

「現在の社会では男性であることと女性であることと、どちらが有利だと思いますか」と尋ね、「男性が有利」、「女性が有利」、「どちらが有利ということはない」のいずれか

を選ばせたところ、男性の６割弱、女性の７割弱が「どちらが有利ということはない」と答えている。これは実態を示すというよりもあるべき姿を答えているのではないだろうか（図表４－２－１０）。「女性が有利」という回答は男性には少ないが、未婚女性では１７％に達しているのはなぜであろうか。男性は「男性が有利」とする割合が女性よりもずっと多く、特に未婚男性にその傾向が著しい。女性の場合は反対に既婚者に「男性が有利」と答える者が多い。既婚女性も男性同様にフルタイムで働き、同時に男性より多くの家庭責任を背負わされているということではないだろうか。

図表4－2－10 男女どちらが有利か
現在の社会では男性であることと女性であることと、どちらが有利ですか。

	男		女	
	未婚	既婚	未婚	既婚
男性が有利	42	34	17	27
女性が有利	4	7	17	7
どちらが有利ということはない	54	59	66	66

(b) 生まれ変わり（問３５）

「もう一度生まれるとしたら男がいいですか、女がいいですか」という問に対し、「男に」「女に」「わからない」から１つを選ばせたところ、男性については婚姻状況に関係なく平均８１％が「男に」、１６％が「女に」生まれ変わりたいと答えている。女性は６２％が「男に」、３７％が「女に」生まれ変わりたいとしている。女性を未・既婚別にみると、既婚者は「男に」生まれ変わることを望み、未婚者はむしろ「女に」生まれかわることを望む者が多い（図表４－２－１１）。年代別にみると４０代の女性に「男に」生まれたい者が多いが年齢による一貫した傾向は認められない。いずれにせよ、中国でも男女平等は達成されておらず、女性の過半数が女性に生まれ変わることを望んでいる昨今の日本の状況には程遠く、１９６３年頃の日本の状況に止まっている。

図表4－2－11 生まれ変わり
もう一度生まれるとしたら、男がいいですか、女がいいですか。

	男		女	
	未婚	既婚	未婚	既婚
男	79	83	48	69
女	20	14	52	29
わからない	1	3	0	2

(8) 数量化３類による結果

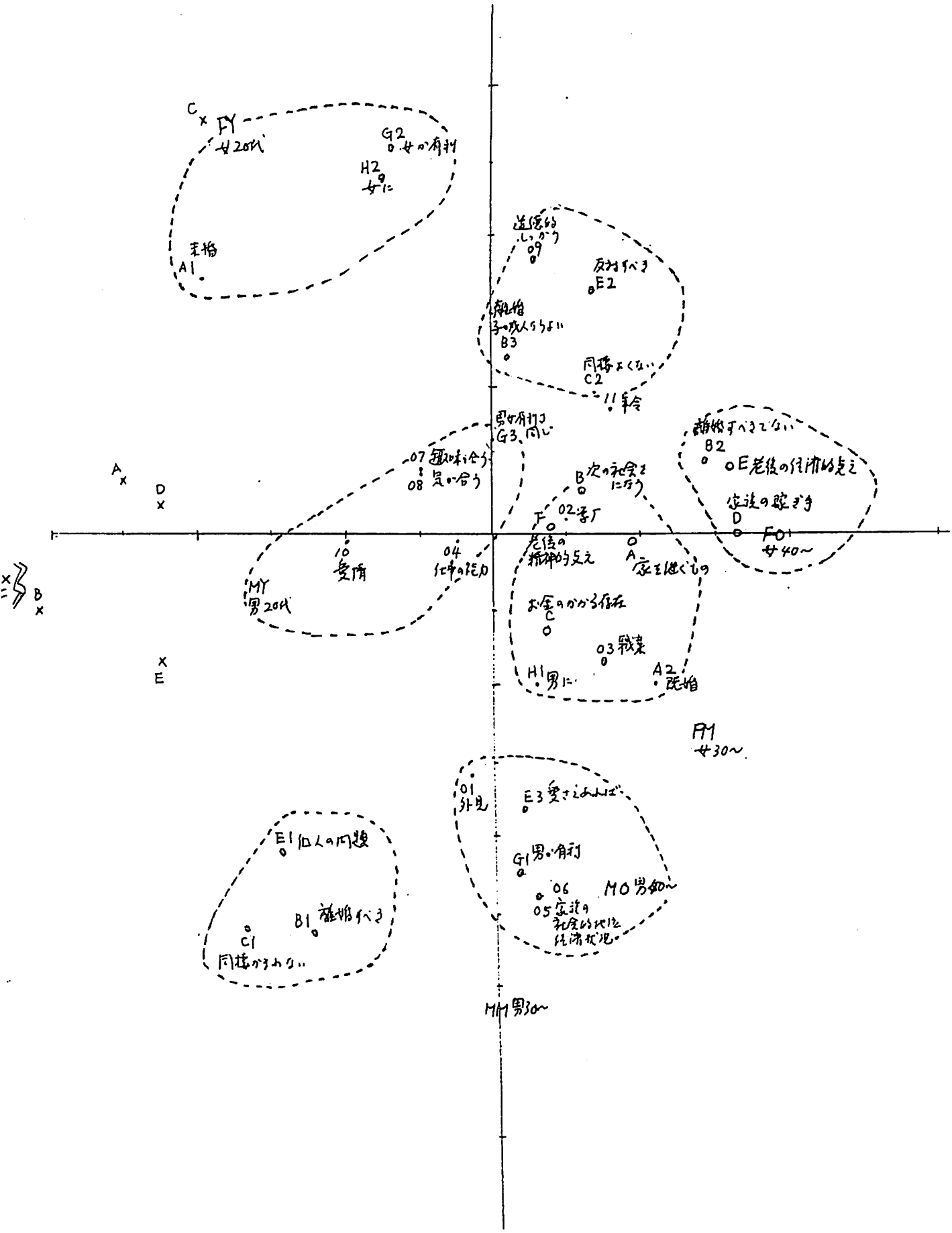
子供観、離婚観、同棲に対する態度、結婚相手の条件、男女どちらが有利か、男女の生まれ変わりに関する回答結果と未・既婚、性ｘ年齢を加えて数量化３類を行った結果が図表４－２－１２である。

この結果から考え方の筋道をとらえると、いくつかの興味深い点が明らかになる。まず、３０代の男女はそれぞれ４０代の男女と比較的近いけれども３０代の男女を特徴づけるような意見をもっていないようにみえる。つまり彼らは不信感が強く何に対してもコミットしない傾向が窺える。それは彼らが文化大革命の時代に小学生であったためきちんとした基礎教育を受けることができなかったことと関係しているのであろう。彼らは多くの苦労を強いられた世代だから忍耐づよく、考え方は現実的であるといわれる。

他方、２０代の女性は「女が有利」と思い、だから「女に」生まれ変わりたいと考えている。２０代の男性は結婚相手の条件として「愛情」、「趣味が合うこと」、「気が合うこと」などロマンティックな様子が窺える。また「男女どちらが有利ということはない」とも考えている。４０代の女性は極めて実利的な考え方をしているという特徴があり、それが子供観にも離婚観（離婚すると損）にも現れている。他方、４０代の男性は「男が有利」と思い、結婚相手の家族の社会的・経済的地位が大切であり同時に外見も重要という古い考えをもっている。また同棲も愛さえあれば容認するという男性に都合の良い意見の持ち主でもある。

また、離婚、同棲などに否定的で道徳的にしっかりしていることが結婚相手の条件だという厳しい意見は女性に、離婚、同棲を容認する意見は男性に特徴的であることがよくわかる。

図表４－２－１２


FY
女20代
G2
女が有利
H2
女に
未婚
A1
道徳的
しっかり
09
反対すべき
E2
離婚
子の成人ならよい
B3
同棲よくない
C2
!!年令
男女有利
G3 同じ
07 趣味が合う
08 気が合う
B
次の社会を
に分う
02 学歴
F
老後の
精神的支え
A
家を出ていく
D
F0
女40～
離婚すべきでない
B2
E老後の経済的支え
家族の疎ぎき
10
受情
04
仕事の能力
MY
男20代
お金のかかる存在
C
03 戦争
H1 男に
A2 既婚
FM
女30～
01
外見
E3 愛さえあれば
E1 個人の問題
G1 男・有利
06
M0 男40～
05 家族の
社会的地位
経済状況
B1 離婚すべき
C1
同棲がすきでない
MM 男30～

4.3　宗教観（問２５）

宗教観は「信仰をもつことは必要だと思いますか」という１問によって測定されている。肯定的意見には性差がみられないが、否定的意見は男性に多く、中間回答は女性の方に多くなっている（図表４－１０－１）。

宗教観
信仰をもつことは必要だと思いますか。

図表4－３－１宗教心と性別

	男	女
はい	38	39
いいえ	27	14
どちらともいえない	35	47

また年齢別にみると５０代だけが肯定、中間、否定にほぼ３分割されており、６０代では肯定と中間回答が共に４割となっていることを除き、２０歳以下から４０代までは年齢が上がるにつれて肯定的意見が増え、「どちらでもない」という回答は逆に若い層に多い傾向がある。５０代に否定的回答が突出して多い理由については後述する。（図表４－１０－２）。

図表4－３－２宗教心と年齢

	20歳以下	20代	30代	40代	50代	60歳以上
はい	29	35	41	45	35	40
いいえ	16	19	16	17	35	20
どちらともいえない	55	45	42	37	31	40

学歴との関係については学歴の低い者ほど肯定的意見が多く、学歴が高くなるに従って否定的意見がふえている（図表４－１０－３）。中間回答は学歴とは関係がないようだ。

図表4－３－３宗教心と学歴

	小卒以下	中学	高校	大学以上
はい	43	40	34	33
いいえ	15	17	21	27
どちらともいえない	42	43	44	39

中国からの留学生の説明によると、中国では宗教と信仰は日本と同じ字を用いるが意味は異なるという。仏教、キリスト教といった宗教は共産主義などと同様信仰すなわちイデオロギーの一種とみなされ、質問文にも「宗教信仰」（イデオロギーとしての宗教）という言葉が用いられている。若い層や高学歴の者に共産主義離れが進んでいるものと思われるが、合わせてイデオロギーとしての宗教離れがみられるようだ。

日本で行われてきた国民性調査では「宗教についてお聞きしたいのですが、たとえばあなたは信仰とか信心とかを持っていますか」という問をしているが、中国では日本人には説明を要さない信心という言葉は理解し難いのではないだろうか。

なお今回の工場調査で用いた調査票には「どちらでもない」という選択肢が含まれているので、日本の国民性調査と直接比較をすることはできないが、１９９３年の日本の国民性調査によると、学歴と宗教心との関係については中国と同じような傾向が認められるが、年齢との関係は中国とは異なり、年齢があがるにつれて肯定的回答が一貫して増える傾向が示されている。中国調査の結果では年齢との関係が直線的になっていないのは、政治体制によって宗教を信じることが悪とされ批判された時期があったためではないだろうか。つまり今日５０代以上の中国人は未だに当時の「教え」をひきずっている様子が窺えるのである。それに対し、日本人の宗教観は自由な状態におかれた場合の結果を示しているといえる。

4.4　社会における人間関係

本節では、周囲の人々との関係を築くときにどのような事柄を重視するか、どのような人々を好むか、といった人間関係の問題を取り上げる。ただし、家庭における人間関係の問題は4.2、4.8、職場におけるそれは 4.6で扱い、ここではより広い一般的な社会における人間関係について考察する。

(1)　社会における人間関係の基本構造

最初に、多少範囲を広げて一般的な人間関係に直接間接に関わると思われるいくつかの調査項目を取り出し、それらのパタン分類をおこなってどのような構造が存在するかをみてみよう。図表４－４－１は、数量化３類で用いたアイテム・カテゴリーと反応率（％）、およびカテゴリー・スコアである。

図表４－４－１　　数量化３類のカテゴリー・スコア

			I	II	III
Q17	子供の育て方	のびのび育てる（43.2）	-1.48	-0.33	-1.06
Q18	公益と私益	公益のために私益の犠牲やむなし（90.3）	-0.10	0.44	0.12
Q19-8	寛容と礼節	誇りに感じる（76.4）	-0.03	0.67	0.25
Q19-11	和を尊重	誇りに感じる（75.3）	-0.20	0.73	0.26
Q19-13	年長者への敬意	誇りに感じる（55.8）	0.24	0.33	1.17
Q19-15	権威への服従	誇りに感じる（10.3）	0.11	-2.44	6.75
Q19-18	己所不欲人にせず	誇りに感じる（32.5）	-1.06	3.08	0.16
Q20	人間性の善悪	性善（30.5）	0.16	-0.61	1.40
Q21	法の機能	互いにうまくやっていくため（17.1）	-4.29	-0.75	-1.47
Q29	最も望むもの	よい人間関係（46.1）	-0.06	-0.58	0.62
Q30-9	人が喜ぶこと	したい（39.0）	1.45	-1.05	-0.92
Q30-10	社会に貢献	したい（39.4）	1.75	-0.65	-0.94
Q30-11	困っている人	助ける（58.0）	0.87	-0.33	-0.73
Q30-12	人を当てに	しない（48.2）	0.01	-0.91	-0.32
Q30-13	何でも自分で	決める（59.1）	0.23	-0.31	-0.70
Q30-14	何か言われても	気にしない（58.5）	0.01	0.85	-0.38
Q32	人との関係左右	友情＋人情（40.6）	0.92	1.83	1.05
Q33	面子	非常に重要（33.2）	0.04	-1.93	0.95
Q34	コネ	頼る（35.4）	-1.31	-1.40	-0.19
Q37-2	人の恩	忘れてはいけない（40.7）	-0.26	-0.06	-0.37
Q37-4	世のため個人を	犠牲にすべし（18.2）	2.65	0.17	-1.29
Q46	いい仕事仲間	友好的な人（44.9）	-1.22	-0.62	-0.02
Q47	同僚との仲	非常によい（16.6）	0.91	-0.13	-1.42

アイテムの数、抽出する軸の数をいろいろ変えて計算したが、説明率はあまり変わらず、３つの軸まで抽出したこの結果がもっとも簡明であった。相関係数が小さいので構造はあまり単純ではないようである（このこと自体が現在の中国、とくに変動の激しい上海の状況を示しているものであろう）が、あえて軸の解釈を試みると次のようになる。

Ⅰ軸ではプラス側に「世のため個人を犠牲にすべし」、「社会に貢献したい」、「人が喜ぶことしたい」、マイナス側に「法は互いにうまくやっていくためのもの」、「子供はのびのび育てる」、「コネ頼る」、「いい仕事仲間は友好的な人」があり、『社会（的貢献）志向』と『個人（的自由）志向』を分けているようである。

Ⅱ軸ではプラス側に「自分がいやなことは他人にもしない」、「他人との関係を左右するのは友情と人情」、「これと思ったらとやかく言われても気にしない」、マイナス側に「権威に服従」、「面子重要」、「コネ頼る」があり、『没社会的思いやり志向』と『伝統的社会関係志向』を弁別している軸であろう。

Ⅲ軸ではプラス側に「権威に服従」、「人間の本性は善」、「年長者への敬意」、「他人との関係を左右するのは友情と人情」、マイナス側に「法は互いにうまくやっていくためのもの」、「同僚とは仲がいい」、「世のため個人を犠牲にすべし」、「子供はのびのび育てる」、「社会に貢献したい」がきているので、『伝統的な謙譲・善良な意識』と『個人レベルでの融和や自由と社会的責任感の共存といった近代的意識』を分けているのであろう。

社会における人間関係についての意識・行動はこれらのような軸によって規定されていると考えられる。

これらの３つの軸によって構成される空間の中に２３個の項目をプロットしてみる（立体図は省略）と、５つの群に分かれていることがわかる。それらを、含まれている項目の特徴からそれぞれ、『気まま・融通』、『自律的個人倫理』、『善良・謙譲な心』、『タフ・全体社会志向』、『権威主義』をベースにしている人間関係意識であると名付けることにする。各群に入るカテゴリーは次のとおりである。

（１）気まま・融通：

「子供はのびのび育てる」、「法は互いにうまくやっていくためのもの」、「コネ頼る」、「いい仕事仲間は友好的な人」

（２）自律的個人倫理：

「公益のために私益の犠牲やむなし」、「寛容と礼節を尊重」、「和を尊重」、「己所不欲人にせず」、「なにか言われても気にしない」、「人の恩は忘れてはいけない」

（3）善良・謙譲な心：

「年長者への敬意」、「人間性は善」、「最も望むのはよい人間関係」、「人との関係左右するのは友情＋人情」

（4）タフ・全体社会志向：

「人が喜ぶことをしたい」、「社会に貢献したい」、「困っている人を助ける」、「人を当てにしない」、「何でも自分で決める」、「同僚との仲は非常によい」、「世のために個人を犠牲にすべし」

（5）権威主義：

「権威に服従」、「面子は非常に重要」

⑵　全体の傾向

各カテゴリーにおける反応率（そのカテゴリーに肯定的に回答したものの全サンプルでの比率）はすでに図表４－４－１に示した。これらはそれぞれ、回答選択肢のうちの一つ（あるものは二つ）だけを取り出したものであるので、詳細は別に付した単純集計結果を見る必要があるが、それらから次のようなことが目につく。（なお、本調査のサンプルの代表性には問題があるので、上で述べた全体の傾向に関する考察が上海の工場勤務者全体に一般化できるか否か、実ははっきりしない。この点には注意しなければならない。）

１）よい社会的人間関係の基礎としてもっとも一般的・普遍的な『善良・謙譲な心』の領域では、肯定するものの率はそれほど高くない。これは「人間性は善」、「年長者への敬意」については意見が分かれるであろうし、「人との関係左右するものは友情＋人情」、「最も望むものはよい人間関係」はともにいくつかの選択肢の中から選択する形式の質問によるものであるからであろうが、それにしても低率である。

２）『自律的個人倫理』には長い伝統を持った価値に関する項目が含まれているが、「己所不欲人にせずということを誇りに感じる」を除いてはいまだに非常に多くの人々に肯定されている。とりわけ「公益のために私益の犠牲やむなし」は全体主義的な国家体制のもとでの強力な教育の成果もあるのであろう、90％が肯定的である。

３）意見が分かれることが当然と思われる『気まま・融通』と『権威主義』でも、「法は互いにうまくやっていくためのもの」と「権威への服従」の二つも、教育の成果であろうか、肯定するものは少ない。ところが「コネ」と「面子」の二つは、否定的なものが極端に少ない。中国社会の特質を論じるときにしばしば非好意的に取り上げられるこれらの考え方が現在もなお広く存続していることをうかがわせる。

４）社会への積極的奉仕が中心となる『タフ・全体社会志向』に属している諸カテゴリーの肯定率が高い。このタイプが優勢である。これらのカテゴリーは近代中国社会において

もっとも望ましいものとして称揚されて来ているであろうから、この結果は当然である。

(3) 属性による違い

各項目ごとの属性による差は別に作成したクロス集計表に示してあるが、ここでは煩雑さを避けて上記の５つのグループにまとめて大まかに傾向を眺めてみることにする。

比較的大きな差だけに着目すると、性による違いがかなりはっきり表れているのは『自律的個人倫理』の諸項目で、男の方が女より肯定する比率が高い。とくに「己所不欲人にせずということを誇りに感じる」ものは男47%、女23%となっている。一方、『善良・謙譲な心』では、「もっとも望むことはよい人間関係」で女の54%に対して男は33%と、女の方が肯定的である。

『タフ・全体社会志向』でも、７項目のうち４つまでが女の肯定率が高い。男がより高いのは「同僚との仲がよい」のみである。『権威主義』も同様で、とくに「面子は非常に重要」は男27%に対して女は37%になる。『気まま・融通』は「法は互いにうまくやっていくためのもの」は男、「よい仕事仲間は友好的な人」は女が多く、共通の結果は得られていない。

年齢別でかなり一貫した傾向を示しているのは『善良・謙譲の心』のグループである。「年長者への敬意」、「人間性は善」は肯定率が年齢と正の相関を示し、「もっとも望むものはよい人間関係」も同様である。これと逆の傾向は『タフ・全体社会志向』に見られる。７項目中５項目で肯定率は年齢とほぼ逆相関し、「人を当てにしない」のみがむしろその逆である。『気まま・融通』でも同様に４項目中３項目で高年齢の５０歳代以上の肯定率が低く、その逆（２０歳代で肯定率が低い）は「コネ」のみである。『権威主義』では２項目とも３０歳代、４０歳代の肯定率が２０歳代、５０歳以上のそれよりも高い。とくに「面子は非常に重要」では２０歳代の肯定率が低い。『自律的個人倫理』においては年齢との関係は項目ごとにバラバラである。

次に国有企業、集体企業、中外合資企業という企業種別に見る。（ただし、これらの企業種ごとに性、年齢の構成が大きく異なる――たとえば、中外合資企業には男が60%いるのに、集体企業では15%しかいないし、中外合資企業の年齢構成は他の企業種よりも高い方によっている――ので、結果が必ずしも企業の組織特性を反映しているものではないことに注意する必要がある。）

『自律的個人倫理』では６項目中「人の恩を忘れてはいけない」を除いた５項目において集体企業の肯定率が低い。また４項目、とりわけ「己所不欲を人にしないことを誇りに感じる」で中外合資企業の肯定率が他よりも高い。

『善良・謙譲の心』と『権威主義』では逆に集体企業の肯定率が高く、中外合資企業のそれは低い。

『タフ・全体社会志向』には７つの項目が属しているが、そのうち「人を当てにしない」を除く６項目で国有企業での肯定率が高い。またさらにそのうち「同僚との仲が非常によい」を除く５項目で中外合資企業での肯定率が最低になっている。

『気まま・融通』では、個別の項目で差が見られるが全体としての共通な傾向はない。

以上の結果を細かい点を無視してまとめると次のようになる。（若＝20歳代、中＝30歳代と40歳代、老=50歳以上；国＝国有、集＝集体、合＝中外合資）

	性　別	年齢別	企業種別
気まま・融通		若＞老	
自律的個人倫理	男＞女		合＞国＞集
善良・謙譲な心	女＞男	老＞若	集＞国＞合
タフ・全体社会志向	女＞男	若＞老	国＞集＞合
権威主義	女＞男	中＞老・若	集＞国＞合

このように各項目の属性別クロス集計を整理することによって、各属性の特徴が浮かび上がってくる。たとえば、年長の人々は「気ままで融通無碍な」気持ちはより若い人々と比べると少なく、「善良で人がよい」こと、男は女と比べて古い伝統的な倫理観を持っていること、などが判明する。

しかし、このように項目単位で属性の特徴を見るのはやや複雑であるから、次に、最初に数量化３類で抽出した３つの軸に戻り、カテゴリー・スコアから属性別の平均を算出することによって各属性の特徴をあらためて眺めてみよう。以下は、性、年齢、企業種、学歴、職種での属性別平均値である。

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
男	-0.209	0.372	-0.022
女	-0.024	-0.115	0.083
20歳代	-0.004	0.202	-0.146
30歳代	-0.284	-0.009	0.088
40歳代	-0.140	-0.119	0.263
50歳～	-0.049	0.172	0.361

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
小以下	0.305	-0.412	0.544
中　学	0.148	0.129	0.152
高　校	-0.481	0.128	-0.190
大以上	-0.776	0.200	-0.444
国　有	0.056	-0.020	-0.114
集　体	0.085	-0.270	0.274
合　資	-0.433	-0.521	-0.035
BLUE	0.055	0.097	0.187
WHITE	-0.308	-0.013	-0.138
経管専	-0.202	0.153	-0.094

(BLUE＝普通労働者とその他、WHITE＝普通職員)

①Ⅰ軸（＜＋＞「社会的貢献志向」←－－－→「個人的自由志向」＜－＞）

男、30歳代、40歳代が個人的自由志向の傾向を他の層よりも強く持っている。また、中外合資企業勤務、WHITEと経管専も個人志向である。これは教育と強く関係しているのであろう。学歴では学歴の高さと個人志向の程度がきれいに相関している。

②Ⅱ軸（＜＋＞「没社会的思いやり志向」←－－－→「伝統的社会関係志向」　＜－＞）

この軸ではかなり大きな男女差があって、男は没社会的思いやり志向、女は伝統的社会関係志向である。年齢的にはもっとも若い世代と、逆に年長の人々が没社会的思いやり志向である。職業関係では中外合資企業勤務者が強く伝統的社会関係を志向しており、集体企業も同じである。経管専は没社会的思いやり志向であるが、これはこの層に高年の人々が多いためではないかと思われる。学歴の部分を見ると、この軸でも教育が関係しているのであろうと推測される。低学歴の層が伝統的社会志向で、学歴が上がると没社会的思いやり志向に傾く。

③Ⅲ軸（＜＋＞「伝統的な謙譲・善良な意識」←－－－→「個人レベルの融和　や自由と社会的責任感の共存という近代的意識」＜－＞）

この軸は年齢ときれいに相関している。すなわち、年齢が若い者ほど近代的意識の側に傾き、年齢が高くなるにつれて伝統的な意識になる。また、集体企業、BLUEは伝統的で、国有、WHITEは近代的である。学歴はここでも強く関係していて、高学歴になるにつれて近代的意識、学歴が低いほど伝統的になる。

(4) おわりに

社会的人間関係に関する１，０５４名のデータを概観して得た印象を以下に記す。

社会的人間関係のベースとしては、おそらくは社会全体として成員に対して公式に、そしてあらゆるチャンスをとらえて教え込んできたであろう考え方が主流になっており、より素朴で自然な人間同士の信頼や善意などはやや影が薄くなっている。しかし、その一方で、中国社会の長い歴史の中で連綿として続き、伝統的な価値となった周囲の人々とのつきあいに関する個人的倫理は、「法」や「権威」に対する考え方のように社会体制の根幹に関わることがかなり明らかである－－したがってすぐに建前で回答しやすい－－ものを除いて、今でも広く一般に受け入れられている。とくに注目すべきは「コネ」と「面子」であり、社会的には不合理で場合によれば不法ですらある個人的な関係や意識がいまだに根強く生き続けていることがはっきりしている。

属性別データを見てまず感じることは、男女差が日本のそれとはかなり異なるのではないか、ということである。すなわち、男と比較して女がとくに因習や弱さと結びつくようなことはない。本調査の対象女性が社会で働いているという特性を持つがゆえでもあろうが、これが現代中国社会の特徴であるかもしれない。

また、年齢による差が必ずしも単純ではないことも目に付く。おそらくは文化大革命や改革解放といった政治的変革の影響をどのように受けたかが関係しているのであろう。Ⅲ軸は年齢との関係が非常にはっきりしており、これが世代の意識差を反映しているものなのかどうか、興味深いポイントである。

もっとも重要な要因は学歴のようである。３つの軸すべてに関わっているが、全体としてみれば、教育の高さはより自由で拘束されない意識・行動に結びついているようである。今後の教育水準の向上が人間関係に関する意識・行動をこの方向に変えていくものと予想できる。

4.5　勤労観

本節では、工場従業員の勤労観にまつわる回答を検討する。

改革開放政策の下で工場経営がなされるようになると、個人の能力を重視する業績主義の導入が必要になり、従来の国営企業でのノルマ達成型働き方ではなく、効率優先の働き方が求められる。改革開放政策の成否の一部は、個々の職場での従業員の勤労観のあり方に懸かっているといっても過言ではない。中国側の研究者には、変化の中で従業員に労働条件をめぐるどんな不満が生じているのか等の目前の状況を捉えようとする問題意識が殊更強かったように思う。

今回の工場調査の質問票は、勤労観に関連した質問項目が非常に多い。勤労観や仕事観は、さまざまな価値意識を問う質問に組み込まれたり、職場の人間関係や人生観の項目にも含まれている。ここではそうした関連質問に触れながら、上海工場従業員の勤労観、勤勉・努力といった勤労倫理の中身を考察する。

浦東地区には、従来型の国有工場、小規模な前近代的設備の集体、そして日本や西欧諸国との合資企業までさまざまなタイプの工場が併存し、男女の労働者が勤務している。まず全体を概観したうえで、工場のタイプ別（国有・集体・台資）、性別や世代によって、どのような違いがあるのかも検討する。

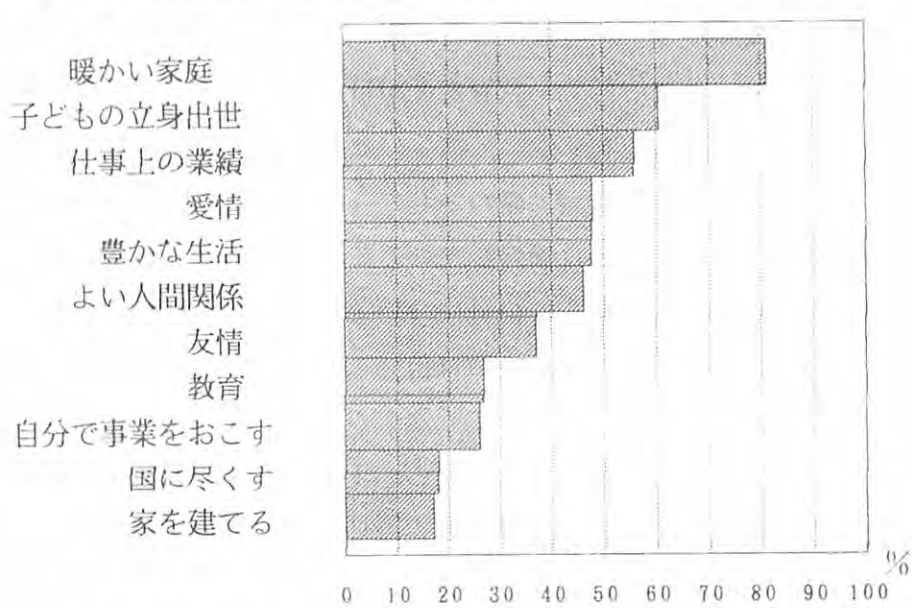
(1) 勤労観についての概要

(a) 人生における職業の位置づけ

まず、職業上で業績をあげることにどの程度人生上の意義を認めているかという点をみよう。

図表４－５－１　人生の目的

問２９「あなたが人生で最も手に入れたいのは何ですか(5つまで選択)」



人生で重視するものを５つ選択した結果は、図表４－５－１の通りである。「暖かい家庭」「子どもの立身出世」「仕事上の業績」を過半数の人が挙げている。

家庭重視、とりわけ子どもへの期待が高いところに、自分よりも次世代に強く期待している労働者の意識が読み取れる。変化する社会の中で、より豊かさな生活を求めて、改革開放政策や経済成長に期待し、その実現を子ども世代に託しているのだろうか。自分自身の仕事上の業績が「豊かな生活」に直結するわけではない現実認識かもしれない。

(b) 仕事や職場についての現状認識

問５５「１日の仕事を終わった後の気持ちはいかがですか」への回答をみると、「少しきついが意義ある仕事だ」と満足感をもつ人が過半数を占めており、「明日は明日の風が吹く（状況まかせ）」といったややなげやりな態度や「平凡でつまらない」といった否定的態度の人は合わせても２割を下回る。

このことは、問３９（職場への満足）でも同様で、現在の職場に満足している者が約半数であり、不満をもつ者は２割が下回るのと共通している（３割強は態度保留）。

職場の人間関係は概ね良好で、その点に不満をもつ者は少ない（問４７「職場の人間関係では、全体の６割が「非常に良好」または「良好」と回答。「普通」が４割）。また、上司との人間関係もほぼよい（問４８「リーダーとの人間関係」で、「非常に良好」「良好」の合計が全体の５割弱、「普通」が５割）。不満がどのような点に由来するのか、関連質問をみると、不公平観をもつ者がいることがわかる（問４４「社員は公平か」で、「不公平」「非常に不公平」の合計が２割弱）。

労働条件などについて８割方があまり不満感をもたずにいるが、２割弱は問題を感じているというのがおおまかな状況である。収入についての回答（問５６「現在の収入は普通従業員と比べていかがですか」）でも、過半数の人は自分の収入を標準的とみなし、約３割は標準以上と思っている（「普通よりいくらか少ない」が約１割、「普通よりずっと少ない」が5.2％と合わせて２割を下回る）。

一方、仕事や職場についての満足感と矛盾するようにみえるのが、問５３「あなたの会社の状況から、もし子女の能力や教育程度が自分と似ていて、また就職が自由に決められる立場だったら、自分の企業で働いて欲しいと思いますか」に対するの否定的な回答の多さである。子どもを自分の職場に勤めさせたくない者が全体の７割強に上っている。

現在の職場や仕事にそこそこ満足していることが、仕事や職場の積極的評価とは直接繋がっていない。現状から判断して自分については半ばあきらめているものの、「子どもの出世」には強い期待を寄せ、子どもには自分よりも条件のよい職場で働いてほしいという意識があるようだ。

これについては二つの仮説が立てられる。上海の工場従業員が、職場や仕事について、目下の自分の状態だけでなく、次世代を視野に入れた長いスパンで考える目を持っている

という可能性、或いは、上海という激しい経済社会の変動に直面する地域に生きるために、回答者が大きな社会変動の時代に生きていることを自覚し、また経済成長に期待し、次世代にとりわけ大きな夢と期待を寄せている可能性である。ひとりっ子政策の下で子どもは過大な期待を負わされるということも言えよう。

(c) 会社への帰属意識

仕事の内容や職場の人間関係への肯定的態度がみられる一方で、企業への関心や愛着、帰属意識が弱いという特徴もみられる。

問５４で、「よく親戚や友人に自分の会社を自慢する」に同意するかどうかでは、回答は三分され、会社を自慢する者、しない者がほぼ３割ずつである。「会社のためなら何でもする」に同意し、会社への忠誠を表明する者が約４割いる一方、否定的な者も２割以上に上る。ここでは会社のためにする事柄の内容までは指定しておらず、「何でもする」の内容は回答者の判断に委ねられているので、これが過労死まで行き着くような「企業戦士」型の忠誠を意味するのかどうかは判断できない。

「会社の前途に関心がある」にはほぼ８割が同意し、自分の利害が会社の前途と直結する点には敏感である。また、「ずっとこの会社に勤めたら成果なしに終わる」と会社自体やそこでの自分の将来に悲観的な者が１割強、「この会社に入ったことを後悔する」への同意も１割強である。無記名とはいえ工場での調査にこのように回答するのは、よほど批判的態度の持ち主なのか、それともアンケートにこのような否定的な回答をすることの意味を理解していない者なのか、日本での調査とは様子が異なるため解釈が難しい。

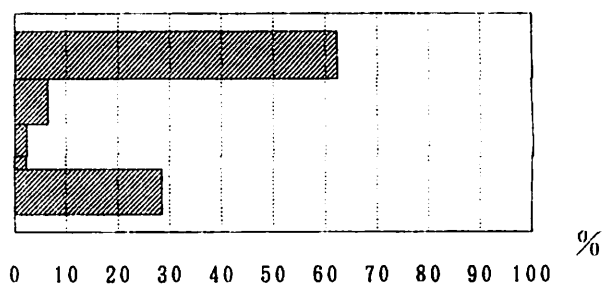
反対に６割は入社を後悔しておらず、むしろ、１割が大いに満足（「後悔」に「大反対」）している点にも注目すべきであろう（企業経営形態別の特徴については後述）。

会社への帰属意識を会社の損害への意識という別の形で訊ねた、問５１「会社で重大な生産事故が発生し、深刻な被害を被ったとき、あなたはどう思うか」には、独特の回答パターンが見られた（図表４－５－２）。質問項目の設計過程で、日本側が用意していた３つの選択肢（1. 大変残念　2. どこの会社でも同じ様なこと、どうでもよい　3. 自分の知ったことではない）に、中国側の研究者が４つ目の選択肢（4. 会社の損はわが家の損と同じ）を加えたものである。

「大変残念」（約６割）と「会社の損はわが家の損」（約３割）の合計が９割に達し、無関心派（「自分の知ったことではない」2.3%）と冷淡派（「どこの会社でも同じ様なこと、どうでもよい」6.5%）は合わせても１割に満たない少数である。また、回答者のほぼ３割が4. を選択している。ただし、日本チームの感覚からは、選択肢1. と4. との差異をどのように解釈すべきかが難しい。これは推測であるが、中国側には、国有企業であれば、給与は一定であり会社の事故が給与などに影響しないので冷淡な反応になるが、民営化した場合には、会社の損を自分の損と同一視するような新しい態度が生まれるはずだし、その必

要があるという暗黙の前提があったのかもしれない。もし、そうだとすれば、この結果から、上海の勤労者にはすでにそのような態度が育っていると言えるだろう。ただし、少数とはいえ、１割が会社の損に無関心・冷淡である点は見過ごせない。

図表４－５－２ 会社の事故
問５１「会社で重大な生産事故が発生し、深刻な被害を被ったとき、あなたはどう思いますか」 （１つ選択）



(d) 将来展望

変化していく社会にあって、生活の将来展望や仕事の予測は、勤労観と相互関係をもつと思われる。そこで、質問の中から、将来展望に関する項目を拾いだして検討しておくことにしたい。

まず、問３１で生活全体についての将来予測をみると、全体の６割が将来の生活に関して楽観的に捉えており、ほぼ４割が予測不明としており、悲観的なものはごくわずか（2.6%）にすぎない。一方、職業についての予測は混沌としており、問３６（「あなたはレイオフや失業の心配はありますか」）で、レイオフや失業の心配が「ない」と答えたものは２割を下回る。失業などの心配「あり」が約１．５割、「わからない」がほぼ７割である。これほどの高率で失業やレイオフの心配を予測しながらも、将来予測が楽観的なのは、回答者が全体的に経済開発の行方を肯定的に受け止めているからなのだろうか。この予測への期待が裏切られたときの反応は興味を惹く。

問４３では、より具体的に、職場での昇進の機会を訊ねた。「機会は少ない」「機会はない」の合計が４割に上り、「機会は普通」が５割、「機会は多い」は１割を下回っている。

レイオフの心配がなく昇進のチャンスも大いに期待できる一部のエリートだけでなく、必ずしも楽観できる状況にはない労働者の多くもが将来を楽観しているというのが一つの特徴だといえよう。

(e) 労働観・職業観

(a) ～(d) までの労働をめぐる諸実態やさまざまな意識が基盤にあることを踏まえ、労働観・職業観の質問への回答を検討していくことにしよう。

ア．努力や能力発揮・勤勉さについての評価

職業上の努力や勤勉さにどの程度重きをおいているのかという基本的な面を、問２６（「人生がうまくいかない人がいるとしたら、その原因は何だと思いますか（能力か運か）」）の回答からみた。不成功の原因を努力不足に求める者が全体の６割、運命だとみる者が約３割、不平等に原因を求める者が１割強であった。

また、能力の顕示についての考え方（問２７「自分の能力は適切な機会を見つけて人に示すべきだと思いますか、それとも人がわかってくれるまで、そのままにしておくべきだと思いますか」）については、能力は自分で顕示すべきとの積極派が６割で、能力顕示についての消極派が３．５割であった。能力を発揮し、本人の努力で道をひらくべきだ、との考えは多数派に支持されている。

また、勤勉型（アリ）と、享楽型（キリギリス）のどちらを選ぶかを問う問２８では、９割弱という圧倒的多数が勤勉型を支持している。

イ．勤労観をめぐる回答者の自己評価

ところが、こうした努力や勤勉さを仕事の場で積極的に発揮しているか、という点になるとやや異なる面がみえる。

問３０は、回答者自身が仕事面での成果をあげたり、昇進や出世のために努力しているかどうかを「1. 私らしい　2. 少し私らしい　3. 私らしくない」という自己評価の形で訊ねたものである。「一生懸命仕事をし、昇進をかちとる」を「私らしい」とした人は３割を下回り、「少し私らしい」がほぼ半数、そして「私らしくない」が２割強である。出世や昇進にはやや消極的に見える。地位達成への淡白さは、昇進機会そのものがない場合も多いことを反映していると思われる（問４３で「昇進機会は少ない」が２割、「昇進機会はない」も２割強）。

「どんなに困難が大きくても、仕事で成果をあげたい」については９割が自分がそういう態度をもつことを自認している（「私らしい」「少し私らしい」の合計で９割）。ただし、１割の者は、それさえ否定している。努力を放棄するかにみえるこの１割の存在は気になるところである。

また「人生を楽しむのは昇進より重要」という点については、ほぼ半数が否定的であるものの、２割弱が「私らしい」と認めており、「少し私らしい」の３割強を合わせると、「享楽派」が多数派になっている。つまり、あくまでも勤勉さを重視するのは５割を下回り、「仕事で成果をあげたい」と「人生を楽しむのは昇進より重要」という一見矛盾する態度が併存していることがわかる。この点について、前者は建前に過ぎず、後者が本音と

の見方も可能である。ただし、昇進可能性のない職場も多いことを考慮してさらに検討する必要があろう。勤勉な態度が醸成されているにも係わらず、職場にそれを評価するシステムが整っていないケースも考えられるからである。

ウ．転職や勤労形態、昇進についての意識にみる仕事観

問２４では、「例えば次にあげるような人は理解できますか、できませんか」という形で、転職などについての許容度を訊ねた。安定職を辞めて脱サラし、事業を起こすことには８割弱が理解を示している。これに比べ、転職については賛否が半々である。さらにフリーター（定職をもたず気の向くままにアルバイトをする）には３割強しか理解を示していない。

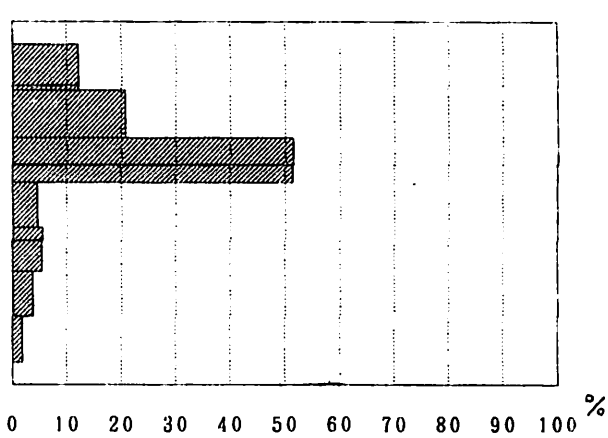
改革開放政策以前の国有企業の場合、勤務先は個人の自由選択ではなく割当制がとられていた。改革開放以降、労働移動が盛んになり、好条件の職場を求めて転職したり、起業も盛んになったという事情がある。また、この質問は回答者自身のケースを想定しているものではないので、他人の働き方への意見として読み取る必要がある。

まず、自己資金での起業はそうたやすいことではないはずだが、上海では新興の事業家の話題には事欠かない。成功した事業家への憧れは強いのではないだろうか。これに対して、現実性のある転職についてはむしろ保守的な意見となっている。また、先進工業国でのフリーターと違い、上海での安定職をもたないフリーターは低収入の不安定な身分である場合が多いのではないだろうか。

では、自分が転職する場合には、どのような条件を重視するのだろうか。問４１（「他の仕事を選ぶ機会があったら、何を一番重視しますか」）の回答をみよう（図表４－５－３）。収入を最も重視する者が過半数にのぼっており、「才能を表せるチャンス」が２割のほかはいずれも１割以下である。

図表４－５－３　転職の条件

問４１「他の仕事を選ぶ機会があったら、何を一番重視しますか」



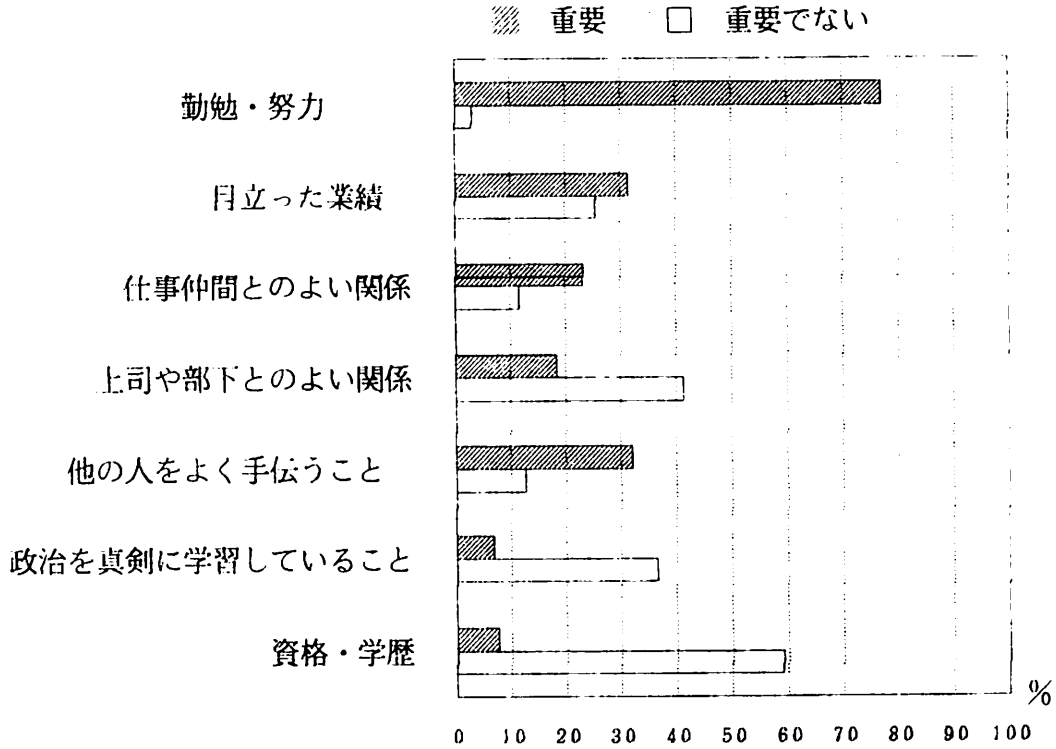
転職の条件は、まず収入なのである。高収入につながる転職の機会の少なさが認識されており、転職そのものへの支持が低いとも解釈できる。「なにはともあれ、まず収入」という意識（「拝金主義」）が目立つ。人間関係を左右するものについて訊ねた質問（問３２）でもやはり第一位がお金で、1. 金2. 友情3. 地位4. 人情5. 公益の順である。これほどまでに金に執着を示すのは、成り金的な存在が目立つ社会だからなのか。転職条件として昇進機会が軽視されているのは、そもそも地位というものが金とは直結しないため重視されないからなのだろうか。

「拝金主義」の傾向は仕事観そのものに表れている。仕事観を「給料か面白さか」で捉えようとした問４０（「次の２つの仕事のうち、どちらが好きですか」）の回答では、「退屈だが給料のよい仕事」を選ぶ人がほぼ６割、「面白いが給料のよくない仕事」を選ぶ人がほぼ４割である。商品が溢れる上海の現況は人々に相対的な貧困意識をもたらしており、それが「拝金主義」に繋がっている可能性がある。貧困層だけでなく、一定の生活水準の確保があっても、相対的な剥奪感によって、人々は仕事内容よりも消費の充実に向かって駆り立てられるのかもしれない。

昇進のための条件についての意見からも仕事観を読み取れる（図表４－５－４　問４２「昇進のための条件のうち、最も重要と考えられるもの２つと、最も重要でないと考えられるもの２つを、次の中から選んで下さい」）。

図表４－５－４　昇進の条件

問４２「昇進のための条件のうち、最も重要と考えられるもの２つと最も重要でないと考えられるもの２つを、次の中から選んで下さい」



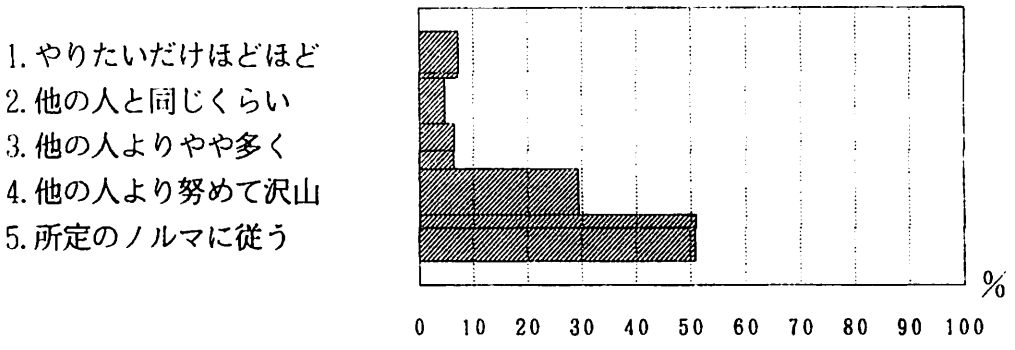
「勤勉・努力」が高い支持を得ている。次いで多いのが「他の人をよく手伝うこと」（奉仕精神や利他的態度）である。また、キャリアで評価することには反対も多く、「目立った業績」は３割強が重要とみると同時に２割強はこれを不要と見ている。昇進を自分のこととしては捉えられず、他人事として回答している人が多いこととも関連するだろう。ただし、「まじめに政治を勉強する」といった直接仕事とは関係のない面での出世には反対が多くなっている。

つまり、個人的な能力発揮による業績が昇進の条件となることには、まだ賛否が分かれる状態である。勤勉・努力型の勤務態度や人間関係の良好さを昇進の基準と認める伝統的な仕事観と、業績主義的な仕事観とが併存しているといえる。

エ．勤務態度

勤務態度についてみよう。問３８「あなたは自分の仕事に対して、どのように考えていますか」について５つの選択肢から選んでもらった（図表４－５－５）。

図表４－５－５　頑張る基準
問３８「あなたは自分の仕事に対して、どのように考えていますか」（１つ選択）



ノルマ内でやる人が半数である点が目立つ。自分のやりたいだけほどほどにするという人、他の人と同程度しかしない人を含めると６割以上が仕事で同僚と競う気持ちをもっていないことになる。収入はできるだけ多く欲しいとしながら、仕事はノルマをこなすだけという態度の人が多いのだ。努力して人より多く働こうという積極的態度をもつのは約３分の１である。

この質問項目では当初、選択肢は４つまでしか想定していなかった。中国側の研究者によって５つ目の選択肢（ノルマ）が加えられた。そしてその選択肢が工場従業員の多くにとって最も現実的だったようだ。

ノルマが勤務態度の基準になっていることが分かったが、怠ける同僚に対してはどのような態度で臨むのだろうか。問４５（「もしあなたの仕事仲間の一人が怠け者で、働きた

がらなかったら、あなたならどうしますか」）で訊ねた。

「本人に忠告する」が最も多い（７割弱）。「放置する」がほぼ２割、「上司に報告する」は少なく（５％）、むしろ「その人の仕事を手伝う」が１割弱である。できない人の面倒をみることが同僚の役目とみなされているようだ。「私もいっしょに怠ける」が１％とごくわずかとはいえ存在していることにも注目したい。

仕事仲間としてどのような人が理想的かを訊ねた問４６の回答からもこうした勤務態度を読み取ることができる。「責任感が強く仕事をやり遂げる人」よりも「友好的な人」が多く支持された（４割強）。つまり、全体的には、仕事面で競い合うよりも、友好的な関係を大切にしながら同僚として同じノルマをこなすという勤務態度が尊重されているといえよう。

⑵　工場経営形態別の勤労観の特徴

前述のように、政府の改革開放政策の結果、浦東地区にはさまざまな経営タイプの工場が併存するようになった。主たるタイプは、従来の国有型、規模も設備も小規模で前近代的な集体型、外国との合弁による新しいタイプの合資型の三種類だが、こうした経営手法やその背景にある思想の違いは、企業風土やそこで働く人々の労働観にも反映すると考えられる。そこで、この三種類の経営形態別に調査の結果を検討し、そこで働く人々の属性や勤労観の特徴を比較する。

ａ）労働者の社会的属性と労働意識の違い

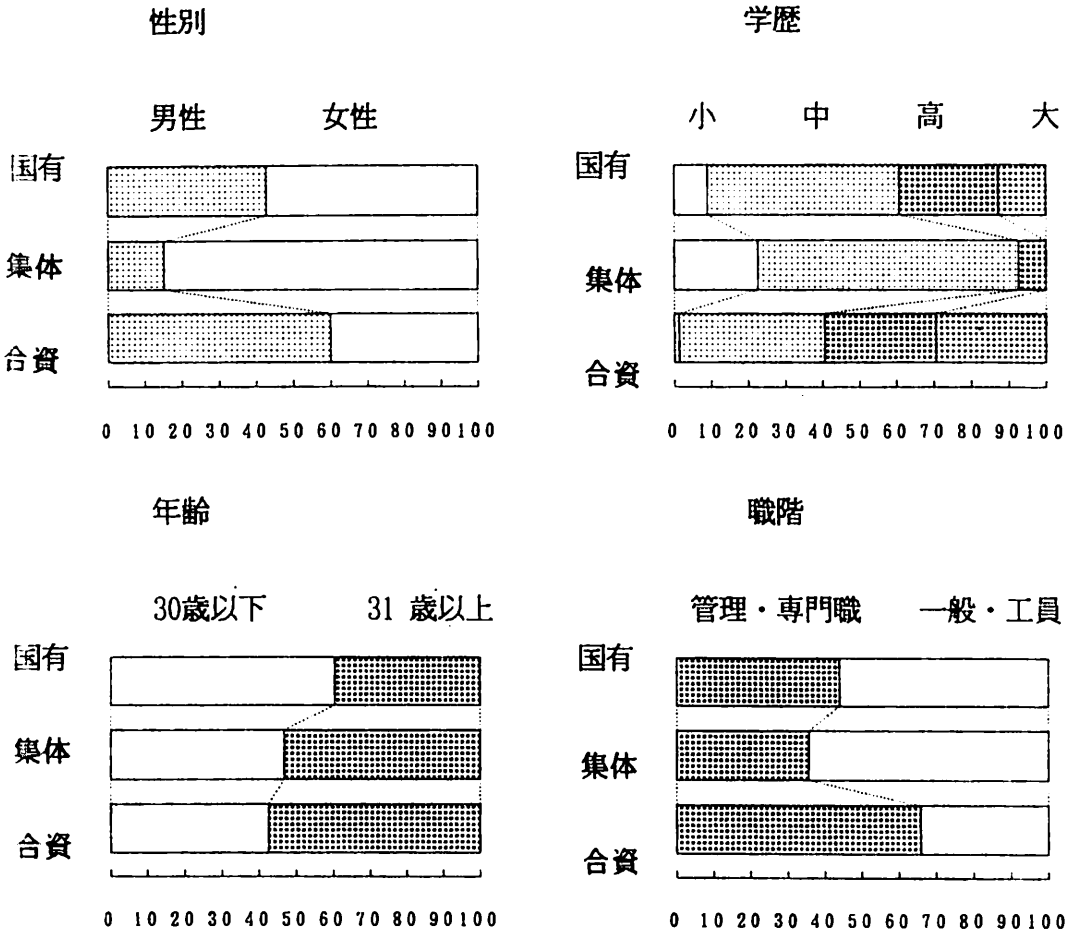
図表４－５－６は、経営形態毎に労働者の社会的属性の分布をグラフにしたものである。

国有型には、比較的年令が若い工員が多い。学歴は中学、高校卒が一般的で、全体の８割近くをしめる。集体型では女性が圧倒的に多く、また学歴の低い小、中学校卒が９割以上にものぼる。そのためか、このタイプでは他のタイプにくらべて、工員の地位も収入も全体的に低くおさえられている。外資合弁型の労働者は、男女別にみると男性が多い。全体的に高学歴（大卒以上）が多く、収入や地位も高い者が多い。

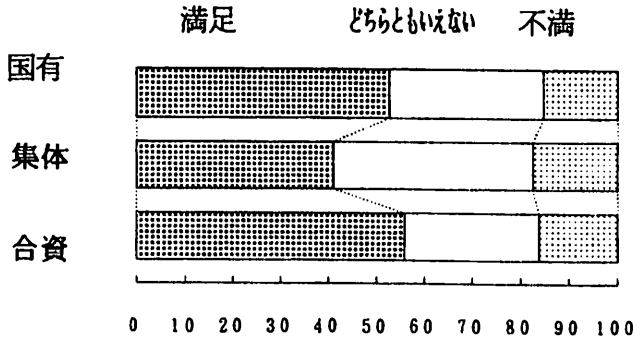
このような従業員の社会的属性の偏りを反映してか、労働者の仕事に対する満足感や将来展望などの労働意識の傾向も、経営形態によって違いがみられる。合資型の労働者は、現在の職場への満足度が高く（図表４－５－７）、会社の前途や自分自身の昇進、レイオフに対する展望などの仕事に関する将来像が明確で、おおむね楽観的だ（図表４－５－８）。他のタイプにくらべて地位、収入の高いことを反映した結果であろう。それに対して、地位、収入の低い工員の多い集体型では、全体的に満足度が低いばかりでなく、会社の将来への関心も低い。さらに、昇進やレイオフの可能性など自分自身の将来をどうとらえているかについてたずねても、「ある」「ない」というはっきりした回答は少なく、「わからない」「不明」といった回答が多い。こうした工員たちは、地位が低いため経営へ関心、

関与が薄いばかりでなく、学歴や職能といった個人的能力をもたないため、転職や昇進によってよりよい労働条件の仕事につく望みも低いため、職業上の夢や展望をもてない、あるいはあえてもたない人が多いのだと考えられる。

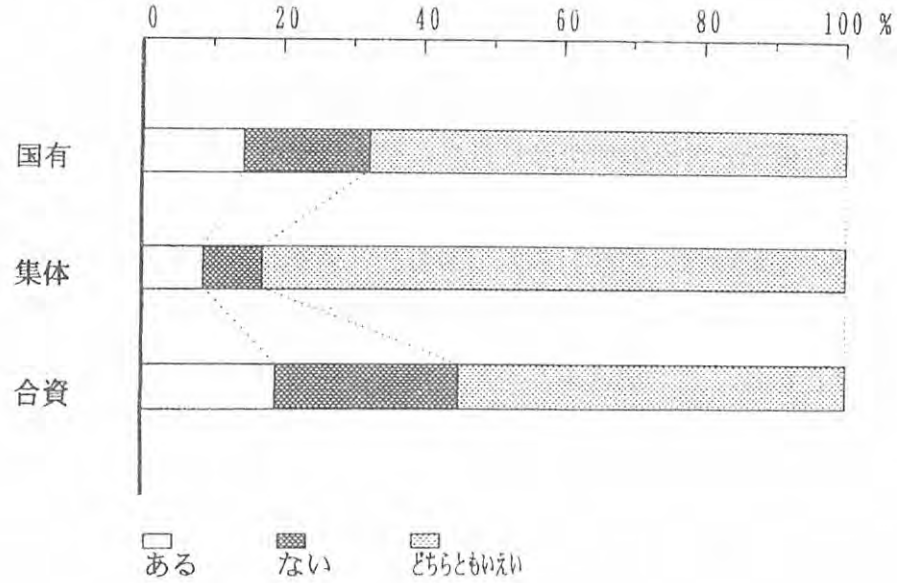
図表４－５－６　　経営形態別回答者の構成



図表４－５－７　　職場への満足



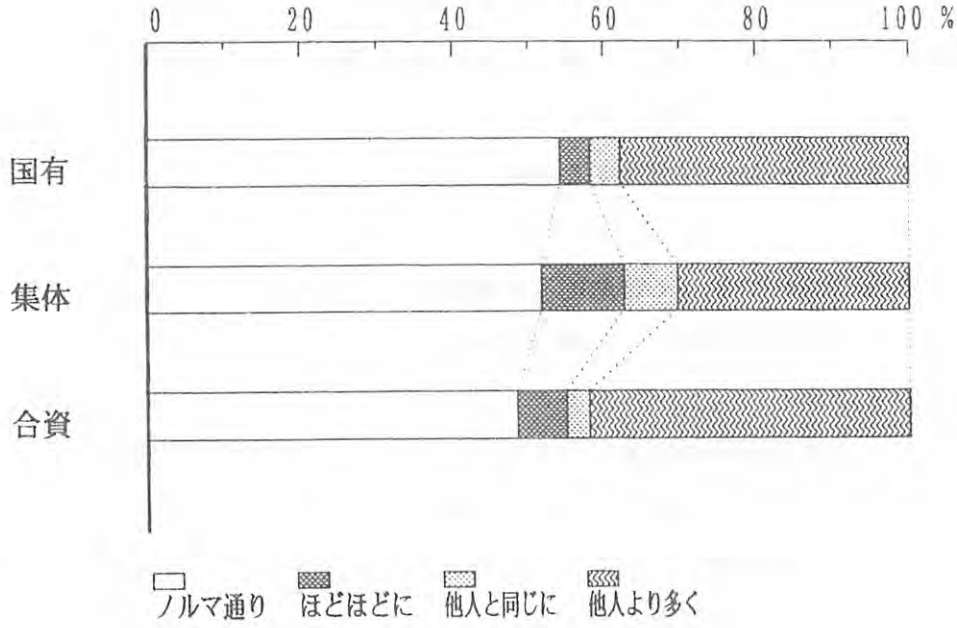
図表４－５－８　「レイオフの心配（問３６）



b）労働観と労働倫理

前節で述べたように、工場労働者の回答を全般的にみると、「勤勉」「努力」といった昔ながらの労働倫理を重視する傾向が根強い。しかしこうした労働観、労働倫理の面も、合資という新しい経営形態の登場により、変化、多様化する様相がみられる。

図表４－４－９　「仕事をどの程度こなすか（問３８）



合資の工員は他のタイプにくらべると、「努力」「勤勉」に代表される精神論を尊重する傾向が低い。職場では、「勤勉」より「個人的な業績」や「能力」をより重視し、「ノルマ」を守り仲間と助け合って職場の「和」を維持するよりも、「他人より多めに働く」「自らのの能力を積極的に示す」という前向きで競争的な労働観を重視している（図表４－４－９）。だからといって、人生全般における仕事の比重が高いわけではなく、むしろ個人の楽しみを仕事より優先させる風潮がみられる。いずれの点をみても、個人主義的な傾向が顕著である。

一方、他の二タイプの工場では、相変わらず「努力」「勤勉」「職場の人間関係」といった従来からの価値観が保持されている。また「どの程度働けばよいか」という質問に対しては、「ノルマどおり」が多く、「他人より多めに働く」と積極姿勢を示す回答は少なかった。

ｃ）曖昧な回答・中間回答が多い国有型

これまで述べたような企業風土の差は、被験者が質問紙に回答する際の意識にも、影響を与えていると考えるべきではないだろうか。こうした視点にたって、各タイプの回答傾向を概観すると、国有型の企業では、本音よりも「建前」的な回答傾向が目ににつく。たとえば、「転職の条件」や「よい人間関係を築く条件」などでは、「人情」より「お金」を重視すると答えているにもかかわらず、「好きな仕事で重要」をたずねると、「給料より興味」だと、前者とは矛盾する建前的な回答が過半数を占める（他の二タイプではいずれも「興味より給料」（合資型では６７．１％　集体型では６１．１％）が多かった。

また、「待遇が公平か」、「レイオフの可能性があるか」など、回答の如何によっては経営批判に受け取られる質問では、「はい」「いいえ」などはっきり回答が少なく、「わからない」「どちらともいえない」「普通」などの曖昧で中立的な選択肢に回答が集中する。こうした傾向は、集体型でも散見され、経営や職場環境、人間関係への不満でもはっきり主張する合資型とは、異なる傾向がみられる。

解釈にあたってこうした点にも留意する必要があろう。

ｄ）まとめ

以上ように合資型には、際立って特徴的な価値観がみられる。努力、勤勉、職場の和といった伝統的で、ある種「建前的な」労働倫理より収入や能力など現実的な価値を重視し、個人のもてる能力を積極的にアピールするという、他のタイプの工場にはみられない新しい労働観である。改革開放政策の推進にともない、このような独特の労働観を背景にもつ合弁型企業、およびそこで働く労働者の数は、今後ますます増加すると予想される。こうした流れが上海の人々の価値観にどのような影響をおよぼすかは、非常に興味深い問題であり、今後とも注視していくべき点といえよう。

(3) 勤労観をめぐる男女の違い

勤労観に関する回答の男女差の特徴をおおまかに見た後、企業経営形態別にみた性別による違いに注目したい。

(a) 男女の勤労観にみる違いと類似性

会社への帰属意識を問う設問（問５４）では、「会社の今年度の目標を知っている」「会社のことを自慢する」「この会社で自分の能力が発揮できる」「会社の前途に関心がある」では、いずれも男性の方が会社について有意に肯定的な回答をしている。そして「チャンスがあれば転職したい」にも男性の方が否定的である。

つまり女性は、現在の職場について男性に比べ弱い帰属意識しかもっていない（もてないでいる）。では、勤労意欲が弱いのか、というとそうでもない。「勤勉型か、享楽型か」（問２８）では、女性の約９割が「時間を惜しんで働く」方を重視しており、この比率は男性より有意に高い。こうしたギャップからは、勤勉な女性が、企業の中で男性のようには能力発揮のチャンスを与えられず、不満を抱き、転職に希望をつなぐ様子がかいま見える。

ただし、女性の労働倫理が表層レベルにとどまっているのではないかという疑いもある。問３８（「ノルマか最高の能力発揮か」）における「他人よりできるだけ多く働く」の女性の回答率は、男性よりほぼ１割も少ない。「所定のノルマに従う」が半数以上にのぼっているのである。

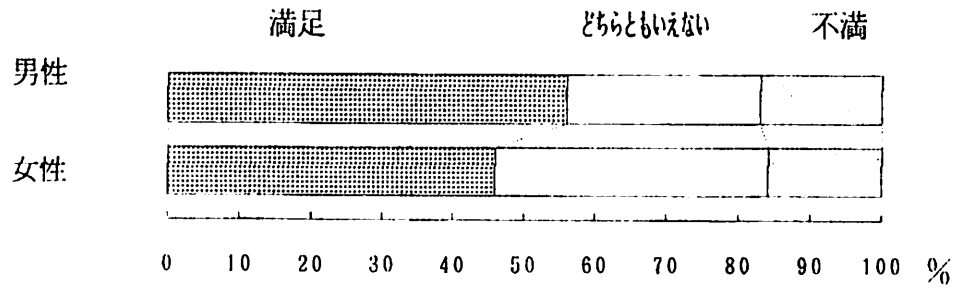
ただし、この結果について検討する際には、今回の調査対象者の社会的特性には性別による格差があることを十分配慮する必要がある。つまり、女性労働者の方が学歴が低く、職階が低く、また国有企業および零細な集体企業に勤務している者の比率が多いという特徴である。女性回答者の３割弱は昇進の機会が「全くない」（男性では１割半程度）。勤労観をめぐる回答の男女差には、こうした性別による労働条件の格差の影響を考慮せざるを得ない。

一方、現在働いている企業への帰属意識や具体的な仕事への態度以外の側面では、勤労観の男女差はあまり目立たない。例えば、自分の子どもを同じ職場に就職させるか（問５３）ではこうした男女差はみられず、共に７割以上が否定的である。また、「脱サラ」や「転職」「フリーター」に関する問い（問２４）では、「転職」に関して女性の方がやや保守的な傾向がみられる程度の差である。「能力の顕示」に関する態度（問２７）では、男女共に６割が「能力は自分で顕示すべき」と回答していて性別による差はほとんど認められない。

ただし、全体的な回答の特徴として、肯定・否定いずれにせよ、男性が明確に答えているのに比べ、女性の方が、「わからない」「普通」「どちらともいえない」といったどちらつかずの選択肢を選ぶ様子がみられた。問３９の回答にもそうした特徴が現れている。

（図表４－５－１０）。

図表４－５－１０　職場への満足感（性別　）
問３９　「今の職場に満足ですか」

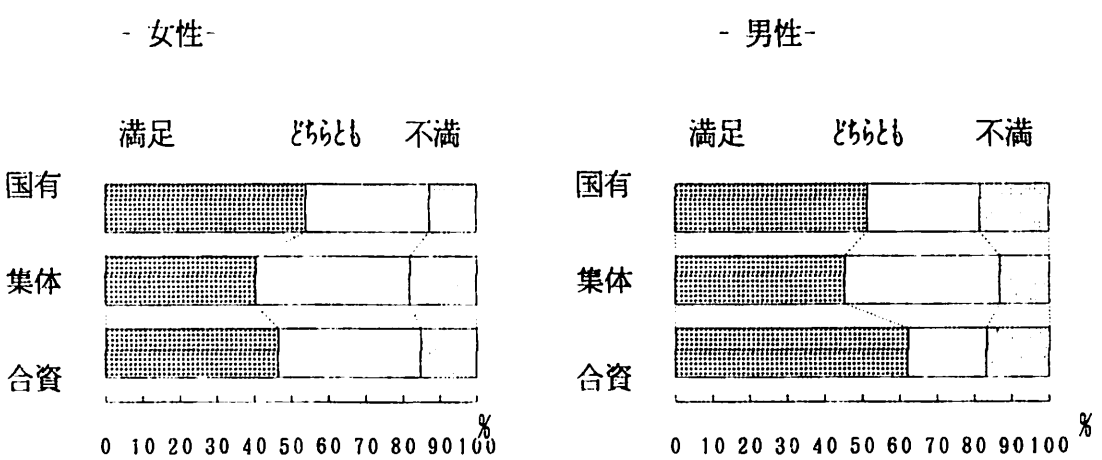


(b) 企業形態と女性の勤労意識

性別ごとに企業形態による満足感の違いをみると、男性と女性とでは、企業形態と満足感の関係に違いがみられる。満足しているものの比率が高い順に、男性は、１合資２国有３集体の順、女性は、１国有２合資３集体の順である（図表４－５－１１）

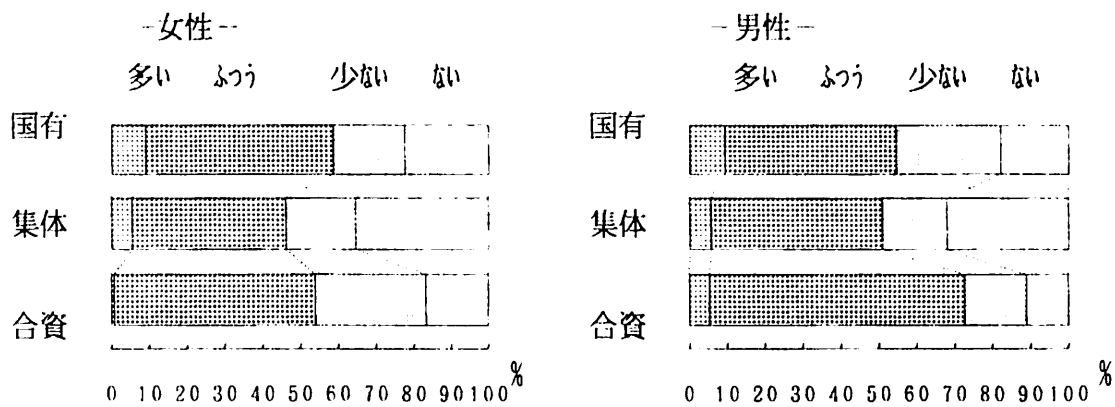
女性にとって、合資企業は、国有企業より不満をもつ人が多い職場となっている。では合資で働く女性はどんな点に不満を抱いているのだろう。

図表４－５－１１　職場への満足感（性別・企業形態別）
問３９　「今の職場に満足ですか」



昇進機会についての回答（問４３）によって、合資企業での女性の相対的不利を読み取ることができる。合資企業で働く男性は、他の企業に比べ昇進機会が「ない」率が顕著に低く、「普通」が多い。それに比べ女性では、昇進機会が「多い」者は極端に少なく、「少ない」の率が高い（図表４－５－１２）。

図表４－５－１２　　企業形態と昇進機会（性別・企業形態別）
問４３「仕事での昇進の機会はいかがですか」



「公平感」（問４４）に関しても同様で、公平感をもつ女性が多い順に１国有、２集体、３合資となっている。合資企業は国有企業よりも「男性優位」の職場のようだ。この点は中国側研究者との会議でも確認できた。

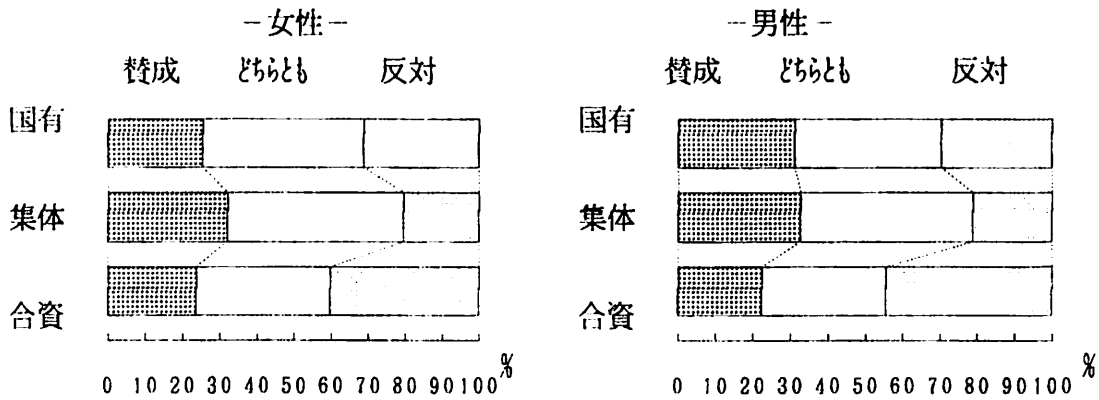
(c) 会社への帰属意識

男女共に「会社のために全力を尽くす」に同意する者が圧倒的多数（「大賛成」「賛成」の合計が８割半）である（問５４）。ただし、「会社のためなら何でもする」への賛同者は４割にとどまる。また、転職に「大変賛成」「賛成」「分からない」の合計が７割にのぼっている。終身雇用的な勤め方は前提とされていない。現在の職場への満足感と転職志向は同居しており、全体に企業への帰属意識は強くない。男性の方が女性より「会社を自慢」し、「会社の将来に関心をもち」「入社を後悔していない」が、一方で会社への忠誠（「会社のために何でもする」）に懐疑的でもある。

「転職」希望者が最も少ないのは男女共に合資企業である。逆に、集体企業は転職希望が最も多い。国有がその中間にある。男性の場合、国有と合資では転職希望率の差が顕著だが、女性の場合は差が少ない（図表４－５－１３）

図表４－５－１３　企業形態と転職希望（性別）
（大変賛成・賛成を「賛成」、大変反対・反対を「反対」として集計）

問５４　「機会があれば今の職場を転職したい」



自分自身の場合に限らず、一般に転職への賛同者は多い。女性の方が全体的には安定志向であるにせよ、「脱サラ」には女性も男性同様８割が理解を示している。女性も、積極的に職を変える点に肯定的だ。

「レイオフや失業の不安」（問３６）については男女共に「不明」が多い（男性約６割、女性約７割）が、全体的には男性の方がレイオフに敏感だ（「ある」も「ない」も多い）。経営形態による差があり、合資企業の従業員はレイオフについて態度が明確である。また合資では、むしろ女性の方が雇用の不安定さに自覚的な傾向がある。

激変する上海の労働環境の中にあって、工場従業員はよりよい労働条件を求めて積極的に転職しようという態度をあらわにしている。そうした中で「拝金主義」的傾向も男女に共通して現れている。

全体的には男女の勤労観の差は、低所得で集体企業で働く低学歴、低職階の女性の多さに引きずられる形となっている。しかし企業形態別比較では、同種の企業形態の中でも男女には違いがある場合があった。とくに注目をひくのは企業形態の多様化や変化の中で、今後主導的地位を占めると予測される合資企業において男女格差が拡大している点である。国有企業における「男女平等」原則は、合資企業の増加でむしろ後退するならば、改革開放政策が女性にとってデメリットをもたらすおそれもある。「天の半分を支える」女性たちの変化を今後も注目する必要があろう。

4.6　職場の人間関係

社会学の立場からみれば、企業の経営状況は、この企業の市場における競争力、市場での占有率ばかりでなく、企業内部の人間関係、企業の凝集力に密接に関わっている。現代、企業の経営状況は種々の持てる資源を如何に配置するかが重要な役割を果たしていることを示している。別の言い方をすれば、企業内の人間関係と企業凝集力は、その企業が合理的に人と資源を分配しているかどうかを測る１つの尺度といえる。本研究は上海の労働者研究の一部で、その調査方法は上海労働者研究と同様であり、主に主観的評価による上海企業における人間関係と凝集力の研究、即ち、調査対象者が自分の企業の人間関係と凝集力に対して評価するものである。人間関係と凝集力の測定のため、表１、表５に示した質問群を用いた。また、人間関係と企業凝集力と関連のある昇進についての評価なども報告する。その説明や解釈のため、主要な基本属性として、年齢、教育程度、職業、企業の性質、個人の月収、入社年を用いた。

(1)企業内の人間関係

調査によると、職場のそれぞれの班の中の人間関係については、「非常にうまくいっている」16.6%、「比較的うまくいっている」44.7%、「ふつう」37.5%、「あまりうまくいっていない」と「うまくいっていない」はそれぞれ 0.5%と 0.4%である。自分と班のリーダーとのコミュニケーションは、「非常にうまくいっている」8.5%、「比較的うまくいっている」37.9%、「普通」51.9%、「あまりうまくいっていない」と「うまくいっていない」は 0.4% と 0.7%である。このように、企業の人間関係は良好である。これは、企業人間関係測定の質問によっても明らかである（図表４－６－１）。

総合評価として、10項目それぞれ、「はい」という回答に１点、「どちらとも言えない」に２点、「いいえ」に３点を与えて、10項目の平均値を計算した。点数が低いほど人間関係はよいことになるが、企業の人間関係の総合評価の平均点は 1.58点となり、全体的 に言えば、上海企業の中の人間関係は比較的うまくいっているといえる。

人々は同僚には穏やかで仲良くつき合うという人間関係を望んでいる。好まれる同僚の特徴は「接しやすい」44.9%、「責任感が強く、仕事をやり遂げる」38.1%、「高潔な人格で、尊敬される」16.8%である。

図表４－６－１　企業人間関係評価

	はい	どちらともいえない	いいえ
同僚と仕事で互いに助けあえる	90.8	8.7	0.4
病気の時同僚が見舞いに来る	66.4	30.9	2.1
上司がよく自分と話をする	27.5	35.2	36.8
職場でいつも気にくわない人がいる	17.5	41.1	40.4
困ったとき同僚に助けてもらえる	60.9	33.3	5.2
職場で自分に嫌な思いをさせる人がいる	7.4	34.5	57.0
トラブルがあるとき同僚が相談に乗ってくれる	75.4	21.9	2.4
上司を信頼している	54.9	36.2	7.6
職場で話すとき意地悪な人を警戒する	24.7	43.5	31.1
職場でよく人の噂をする	25.2	41.8	32.4

同僚との関係についての評価をみると、同僚との関係は女性より男性の方が良い（「良い」が、男性73.3%、女性53.5%）。また、その中でも21歳～30歳までと、51歳以上の社員は、同僚との関係評価が「良い」という回答が多い（64.9%、75.5%）。また、学歴の高い人は、同僚との関係が「良い」という評価の率が高い。各企業の中で、企業の責任者や部門の責任者は、「社員との関係は良い」との評価が最も高い（83.3%、79.4%）。このほか、専門技術者も 72.5%と高い。企業の種類によると、中外合資企業では同僚との関係の評価が非常に良く、その次は国有企業である。個人の収入は同僚との関係に密接に関連している。つまり収入の高い人は同僚との関係が良好という評価をしている。また、1980年以前に入社した従業員と、96年以後に入社した従業員は、企業内での人間関係は良いという評価である（63.5%、64.6%）。班長や部門の責任者との関係評価についても、性別、年齢、学歴、職業、企業の性質、個人の収入、入社年との関連は、同僚との関係評価と同様である。

性別、年齢と学歴などの基本属性と企業内人間関係の総合評価との関係は、上述の分析結果とほぼ一致している。各基本属性のうち、企業内人間関係総合評価が全体平均（1.58）より低く、より好意的な評価をしているのは、男性（1.54）、年齢 31歳以上（31歳～40歳 1.57、51歳以上 1.50）、大卒相当の学歴（1.54）、企業の責任者（1.49）、専門技術者（1.56）、中外合資企業（1.54）、個人の収入 501元以上(501元～1000元 1.56、1001元～1500元 1.47)、1991年以降に入社した人たち(1991年～1995年 1.57、1996以後 1.54）である。

図表４－６－２　性別、年齢、学歴、職業、企業の種類、個人収入、入社年と企業内人間関係総合評価

	与同事关系评价					
	非常好	比较好	一般	不太好	很不好	
性别:						
男	21.7	51.6	25.3	0.5	0.2	(415)
女	13.3	40.2	45.4	0.5	0.5	(639)
年龄(岁):						
≤20	25.9	31.3	42.2	0	0.7	(147)
21-30	18.7	46.2	33.1	0.6	0.8	(359)
31-40	11.1	46.7	41.8	0.4	0	(225)
41-50	12.9	47.0	39.8	0.4	0	(249)
≥51	13.2	62.3	24.5	0	0	(51)
教育程度:						
小学及以下	16.4	25.0	57.8	0	0.9	(116)
初中	14.2	39.1	45.4	0.5	0.4	(562)
高中	16.5	59.4	23.2	0.4	0	(224)
大专及以上	25.2	58.5	14.3	0.7	0.7	(147)
职业:						
企业主要负责人	50.0	33.3	16.7	0	0	(6)
部门主要负责人	20.6	58.8	19.6	1.0	0	(102)
普通职员	16.0	46.7	36.3	0	0.3	(300)
专业技术人员	14.3	58.2	24.2	2.2	1.1	(91)
普通工人	16.2	38.4	44.3	0.4	0.4	(542)
其他	18.2	72.7	9.1	0	0	(11)
企业性质:						
国有单位	29.9	39.0	37.3	0.3	0.3	(354)
集体企业	10.6	34.6	53.7	0.6	0.6	(350)
中外合资	16.3	60.6	21.4	0.6	0.3	(350)
个人收入(元/月):						
≤300	14.3	31.4	53.6	0	0.7	(140)
301-400	15.4	29.5	54.6	0	0.4	(227)
401-500	16.6	38.9	43.5	0.5	0.5	(193)
501-1000	13.5	57.0	28.7	0.4	0	(223)
1001-1500	19.7	59.0	19.7	0.6	0.6	(178)
≥1501	24.2	57.1	14.3	2.2	0	(91)
进厂年份(年):						
≤80	14.2	49.3	35.2	0.9	0	(219)
81-90	12.1	45.1	42.2	0	0	(206)
91-95	17.0	42.7	38.5	0.8	0.3	(358)
≥96	21.4	43.2	34.3	0	1.1	(271)

このように、上海の各企業の中で、男性、幹部、専門技術者、中外合資企業、学歴の高い人、個人収入の高い人は、企業内の人間関係が良好という評価をしている。その中で、学歴と個人収入は特に人間関係と密接に関わっている。筆者のみたところでは、学歴の高低はその人の素質の良し悪しとほぼ正比例しており、学歴の高い人は周囲の人たちとのコミュニケーションがうまくできるし、細かいことで計算高いようなことはしない。また、ある程度の収入をもらっている人は、ある程度の生存状況にあることを表す。収入が一定のレベルに至ると、個人の生存は問題にならなくなり、経済問題が原因で人との間に問題が起きることもなくなる。従って、学歴の高低と個人収入は企業の人間関係に大きな影響を与えると言えるだろう。

(2) 企業凝集力

図表４－５－３は企業凝集力を測る質問である。回答「大変賛成」から「大変不賛成」に、それぞれ１点～５点（つまり点数値が低いほど凝集力が強い）を与えたところ、企業凝集力の10項目の平均（企業凝集力総合評価）は 2.60点であった。従って、全体的に言えば、上海企業の凝集力は強い方だといえる。

図表４－６－３　企業凝集力評価　　(%)

	大変賛成	賛成	わからない	不賛成	大変不賛成
会社のために全力を尽くしたい	25.6	59.3	12.9	1.5	0.5
よく親戚や友人に自分の会社を自慢する	5.1	29.5	35.2	25.2	4.4
会社のためなら何でもする	7.1	32.4	36.2	19.0	4.6
会社の前途に関心がある	23.0	55.9	16.8	3.2	0.7
ずっとこの会社に勤めていたら成果なしに終わってしまう	3.4	10.3	40.5	37.1	8.3
この会社に入ったことを後悔する	1.9	9.5	26.9	50.2	10.8
機会があったら、転職したい	5.9	21.5	40.6	26.5	1.6
この会社で自分の能力が発揮できる	2.9	26.1	48.6	18.4	3.2
会社の多くの政策決定は自分の考えに合致する	3.8	25.8	49.8	15.7	4.5
会社の今年度の目標を知っている	8.2	44.8	31.2	12.0	3.4

表４－６－４　性別、年齢、学歴、職業、企業の性質、個人収入、入社年と企業凝集力総合評価

	企业凝聚力总评价					
	强	较强	中	较弱	弱	($\bar{X}$)
性别:						
男	11.0	44.0	28.9	12.6	3.5	2.54
女	9.4	35.7	37.4	14.4	3.1	2.66
年龄(岁):						
≤20	11.3	35.0	33.5	15.5	4.7	2.67
21-30	11.2	39.1	30.7	15.0	3.9	2.61
31-40	7.6	38.8	39.7	11.7	2.2	2.62
41-50	8.8	39.8	36.0	12.9	2.6	2.61
≥51	13.0	46.7	25.0	12.7	2.6	2.45
教育程度:						
小学及以下	11.3	33.1	35.2	15.7	4.7	2.68
初中	10.1	40.7	34.6	11.9	2.7	2.56
高中	7.8	38.3	33.4	17.2	3.3	2.70
大专及以上	11.3	38.2	32.4	14.0	4.2	2.62
职业:						
企业主要负责人	13.3	50.0	35.0	0	1.7	2.27
部门主要负责人	13.4	48.8	26.8	8.8	2.3	2.38
普通职员	8.1	37.3	36.9	14.6	3.0	2.67
专业技术人员	11.7	36.7	32.8	15.0	3.8	2.63
普通工人	10.1	38.3	34.1	14.0	3.5	2.62
其他	9.1	39.0	26.4	20.9	4.5	2.73
企业性质:						
国有单位	11.6	38.1	32.6	14.3	3.4	2.60
集体企业	8.1	32.4	40.9	15.1	3.5	2.74
中外合资	10.4	46.5	28.6	11.7	2.8	2.50
个人收入(元/月):						
≤300	7.3	26.6	46.8	14.4	4.9	2.83
301-400	9.9	35.7	35.6	15.3	3.5	2.67
401-500	10.0	36.6	33.8	16.2	3.4	26.7
501-1000	10.0	38.9	33.3	14.3	3.6	2.63
1001-1500	10.2	53.4	26.7	8.5	1.2	2.37
≥1501	13.4	44.1	27.1	12.4	3.0	2.47
进厂年份(年):						
≤80	7.4	38.5	37.9	13.6	2.6	2.65
81-90	5.6	34.6	41.3	15.3	3.2	2.76
91-95	11.8	39.5	31.3	14.1	3.3	2.57
≥96	13.0	42.0	29.1	12.1	3.8	2.52

このほか、「もし企業に重大な作業事故が起きて重大な損失があったとき、あなたはどう思うか」「会社の制度に違反する同僚がいたら、あなたはどうするか」「もし、あなたの仕事仲間の一人が怠け者であまり働かない時」「もし子どもの状況が自分と似ていて、また、就職が自由に決められる立場だったら、自分の企業で働いて欲しいと思うか」などへの回答分布を見ると（巻末クロス表参照）、大部分の従業員は仕事への責任感と凝集力が強く、その中でも、４分の１の社員は仕事の凝集力が非常に強い。

図表４－６－４は表４－６－３から企業の凝集力への総合評価を基本属性別に計算した結果である。基本変数のうち、企業凝集力の平均点（2.60）より低い（凝集力が強い）のは、男性（2.54）、51歳以上の年齢層（2.45）、中卒（ 2.56）、企業の責任者と部門の責任者（2.27、2.38）、中外合資企業（2.50）、個人収入が1001元以上の人(1001～1500元 2.37、1501元以上 2.47）、1991年以降に入社した人（1991～1994年 2.57、1995年以降 2.52）である。これらの変数の中で、個人収入は企業凝集力と最も密接な関連がある。

例えば、上海の企業の中、中外合資企業の社員たち、企業の責任者と部門の責任者の収入は一般の人より高く、それらの関連からみると企業の性質、職業などは企業凝集力に影響する媒介変数と見て良い。

図表４－６－３の企業凝集力を測る質問の中で「機会があれば、転職したい」の結果は、同意と不同意、それぞれ 27.4%と 31.1%、換言すれば、30%の従業員は今の会社で働きたいと思っていることがわかる。社会主義経済の条件のもとで、社会の流動は多くなるだろうが、頻繁な社会流動は企業の凝集力に影響を与える。このことを企業の権力者と管理者は重視すべきである。流動希望が多いのは、主に41～50歳の年齢層、高卒以上の学歴の人、職員と専門職の技術者、集体企業、1001元以上の収入の者と入社年数の長い人たちであることを示している。

(3)昇進について

図表４－６－５で見られるように、昇進の条件として最も重要な２項目は、勤勉・努力、成績優秀であり、最も重要でない２項目は、キャリアと上司部下関係である。上下関係やキャリアではなく成績を重視するのは、まさに現代社会の象徴である。

昇進の機会が「多い」という回答は 6.0%、「普通」50.1%、「少ない」20.7%、「ない」22.8%である。従業員の昇進が「大変公平」に行われていると思う人は 4.4%、「公平」23.6%、「どちらとも言えない」52.9%、「不公平」10.9%、「大変不公平」7.8%である。

図表４－６－５　　昇進の条件の評価

	最も重要な２項	最も重要でない２項
勤勉・努力	38.8	1.7
成績優秀	16.7	13.4
同僚とのよい関係	11.7	6.2
上司部下とのよい関係	9.3	21.8
熱心に人の世話をする	16.2	6.7
政治をまじめに勉強する	3.4	19.3
キャリアが豊富	3.8	31.2

昇進のために最も重要な条件の選択の仕方は、基本属性によってことなる。全体的に言えば、最も重要な昇進の条件は、勤勉・努力と成績優秀であるが、年齢の高い方、学歴や職種のレベルが高い方、収入が高い方、中外合資企業の者は、それ以外の者より、成績優秀を重視する。ここで注意すべきことは、企業の責任者は「同僚との人間関係がよい」ことが非常に重要だとみており、その比率は 25.0%と「勤勉努力」の次に多く、良い人間関係は昇進の重要な要因といえる。

従業員の昇進が公平か否かの評価について、男性、年齢の高い方、学歴の高い方、一般の職員、中外合資企業、月収 501～1000元、1501元以上、1990年より前に入社の者は、それ以外の者よりマイナスの評価が高い。多くの被調査者は「どちらともいえない」との評価であるが、一般の比率（52.9%）より高いのは、女性、31歳～50歳の年齢層、高卒、職員と専門技術者、集体企業、月収 300元以下、401～1000元、1990年より前に入社の者である。昇進が公平か否かは複雑な問題で、各人が昇進ということをどう見ているかによって、その評価も違っている。

図表４－６－６　性別、年齢、学歴、職業、企業の性質、個人収入、入社年と「最も重要な昇進の条件」

	工作勤奋努力	表现出色	同事关系好	上下级关系	热心为大家服务	认真学习政治	资历高
性別:							
男	38.1	18.4	8.5	9.9	19.0	3.2	3.0
女	39.3	15.5	13.8	8.9	14.4	3.6	4.3

つづく

つづき

年龄(岁):							
≤20	41.8	10.9	15.0	4.8	19.0	4.8	3.7
21-30	36.7	17.9	11.2	9.7	18.8	2.7	3.0
31-40	36.9	17.2	13.6	9.8	14.3	2.9	5.1
41-50	41.2	15.2	10.8	10.8	13.4	4.3	4.5
≥51	39.6	23.6	4.7	11.3	15.1	2.8	2.8
教育程度:							
小学及以下	42.4	11.3	17.7	6.5	13.9	6.5	1.7
初中	41.2	10.0	13.2	7.8	19.9	4.2	3.7
高中	36.4	24.1	9.1	11.4	13.6	0.7	4.8
大专及以上	30.0	34.8	5.5	14.5	8.3	2.1	4.8
职业:							
企业主要负责人	33.3	16.7	25.0	8.3	16.7	0	0
部门主要负责人	41.4	18.2	7.4	8.9	15.8	4.9	3.4
普通职员	36.5	19.9	11.2	11.5	12.4	3.2	5.3
专业技术人员	35.8	27.4	5.0	12.8	12.3	3.9	2.8
普通工人	40.3	12.9	13.8	7.5	19.0	3.2	3.3
其他	36.4	18.2	9.1	13.6	18.2	0	4.5
企业性质:							
国有单位	38.9	16.5	13.1	7.2	16.8	3.4	4.1
集体企业	41.6	11.1	15.4	7.9	14.0	5.3	4.7
中外合资	35.9	22.5	6.6	12.8	18.0	1.6	2.6
个人收入(元/月):							
≤300	40.0	10.4	19.3	9.3	11.1	7.1	2.9
301-400	41.7	10.2	16.4	6.0	18.0	3.5	4.2
401-500	40.4	16.1	12.4	5.4	16.6	4.1	4.9
501-1000	39.8	17.6	7.5	13.3	15.2	2.7	3.8
1001-1500	36.8	21.4	6.0	9.7	21.9	0.9	3.4
≥1501	27.4	32.6	8.0	15.4	10.9	2.9	2.9
进厂年份(年):							
≤80	39.3	18.6	10.3	12.6	9.4	3.2	6.4
81-90	38.7	16.2	12.7	9.8	14.5	4.7	3.4
91-95	36.8	17.2	12.0	8.9	18.6	2.8	3.7
≥96	41.1	14.7	11.7	6.7	19.9	3.5	2.2

(4) その他

図表４－６－７は仕事への態度についての集計である。「普通よりできるだけ多くやる」を選択した率が一般水準（29.3%）より高いのは、主に、男性（34.9%）、20歳以下と41歳代、51歳以上（31.3%、33.3%、30.2%）、企業の責任者と部門の責任者（50.0%、47.1%）、国有企業と中外合資企業（32.5%、31.7%）、月収401元以上(401～500元、501元から1000元、1001元～1500元、1501元以上がそれぞれ34.2%、32.3%、34.3%、35.2 %)

などである。「所定のノルマに従う」を選ぶ率が一般水準（50.9%）より高いのは、主に、女性（53.5%）、20歳以下、21歳代、31歳代と51歳以上（56.5%、52.6%、53.3%、54.7%）、中卒、高卒程度（52.0%、51.3%）、専門技術者と普通労働者（53.8%、55.2%）、国有企業（54.0%）、収入 301～400元、401元～500元の者（61.2%、51.8% ）、1981年～1990年および 1996年以降に入社した者（57.3%、52.4%）である。

仕事への態度は従業員本人の主観的な要因に関係しているほか、多くは仕事の性質、労働管理の方式に関係している。例えば、出来高制の分配方法や流れ作業という仕事の性質は、仕事への態度に重要な影響を与える。前者は労働者に「普通よりできるだけ多くやる」よう意欲をおこさせ、後者は労働者が「決められたノルマに従う」ことにほかならない。また「好きなだけやる」の選択率が、一般水準（7.2%）よりかなり多いのは、大卒相当以上(12.2%）、企業の責任者と一般の職員（16.7%、13.2% ）である。その中には、仕事の性質上必然的に選択した可能性も見られる。例えば、大卒相当以上の学歴を持っている者、企業の管理者、職員など、また、企業管理が遅れている集体企業の従業員である。本研究ではこれらの要因を入れていなかたったため、残念ながら明確な結論が得らえられなかった。基本属性の中で、個人の収入は仕事への態度と相関があるといえる。表11は、収入が高いほど「なるべく人より多く働く」を選ぶ比率が高くなり、「ノルマに従う」を選ぶ比率が低くなることを表している。

図表４－６－８は、収入についての主観的評価である。男性は女性より評価が高い。年齢と収入の評価もある程度関係しており、年齢が高ければ収入への評価も良い。学歴と収入評価の関連は、学歴が高いほど収入評価が高く、密接に関連している。企業の責任者、部門の責任者、専門技術者、職員は、自分の収入に対する評価が他より良い。国有企業、中外合資企業は集体企業より収入の評価が良い。本人の実際の収入は自分の収入に対する評価に密接な関係があり、個人の実際の収入が高ければ高いほど、収入の評価が良い。入社年も自分の収入への評価にある程度に関連があり、社員歴が長いほど評価も良い。

图表４－６－７　性别、年龄、学歴、職業、企業の性質、個人収入、入社年と「仕事に対する態度」

	对工作的态度					
	想做多少就做多少	别人做多少我也做多少	比别人稍多做些	尽量比别人多做些	按规定的工作量去做	
性别:						
男	5.5	4.6	6.7	34.9	46.7	(415)
女	8.3	4.9	6.1	25.7	53.5	(639)
年龄(岁):						
≤20	4.8	5.4	1.4	31.3	56.5	(147)
21-30	7.8	3.1	7.0	28.7	52.6	(359)
31-40	8.9	4.9	6.7	24.4	53.3	(225)
41-50	6.0	7.2	7.6	33.3	43.4	(249)
≥51	5.7	3.8	5.7	30.2	54.7	(53)
教育程度:						
小学及以下	6.9	8.6	5.2	29.3	49.1	(116)
初中	6.4	5.5	4.6	29.5	52.0	(562)
高中	5.8	4.0	7.1	29.9	51.3	(224)
大专及以上	12.2	0	12.9	27.9	46.9	(147)
职业:						
企业主要负责人	16.7	0	0	50.0	33.3	(6)
部门主要负责人	6.9	3.9	11.8	47.1	30.4	(102)
普通职员	13.3	2.7	7.3	25.7	49.3	(300)
专业技术人员	4.4	4.4	7.7	29.7	53.8	(91)
普通工人	4.4	6.3	4.8	27.5	55.2	(542)
其他	0	0	0	45.5	45.5	(11)
企业性质:						
国有单位	4.2	4.2	4.5	32.5	54.0	(354)
集体企业	10.9	6.9	5.7	23.7	50.9	(350)
中外合资	6.6	3.1	8.9	31.7	47.7	(350)
个人收入(元/月):						
≤300	17.1	5.7	5.7	17.9	50.7	(140)
301-400	4.4	4.8	4.8	22.9	61.2	(227)
401-500	5.7	4.1	3.6	34.2	51.8	(193)
501-1000	2.7	7.2	9.4	32.3	47.5	(223)
1001-1500	7.3	2.8	5.1	34.3	48.9	(178)
≥1501	13.2	2.2	12.1	35.2	35.2	(91)
进厂年份(年):						
≤80	6.8	8.2	9.6	30.1	43.8	(219)
81-90	13.6	4.4	3.9	18.9	57.3	(206)
91-95	5.3	3.6	7.5	31.6	50.3	(358)
≥96	5.2	3.7	4.1	33.6	52.4	(271)

图表４－６－８　性别、年龄、学歴、職業、企業の性質、個人収入、入社年と「自分の収入に対する評価」

	收入比较					
	比一般工人好得多	比一般工人好一些	和一般工人差不多	比一般工人差一些	比一般工人差很多	
性别:						
男	9.4	28.9	50.4	8.2	2.9	(415)
女	5.2	21.4	56.3	9.7	6.7	(639)
年龄(岁):						
≤20	2.0	14.3	70.7	8.8	4.1	(147)
21-30	4.7	21.7	59.9	8.6	5.0	(359)
31-40	8.0	23.1	54.2	9.8	4.9	(225)
41-50	9.6	30.1	41.4	10.4	7.2	(249)
≥51	15.1	47.2	32.1	3.8	1.9	(53)
教育程度:						
小学及以下	0.9	13.8	59.5	12.1	12.9	(116)
初中	5.5	18.1	61.6	9.3	5.2	(562)
高中	7.6	31.7	49.1	8.9	2.2	(224)
大专及以上	15.6	46.3	27.2	6.1	4.1	(147)
职业:						
企业主要负责人	66.7	33.3	0	0	0	(6)
部门主要负责人	26.5	50.0	20.6	2.0	1.0	(102)
普通职员	4.0	31.7	46.3	12.0	5.3	(300)
专业技术人员	8.8	41.8	38.5	5.5	5.5	(91)
普通工人	3.5	12.4	68.1	9.6	5.9	(542)
其他	18.2	36.4	36.4	0	9.1	(11)
企业性质:						
国有单位	8.2	29.1	53.1	7.3	2.3	(354)
集体企业	2.9	14.3	59.7	12.0	10.6	(350)
中外合资	9.4	29.7	49.1	8.0	2.9	(350)
个人收入(元/月):						
≤300	2.9	2.9	57.1	17.1	18.6	(140)
301-400	1.3	11.9	67.8	13.2	5.7	(227)
401-500	4.7	20.2	62.2	9.8	3.1	(193)
501-1000	7.6	39.0	44.8	5.8	2.2	(223)
1001-1500	9.0	32.0	53.9	3.4	1.1	(178)
≥1501	25.3	47.3	18.7	4.4	3.3	(91)
进厂年份(年):						
≤80	9.6	32.0	42.9	8.2	5.5	(219)
81-90	6.3	22.8	45.6	14.6	10.2	(206)
91-95	6.4	27.7	55.0	6.7	4.2	(358)
≥96	5.5	15.1	67.9	8.9	2.6	(271)

4.7　職場・リーダーシップ

ここでは工場従業員について調べた結果をみよう。質問は、転職の条件問41、リーダーシップに関する問22、問23、問49である。

(1)　転職の条件　(問41)

転職の際の判断基準　(一つ選んで下さい)

1. 個人の趣味と一致（　）　2. 自分の才能が発揮できそう（　）　3. 高収入　（　）
4. 余暇が多い（　）　5. 同僚と上下関係（　）　6. 昇進の機会が多い　（　）
7. その他　（　）　8. わからない　（　）

回答は、図表４－７－１のようになる。

図表４－７－１　回答分布（%）

1	2	3	4	5	6	7	8
12	21	51	5	5	4	2	7

回答は、「高収入」（51%）と「才能の発揮」「趣味との一致」にかたまっており、あとは少数意見である。 年齢別にみても、この傾向は変わらないが、30才未満で「高収入 」が39%と低い傾向であり、「才能の発揮」が30%「趣味と一致」が16%と高い傾向が見られる。 職種でみると「専門技術で高収入」が低く（37%）、「趣味と一致」が22%と高いのが目につく。

(2)　リーダーシップ

ア．問22

公の問題は影響力も経験もある人に任せるべきだと思いますか。それともそのような問題は決定される前に人々で論議すべきだと思いますか。

1.　影響力も経験もある人に任せるべきだ
2.　人々で論議すべきだ
3.　わからない

「人々で論議」が87%、「まかせる」が13%と圧倒的に「議論」の回答が多く、一つの社会的に定着していると言えようか。 年齢別にも差はない。 職種別にも差はなく。一つの普遍的ノルムのように見える、

イ．問23

リーダーとして次のどちらの人がいいですか

1. 年配で尊敬される人
2. 若くて有能な人
3. どちらでもない

回答は「若くて有能」が70％、「年配で尊敬」が13％とこれも明確な形であるが、年齢別にみると興味あるのは、50才以上の高年齢層ーその数は21人と少ないがーその1／3は「年配で尊敬」が多くなっているのが見られる。職種別に大きな差はない。

ウ．問49

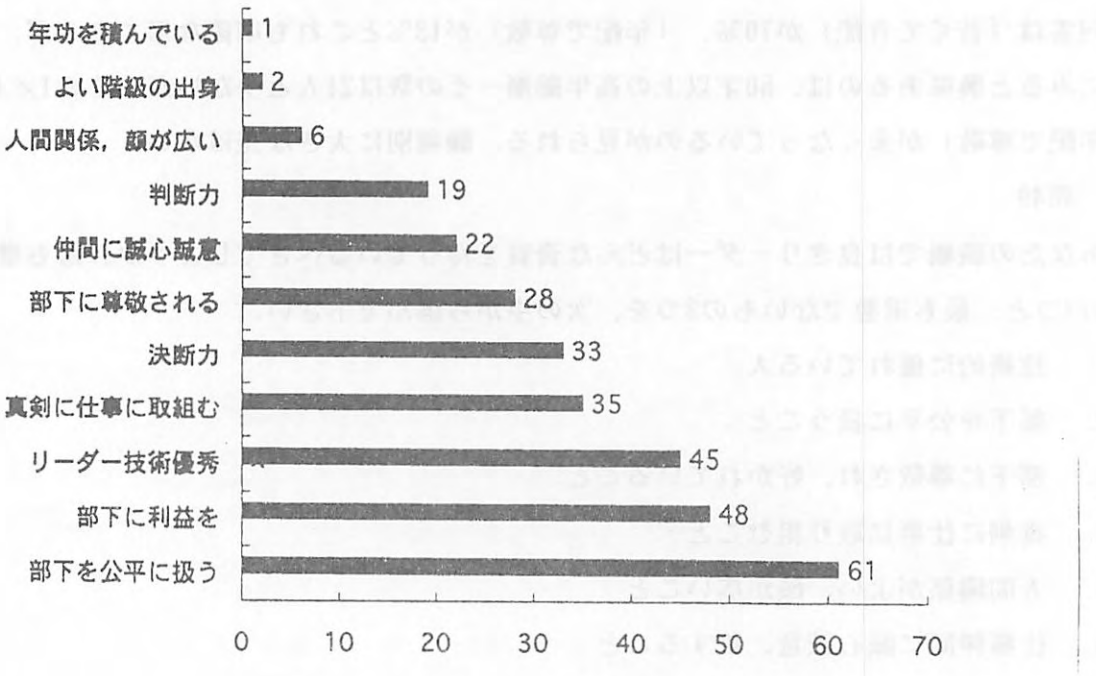
あなたの職場では良きリーダーはどんな資質を持っているべきでしょうか。最も重要なもの3つと、最も重要でないもの3つを、次の中から選んで下さい。

1. 技術的に優れている人
2. 部下を公平に扱うこと
3. 部下に尊敬され、好かれていること
4. 真剣に仕事に取り組むこと
5. 人間関係がよい、顔が広いこと
6. 仕事仲間に誠心誠意、接すること
7. 決断力がある、断固としているこ
8. 判断力が優れていること
9. 部下に利益をもたらすこと
10. 年功をつんでいること
11. よい階級の出身であること

重要であると回答した方の回答のみをとりあげる。「部下を公平に取り扱う」60％、「部下に利益をもたらす」48％、「技術優秀」が45％とこの三つが半数前後ということになる。 結果をまとめたのが図表４－７－２である。

性別に10％以上差のあるものをみると、「部下を公平に扱う」（男53％、女65％）、「真剣に仕事に取り組む」（男26％、女41％）、「決断力」（男46％、女25％）となっており、よく社会情勢を反映しているのではないかと思われる。職種を見ると、「部下を公平に扱う」は幹部職員は38％、労働者70％、一般職員56％と差が大きい。「決断力」は幹部職員57％、労働者26％、一般職員36％と差は大きく、「判断力」は幹部職員で32％、労働者12％、一般職員24％とその職種の性格がよく現れている。中国に特徴的な「部下に利益をもたらす」はあまり差はないという点は見逃せない。

図表４－７－２


年功を積んでいる
よい階級の出身
人間関係，顔が広い
判断力
仲間に誠心誠意
部下に尊敬される
決断力
真剣に仕事に取組む
リーダー技術優秀
部下に利益を
部下を公平に扱う
1
2
6
19
22
28
33
35
45
48
61
0
10
20
30
40
50
60
70

4.8　家族関係と価値意識

工場調査でも、浦東調査の Q15とほぼ対応する価値意識に関する質問を行っている。ただし工場調査では多少質問のニュアンスが異なるものがあり、また1項目つけ加えられた（「自己中心・利己主義でないと天罰が下る（自己の利益を守る）（Q37-7)」）。回答選択肢は浦東調査とやや異なり、各意見に対して「大賛成」「賛成」「どちらともいえない」「反対」「大反対」の５選択肢の中から一つを選んでもらった（選択肢はこの順に並んだ中から一つを選ぶ方法）。また各意見への回答の後、その意見が何の影響を受けたものかを質問し、「両親の教え」「両親の行動」「マスコミ」「学校教育」「何ともいえない」「その他」の6選択肢から一つ選んでもらった。影響源の質問は浦東調査とまったく同じものである。ワーディングの異同については国際比較と合わせて詳細は報告書 5.3で検討する。

(1)　価値意識項目の意見分布の特徴

挙げられた意見のうち、賛成する者が最も多かったのは「他人の恩を忘れてはいけない(Q37-2)」で、9割以上が賛成（「大賛成」＋「賛成」）し、次いで「社会のために個人の利益を犠牲にすべきだ(Q37-4)」も65.5％が賛成している。これらは社会的望ましさが高く、浦東調査同様に建前的な回答が得られた可能性もある。

物質志向を示す「金さえあれば何でもできる (Q37-1)」に賛成する回答はやはり54.3％で過半数を超え、かなり一般的に広がっている意識と考えられる。浦東調査について検討した 3.4で＜私利益主義＞と呼んだ項目群については、上述の「金さえあれば」以外の項目では3割に見たず、むしろ少数派である。ただし工場調査では「どちらともいえない」の選択肢が浦東調査よりもかなり多く1割から2割強程度得られている。

その他の項目ではむしろ否定的な回答が多いが、「仕事のために家族の信頼を裏切ってもよい(Q37-3)」や「結婚後、浮気をしたら離婚させるべきで、干渉する必要がない(Q37-14)」は約3割が肯定している。

一方、家族の相互扶助については「稼いだお金は自分で使うべきで、家族のことを構わなくてもよい(Q37-11)」「結婚後最も大事なことは子供の楽しみを考えることで、両親のことはあまり関心を寄せなくてもよい(Q15-10)」といった＜脱家族志向＞には賛成する者は1割未満だった。互助的共同体としての家族に対する価値意識はここでも依然として明確であることが分かる。

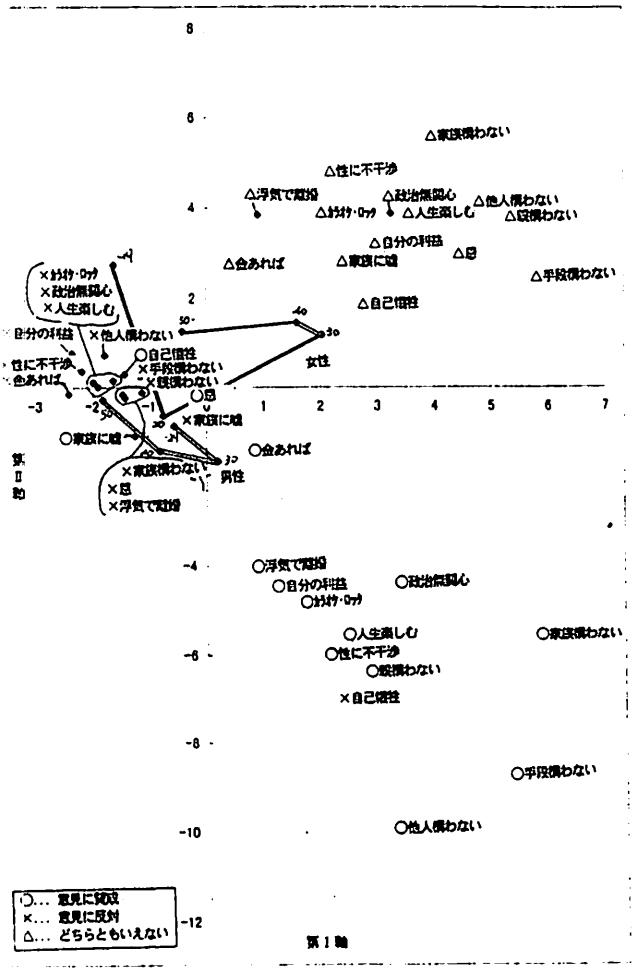
(2)　価値意識の構造

価値意識の全体的な構造を見るために数量化Ⅲ類の分析を性・年齢層を含めて行ったのが図表４－８－１(1)(2)である。浦東調査でも年齢要因が重要であったため、ここでも年

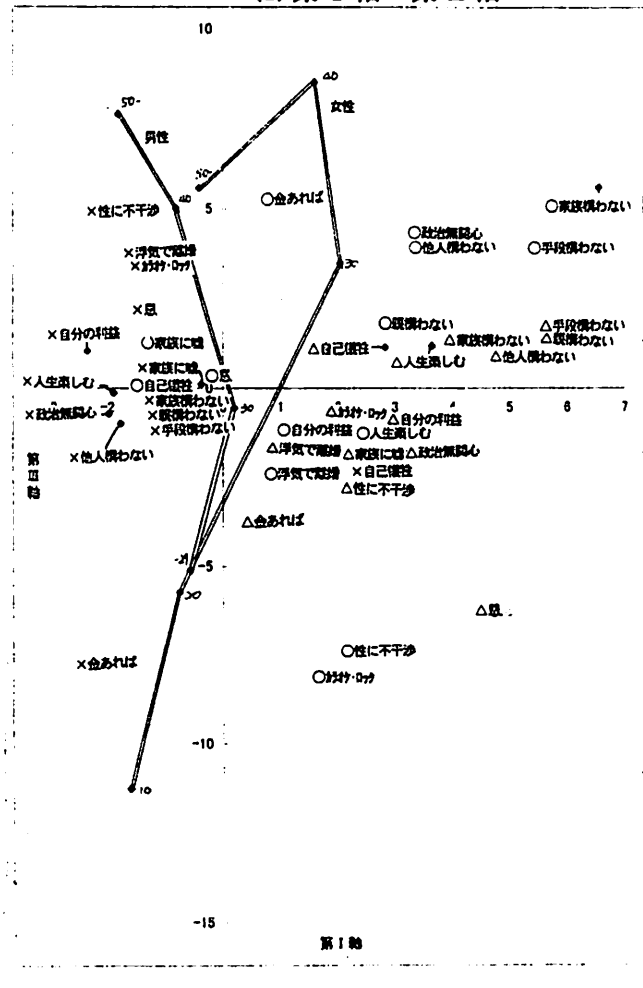
齢区分をやや細かくしたグループ分けを行った。回答者全体の年齢分布が浦東調査よりもやや低年齢に傾斜しており、また年齢分布の男女差が大きい。特に10代男性は欠損値のないデータが17名しかなかったため、20代までにまとめた。女性の場合は10代が52名あり、独立したグループとした。このため年齢区分に関しては図表からも分かるように男性は20代までから10歳刻みで50代以上までの4区分、女性は10代を独立させた5区分で布置されている。価値意識への回答は「大賛成」「賛成」を＜賛成＞にまとめ、「反対」「大反対」を＜反対＞にまとめて「どちらともいえない」を合わせた3段階に変換してある。

図表４－８－１　価値意識項目の数量化Ⅲ類

(1)第Ⅰ軸×第Ⅱ軸



(2)第Ⅰ軸×第Ⅱ軸



この結果、第Ⅰ軸は＜私利益主義＞と＜脱家族志向＞への賛成および態度保留を右側に、明確にこれらに反対する＜伝統的倫理志向＞を左側に置く軸と解釈できる。これは 3.4でみた家庭調査と方向が逆転しているがほぼ同様の結果である。しかし浦東調査では判断保留の選択肢群をはじき出す軸だった第Ⅱ軸は、ここでは「どちらともいえない」という回答の比率が高いことも影響して、判断を保留する回答をプラスの方向に、＜私利益主義＞＜

脱家族志向＞や＜若者文化＞への賛成をマイナスに分ける軸になった。この軸の性格もプラスとマイナスの方向が逆転しているが、3.4でみた図表３－４－１(1)と似ている。ただしここでは３極構造がより明瞭に現れている。第Ⅲ軸は家庭調査とはやや異なる軸になった。プラス方向に若者文化への否定や＜私利益主義＞＜脱家族志向＞に肯定する選択肢と判断保留する選択肢がある程度近接して集まり、「どちらともいえない」と答えた者と賛成の者がかなり類似した回答パターンを持っていることが分かる。私利益主義の項目は社会的望ましさが低い内容であることから、心情的には同意しているがやや婉曲に「どちらともいえない」と答えた回答者が多い事を推測させる。マイナス方向には「性に不干渉」「カラオケ・ロック」への肯定、「恩を忘れない」に判断保留、「金さえあれば」に肯定または判断保留、などが得点の高い項目である（各軸の固有値は、第1軸が0.240、第Ⅱ軸が0.149、第Ⅲ軸が0.104）。なお、「恩を忘れない」に反対、という選択肢が独自の動きをしているが、回答がきわめて少数であることが原因かと思われる。

年代と合わせて、男性と女性でかなり回答傾向が異なる。女性の方が第Ⅰ軸で右側にある＜私利益主義＞＜脱家族志向＞にシフトし、かつ男性の方が積極的な肯定（男性グループの方が全体的に第Ⅱ軸で下方に位置）に、また女性の方が判断保留の選択肢群に近い（上方に位置）。

年代的には最も若い年齢グループと50代以上の年配層が＜伝統的倫理志向＞に近い位置を占め、中間の年齢グループが、男性・女性それぞれに右方向に位置して、ちょうど弧を描くように並んでいる。特に女性では中間的な30代、40代が大きく右側の＜私利益主義＞＜脱家族志向＞判断保留群に近づいている。また第Ⅲ軸に関しては女性の40代と50代の逆転を例外に、ほぼ年齢グループの順にマイナスからプラス方向に並んでいる。

これらの結果から、この調査では年代的な違いは30代･40代と、その上下の層の間にあり、最も若い層はむしろ伝統よりの価値意識を持っている面があること、かつ男女の違いも大きいことが指摘できる。

別な側面から項目間の関係を見るために行った因子分析の結果(図表４－８－２)では、浦東調査と同様に４因子構造が妥当と解釈できた。また第１因子から第３因子まではほぼ家庭調査と同様の因子が得られた。工場調査でのみ質問された「自己の利益を守る」という質問は＜私利益主義＞の因子に含まれている。しかし第4因子についてはやや異質な性格を持つ因子が得られている。浦東調査では第4因子は「恩を忘れてはならない」と「自己犠牲」が結びついていたのに対して、工場調査では「仕事のために家族の信頼を裏切ってもよい」と「自己犠牲」が因子負荷量の最も高い項目で、社会性の中に会社のために滅私奉公ができるかどうかという「会社志向」を含んだ因子と解釈できる。

図表４－８－２　価値意識項目の因子分析

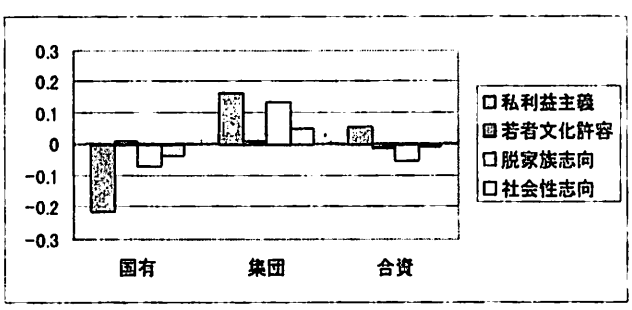
項目	私利益主義	若者文化許容	脱家庭志向	社会性志向
金さえあれば何でもできる	45	-4	2	15
恩を忘れてはならない	4	4	-14	4
仕事のために家族に嘘	4	4	0	42
社会のために犠牲になるべき	-33	-13	-4	35
重要なのは楽しむこと	41	22	3	-7
困っている人をかまう必要ない	64	16	13	-2
手段を選ばず稼ぐべき	54	16	25	6
政治を心配する必要ない	45	14	25	-26
稼いだ金は自分で使う	38	15	63	2
結婚後は両親のことは構わない	28	15	47	11
ｶﾗｵｹ･ﾛｯｸは好きに聞けばよい	10	55	7	4
若者のセックスに干渉しない	13	71	10	-8
浮気をしたら離婚させてよい	12	40	-7	0
自分の利益を守る	41	17	-2	-8
寄与率	1.817	1.167	0.805	0.426

注：反復推定のある主因子法ﾊﾞﾘﾏｯｸｽ回転後の値(100倍し小数点以下を四捨五入)。5段階評定として扱った。

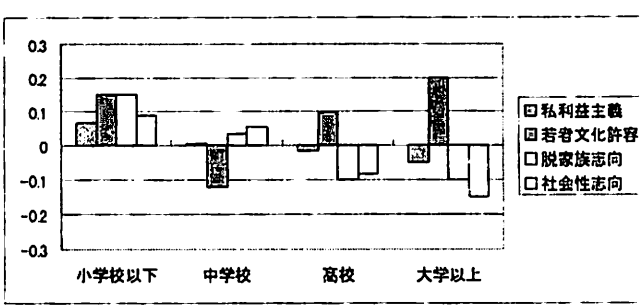
(3)　その他の属性による違い

図表４－８－３　　属性による因子得点の違い

(1)組織形態別にみた違い



(2)教育水準別に見た因子得点の違い



性・年齢別以外の属性では、所属する企業の組織形態の違いや教育程度の違いが顕著に見られた。特徴を明確にするために図表４－８－３では因子分析で得られた因子得点を、属性別に示した。組織形態の違いは＜私利益主義＞と＜脱家族志向＞で顕著で、＜私利益主義＞については国有企業に所属する者は集体企業や合資企業と比べて顕著に低い傾向があった。また＜脱家族志向＞では、集体企業と他の二つの組織形態の間に違いがあり、集体企業の回答者は＜脱家族志向＞を否定する度合いが弱い。国有企業では(日本でも公的な組織は同様の傾向があると思われるが)必ずしも利益を追求することを目的としない運営を行っていただろうと推測され、そこで形成された企業文化が改革開放後も残存していると考えると＜私利益主義＞の低さを理解することができる。一方、集体企業で＜脱家族

志向＞への否定が弱いが、これは家族関係に関する価値であることから、集体企業の企業文化として理解するよりは、集体企業の従業員の属性から理解する方が妥当かと考えられる。このタイプの企業は、所得水準が最も低く、かつ女性労働者が多いが、これらのことから家族の相互扶助に対して判断保留が多い（あるいは経済的に扶養責任を負いかねると考える）ことが一因ではないかと推測される。

また工場調査では教育水準による違いも浦東調査よりもはっきりしており、＜私利益主義＞では大きな差がないが、＜若者文化許容＞では、大学卒が最も高い。また＜脱家族志向＞と＜社会性志向＞については小学校以下が最も高く、教育水準が高くなるほど低くなる傾向が見られた。ただし学校教育の単独の効果というよりは、大学卒は男性・20代・未婚・高所得層などの比率が(学歴間で比較した場合に)最も高いため、これらの属性の合成された影響で顕著な差が見られているものと思われる。

(4) 価値意識の影響源

浦東調査同様に、回答者の価値意識に影響を与えた要因を「両親の教え」「両親の行動」「マスコミ」「学校教育」「分からない」「その他」の6つの選択肢から選んでもらった。「恩を忘れてはならない」「稼いだ金は自分で使う(家族には構わない)」「結婚後は両親のことは構わない」などの項目については、考え方に影響を与えたものとして「両親の教え」「両親の行動」が合わせて5割から7割を占め、家庭内での価値の伝達が意識化されている。また＜私利益主義＞に対しては全体として浦東調査よりも肯定率が低いがこれと呼応して影響源として「両親の教え」「両親の行動」を挙げる回答者の割合が高くなっている。

影響源と価値意識への回答の間にはやはり強い関連が見られ、＜私利益主義＞に賛成の者は影響源として「分からない」あるいは「マスコミ」を挙げる割合が高いのに対して、＜私利益主義＞を否定する者や、「自己犠牲」を肯定する者では、学校教育や両親の影響を挙げる割合が高かった(図表４－８－５)。

影響源については、数量化Ⅲ類を行った結果（図表は省略）、やはり多くの項目で特定のメディア同士がグループとして集り、一つの項目についてあるメディアの影響を挙げた者は、他の項目でも同じメディアを挙げる傾向がある。影響源についての属性による違いでは「両親の教え」ではデモグラフィックな属性で差がほとんど見られないものの、「両親の行動」を挙げる者は10代女性に多く、また「マスコミ」は男女とも30代以上の層（特に男性）で10代、20代よりも多い。また10代では男女とも「学校教育」が最も意見の影響源として多く挙げられており、学校教育の効果が卒業後もまだ間もないために持続しているようである。

情報源の中で「分からない」は男性より女性に多い傾向が見られた。ただし価値意識の質問で「どちらともいえない」と答えた回答者は、情報源でも「分からない」と答える傾向が強

いため、価値意識で判断保留が多い女性で「分からない」が多いのは当然といえる。

以上から価値意識の年代差で、浦東調査とは異なり、10代、20代の若い年代と50代以上のやや年配の世代で価値意識に類似点が多く、中年層と対置される結果が得られている。ただし、若者と年配層では、意識への影響源については大きな違いがある。

図表４－８－４　価値意識と影響源の関係

意識	意見	両親の教え	両親の行動	マスコミ	学校教育	分からない	その他
恩を忘れない	賛成(956)	47.3	26.2	8.4	9.7	4.5	4.0
	反対(14)	21.4	0.0	14.3	14.3	**42.9**	7.1
	ＤＫ(48)	10.4	0.0	**25.0**	4.2	**50.0**	10.4
	全体	45.3	24.5	9.2	9.5	7.1	4.4
社会のために自己犠牲	賛成(665)	15.0	11.1	9.9	**56.5**	5.3	2.1
	反対(91)	5.5	8.8	**26.4**	9.9	**34.1**	**15.4**
	ＤＫ(255)	3.9	2.0	**30.6**	8.2	**49.0**	6.3
	全体	11.4	8.6	16.6	40.0	19.0	4.4
金さえあれば何でもできる	賛成(520)	9.0	3.7	**65.0**	1.9	10.2	10.2
	反対(229)	**24.5**	11.8	15.3	**25.8**	11.8	10.9
	ＤＫ(284)	8.8	3.9	31.3	7.4	**41.2**	7.4
	全体(1037)	12.3	5.5	44.6	8.8	19.3	9.5
人生を楽しむ	賛成(160)	3.1	7.5	**46.9**	7.5	20.6	14.4
	反対(627)	14.5	19.5	13.6	28.1	16.9	7.5
	ＤＫ(225)	2.2	3.1	28.9	4.9	**52.0**	8.9
	全体	10.1	13.9	22.1	19.7	25.3	8.8
浮気で離婚してよい	賛成(302)	3.6	5.3	**50.3**	5.6	19.5	15.6
	反対(378)	10.6	8.5	32.3	8.5	25.7	14.6
	ＤＫ(338)	2.1	2.7	23.4	3.8	**55.3**	12.7
	全体	5.7	5.6	34.6	6.0	34.0	14.1
結婚後は両親構わない	賛成(87)	18.4	28.7	17.2	5.7	21.8	8.0
	反対(830)	21.4	34.5	12.7	14.2	10.6	6.6
	ＤＫ(99)	5.1	8.1	17.2	8.1	**49.5**	12.1
	全体	19.5	31.3	13.6	12.9	15.4	7.3

注：全体の平均より 10 ポイント以上高い値をゴチックで示した（％）。

図表４－８－５　性・年代別に見た影響源

性･年代		両親の教え	両親の行動	マスコミ	学校教育	分からない	その他
男性	10 代	1.95	1.10	2.76	**4.05**	2.14	1.67
	20 代	2.07	2.08	2.87	2.54	2.59	1.48
	30 代	1.57	2.06	**4.03**	1.84	2.65	1.06
	40 代	2.08	2.17	**3.98**	2.47	1.89	0.68
	50 代	1.96	1.92	**3.92**	2.89	1.87	1.31
女性	10 代	2.05	2.13	2.53	**3.00**	2.78	1.45
	20 代	2.20	1.71	2.68	2.64	**2.88**	1.65
	30 代	1.75	1.53	3.46	2.19	**3.65**	0.97
	40 代	1.92	1.49	**3.79**	1.99	3.06	1.08
	50 代	2.00	1.76	2.72	2.08	**3.16**	1.04

注：各グループで最も多く挙げられた情報源を太字で示した（数字は影響源として挙げられた回数の平均）。

4.9　カウンターカルチャー

工場経営形態別に見たカウンターカルチャー

浦東住民調査の項 3.5で触れたカウンターカルチャーについて、工場調査でも同様の分析を行っているが、よく似た結果である。ただし、工場調査では、国有企業・工場、集体企業、外資系企業との合資企業別での分析が興味深いので、簡単に触れておきたい。

予想通り、国有企業では、総じてまじめで、人生享受志向の人は少ないようだ。収入もあまり良くない、労働者、農民が主体の、集体企業で、いちばん人生享受志向が強いこと、そして諸外国の情報の入りやすい合資企業で、ちょうどその両者の中間、と言うのもおもしろい。

自分中心主義がいちばん強いのは集体企業というのは予想通りであった。ここでも国有企業がいちばんまじめで、合資企業がまた両者の中間、と言う結果だ。カウンターカルチャー因子では、あまり大きな差は見られないが、合資でやや批判的、と言う結果である。外国についても情報の多いこの人たちは、カウンターカルチャーのマイナス面にも注意して評価している、ということであろう。

こうして、職場環境によって、価値・ライフスタイルに差が見られることが確認されており、大変興味深い。（図表４－９－１）

図表４－９－１　工場調査、因子得点

工場の種類（FACTR）		factor score 1 人生享受	factor score 2 自分中心	factor score 3 ｶｳﾝﾀｰｶﾙﾁｬｰ
1　国有企業	平均値　N=354	.170	.150	-.023
2　集体企業	平均値　N=350	-.147	-.174	-.018
3　合資企業	平均値　N=350	-.024	.022	.041
合計	平均値　N=1054	0	0	0
	標準偏差	.761	.811	.765

こうして、カウンターカルチャーといった、新しい価値・ライフスタイルが、上海、浦東調査地区においても、急速に浸透しつつあることが伺える。こうした新しい意識は、どこの国でも、若い層、高学歴層、そして外国の企業や文化との接点にいるような層から、徐々に浸透していくものだ。そしてこれは、中国古来の伝統的価値と、時には対立し、時には協調しながら、これからの中国人の価値・ライフスタイルを形成していくことであろう。こうしたカウンターカルチャーというような、新しい価値・ライフスタイルは、これ

からも、どんな層から入って行き、広がっていくのか。それがこれからの中国の新しい価値・ライフスタイルの形成に、積極的に貢献していく部分と、それを阻害する面と、両面をもっていることは疑いない。特に今日のような、価値・ライフスタイルの激動期に、こうしたカウンターカルチャーの果たす役割は大きいと考える。今回はまだ、ごく部分的な動向を見ることができただけであるが、十分、その重要性と、意義を、知ることができたと考える。今後の重要な研究課題として、是非検討を続けていきたい。

4.10　カウンターカルチャー共感尺度

工場調査に限って、少し異なった新しい角度から、カウンターカルチャーについて、調査を行った。これは１３の典型的カウンターカルチャーを示し、それらのどれに”共感できるか”を、質問したものである。「カウンターカルチャー共感尺度」とでも言うべきものである。

回答は共感できる、共感できない、の２分法であったので、数量化３類によって分析した結果が、図表４－９－２，図表４－９－３，図表４－９－４である。第１根は、回答あり・なしに対応するものなので割愛し、第２根、第３根、第４根を組み合わせて、図示した。

まず第２根と第３根を組み合わせた、図表４－９－２より、マージャン・ギャンブル、麻薬、ホモ、不倫の４つが、一つのはっきりしたグループを形成している。いわば「反社会的カルチャー」とでも言うべきものが固まっているようだ。マージャンはそれほど反社会的ではないと思われるが、マージャン・ギャンブルというギャンブルの方に強く反応したのであろう。

ついで、ロック・ジャズ、成金を見せびらかす者、フリーター、の３つが、第２のグループを形成している。これはそれほど特異なものではなく、第１グループに比べるとずっと普通のものだが（原点に近いところに位置している）、しかしやはり社会的にはまだあまり歓迎されていないもの、と言って良かろう。「非社会的カルチャー」とでもいうべきものであろうか。

第３のグループは脱サラ、転職、の２つが、第１のグループとは反対のところに固まっている。この２つはほとんど同じようなものと考えられているようだ。従来の慣行のように、一生、同じ職業に就いているべき、というような伝統的カルチャーから離れた、新しい動向だ。それは反社会的ではないし、いまや非社会的でもない、いわば「脱伝統文化」志向とでも言うべき、新しい、未知の、道だ。成功しているものもいれば、失敗しているものもいるが、とにかく新しい第３の道といえよう。

第３根と第４根を組み合わせた、図表４－９－３より、第４根は、フリーターをはじき出すだけの軸のように解釈できる。

第３根と第４根を組み合わせた、図表４－９－４より、図表４－９－２では出てこなかった暴力・セックス（映画）やポルノ（雑誌）も、第１群、第２群と同じような、反社会的、非社会的グループに入るものだ、と言うことを、図表４－９－３とともに、示しているようだ。さらに図ｚ３では、これらは特に、脱サラ、転職とは違い、またフリーターとも違うもの、と言うことを、示しているといえよう。

以上を総合して、マージャン・ギャンブル、麻薬、ホモ、不倫と言った、「反社会的カルチャー」、ロック・ジャズ、成金をひけらかす、ポルノ（雑誌）、暴力・セックス（映画）、などの「非社会的カルチャー」、そして、脱サラ、転職、フリーターといった「脱伝統カルチャー」の３つのタイプのカウンターカルチャーが分離された、と考えることができよう。

カウンターカルチャー共感尺度と社会的属性

このようなさまざまなタイプのカウンターカルチャーがどんな人たちに受け入れられているか、性、年齢、学歴などとの関連で、みてみよう。「反社会的カルチャー」では、マージャン・ギャンブルが、男性に多く（男、5,1%、女、2,5%）、また、むしろ高学歴で多い（全体で、3,5%なのに、高学歴で、6%）。ホモも高学歴に多い（全体で、8,5%に対し、高学歴で、10,2%）という結果である。「非社会的カルチャー」では、ロック・ジャズは、意外に性差はなく、高学歴でやや多い（全体で16%、高学歴で約20%）。ポルノも男性でやや多い（全体、3,7%、男性、5,3%）ことと、高学歴ではかなり多いのが注目される（全体、3,7%、高学歴、9,5%）。「脱伝統カルチャー」の脱サラ、転職では、性差と学歴差が見られる。脱サラは性差は見られないが、転職は男子がかなり多い（男、55%、女、47%）。学歴では、脱サラ、転職ともに、高学歴に多い（脱サラ：全体、76,4%、大学卒、86,4%、高卒81,3%、転職：全体、50%、大学卒、68%、高卒、61%）。

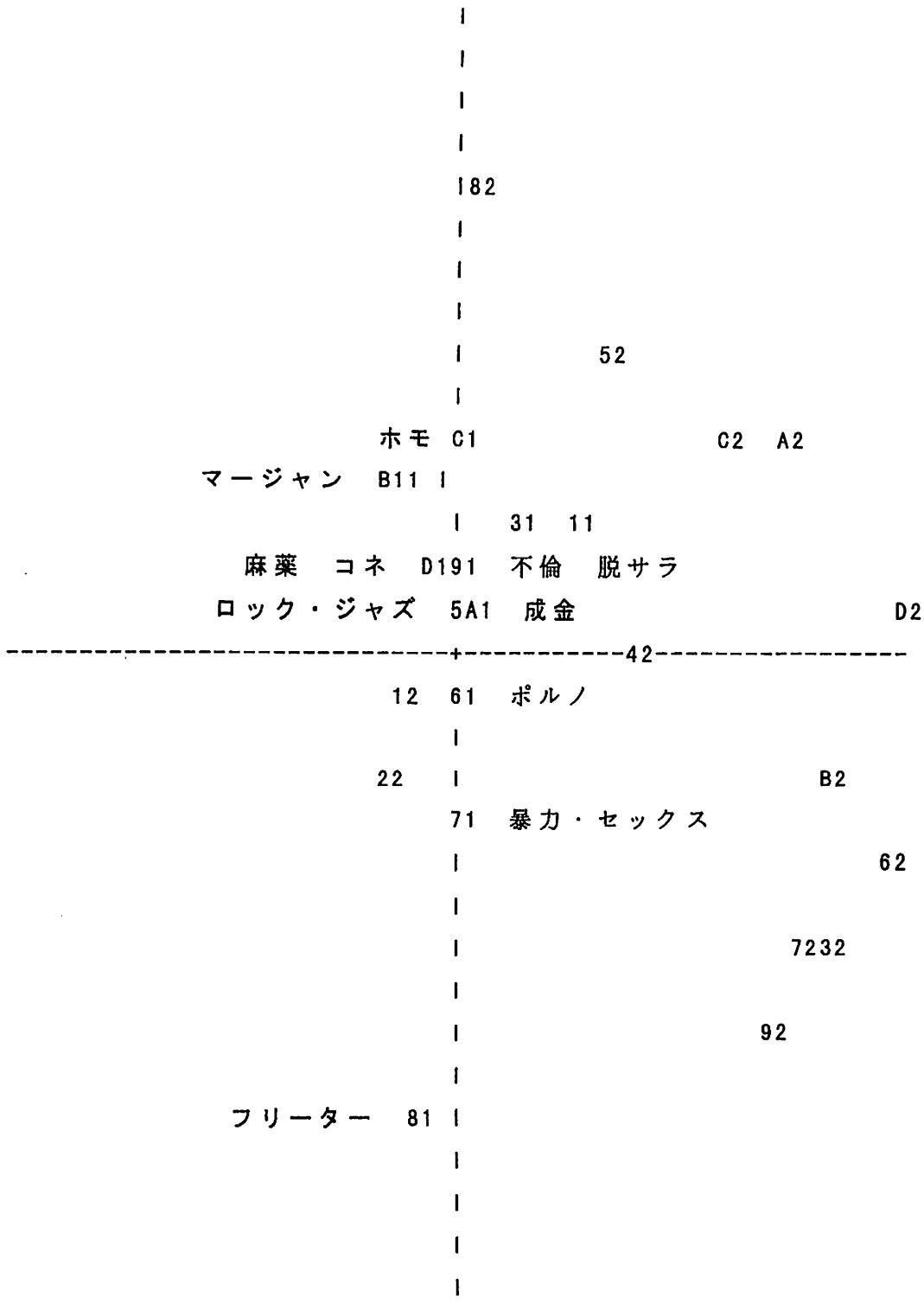
こうして、新しい価値・ライフスタイルは、高学歴、そして男性から、まず浸透して行くようであることがわかる。これは世界的傾向であるが、中国でも今後こうした層が、まず新しい価値・ライフスタイルを評価し、受け入れ、そして一般の人々へと、伝搬して行くことであろう。今後の中国における文化変動、価値変動にとって、こうした新しい価値・ライフスタイルへの共感を持つ者、価値のイノベーターたちの動向は、決定的に重要な視点である。今後の興味深い課題である。

図表４－９－２

```
                    ﾏｰｼﾞｬﾝ  麻薬   ホモ
                          B1D1C1  31   不倫
                            |
                            |
                            |

                            ～

                            |
                            |
                            |
            ロック・ジャズ  5A1  成金
                            |
                            |
                            |
                            |
              フリーター  81 |
                            |
                            |
                            |
                            |
                            |
                            |                    9A2
                            |         52           72B2  6D2
-------------------------222--+82---------42----C2-----32----
                            |
                            |
                            |
                            |

                            ～

                            |
                            |
                            |       11  21
                                   脱サラ  転職
```

LEGEND (HORIZONTAL DIMENSION 2: VERTICAL DIMENSION 3)

図表４－９－３



LEGEND (HORIZONTAL DIMENSION 2: VERTICAL DIMENSION 4)

図表４－９－４

```
                                  |
                                  |
                                  |
                                  |
                                  |
                                  |
                                  82
                                  |
                                  |
                                  |
                                  |52
                                  |
                                  C2   A2                          C1 ホモ
                                  |                                B1 ﾏｰｼﾞｬﾝ
11  脱サラ                         |                                31 不倫
                                  |            ロック・ジャズ       D1 麻薬
転職                              | D2                 5A1  成金
21----------------------------42----------------------------
                                  12                               61 ポルノ
                                  |
                                  2B2
                                  |                                71
                                  | 62                       暴力・セックス
                                  |
                                  3272
                                  |
                                  |  92
                                  |
                                  |            81  フリーター
                                  |
                                  |
                                  |
                                  |
                                  |
```

LEGEND (HORIZONTAL DIMENSION 3: VERTICAL DIMENSION 4)

5．諸調査の比較・国際比較から見える中国の姿

5.1	上海・浦東調査の時系列変化	飽戸　弘　Godwin C.Chu
5.2	ライフスタイルの基本構造	飽戸　弘
5.3	家族関係と価値意識	中村　雅子
5.4	結婚、家庭	岩男寿美子
5.5	リーダーシップ	林　知己夫
5.6	回答選択率からみた地域差	林　文

5.1　「上海調査」・「浦東調査」の時系列変化＞

―――激動の２０年に「伝統的価値」はどう変化したか

(1) はじめに

人々の価値・ライフスタイルは、時代とともに変動して行く。特に、産業構造、そして社会構造が大きく変動するとき、価値観も変化することは、Inglehart (1977) らが古くから検証してきたところである。特に、Inglehartは、１９６０年代から７０年代にかけて、多くの欧米先進資本主義国が、工業化社会から脱工業化社会へと言われるような著しい経済水準の向上、そして生活様式の変化につれて、価値観が、物質志向から脱物質志向へと、大きく変化していった様を、見事に描き出している。

〈 Inglehart. Ronald, The Silent Revolution, Princeton University Press. 1977. 〉

1968-69年の大学紛争に端を発した世界的価値・ライフスタイルの激動も、アメリカ、フランスなど、欧米諸国では大きな価値・ライフスタイルの変動を経験したが、一方、日本のように、価値・ライフスタイルの激動が予想されながら、いち早く以前の価値観に戻ってしまった、という例も報告されている。

〈 林知己夫・飽戸弘ほか、「日本人の法意識」、至誠堂、１９７３年、林知己夫、飽戸弘ほか、「現代日本人の法意識」、第１法規、１９８２年。など、参照。〉

中国は、序章に見るように、「解放政策」により、共産主義政治のもとで、ほとんど近代資本主義国に近い、自由主義経済を導入し、経済水準は著しく向上し、生活様式も激変した。このような経済水準の向上・社会構造の変化は、価値・ライフスタイルにも大きな変動をもたらしていることが予想される。幸い、われわれグループは、1987年に、上海地区での意識調査を行っている＜これを以下、「上海調査」と呼ぶ＞。この詳細な結果は、Chu (1993) に、報告されている。

〈 Chu, G. &Ju, Y., The Great Wall in Ruins, SUNY press, 1993. 〉

そこでまず、今回の我々の行った、１９９６年の＜浦東調査＞と、１９９７年の＜工場調査＞とを、上記＜上海調査＞と、比較することによって、ここ２０年における中国人の価値の変化について、見てみよう。

(2) 伝統的価値の激動

特に上海調査からみて、大きく変化している項目は、1、保身（８－＞２０）、2、婦女子の道徳（８－＞２３）、4、中庸の美徳（５－＞２２）、8、辛抱・礼儀（４５－＞８８）、9、家名先祖の栄光（１９－＞４１）、11、和を大切に（４７－＞９０）、12、仁義道徳（５６－＞９２）、などで、「誇りに思う」というものが倍増、３倍増、といった大きな変化が見られる。これほどの変化が見られるということは世界的にも珍しいことといえよ

う。とりわけ、儒教的道徳が復活していることが示されている。いずれにしてもこうした伝統的価値が激動していることにまず注目したい。そこで、以下、特に、４、「中庸の美徳」と１１，「和を大切に」、　「辛抱・礼儀」「家名・祖先」「三従四徳」の５つの価値に焦点を当て、少し詳しく見てみよう。＜図表５－１－１＞

図表５－１－１　伝統文化に対する意識

			誇りに思う					なくしたい					わからない				
			浦東	工場	上海	蘭	日	浦東	工場	上海	蘭	日	浦東	工場	上海	蘭	日
1	明哲保身	保身をはかる	20**	17	8	-	56	45	38	64	-	3	35	43	25	-	41
2	三従四徳	婦女子の道徳	23**	30	8	29	13	64	44	2	47	48	17	26	17	22	39
3	勤労節倹	勤勉・倹約	96	92	89	89	55	2	2	3	3	8	2	7	7	8	37
4	中庸之道	中庸の美徳	22**	16	5	17	27	35	33	65	48	12	43	50	26	32	62
5	父慈子孝	親切・孝行	93*	84	61	74	55	2	2	13	9	8	5	13	23	14	37
6	男女有別	男女差別	15*	14	10	-	8	68	51	9	-	51	17	35	18	-	41
7	子孫満堂	子孫が多い	19	26	21	-	54	64	37	56	-	4	17	36	20	-	42
8	容認礼節	辛抱・礼儀	88**	76	45	73	52	4	5	20	9	12	8	19	31	18	36
9	光宗耀祖	家名先祖栄光	41**	30	19	32	52	38	28	42	37	11	21	42	34	29	37
10	重農軽商	農重視商軽視	9	8	10	-	7	69	42	54	-	50	23	49	31	-	42
11	以和為尊	和を大切に	90**	75	47	-	64	3	5	17	-	4	6	19	31	-	31
12	仁義道徳	仁義と道徳	92**	86	56	76	46	3	2	16	8	14	5	11	24	14	40
13	従順尊重	年長者尊敬	77*	56	50	52	60	8	7	17	16	5	15	37	28	32	35
14	精忠扱国	忠誠愛国	83	76	74	84	19	5	1	7	4	26	13	22	15	11	55
15	迎合上意	上意に迎合	13*	10	7	-	5	65	40	56	-	60	23	49	32	-	35
16	婦女貞節	婦人の貞節	54*	45	31	53	34	24	22	45	22	17	22	32	21	23	49
17	己所不欲、勿施干人*1		63	61	-	-	-	16	11	-	-	-	21	8	-	-	-
18	礼尚往来*2		86	32	-	-	-	7	27	-	-	-	7	40	-	-	-
19	人不為己、天珠地灰*3		10	8	-	-	-	71	61	-	-	-	9	31	-	-	-

*1(new) 礼を受ければ、礼を返す。*2(new) 己の欲せざることを人になすなかれ。

*3(new)　自己中心。

*4工場だけ、１）誇り、３）わからない、２）破棄すべき、と、ほかに併せて変換した。

このような大きな変化が、どこから来ているのか、さまざまな要因が考えられるが、一つの方法は、性別、年齢別、学歴別といった、デモグラフィク要因との関連から、変化の原因を考えてみるということが考えられよう。そこで、浦東調査、上海調査それぞれについて、これらのデモグラフィック要因との相関を見たものが、<図表５－１－２>、<図表５－１－３>である。

伝統文化に対する意識（浦東調査）

	（浦東調査 No）		(上海 No)	性 (Q19) phi	水準	年齢 (Q20) phi	水準	学歴 (Q22) phi	水準
1	明哲保身	保身をはかる	18	12	000	13	ns	23	000
2 ＊	三従四徳	婦女子の道徳	7	08	03	18	001	10	ns
3	勤労節倹	勤勉・倹約	2	07	15	01	ns	11	ns
4 ＊	中庸之道	中庸の美徳	3	12	001	08	ns	15	003
5	父慈子孝	親切・孝行	4	05	ns	13	ns	14	04
6	男女有別	男女差別	6	12	000	14	03	08	ns
7	子孫満堂	子孫が多い	13	03	ns	15	01	17	000
8 ＊	容認礼節	辛抱・礼儀	8	03	ns	17	001	11	ns
9 ＊	光宗耀祖	家名先祖栄光	9	03	ns	17	001	11	ns
10	重農軽商	農重視商軽視	10	07	ns	10	ns	09	ns
11 ＊	以和為尊	和を大切に	14	05	ns	18	000	13	04
12	仁義道徳	仁義と道徳	15	00	ns	10	ns	12	ns
13	従順尊重	年長者尊敬	16	03	ns	26	000	23	000
14	精忠扱国	忠誠愛国	5	05	ns	16	003	10	ns
15	迎合上意	上意に迎合	12	12	000	12	ns	12	ns
16	婦女貞節	婦人の貞節	11	09	02	16	003	22	000
17	己所不欲、勿施干人*1								
18	礼尚往来*2								
19	人不為己、天珠地灰*3								

ns: not significant

*1(new) 礼を受ければ、礼を返す
*2(new) 己の欲せざることを人になすなかれ
*3(new) 自己中心
*4 工場だけ、１）誇り、３）わからない、２）破棄すべき、と、ほかに併せて変換した。

伝統文化に対する意識（上海調査）

(上海調査 No)			（浦東 No）	性 (sex) phi	水準	年齢 (age) phi	水準	学歴 (ed) phi	水準
1	歴史悠久		X	64	003	03	ns	13	000
2	勤労節倹	勤勉・倹約	3	05	05	13	000	07	003
3 ＊	中庸之道	中庸の美徳	4	02	ns	10	000	19	000
4	父慈子孝	親切・孝行	5	01	ns	06	03	12	000
5	精忠扱国	忠誠愛国	14	03	ns	05	ns	07	015
6	男女有別	男女差別	6	07	001	10	000	14	000
7 ＊	三従四徳	婦女子の道徳	2	02	ns	14	000	16	000
8 ＊	容認礼節	辛抱・礼儀	8	06	01	02	ns	14	000
9 ＊	光宗耀祖	家名先祖栄光	9	05	04	12	000	10	000
10	重農軽商	農重視商軽視	10	09	000	08	001	19	000
11	婦女貞節	婦人の貞節	16	05	02	14	000	05	ns
12	迎合上意	上意に迎合	15	05	03	08	003	24	000
13	子孫満堂	子孫が多い	7	03	ns	15	000	22	000
14 ＊	以和為尊	和を大切に	11	02	ns	04	ns	14	000
15 ＊	仁義道徳	仁義と道徳	12	04	ns	03	ns	11	000
16	従順尊重	年長者尊敬	13	04	ns	06	02	08	000
17	伝統尊重		X	05	ns	05	05	12	000
18	明哲保身	保身をはかる	1	07	001	13	000	13	000

ns: (not significant)

以上の結果より、「上海調査」では、中庸、三従四徳、家名・先祖、いずれも年齢と学歴で、大きな差が見られ、和は大切と、忍耐・礼儀では、学歴差が顕著であった。性差はほとんど見られなかった。それに対して「浦東調査」では、三従四徳は当然として、中庸においても性差が見られる。また、年齢差が大きく、三従四徳、忍耐・礼儀、家名・先祖、和は大切、いずれも世代差が見られる。また、学歴はあまり差がなく、中庸と和は大切で、差が見られる程度である。夫々について、以下、少し詳しく見てみよう。

(3) 上海調査とデモグラフィック分析

まず、1987年の上海調査より、１０年前の上海で、どんな主要な価値が、どんな属性と関連をもっていたかを、整理しておこう。「寛容と忍耐」に関しては、性差はあまり見られないが、わずかに男性において、より重要であったことがわかる。（しかし日本では、性差は全く見られなかった。）＜図表５－１－４＞

図表５－１－４　上海調査、寛容と忍耐の性差

			Chinese culture: Tolerance, propriety			合計
			Proud of	Discard	Not sure	
China	Sex	Male	50.4%	18.7%	30.9%	100.0%
		Female	43.7%	22.7%	33.7%	100.0%
	合計		47.3%	20.6%	32.2%	100.0%
Japan	Sex	Male	51.4%	11.8%	36.8%	100.0%
		Female	52.1%	12.9%	35.0%	100.0%
	合計		51.8%	12.4%	35.8%	100.0%

「家名・先祖」を大切にすると言う点では、男性でやや否定的な意見が多かった。女性はわからない、答えられないというものが多い。＜図表５－１－５＞

図表５－１－５　上海調査、家名・先祖と性別

			Chinese culture: Glory to ancestors			合計
			Proud of	Discard	Not sure	
China	Sex	Male	19.2%	46.7%	34.0%	100.0%
		Female	19.7%	41.9%	38.4%	100.0%
	合計		19.5%	44.5%	36.1%	100.0%
Japan	Sex	Male	51.4%	10.0%	38.6%	100.0%
		Female	52.5%	11.4%	36.1%	100.0%
	合計		52.0%	10.8%	37.3%	100.0%

儒教の中心的価値であった「中庸の美徳」については、１９８７年頃は、日和見、または保身と考えるネガテイブな評価が定着していた。すべての層で拒否的であったが、特に年輩層でそのような当時の規範に忠実なものが多かった。<図表５－１－６>

図表５－１－６　上海調査、中庸と年齢

			Chinese culture: Way of Golden Mean			合計
			Proud of	Discard	Not sure	
China	Would you please tell us your age	Under 29	7.2%	64.4%	28.4%	100.0%
		30-49	5.5%	67.8%	26.6%	100.0%
		Over 50	4.0%	71.3%	24.7%	100.0%
	合計		5.6%	67.8%	26.6%	100.0%
Japan	Would you please tell us your age	Under 29	17.6%	14.9%	67.6%	100.0%
		30-49	27.8%	12.9%	59.3%	100.0%
		Over 50	29.5%	9.0%	61.5%	100.0%
	合計		26.9%	11.6%	61.5%	100.0%

「家名・先祖」については、大切と言うものは２割弱という状況であったが、ここでも年輩者ほど当時の規範に忠実で、家名・先祖などは恥ずべきものとするものが多かった。２０代、３９％、３０代・４０代、４２％、５０歳以上で５６％が、恥ずべきことと考えていた。<図表５－１－７>

図表５－１－７ 上海調査、家名・先祖と年齢

			Chinese culture: Glory to ancestors			合計
			Proud of	Discard	Not sure	
China	Would you please tell us your age	Under 29	21.9%	38.7%	39.5%	100.0%
		30-49	20.3%	41.8%	37.9%	100.0%
		Over 50	15.3%	55.7%	29.0%	100.0%
	合計		19.4%	44.5%	36.1%	100.0%
Japan	Would you please tell us your age	Under 29	31.1%	10.8%	58.1%	100.0%
		30-49	49.3%	11.5%	39.2%	100.0%
		Over 50	62.5%	10.0%	27.5%	100.0%
	合計		52.0%	10.8%	37.3%	100.0%

女性は男性に従うべきという、「三従四徳」についても、同じく年輩者ほど、三従四徳など、恥ずべき男女差別であるという当時の規範に忠実であった。２０代、６６％、３０代・４０代、７２％、５０以上、８７％と驚くほどの大差である。<図表５－１－８>

図表５－１－８　上海調査、三従四徳と年齢

			Chinese culture: Three obediances and four virtues			合計
			Proud of	Discard	Not sure	
China	Would you please tell us your age	Under 29	9.6%	65.7%	24.6%	100.0%
		30-49	9.4%	71.6%	19.0%	100.0%
		Over 50	4.0%	87.3%	8.7%	100.0%
	合計		8.1%	74.0%	17.9%	100.0%
Japan	Would you please tell us your age	Under 29	4.1%	55.4%	40.5%	100.0%
		30-49	11.0%	52.2%	36.8%	100.0%
		Over 50	18.5%	40.0%	41.5%	100.0%
	合計		13.0%	47.6%	39.3%	100.0%

「中庸」と学歴については、統計的な関連が出ているが、理解可能な一貫した傾向はみられないので、表は、割愛する。「和は大切」では、学歴で大差が見られる。高学歴は、和が大切とするが、低学歴は、当時の規範に忠実で、批判的。和は大切というものは、低学歴、３９％、中学歴、４９％、高歴、５６％と、大差である。<図表５－１－９>

図表５－１－９　上海調査、和は大切と学歴

			Chinese culture: Harmony is precious			合計
			Proud of	Discard	Not sure	
China	Your educational level	Low	38.6%	22.5%	38.9%	100.0%
		Medium	48.9%	17.7%	33.4%	100.0%
		High	56.0%	16.3%	27.7%	100.0%
	合計		49.3%	18.3%	32.4%	100.0%
Japan	Your educational level	1, Junior H.	59.6%	4.5%	36.0%	100.0%
		2, Senior H.	70.0%	4.2%	25.8%	100.0%
		3, College	56.1%	4.5%	39.4%	100.0%
		4, University	62.5%	1.4%	36.1%	100.0%
		5, Student	66.7%	8.3%	25.0%	100.0%
	合計		64.9%	4.0%	31.1%	100.0%

「寛容と忍耐」も、高学歴ほど、大切だとしている。低学歴、３８％、中学歴、４５％、高学歴、５５％と、ここでも大差である。＜図表５－１－１０＞

図表５－１－10　上海調査、寛容と忍耐の学歴差

			Chinese culture: Tolerance, propriety			合計
			Proud of	Discard	Not sure	
China	Your educational level	Low	37.9%	23.0%	39.1%	100.0%
		Medium	45.2%	21.8%	33.0%	100.0%
		High	54.7%	18.1%	27.2%	100.0%
	合計		47.3%	20.6%	32.1%	100.0%
Japan	Your educational level	1	52.8%	9.0%	38.2%	100.0%
		2	54.2%	14.2%	31.7%	100.0%
		3	51.5%	9.1%	39.4%	100.0%
		4	43.1%	13.9%	43.1%	100.0%
		5	58.3%		41.7%	100.0%
	合計		52.0%	12.1%	35.9%	100.0%

「家名・先祖」については、低学歴で、わからないと言うものが多いが、他は明確な傾向差は見られない。＜図表５－１－１１＞

図表５－１－11　上海調査、家名・先祖と学歴

			Chinese culture: Glory to ancestors			合計
			Proud of	Discard	Not sure	
China	Your educational level	Low	17.0%	39.1%	43.9%	100.0%
		Medium	21.3%	44.1%	34.6%	100.0%
		High	19.1%	48.0%	33.0%	100.0%
	合計		19.4%	44.5%	36.1%	100.0%
Japan	Your educational level	1, Junior H.	58.4%	10.1%	31.5%	100.0%
		2, Senior H.	57.5%	11.3%	31.3%	100.0%
		3, College	40.9%	4.5%	54.5%	100.0%
		4, University	38.9%	12.5%	48.6%	100.0%
		5, Students	41.7%	25.0%	33.3%	100.0%
	合計		52.2%	10.6%	37.2%	100.0%

「三従四徳」と学歴との関連は、やや異なった次元で反応しているようで、規範とはあまり関係なく、低学歴ほど支持が多く、高学歴で批判的という、ここはむしろ近代的、かつ常識的結果である。<図表５－１－１２>

図表５－１－12　上海調査、三従四徳と学歴

			Chinese culture: Three obediances and four virtures			合計
			Proud of	Discard	Not sure	
China	Your educational level	Low	10.7%	65.6%	23.7%	100.0%
		Medium	9.5%	74.7%	15.8%	100.0%
		High	5.2%	78.3%	16.6%	100.0%
	合計		8.1%	74.0%	17.9%	100.0%
Japan	Your educational level	1	18.0%	32.6%	49.4%	100.0%
		2	15.8%	49.6%	34.6%	100.0%
		3	3.0%	57.6%	39.4%	100.0%
		4	6.9%	47.2%	45.8%	100.0%
		5	8.3%	58.3%	33.3%	100.0%
	合計		12.9%	47.4%	39.7%	100.0%

(4)　浦東調査のデモグラフィック分析

さて２０年が経過し、中国は改革開放政策によって、大きく経済発展を遂げ、意識の近代化という点でも見違えるような変化を示している。浦東地区は、中国のなかでも驚異的経済発展を遂げた。このような経済情勢、社会環境の激変が、意識の激動をもたらしたことは前述の通りである。ここではデモグラフィック要因との関連から、この意識の変化について考えてみたい。

まず、性差については、ほとんど顕著な傾向差は認められない。世代差がもっとも顕著のようだ。文革の経験、そしてその後のさまざまな社会変動を体験し、意識の世代差、世代断絶が、たいへん大きいことが伺われる。

まず「三従四徳」という男女差別に関しては、１０代と、５０代、６０以上という、若い層と年輩層の両極で、特に強く反発している、というところがおもしろい。かつては年を取るほど規範に従って拒否的という、年齢との間に正相関であったが、今はそれだけでなく、若い人も消極的という、新しい要因が加わっているようだ。<図表５－１－１３>

「寛容と忍耐」はすべての世代で支持が激増している。かつては世代差は見られなかったが、今は、１０代、２０代で、わからないと言うものがやや多い、という差が出ている。古い価値に若者たちはとまどっているようだ。<図表５－１－１４>

図表５－１－13　浦東調査、三従四徳と年齢　A20 と A1802 のｸﾛｽ表

			三従四徳 A1802			合計
			1 誇り	2 不要	3 ？	
A20 年齢	1、１０代	度数	3	22	6	31
		A20 の %	9.7%	71.0%	19.4%	100.0%
	2、２０代	度数	28	74	22	124
		A20 の %	22.6%	59.7%	17.7%	100.0%
	3、３０代	度数	59	130	32	221
		A20 の %	26.7%	58.8%	14.5%	100.0%
	4、４０代	度数	86	188	37	311
		A20 の %	27.7%	60.5%	11.9%	100.0%
	5、５０代	度数	15	110	16	141
		A20 の %	10.6%	78.0%	11.3%	100.0%
	6、６０～	度数	34	120	15	169
		A20 の %	20.1%	71.0%	8.9%	100.0%
合計		度数	225	644	128	997
		A20 の %	22.6%	64.6%	12.8%	100.0%

図表５－１－14　浦東調査、寛容と忍耐と年齢　A20 と A1808 のｸﾛｽ表

			忍耐・礼儀 A1808			合計
			1 誇り	2 不要	3 ？	
A20 年齢	1、１０代	度数	25		6	31
		A20 の %	80.6%		19.4%	100.0%
	2、２０代	度数	98	10	16	124
		A20 の %	79.0%	8.1%	12.9%	100.0%
	3、３０代	度数	194	7	20	221
		A20 の %	87.8%	3.2%	9.0%	100.0%
	4、４０代	度数	269	15	28	312
		A20 の %	86.2%	4.8%	9.0%	100.0%
	5、５０代	度数	130	4	7	141
		A20 の %	92.2%	2.8%	5.0%	100.0%
	6、６０～	度数	162	2	5	169
		A20 の %	95.9%	1.2%	3.0%	100.0%
合計		度数	878	38	82	998
		A20 の %	88.0%	3.8%	8.2%	100.0%

「家名・先祖」については、当然のことながら、年を取るほど大切、と言うものが増える。１０代の２６％に対して、５０代で４２％、６０代では５７％と、大差である。＜５－１－１５＞

図表５－１－１５　浦東調査、家名・先祖と年代　A20 と A1809 のｸﾛｽ表

			家名・先祖 A1809			合計
			1 誇り	2 不要	3 ?	
A20 年齢	1、１０代	度数	8	13	10	31
		A20 の %	25.8%	41.9%	32.3%	100.0%
	2、２０代	度数	52	40	32	124
		A20 の %	41.9%	32.3%	25.8%	100.0%
	3、３０代	度数	79	89	53	221
		A20 の %	35.7%	40.3%	24.0%	100.0%
	4、４０代	度数	118	128	66	312
		A20 の %	37.8%	41.0%	21.2%	100.0%
	5、５０代	度数	59	57	25	141
		A20 の %	41.8%	40.4%	17.7%	100.0%
	6、６０～	度数	96	49	24	169
		A20 の %	56.8%	29.0%	14.2%	100.0%
合計		度数	412	376	210	998
		A20 の %	41.3%	37.7%	21.0%	100.0%

「和」についても、隔世の感がある。和は大切と言うものは、４７％だったのが、いまや９０％が和は大切という時代になった。１０代だけが、わからない・答えられないというものが２５％もおり、こうした伝統的価値については、ややとまどっているのであろう。＜５－１－１６＞

その他はそれほど大きな差はない。総じて、かつての、年をとるほど、儒教的価値を否定するという当時の規範に従うという形の世代差は消えて、伝統的価値を見直す古い世代と、それに懐疑的な新しい世代との対立、と言う点が、予想され、注目される。

学歴差はかつては大変大きかったが、今日では学歴差は激減しているようだ。わずかに「中庸」のところで、学歴差が出ている。高学歴ほど評価しないものが多いことと、低学歴（無学、小学校）のものが、わからない、答えられないが多い、と言う傾向がみられる。特に中庸などない方がいい、というものが、中学歴で３３％、高学歴で４割と、学歴が高いほど懐疑的なものが多いのも興味深い。文革時代の中庸に対するきびしい批判が、まだ記憶に残っていて、知識層が、中庸のネガティブな面に反応しているのであろうか。大変興味深い。＜図表５－１－１７＞

「和は大切」に関しては、高学歴ほど、懐疑的なものが増えるが、それ以外は顕著な傾向は見られない。<図表５－１－１８>

図表５－１－16　浦東調査、和と年齢　A20 と A1811 のｸﾛｽ表

			和は大切 A1811			合計
			1 誇り	2 不要	3 ?	
A20 年齢	1、１０代	度数	22	1	8	31
		A20 の %	71.0%	3.2%	25.8%	100.0%
	2、２０代	度数	108	6	10	124
		A20 の %	87.1%	4.8%	8.1%	100.0%
	3、３０代	度数	196	9	16	221
		A20 の %	88.7%	4.1%	7.2%	100.0%
	4、４０代	度数	290	8	15	313
		A20 の %	92.7%	2.6%	4.8%	100.0%
	5、５０代	度数	127	8	6	141
		A20 の %	90.1%	5.7%	4.3%	100.0%
	6、６０～	度数	160	1	8	169
		A20 の %	94.7%	.6%	4.7%	100.0%
合計		度数	903	33	63	999
		A20 の %	90.4%	3.3%	6.3%	100.0%

図表５－１－17　浦東調査、中庸と学歴　A22 と A1804 のｸﾛｽ表

			中庸 A1804			合計
			1 誇り	2 不要	3 ?	
A22 学歴	1 無学	度数	5	9	32	46
		A22 の %	10.9%	19.6%	69.6%	100.0%
	2 小学校	度数	22	31	51	104
		A22 の %	21.2%	29.8%	49.0%	100.0%
	3 中学校	度数	77	110	151	338
		A22 の %	22.8%	32.5%	44.7%	100.0%
	4 高校	度数	78	133	135	346
		A22 の %	22.5%	38.4%	39.0%	100.0%
	5 大学以上	度数	37	69	58	164
		A22 の %	22.6%	42.1%	35.4%	100.0%
合計		度数	219	352	427	998
		A22 の %	21.9%	35.3%	42.8%	100.0%

図表５－１－18　浦東調査、和と学歴　A22 と A1811 のｸﾛｽ表

			和は大切 A1811			合計
			1 誇り	2 不要	3 ？	
A22 学歴	1 無学	度数	44		2	46
		A22 の　%	95.7%		4.3%	100.0%
	2 小学校	度数	98	2	4	104
		A22 の　%	94.2%	1.9%	3.8%	100.0%
	3 中学校	度数	315	12	12	339
		A22 の　%	92.9%	3.5%	3.5%	100.0%
	4 高校	度数	305	14	27	346
		A22 の　%	88.2%	4.0%	7.8%	100.0%
	5 大学以上	度数	141	5	18	164
		A22 の　%	86.0%	3.0%	11.0%	100.0%
合計		度数	903	33	63	999
		A22 の　%	90.4%	3.3%	6.3%	100.0%

＜文献＞

Ronald Inglehart, The Silent Revolution, Princeton University Press, 1977.
林知己夫・飽戸弘ほか、「日本人の法意識」、至誠堂、１９７３年、林知己夫、飽戸弘ほか、「現代日本人の法意識」、第一法規、１９８２年、など、参照。
Godwin Chu & Yana Ju, The Great Wall in Ruins, SUNY press, 1993.

5.2　ライフスタイルの基本構造

——浦東調査、工場調査、日本調査の比較——

(1)　浦東調査

浦東調査と工場調査では、日本でよく行われている「ライフスタイル」についても、調査を行なうことができた。しかも、飽戸らが、日本経済新聞社で、１９８７年から１９９３年まで、継続的に行ってきた、日本経済新聞社ライフスタイル研究シリーズ、で用いてきたライフスタイル項目、２１項目を用いて、全く同じ質問、同じ回答方法（５段階）で、調査を行なうことができたので、日本との比較も可能である。さらにわれわれは、中国の地方都市、蘭州で、６年前の1992年に、East-West Centerの研究の一環として、Godwin Chu と飽戸弘が参加して行った調査に、たまたま飽戸らの、ライフスタイル調査を含めて行うことができた。こうして、これらの４つの調査を比較することによって、中国、特に上海のような大都市で起こっている価値・ライフスタイルの激動、そして地方都市との比較、さらには日本との比較も、可能になろう。本章ではそうした観点から、あまり厳密ではないが、ごく大ざっぱながら、こうした地域比較と、時系列比較を試みてみることにしよう。

まず、浦東調査の結果から、見てみよう。＜図表５－２－１＞より、固有値、1,00　以上の根は、６つ、ということで、６根までを算出し、その結果に対して、バリマックス回転を行った結果が、＜図表５－２－２＞である。

図表５－２－１，説明された合計分散、浦東調査

	初期の固有値			負荷平方和の因子抽出			負荷平方和の回転		
Factor	合計	変数の %	累積 %	合計	変数の %	累積 %	合計	変数の %	累積 %
1	3.325	15.831	15.831	2.855	13.597	13.597	1.685	8.025	8.025
2	2.587	12.318	28.150	2.029	9.663	23.260	1.685	8.023	16.048
3	1.815	8.642	36.792	1.321	6.291	29.551	1.428	6.801	22.849
4	1.373	6.540	43.332	.907	4.317	33.868	1.301	6.195	29.045
5	1.355	6.452	49.784	.873	4.157	38.025	1.269	6.044	35.088
6	1.102	5.245	55.029	.582	2.769	40.795	1.198	5.706	40.795
因子抽出法: 主因子法。有値、1,00以上の根が６つ。									

図表５－２－２，回転後の因子行列(a)、浦東調査

	因子					
	1	2	3	4	5	6
A1601	.224	7.735E-02	.199	.121	3.670E-02	.193
A1602	.423	4.576E-02	.222	1.433E-02	7.733E-02	.151
A1603	3.434E-02	.409	1.449E-02	.252	1.328E-02	.142
A1604	2.388E-02	.715	4.431E-02	3.098E-02	.111	6.616E-02
A1605	-4.160E-02	.797	3.427E-02	-1.788E-02	.119	2.916E-02
A1606	-.159	.238	3.462E-02	.149	8.457E-02	1.248E-02
A1607	2.504E-03	.200	1.531E-02	.123	7.969E-02	1.061E-03
A1608	.164	2.450E-02	.186	-7.373E-02	.153	-1.782E-02
A1609	-7.731E-03	.238	8.019E-03	.140	-6.959E-02	5.047E-02
A1610	.636	1.115E-04	1.004E-02	-2.344E-02	7.100E-02	2.966E-02
A1611	.779	-4.769E-02	-2.344E-02	-3.687E-02	-1.905E-02	-1.976E-02
A1612	.582	-8.714E-02	.122	-6.235E-02	2.539E-02	4.085E-02
A1613	.102	3.723E-02	.506	5.398E-02	-7.461E-02	-9.787E-02
A1614	7.138E-02	9.717E-03	.835	-1.295E-02	7.442E-02	9.532E-03
A1615	1.597E-02	3.556E-02	.551	-1.903E-02	.231	3.276E-02
A1616	5.230E-02	.113	.127	.108	.669	3.480E-02
A1617	8.371E-02	.132	6.787E-02	8.045E-02	.804	.110
A1618	-4.098E-02	.293	5.566E-03	.755	9.765E-02	.191
A1619	-.109	.238	-8.504E-03	.718	.101	.231
A1620	8.584E-02	5.715E-02	-1.482E-02	.186	2.580E-02	.596
A1621	5.616E-02	.145	-7.812E-02	.110	9.280E-02	.799
因子抽出法: 主因子法、回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法						
(a) : 6回の反復で回転が収束しました。						

第１因子：項目番号で、１０，１１，１２，２など、人に喜ばれることをする、社会へ貢献できるよう努力する、困っている人を助ける、たいへんでも業績をあげる、など、「社会性・社会貢献」の因子といえよう。

第２因子は、項目番号で、３，４，５，など。有名になりたい、生活様式も変わっていて独特、生活は普通の人と変わっている、など、「個性化」因子といえよう。

第３因子は、項目番号で、１４，１５，１６で、すべて自分でやり他人に頼らない、なにをするにも自分で決める、自分が正しいと思えば他人の言うことは気にしない、「自分中心・自己尊重」とでも言うべき因子だ。

第４因子：１８，１９。変わった服装で自分を表現する、金ヒマかけて、変わった服装を探す方など「自己表現」の因子。

第５因子：１６，１７。好きでよくするスポーツがある、スポーツでストレスを解消する、など、「スポーツ」に関する因子。
第６因子：２０，２１。新製品についてよく話したり、人に教えたりする。新しい映画や本についてよく話したり、人に教えたりする、など、あたらしもの好きで、人にいろいろ教える「オピニオンリーダー」的因子。
以上６つの因子が析出された。

⑵　工場調査

同様の調査を工場調査でも行なった。予想通り、工場調査でも、浦東調査と、よく似た結果が得られている。固有値が1,00以上の因子は７つ。＜図表５－２－３＞参照。従って、７因子まで算出して、バリマックス回転を行った結果が、＜図表５－２－４＞である。

図表５－２－３，説明された合計分散、工場調査

	初期の固有値			負荷平方和の因子抽出			負荷平方和の回転		
Factor	合計	変数の %	累積 %	合計	変数の %	累積 %	合計	変数の %	累積 %
1	3.147	14.984	14.984	2.553	12.157	12.157	1.754	8.354	8.354
2	2.200	10.478	25.462	1.648	7.848	20.005	1.334	6.351	14.705
3	1.528	7.278	32.740	.855	4.073	24.078	1.058	5.039	19.744
4	1.411	6.717	39.457	.841	4.006	28.084	1.020	4.858	24.602
5	1.286	6.125	45.582	.761	3.624	31.708	1.009	4.804	29.406
6	1.196	5.697	51.279	.554	2.640	34.348	.869	4.137	33.543
7	1.134	5.400	56.679	.451	2.145	36.493	.620	2.950	36.493
因子抽出法: 主因子法。固有値が1,00以上の根が７個、析出。									

第１因子は、浦東調査と全く同じ、項目番号で、１０，１１，１２，２。「社会性・社会貢献」因子。
第２因子：１８，１９。すなわち浦東調査の第４因子と同じ。「自己表現」の因子。項目番号３の、有名になるが、ここに入っているのがおもしろい。
第３因子：２０，２１。浦東調査の第３因子と同じ。従って「オピニオンリーダー」因子。
第４因子：４，５。「個性化」因子。３の有名は、第２因子の方に移っている。
第５因子：１６，１７。まったく同じ、「スポーツ」因子。
第６因子：１３，１４、１５。これも同じく、「自分中心・自己尊重」因子。
第７因子は、たとえお金がなくても楽しければいい、という項目一つだけなので、因子と

は言いにくいので割愛する。

こうして、工場調査では、７因子まで析出されたが、意味の明らかな因子は、浦東調査と同じ６因子構造であったと言うことができる。当然のことながら、浦東調査と工場調査では、ほとんど同じ地域で、ほとんど同じ時期に行われたもので、微妙な差異は見られるが、基本的には同じような因子構造が得られたと言うことができよう。

図表５－２－４，回転後の因子行列(a)、工場調査

	因子						
	1	2	3	4	5	6	7
A3001	.262	.274	1.865E-02	1.204E-03	-6.881E-02	4.092E-02	-8.064E-02
A3002	.482	.104	8.775E-02	7.755E-02	5.975E-02	.118	-7.288E-02
A3003	.102	.433	8.616E-02	.226	-3.345E-02	9.312E-02	-7.361E-02
A3004	5.287E-02	8.030E-02	6.645E-02	.708	.112	3.918E-02	-3.478E-02
A3005	.123	.133	5.340E-02	.611	4.035E-02	4.759E-02	6.632E-02
A3006	4.687E-02	.255	3.613E-02	.181	-8.438E-02	7.004E-02	.160
A3007	-6.957E-02	.153	5.680E-02	.115	.277	-1.246E-02	.297
A3008	.145	-7.645E-02	3.101E-02	-4.262E-02	6.083E-02	5.965E-02	.618
A3009	-.122	.321	-2.914E-02	9.679E-02	6.851E-02	.131	.260
A3010	.648	3.445E-02	6.560E-02	4.633E-02	3.844E-02	6.024E-02	7.516E-02
A3011	.733	-1.753E-04	-3.163E-02	2.298E-04	7.819E-02	7.712E-02	3.395E-02
A3012	.594	-9.361E-02	4.571E-02	.105	3.312E-02	4.553E-02	.103
A3013	9.257E-02	.116	8.367E-03	6.167E-02	-1.956E-02	.545	3.115E-02
A3014	.160	-7.396E-02	6.686E-02	2.642E-02	.190	.620	2.842E-02
A3015	4.566E-02	-1.103E-02	-4.144E-02	2.515E-02	.325	.303	9.298E-02
A3016	-3.317E-03	7.347E-02	.107	5.000E-02	.498	6.717E-02	5.720E-02
A3017	.151	5.512E-02	5.788E-02	2.142E-02	.448	6.440E-02	4.449E-03
A3018	-7.394E-03	.626	.118	1.964E-02	.393	-.106	-1.439E-02
A3019	-4.342E-02	.624	.135	1.849E-02	.345	-8.845E-02	1.958E-02
A3020	7.374E-02	.122	.717	5.603E-02	7.664E-02	5.086E-02	1.874E-02
A3021	7.379E-02	7.471E-02	.675	7.602E-02	.121	-2.714E-03	3.694E-02
因子抽出法: 主因子法　、　回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法							
a 12回の反復で回転が収束しました。							

この点に関連してさらに興味深い点は、この浦東調査や工場調査より、６年前に、蘭州大学北西文化研究所で行なわれた同様の調査では、当時こうした項目はあまりに人々の生活からかけ離れており、十分理解されず、また適切でなかったのであろう、２因子が析出

されただけで、今回のような因子は析出されなかった。少なくとも、今日、上海地区においては、こうしたライフスタイル項目が、十分理解でき、妥当な回答が得られるほどに、生活文化が発展した、と考えることができよう。<後掲、図表５－２－５，図表５－２－６，参照>。

また、上海では、日本と同じように、多様に分化しているが、この項目の意味も、文脈もやや異なっており、日本とは、若干異なった因子が得られている点も興味深い。日本では、同じ２１項目を用いた調査で、以下のような６つの因子が析出されている。<日本経済新聞社、『食生活とライフスタイル』、１９８８年、より。>

第１因子：「出世志向」。苦労しても成功者になりたい、早い機会にひとかどの人物になりたい、出世するためにあらゆる努力を惜しまないなど。
第２因子：「個性化志向」。ほぼ同じ。
第３因子：「社会貢献・社会志向」。ほぼ同じ。
第４因子：「自己尊重」。ほぼ同じ。
第５因子：「生活エンジョイ志向」。気ままに楽しく暮らせればいい、将来に備えるより今の生活を楽しみたい、出世より自分の人生をエンジョイしたい、など。
第６因子：「オピニオンリーダー性」。ほぼ同じ。

第１因子は、中国にはない「出世志向」因子、と言うのもおもしろい。
第２因子、第３因子、第４因子、第６因子などは、それぞれ、「個性化」、「社会貢献・社会志向」、「自己尊重」、「オピニオンリーダー」性など、中国とたいへんよく似た因子が見られている。ところがまた、第５因子は、全く違う「生活エンジョイ志向」などという日本独自の因子が、析出されているところが、注目される。こうした、共通点と相違点が、大変興味深い。

それにしても、蘭州調査時代から見ると、たいへんな価値・ライフスタイルの激動が、中国に、特に上海のような大都市で、起こっていることが、予想される。中国における、価値・ライフスタイルが、まず都市部でどのように変化していくのか、そしてそのような変化は、地方都市、さらに農村部へ、どのくらいの期間を経て、浸透して行くのか、またはそうした地域へは、新しい価値・ライフスタイルは、なかなか浸透して行かないのか、今後の中国の動向の鍵をにぎる、重大な主題であり、たいへん興味深い課題である。

＜参考、蘭州調査結果＞

図表５－２－５，固有値と説明された分散、蘭州

Factor	Eigenvalue	Pct of Var	Cum Pct
1	11.60906	55.3	55.3
2	1.22548	5.8	61.1
3	.83626	4.0	65.1
4	.69494	3.3	68.4
5	.63967	3.0	71.5

図表５－２－６，Rotated Factor Matrix、蘭州

	Factor 1	Factor 2
D37X1	.59260	.34306
D37X2	.43279	.58703
D37X3	.54774	.58678
D37X4	.66762	.48637
D37X5	.76608	.31155
D37X6	.64329	.43103
D37X7	.28740	.60137
D37X8	.51897	.34208
D37X9	.75533	.35599
D37X10	.30573	.74467
D37X11	.24748	.74907
D37X12	.37871	.59922
D37X13	.50536	.47190
D37X14	.40222	.60041
D37X15	.32090	.60283
D37X16	.39776	.51831
D37X17	.54181	.54033
D37X18	.74179	.42155
D37X19	.80157	.27202
D37X20	.57880	.52766
D37X21	.51343	.56258

(VARIMAX converged in 3 iterations.)

5.3　家族関係と価値意識

価値意識に関する質問は、価値意識自体の意見分布や構造を検討するとともに、価値意識の形成に家族が果たす役割の強弱が、意見の世代的な変化の速度に影響を与えるのではないかという仮説に基づいている。同様の問題意識で行われた日米調査との比較からこの点についての検討を行う。また複数の調査を比較する際に生じる質問方法による回答傾向の違いについて、浦東調査と工場調査を比較して考察する。

(1)　日米調査との比較の視点

今回浦東調査、工場調査で質問した価値意識のうち数項目は1994年に日本、およびアメリカ合衆国で行われた全国規模の調査でも類似の項目が質問されている。日本のデータは層化多段抽出法、アメリカのデータは層化割り当てサンプリングによる全国調査（アメリカではハワイ、アラスカを除く）である。いずれも調査員による個別面接を用いている（注1）。日本とアメリカの調査はもともと日米比較のために実施されたもので、共通の質問項目はある程度翻訳上の問題を検討して作成してある。今回調査と対応する類似項目は、日本版でいえば「お金があればたいていのことは思い通りになるものだ（金さえあれば）」「他人から受けた親切は決して忘れてはならない（他人の親切）」「社会のためになるなら、自分の生活をいくらかは犠牲にするべきだ（自己犠牲）」「政治のことはわれわれには分からないから、専門家に任せておくほうがよい（政治無関心）」、「仕事のために家族との約束を破ることがあってもやむを得ない（仕事優先）」の５項目である。

日米調査では「賛成」から「反対」までの4段階と「分からない」（選択肢はカードにはなく、調査員がチェック）を含めた５カテゴリーのデータを得ている。また意見の質問後に、意見に影響を与えたのが「親から言葉ではっきり教わった」のか、「言葉ではっきりと教えられたわけではないが、親の姿勢から学んだ」のか「特に親から学んだり教わったりしなかった」のかを質問している（日米調査では、学校教育、マスコミなど両親以外の影響源は質問していない）。これも「分からない」を合わせた４カテゴリーで分析した。

実施方法や質問内容のずれ、選択肢の違いなどがあるので、日米調査の回答比率を今回の浦東調査、工場調査と直接比較して評価することはできないが、日米調査との対比で指摘できることを以下に示した。

日米間の価値意識の比較では、この５項目以外も含めた全体の傾向として、相違点よりは類似点が目立つ結果だったが、回答傾向を今回の２つの調査と合わせて示すと次のようになる。

この４調査で比較すると「分からない」という回答比率は工場調査だけが特に高い（

「他人の親切」除く）ことから、「分からない」の配置の違いが強く影響を与えていることが示唆される。また中国での２調査では共通して「金さえあれば」への賛成が多く、特徴となっている。「仕事優先」には日本だけが賛成が反対の倍以上の比率ではっきり多い。「他人の親切」は極めて普遍的な価値意識で、全ての調査でほとんどの回答者が肯定している。

	日本	アメリカ	浦東調査	工場調査
「金さえあれば」	賛成＜反対	賛成＜反対	賛成＞反対	賛成＞反対
「他人の親切」	賛成10割	賛成10割	賛成9割	賛成9割
「自己犠牲」	賛成≒反対	賛成＞反対	賛成＞反対	賛成＞反対
「政治無関心」	賛成＜反対	賛成＜反対	賛成＜反対	賛成＜反対
「仕事優先」	賛成＞反対	賛成＜反対	賛成≒反対	賛成＜反対

また両親の影響では言語で明示的に与えられた影響と言動から暗示的に受けた影響の合計では、アメリカ調査が他の３調査よりも高く、家族内での価値意識の伝達を強く肯定する傾向が再確認された（ただし中国調査では他の影響源が選択肢にあるために、それがない日米調査よりも両親の影響を挙げる割合が低く出ている可能性もある）。明示的伝達と暗示的伝達の比率の比較では、暗示的伝達が相対的に多いのが日本調査であり、次いでアメリカ、中国の２調査となっている。中国ではほとんどの質問で、明示的伝達＞暗示的伝達となっている。浦東・工場調査からは両親の側から積極的に働きかけない場合、価値意識の影響源としてあまり認知されない傾向が指摘できる。

意見と影響源が関連するという傾向はすべての調査で見られ、社会的望ましさが高い意見の場合にはそうでない場合よりも両親の影響（または学校教育）が多く挙げられるという傾向は普遍的である。

(2) 質問方法による違いの検討

価値意識に関しては、浦東調査と工場調査の調査でいくつかの違いがあり、比較して検討する必要がある。

まず質問項目では浦東調査では13項目、工場調査では14項目が質問されており、13項目は互いに対応している。ただし大半はほぼ同じ言い回しだが、微妙なニュアンスの違いが生じている項目も2,3ある。

浦東調査で「人間はこの世で数十年しか生きられないのだから、できるだけ楽しむべきだ」という項目に対応する質問に対して、工場調査では前半がやや簡単な言い回しになって「人生は短いので大いにエンジョイすべきだ」の意になっている。また浦東調査で「社会のためにある程度個人の利益を犠牲にすべきだ」の意の表現があるが、工場調査では「社会

のために個人の利益を犠牲にすべきだ」とあり「ある程度」に対応する部分（「某」）がぬけて断定的な言い回しになっている。

もう一点は選択肢の配置の問題である。浦東調査では回答選択肢はまず「大賛成」「ある程度賛成」「あまり賛成できない」「まったく賛成できない」の4件法で選択肢が並び、最後に「どちらともいえない」の選択肢が配置されており、「どちらともいえない」の割合は質問によって変わるものの、数％程度から最大で2割弱である。しかし工場調査では「どちらともいえない」が最大で3割を超える項目もあり、大きな割合を占めている。これは工場調査では選択肢が「大賛成」「賛成」「どちらともいえない」「反対」「大反対」の順で配置されたため、回答者が「どちらともいえない」を５件法の中央値と解釈したためと推定される。これらの違いが、両調査に与えた影響について以下に見ていくこととする。

a)因子分析による意識構造の比較

回答比率は上記の理由で直接比較できないが、質問の仕方の違いにも関わらず、項目への回答パターンについて、二つの調査の結果に類似する点が多いことが注目に値する。これはそれぞれの調査の回答者全体に対して行った数量化や因子分析の結果からも予想できるが、浦東調査の回答者のうち、工場調査の回答者にある程度対応すると見られる「工人」「管理人員（管理職）」を取り出して、因子分析を行った結果、浦東調査全体とほぼ同様の結果が得られた（「工人」のみ、または「工人」と「管理人員」を合わせた因子分析でも、ほぼ同様の結果が得られる）。工場調査の因子分析結果（図表4-8-2）と比較すると、価値意識の構造がこの2つの異なる方法で得られたデータのの間でかなり共有されていることが示唆される（ただし詳細に見ていくといくつかの違いを指摘できる）。どちらも反復推定のある主因子法で得られた解で固有値から見て４因子構造として解釈したが、第１因子はいずれも経済的価値を高く評価し、それを獲得して生活を享受するために反社会的で利己主義的な手段を容認する＜私利益主義＞と名付けた軸である。なお工場調査で付け加わった「自己中心・利己主義でないと天罰が下る（自分の利益を守る）」という項目はこの因子への負荷量が最も高い。

第２因子は「カラオケ・ロック」「若者のセックス」などを容認し、「浮気をしたら離婚させてよい」という意見から構成されており、伝統的な行動から逸脱する者を容認する因子である。第３因子は「稼いだ金は自分で使い、家族にあげなくてもよい」「結婚したら子供の楽しみが第一で親のことはあまり関心をよせる必要がない」という生活共同体としての家族の切り捨てともいうべき項目（＜脱家族志向＞と呼んでいる）からなるが、単純集計で見た通り、この因子の負荷量の高い２項目に対してはどちらの調査でも大半の回答者が否定的な回答をしており、親世代の扶養を含めた家族への経済的貢献は、価値として堅持されている。

これらの３因子については、浦東調査でも工場調査でも個別の項目の多少のニュアンス

の違いにも関わらず、ほぼ同じ因子と解釈できる。

第４因子は工場調査と浦東調査でややニュアンスが異なる軸が得られており、浦東調査では「工人」「管理人員」という「勤め人」に限定した分析でも「恩を忘れてはならない」と「社会のためにある程度個人の利益を犠牲にすべき」という項目が中心の因子である。ここから家族を超えた社会に対する貢献あるいは社会的なルールの遵守といった社会性志向を示す軸と解釈できる。一方、工場調査では「仕事に必要なら家族の信頼を裏切ってもよい（家族に嘘）」の負荷量が最も高い（浦東調査ではどの因子にも負荷量があまり大きくない）、次いで「社会のために個人の利益を犠牲にすべきだ」が２番目に負荷量が高い項目になっている。一方浦東調査で負荷量が最も高かった「恩を忘れない」の項目の負荷量はほとんどない（工場調査では第4因子に限らず、どの因子にも負荷量が小さい）。

このためどちらも「社会のために自己犠牲」という趣旨の項目を含んでいるものの、浦東調査では一般的な社会の互報性のルールの遵守を軸とした漠然とした社会性志向であるのに対して、工場調査では会社への忠誠心を軸とした社会性志向という違いが読み取れる。工場調査で調査を行った企業群は上海の企業の中でも比較的大規模で安定しており、浦東調査の「勤め人」よりも回答者の企業への忠誠心が強いことがこの違いの原因かもしれないが、それ以外に調査実施場面の違いを反映している可能性がある。すなわち、浦東調査では家庭で調査に回答したのに対して、工場調査では勤め先で集合調査をしたために、この項目で「所属企業への貢献意欲を問われている」という社会的文脈が生まれ、影響を与えたという解釈も考慮すべきであろう。

(b)回答傾向の違い

前述のように個別の質問への回答比率の違いは、両調査のサンプルの違いだけでなく質問票の違いを反映しているものと思われるが、工場調査の方が全体に「金さえあれば」「人生を楽しむ」「浮気で離婚してよい」などに賛成する割合が低い。しかし一方ではっきり反対を表明する回答も少なく、その分が「どちらともいえない」という判断保留に流れている。浦東調査の方が逃げ道となる中間的な選択肢を後ろに置いた分、ある意味で本音で回答しているものと読めるが、「金さえあれば」という意見を管理職よりも作業職の方が肯定し（浦東調査では「工人」の方が「管理人員」よりも肯定）、「仕事に必要なら家族の信頼を裏切ってもよい」に対しては、作業職では管理職と比べて判断保留が多い（浦東調査では「工人」の方が「管理人員」よりも肯定）ことなどは、両方の調査を通じて管理職とその他の勤め人を比べた場合に共通する傾向である。職場での地位や付随する経済的な階層によってこれらの意識の違い共通して生じているものと思われる。

また浦東調査について、勤め人に限定して、属性と価値意識の関連を検討し、これを工場調査の場合の属性との関連と比べたところ、勤め人に限定した場合も、浦東調査全体とほぼ同様の属性との関連が得られた。具体的には、年齢が若いほど＜私利益主義＞＜若者

文化許容＞の傾向が強いことなどである。もともと浦東調査の勤め人層では年齢分布で工場調査より年上の層が厚く、若者層といっても１０代が少なくて２０代以上が大半だが、この比較の結果、工場調査の若者層は浦東調査の若者層とかなり異質な意識をもっていた。

(c)価値意識の影響源

影響源については両調査で内容的にほぼ共通する13項目のうち、影響源としてどのエージェントを何回挙げたかを比較した。工場調査の方が「両親の教え」や「両親の行動」「学校教育」が多く挙げられ、「分からない」は浦東調査の方が多かった。どちらの調査でも、＜私利益主義＞や＜若者文化許容＞に肯定的な回答をする者は「マスコミ」を挙げる割合が多いなど、意識項目との関連はすでに見た通りで(3.4、4.8)、比較のために浦東調査で勤め人に限定して行った分析でも同様で、影響源と意見分布の間に関連が見られた。

以上、同じ中国語の質問票を用いた２つの調査で、調査の方法の違い、質問内容のニュアンスの違い、回答選択肢の配列の違い等がもたらす結果の違いを確認したが、個別の項目への回答比率が選択肢の違いによって大きな影響を受けていると見られる一方で、回答する時の考え方の筋道、つまり意識の構造については非常に安定し、共通する部分が大きいことが明らかになった。これは国際比較についても、ワーディングの翻訳上の問題を超えて、構造に注目することの正当性を傍証するものといえるだろう。

(注1)比較のために用いたデータは1994年に日本(多段層化無作為抽出法により全国の満18歳以上の男女を対象として実施)、および米国（ハワイ、アラスカを除く全州を対象として実施）で収集された。詳細な分析については中村雅子（1997）「価値意識の世代間伝達に関する日米比較」（家族社会学研究第9号）および国際長寿社会日本リーダーシップセンター(現ILC-Japan)報告書「高齢社会を支える世代間の価値の継承と責任における日米比較」を参照。

図表５－３－１　浦東調査(勤め人)の価値意識項目の因子分析

項目	私利益主義	若者文化許容	脱家庭志向	社会性志向
金さえあれば何でもできる	51	-2	5	-2
恩を忘れてはならない	3	-5	-16	39
仕事のために家族に嘘	-3	12	13	25
社会のために犠牲になるべき	-29	-11	-1	35
重要なのは楽しむこと	64	27	6	6
困っている人をかまう必要ない	53	6	43	-11
手段を選ばず稼ぐべき	46	21	19	-17
政治を心配する必要ない	33	23	39	2
稼いだ金は自分で使う	11	17	67	-1
結婚後は両親のことは構わない	11	21	54	-6
ｶﾗｵｹ･ﾛｯｸは好きに聞けばよい	14	63	12	0
若者のセックスに干渉しない	8	76	19	-6
浮気をしたら離婚させてよい	9	35	15	3
寄与率	1.405	1.386	1.241	0.386

注：反復推定のある主因子法バリマックス回転後の値(100倍し小数点以下を四捨五入)。5段階評定として扱った。

図表５－３－２　調査・職種別に見た価値意識の違い

価値意識		金さえあれば			家族の信頼裏切る			人生を楽しむ			浮気で離婚してよい		
		賛成	反対	ＤＫ	賛成	反対	ＤＫ	賛成	反対	ＤＫ	賛成	反対	ＤＫ
工場調査	管理職	42.6	22.2	35.2	31.8	48.6	19.6	15.9	69.2	15.0	39.3	37.4	23.4
	事務職	49.8	21.7	28.4	25.3	52.5	22.2	19.2	53.9	26.9	27.9	36.7	35.4
	技術職	50.0	23.3	26.7	23.6	51.7	24.7	20.2	65.2	14.6	26.7	33.3	30.0
	作業職	53.4	21.0	25.6	35.2	40.9	23.9	13.4	62.9	23.7	27.3	37.7	35.1
浦東	管理人員	51.7	43.1	5.2	44.8	50.0	5.2	37.9	57.8	4.3	33.6	53.4	12.9
	工人	60.1	35.5	4.4	44.9	39.9	15.2	36.8	56.1	7.1	31.5	48.7	19.9

注：Ⅲ-4、Ⅳ-7と合わせて回答選択肢を「賛成」「反対」「どちらともいえない」の3段階にまとめてある(%)。

図表５－３－３　調査・職種別に見た影響源の違い

影響源		両親の教え	両親の行動	マスコミ	学校教育	分からない	その他
工場調査	管理職	1.82	1.80	**4.14**	2.76	1.88	1.11
	事務職	1.86	1.65	**3.26**	2.31	2.82	1.48
	技術職	2.17	1.84	**3.50**	2.91	2.11	1.12
	作業職	2.07	1.86	3.08	2.35	**3.09**	1.18
浦東	管理人員	1.60	1.35	**3.33**	2.47	2.98	1.25
	工人	1.48	1.27	**3.69**	1.68	3.43	1.36

注：注：各グループで最も多く挙げられた情報源を太字で示した（数字は影響源として挙げられた回数の平均)。

5.4 結婚、家庭

(1) 結婚の条件

１９８７年の上海調査、１９９０年の東京調査、１９８９年の台湾調査と今回の工場調査の調査票には結婚相手を選ぶ時に重要とされることについて同一の質問が含まれている。結果は図表５－４－１に類似／相違をまとめた形で示しているが、日本や台湾の結果に比べて中国人が「外見」と「学歴」を重視することが示されている。特に工場従業員の学歴重視傾向は日頃から自分に学歴がないことのマイナスを痛感していることを反映しているものと思われる。また、親として回答しているのであれば自分の子供には学歴の高い相手を望むということであろう。

反対に彼らが「仕事の能力」を台湾や日本ほど重視しないのは、能力によって待遇や昇進が左右される制度をとってこなかったためだと思われる。

「趣味が合うこと」については台湾と中国の重要視と日本の軽視が対照的である。日本人は趣味をもつことに対して一般に肯定的であるが、夫婦の趣味が一致する必要があるとは考えていない。むしろ趣味は夫婦それぞれが好きなことを楽しめばよいと考えているから結婚相手の条件としては当然重視されないことになる。しかし台湾を含め中国人は数少ない趣味が合うことが夫婦間の良い関係につながり、反対に趣味が合わなければ喧嘩も生じるため、家庭重視の彼らにとっては好ましくないことと考えていることがこの結果から読み取れる。

「道徳的にしっかりしていること」については中国に次いで日本が重視しており、むしろ台湾があまり重要と考えていないという結果になっている。この点については良い結婚の条件のところで触れるが、なぜ台湾では「道徳的にしっかりしていること」が比較的重視されないのかその理由はよくわからない。

「愛情」については日本が突出しているが、恋愛結婚が主流の今日、当然の結果と思われ、日本人からみれば中国、台湾の低さが異常に思えてくる。しかし日本では相手を選ぶ際に「愛情」が重視されるのであって、一度結婚してしまうと「愛情」はそれほど重要ではなくなることが次の良い結婚の条件からも明らかである。

良い結婚の条件についても国による違いが認められることは類似／相違をまとめた図表５－４－２に明らかである。なおここで用いた日本と米国の調査結果は１９９０年のVirginia Slims調査の結果である。

顕著な点を指摘すると、全般的に米国人特に米国人女性が良い結婚の条件として他の集団以上に多くの項目を重要視する傾向を示し、彼女らにとって結婚が多くのエネルギーを要する重大事であることがわかる。特に夫婦間の情緒的・肉体的結びつき、金銭感覚、ユーの重要性（言語的コミュニケーション）などを米国人が重視する姿が示されている。

また中国の工場調査と家庭調査の結果を比べると、家庭調査の方がより米国の結果に近い。家庭調査の回答者には年齢の若い層が多く、高学歴の者を含む多様な人々が含まれているせいであろう。 工場従業員の結果は日本の結果に比較的近いものが多い。

「恋人気分を持ち続けること」と「貞節であること」については日本の結果が他のグループとかけ離れて低い。結婚後は互いに夫婦は空気のような関係になることが良しとされ、また不倫に許容的な日本の結婚観の特徴が示されている。上述の結婚相手の条件に含まれている「道徳的にしっかりしていること」を重視する日本の結果は、この項目が性道徳というよりも広く人格全体を意味するものと受け止められた結果とみるべきであろう。

「子供がいること」、「子供の養育について同じ考え」、「経済的安定」についてはいずれのサンプルでも殆どの場合男性より女性の方が重視している。とくに日本女性が他の誰よりも「経済的安定」を重視しており、そこには伝統的にサイフをまかされてきた日本人女性の現実的な姿勢を窺うことができる。

「結婚の相手があなたが毎日していることに対して理解していること」という項目に対する中国の低さが突出している。中国人にとって結婚するということは相手に全幅の信頼を寄せることであり、いちいち相手がなにをしているかを詮索する必要は全くないと考えるためかもしれない。

以上の結果から今日の中国では日本とは比較にならないほど厳しい性意識が生きており、結婚する時に処女であるかどうかは問題にはされないけれども結婚後は相互に貞節を守り浮気をしないことが求められていることがわかる。さらに住宅事情が極端に悪く、プライバシイがほとんど守られないような状況であるため、「性格の不一致」が深刻なトラブルに発展する恐れがある。

図表５－４－１　　結婚相手の条件

若者が結婚相手を選ぶ時に重要なことはどれだと思いますか。

	上海	工場	台湾	日本
気が合うこと	45	50	59	54
道徳的にしっかりしている	47	42	30	40
家族の社会的地位	8	6	3	3
家族の経済的状況	14	21	27	22
年齢	15	8	7	7
職業	11	27	26	23
仕事の能力	27	21	40	35
外見	27	22	16	4
学歴	35	42	21	6
趣味が合うこと	40	37	47	21
愛情	22	19	14	64

図表５－４－２ 良い結婚の条件（「非常に重要」を選択した割合）

	米国		浦東		工場		日本	
	男	女	男	女	男	女	男	女
お互いの気持ちを話し合えること	76	84	61	62	69	62	62	73
経済的に安定していること	61	63	58	64	52	49	57	66
愛し合っていること	84	87	79	73	64	78	67	68
子供がいること	41	48	61	67	37	54	44	52
同じような生活が好きであること	62	64	50	47	25	29	26	31
性生活がうまくいくこと	74	72	53	52	41	38	38	38
恋人気分を持ち続けること	76	78	76	73	72	79	30	29
お互いに貞節であること	78	85	81	83	76	80	34	46
子供の養育について同じ考え	63	72	58	66	50	63	36	52
お金の使い方について似た考えをもっていること	65	71	36	41	19	32	25	34
共に物事をユーモアを持ってみることができること	69	76	31	33	19	20	29	39
同じような環境で育ってきたこと	29	34	21	21	12	18	14	19
結婚の相手が、あなたが毎日していることに対し理解していること	57	67	17	16	5	9	49	59

(2) 老親のめんどう

上海調査の結果は８割弱と圧倒的多数が「子供が面倒をみるべき」となっており、工場調査の結果とは大きく異なる。工場調査は「子供が面倒を見るべき」と「場合による」に二分されている。この差は過去１０年間に中国がみせた変化を反映していると考えることもできる。「親が自分でなんとかすべき」という回答が日本では３割弱もあるということは高齢化社会の厳しい現実のせいだと思われるが、中国・台湾では問題がまだ現実的ではないとみえて支持する者は少ない。工場調査の結果に「場合による」が日本よりも多い理由は明らかではない。しかし全体的にみるとこれらの結果は調査時点における各国の高齢化問題をめぐる状況をかなり正直に反映しており、１９８７年の上海、１９９７年の上海、台湾、日本という位置ずけになっている（図表５－４－３）。

図表５－４－３ 老親のめんどう
年取った親は子供が見るべきだと思いますか、それとも自分でなんとかするべきだと思いますか。

	上海	工場	台湾	日本
子供が面倒を見るべき	79	49	64	45
親が自分でなんとかすべき	7	4	12	29
わからない	1	4	12	2
場合による	12	49	12	24

(3) 家庭のなかのもめごと

もめごとには当然ながらその国の事情が反映されている。中国における住宅事情の悪さと老親同居はそのままもめごとの原因になっていることが図表５－４－４から明らかである。しかし、長寿化がまだ進んでいない新開発区の浦東では工場調査の結果や日本の結果ほどには「親の面倒」は問題ではないようだ。住宅事情が良く、安い人手が利用できる台湾は「住宅問題」と「親の面倒」が他のグループよりも少ない。また、豊かな日本次いで台湾では「日々の支出」や「娯楽」がもめごとの原因とはなっていないという結果は十分納得できるものだろう。日本では過去のものになりつつある「嫁・姑問題」は親の同居が一般的な中国・台湾ではいまだに深刻なようだ。

工場調査の結果に於いて「性格の不一致」と「財産」の２項目が他のサンプルの結果よりもかなり高くなっている。これは対象者が若者にかたよっていることに起因しているのかもしれない。工場従業者の学歴は低く、この学歴の低さが配偶者に対する許容度の低さにつながり、結果としてささいなことから喧嘩が起こりがちなことが彼らにとっての「性格の不一致」の意味ではないだろうか。

図表５－４－４ 家庭のなかのもめごと

	上海	浦東	工場	台湾	日本
住宅問題	53	45	44	10	24
嫁・姑問題	54	43	57	40	33
子供の教育	49	25	42	35	39
日々の支出	35	32	32	27	19
親の面倒	33	23	43	19	39
娯楽	11	12	21	9	7
性格の不一致	41	23	48	42	23
生活の仕方	23	22	30	33	33
財産	20	11	27	20	16

5.5　リーダーシップ

現在とりあげている調査の前に、日本、中国、台湾に関するリーダーシップの比較研究があり、既に発表されている（林 知己夫、林 文：国民性の国際比較、統計数理第43巻第1号1995、27-80、該当個所は 1.5リーダーシップについて48-52 、及び林ほか： 日本における長のイメージ、INSS Journal No.3 1996 90-132, 該当個所は2. 4. 3 日本と中国の比較から見えてきたリーダーシップ 111-113）。ここで分析された結果はそのまま今回の調査による国際比較に当てはまる。そこでこの先行調査をあえて再録しておこう。これは、今回分析のリーダーシップの文脈を理解する上で役に立つとかんがえたからである。

(1) 先行研究、 日中台のリーダーシップ比較

これは、日本と中国との比較調査から得られたものである。関連する質問は第1表の通りであるが、分析には、質問1のリーダーの資質として重要な3つを選ぶ方のみ、質問2と3は後ろに記号を付記した回答肢、質問4の伝統的分化（道徳）に関する質問では記号を記入した7つの項目を用いた（これらの質問は、ハワイのEast-West CenterのG. Chu教授による）。それぞれの国別にパタン分類の数量化を試みたが、しかるべき結果は得られたもののそれほど面白いものではなかった。そこで日本・中国のデータ数をそろえて、ボンドサンプルに対して数量化を行ってみると、きわめて明快な結果を得た。各質問回答カテゴリーの布置を図表５－５－１に示すが、第1軸（'X）において日本と中国の特徴がきれいに分かれることを知った。つまり、第1軸の値のサンプルスコアの分布（第2図）をみると、日本と中国がきれいに分かれ、マイナスが日本、プラスが中国となっている。 0点を日本人と中国人を判別する分割点とすると、日中の判別成功率は88％と極めて高い。ここにとりあげたリーダーシップの質問による判別の予測力が極めて高いことを知るのである。
これほどまでに、リーダーシップが日中で異なっていることを示しているのは驚くべきことであった。回答カテゴリーの布置のマイナス寄りが日本的リーダーシップであり、プラス寄りが中国的リーダーシップである。敢えてその特色を書いてみると次のようになる。括弧内の数値は左が中国。右が日本の回答の％である。

質問文

日中比較調査のリーダーシップに関する質問，伝統文化の質問（括弧付きの記号を記したものが分析に用いた項目，カテゴリー）．

質問1　あなたの職場では良きリーダーはどんな資質を持っているべきでしょうか。最も重要なもの3つと、最も重要でないもの3つを、次の中から選んで下さい。
〔項目のリストを提示して回答をとる〕

	最も重要な3つ○	最も重要でないもの3つ
1．技術的に優れていること	(01)	
2．部下を公平に扱うこと	(02)	
3．部下に尊敬され、好かれていること	(03)	
4．真剣に仕事に取り組むこと	(04)	
5．人間関係がよい、顔が広いこと	(05)	
6．仕事仲間に誠心誠意、接すること	(06)	
7．決断力がある、断固としていること	(07)	
8．判断力が優れていること	(08)	
9．部下に利益をもたらすこと	(09)	
10．年功を積んでいること	(10)	
11．よい階級の出身であること		

質問2　公の問題は影響力も経験もある人に任せるべきだと思いますか。それともそのような問題は、決定される前に人々で論議すべきだと思いますか。

1．影響力も経験もある人に任せるべきだ　(N1)
2．人々で論議すべきだ　(N2)
3．わからない

質問3　リーダーとして次のどちらの人がいいですか。〔回答肢のリストを提示〕

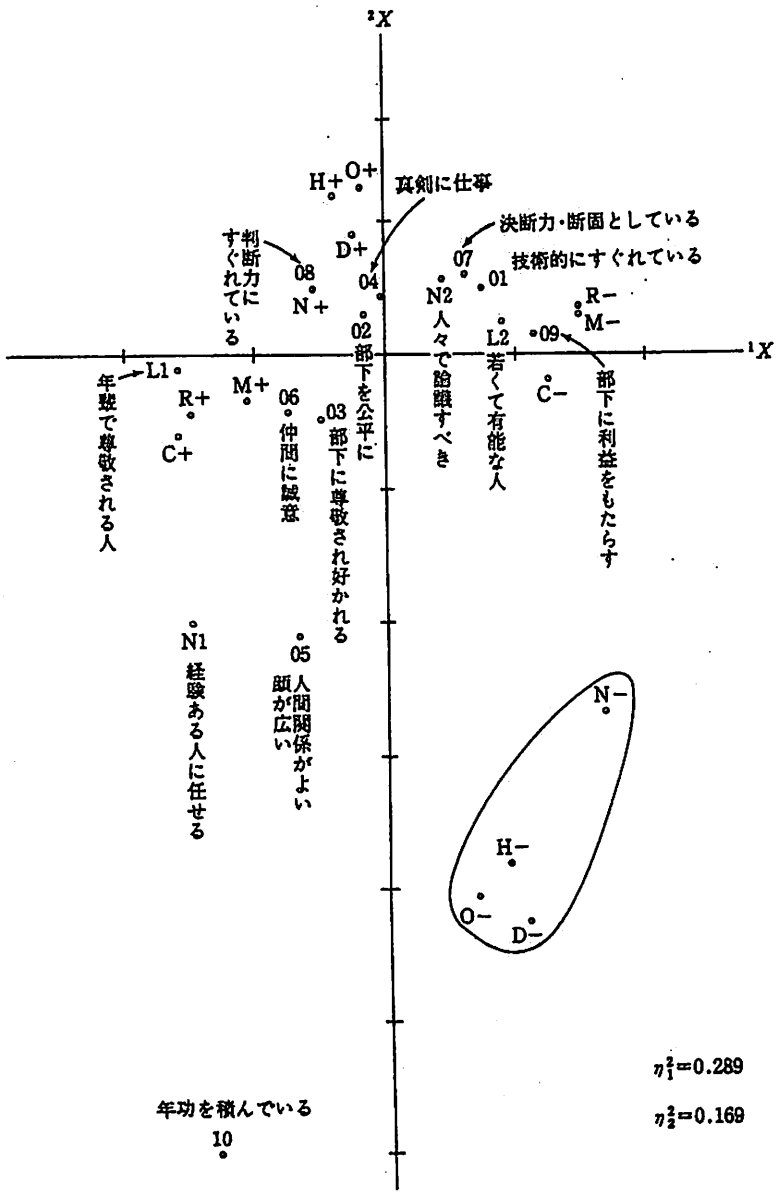
1．年輩で尊敬される人　(L1)
2．若くて有能な人　(L2)
3．どちらでもない

質問4　次にわが国の伝統文化をいくつかあげてみました。それぞれについて、「誇りに感じる」「なくしてしまいたい」「どちらともいえない」のいずれかでお答え下さい。
〔項目のリストを提示〕

	誇りに感じる	なくしてしまいたい	どちらともいえない
a．長い歴史的伝統	1	2	3
b．勤勉と質素	1	2	3
c．中庸の道	1(C+)	2(C-)	3
d．親の慈悲深さと子の孝行	1(D+)	2(D-)	3
e．国家への忠誠	1	2	3
f．男女の差別	1	2	3
g．女性は嫁ぐ前は父に、嫁いだら夫に、夫が死んだら子に従う三従と、四つの美徳を持つ	1	2	3
h．寛容と礼節	1(H+)	2(H-)	3
i．先祖の名を汚さない	1	2	3
j．農業を尊び商業をいやしむ	1	2	3
k．女性の貞節	1	2	3
l．権威への服従	1	2	3
m．子孫繁栄	1(M+)	2(M-)	3
n．和をもって貴しとなす	1(N+)	2(N-)	3
o．仁義道徳	1(O+)	2(O-)	3
p．年長者への敬意と従順	1	2	3
q．伝統を尊重	1	2	3
r．分別	1(R+)	2(R-)	3

図表５－５－１

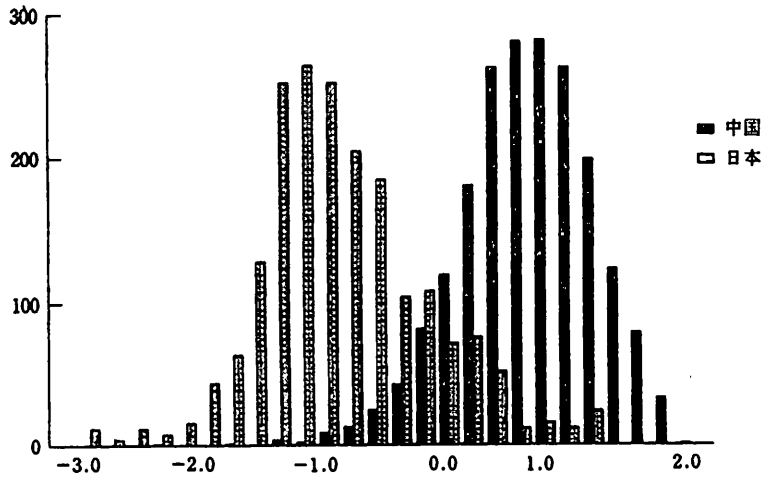
リーダーシップに関する意識構造（日中ポンドサンプルの数量化Ⅲ類による分析）。



図表５－５－２

第１次元目のサンプルスコアの分布

（日中ボンドサンプルの数量化 III 類による分析）



日本的リーダーシップの条件	(中，日)
部下に尊敬・好かれる	(28, 46)
仲間に誠意を以て接する	(16, 34)
人間関係がよい，顔が広い	(8, 15)
経験のある人	(11, 31)
年輩で尊敬される人	(9, 50)
年功を積んでいる	(1, 5)
判断力が優れている	(22, 36)
部下を公平にあつかう	(37, 41)

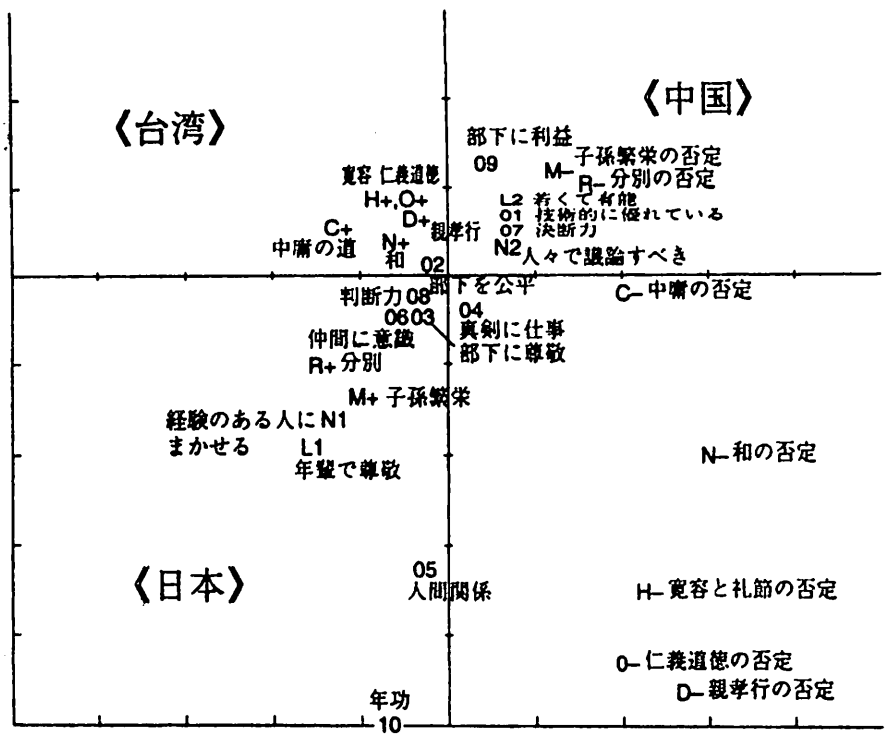
中国的リーダーシップの条件	(中，日)
部下に利益をもたらす	(39, 7)
技術的に優れている	(71, 23)
若くて有能	(82, 28)
決断力断固としている	(39, 23)
(真剣に仕事をする)	(33, 32)

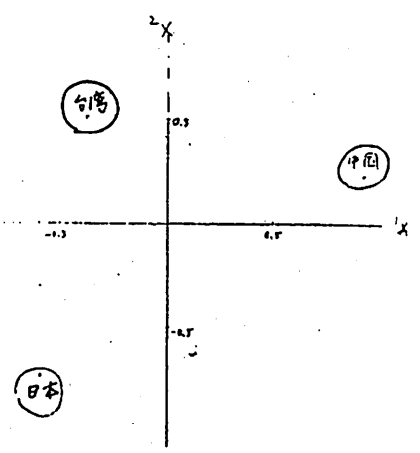
伝統文化との関連	肯定 (中，日)	否定 (中，日)
子孫繁栄 (paternalism)	(21, 54)	(56, 4)
分別	(8, 56)	(64, 3)
中庸	(5, 27)	(65, 12)
和を以て貴しとする	(47, 64)	(17, 4)
寛容と礼節	(45, 52)	(20, 12)
＊親の慈悲深さと子の孝行	(61, 55)	(13, 8)
＊仁義道徳	(56, 46)	(16, 14)

上記の伝統的道徳に関する質問の回答を見ると、＊印を除いて、中国の方が“誇りに感じる”回答が少なく、“なくしてしまいたい”とする回答が多い。日本の方が中国よりも“誇りに感じる”回答の率が高い項目（＊印以外）がリーダーシップに関係が強いことは興味深い。共産党教育のしみこんだ中国との比較の単なる一例であるが、日本では人間関係と関係深いリーダーシップは一つの特徴を示すものと考えてよかろう。

つぎに台湾を加えて同一質問で数量化III類を行ってみた。 このとき、各グループの標本数はウエイトを乗じ同一とした。その分析結果を図表５－５－３、国の布置を図表５－５－４に示す。

図表5-5-3、図表5-5-4　日本・中国・台湾のリーダーシップに関する意識構造

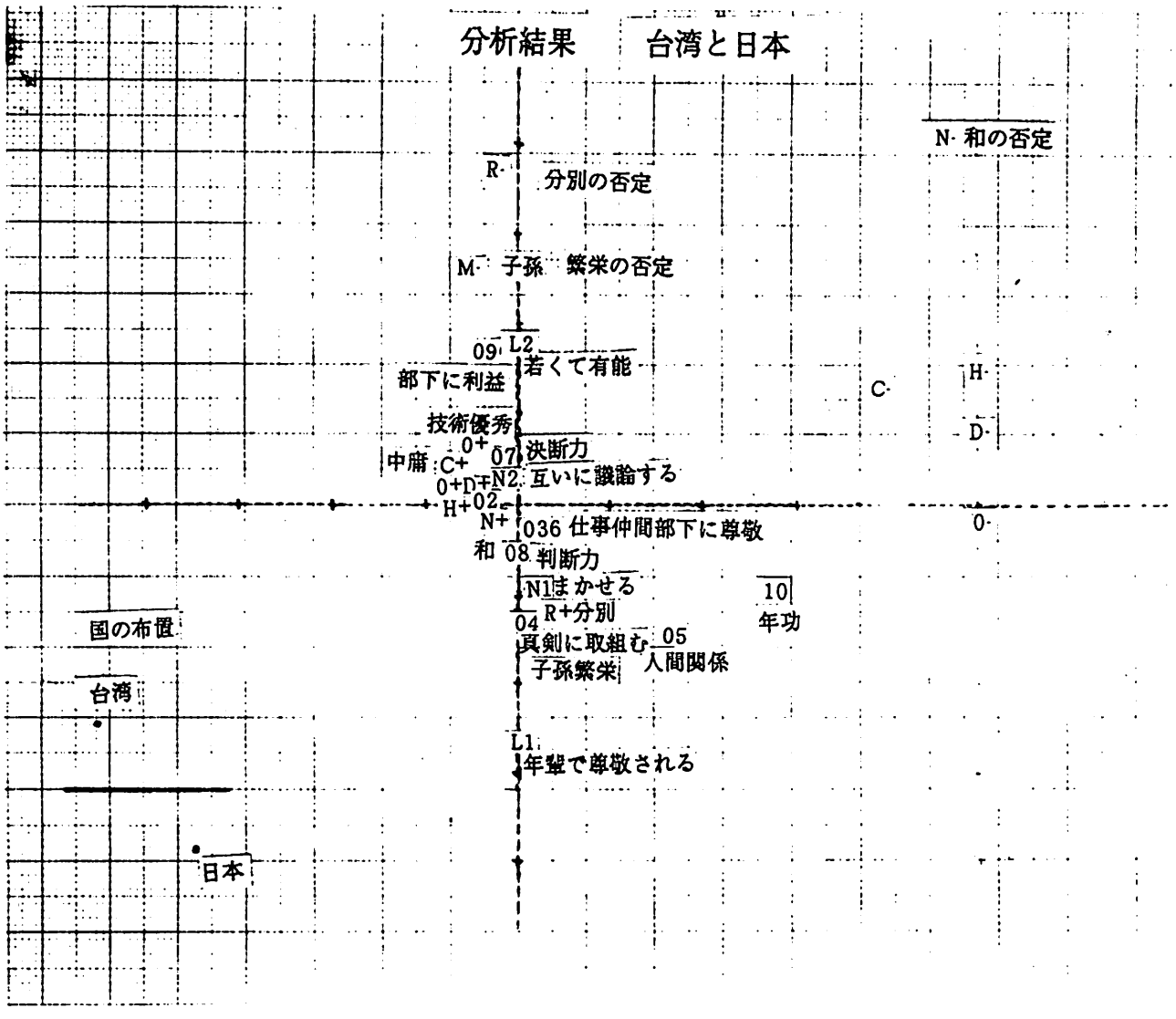




第１軸で中国と日本、台湾が分離し、第２軸で日本と台湾が分離するという形である。日本と中国の判別の成功率は85％、第２軸における日本と（中国、台湾）との判別の成功率 は76％である。 台湾がやや日本寄りであることがわかる。

こんどは、日本と台湾のみをとりあげ。Ⅲ類を行った結果は図表５－５－５のようになり、図表５－５－３ともあわせ考えると台湾は日本とくらべ、中国的特徴を示していることがわかる。第1 根目は徳目の否定がきて、第２根目にリーダーシップの特色がきていることに注意されたい。

図表５－５－５



この場合、日本と台湾の判別の成功率は76％となっている。この三つのグループ、日本、台湾、中国と比較することで一層ものごとがはっきり見えてきた。台湾を加えて分析することにより、台湾を含めて中国のリーダーシップの特徴が析出されてきた。一方台湾は中国よりも日本寄りであり、中国にくらべやや日本的特色を備えているという点が示されたのである。

(2) 日中台5グループの国際比較

今回の調査、浦東人、工場従業員を加えて分析したものである。とりあげた質問は、共通問題で限りがある。 用いる質問文は以下にあらためて再録する。

あなたの職場では良きリーダーはどんな資質を持っているべきでしょうか。 最も重要なもの3つと、最も重要でないもの3つを、次の中から選んで下さい。
(項目のリストを提示して回答をとる)

		最も重要な3つ○	最も重要でないもの3つ
1.	技術的に優れていること	(L1)	
2.	部下を公平に扱うこと	(L2)	
3.	部下に尊敬され、好かれていること	(L3)	
4.	真剣に仕事に取り組むこと	(L4)	
5.	人間関係がよい、顔が広いこと	(L5)	
6.	仕事仲間に誠心誠意、接すること	(L6)	
7.	決断力がある、断固としていること	(L7)	
8.	判断力が優れていること	(L8)	
9.	部下に利益をもたらすこと	(L9)	
10.	年功を積んでいること	(L0)	
11.	よい階級の出身であること		

公の問題は影響力も経験もある人に任せるべきだと思いますか。それともそのような問題は、決定される前に人々で議論すべきだと思いますか。

1. 影響力も経験もある人に任せるべきだ (N1)
2. 人々で議論すべきだ (N2)
3. わからない

リーダーとして次のどちらの人がいいですか。 (回答肢のリストを提示)

1. 年輩で尊敬される人 (L1)
2. 若くて有能な人 (L2)
3. どちらでもない

数量化111類を行うが、この質問を調査していないグループはブランクとして取り扱う。リーダーシップ関係のグループ別相対頻度表はこのようになる。

図表５－５－６　（%）

	上海	台湾	日本	工場	浦東
公の問題　経験ある人に	11	33	31	13	―――
人々で論議	89	63	57	87	―――
リーダー　年輩　尊敬	9	17	50	13	―――
若く有能	82	60	28	70	―――
どちらでも	28	70	37	38	―――
リーダー　技術優秀	71	43	23	45	48
部下を公平に扱う	37	50	41	61	57
部下に尊敬される	28	42	46	28	38
真剣に仕事に取組む	33	19	32	35	29
人間関係，　顔が広い	8	4	5	6	9
仲間に誠心誠意	16	27	34	22	18
決断力	39	22	23	33	24
判断力	22	28	36	19	15
部下に利益を	39	49	7	48	58
年功を積んでいる	1	3	5	1	2
よい階級の出身	1	1	1	2	1

注　上海とあるのは先行研究の上海のグループ
　　―はデータなし

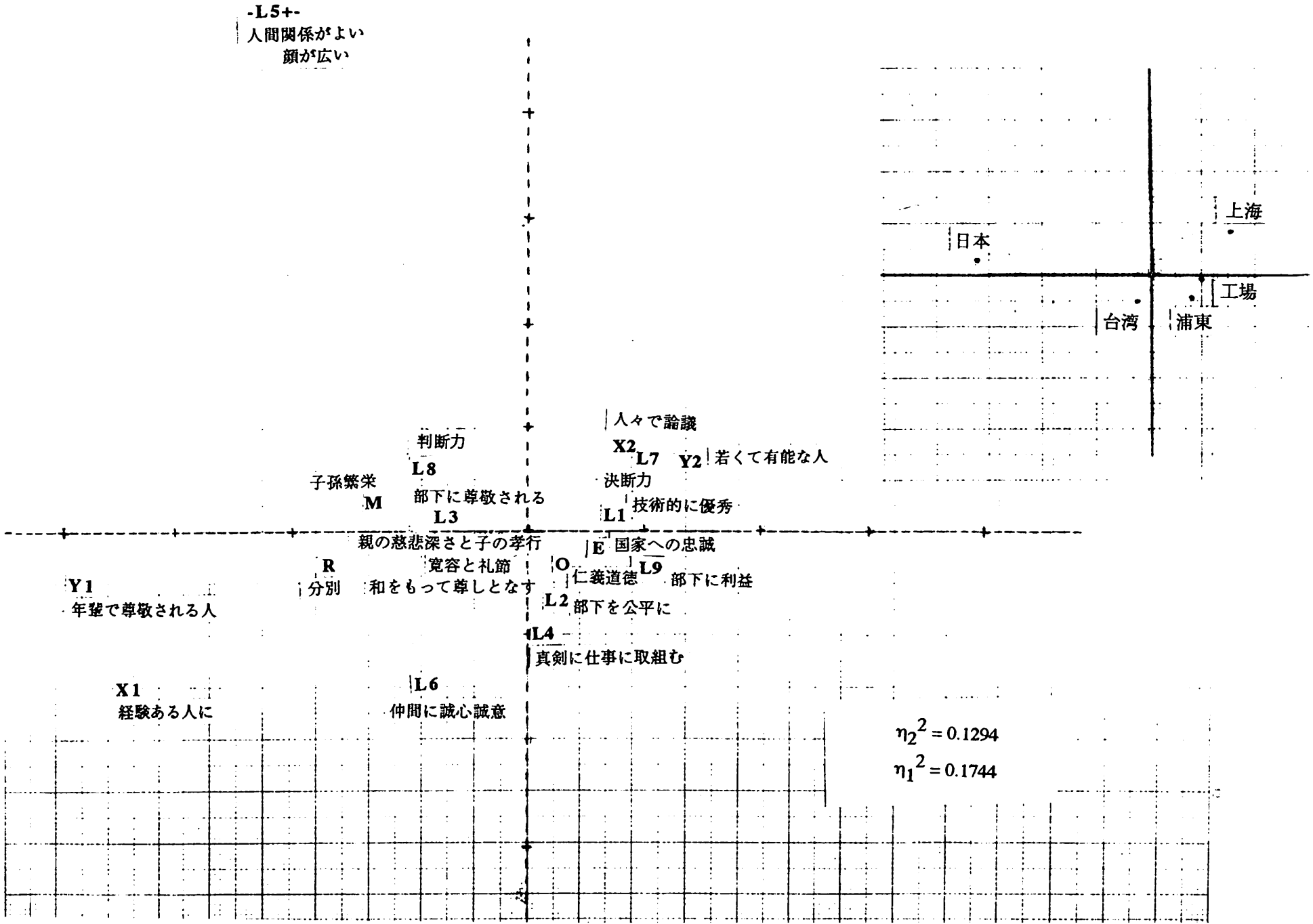
比率上の差はさきに示した通りの特色がここにも通じる。中国と日本との差をまとめてみると

技術優秀	日本に少ない	（中国に多い）
部下を公平に扱う	日本に少ない	（中国に多い）
部下に尊敬される	日本に多い	（中国に少ない）
仲間に誠心誠意接する	日本に多い	（中国に少ない）
判断力	日本に多い	（中国に多め）
決断力	日本に少な目	（中国に少ない）
部下に利益をもたらす	日本に特に少ない	（中国に特に多い）

のようにまとめられる。

５グループのサンプル数を揃えて（ウエイトをかけて）数量化Ⅲ類を用いてみると、図表５－５－７のようになり、前問同様明解な形が現出している。国の関係もきわめて解り易い。

図表５－５－７　カテゴリーの布置とグループの布置



Ⅲ類による分析であるがⅡ類で分析したようにグループ別の特色が明らかな形で析出されているのである。 第1軸の意味もきわめて解り易い。

さて、こんどは、Ⅲ類で用いた全ての項目を使って（伝統文化は3カテゴリとする）、いくつかのグループの組み合わせを考え、数量化Ⅱ類をほどこしてみた。このとき、すべてのグループの数をそろえ（ウエイトをかける）分析してみることにする。こうして出てきた数値を用い、各グループの個人得点を算出し、その分析を比較検討してみよう。

Case 1　日本・台湾・上海

一根目で日本、台湾、上海が分離するが、上海のみがとくに離れる。台湾は日本寄り中間にあるが、二根目で日本と離れるという様相がよく見ることが出来る。（図表５－５－８）

Case 2　日本・台湾・工場

日本と比較すると台湾と工場はほとんど同じである。 工場と台湾は二根目で分離する。つまり、日本と比較すると台湾と工場も中国人的特色を持っていることがわかる。（図表５－５－９） しかし、 Case 1のように工場の代わりに上海にしてみると、台湾は日本寄り中間ということになり、上海が特に異なっていたことがわかる。

Case 3　日本・台湾・浦東

工場の代わりに浦東を入れてみると、台湾は中間で、浦東寄りになる。やはり、日本人対中国人の特色ということになる。二根目で浦東と台湾が分離するという形で工場の場合と同様である。 （図表５－５－10）

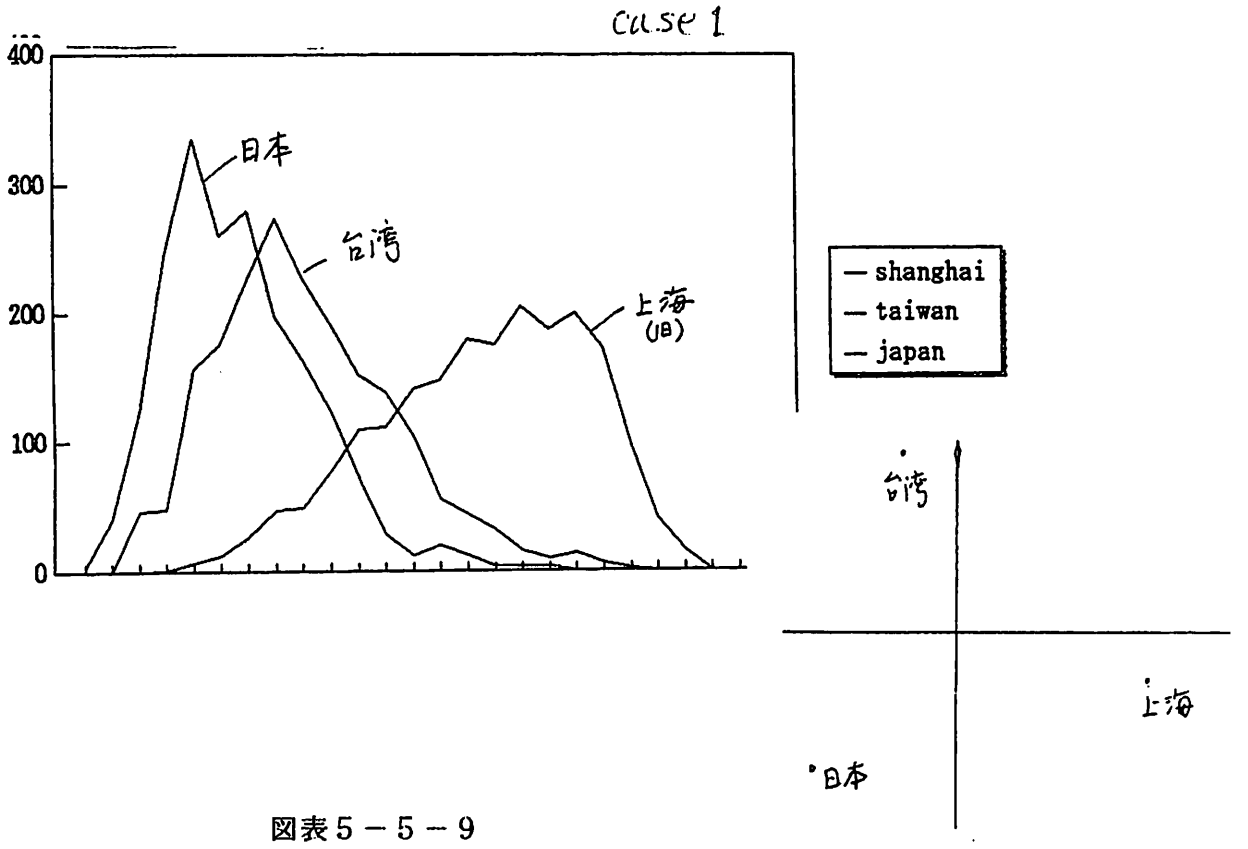
Case 4　台湾・工場・上海

日本をぬかし上記の三者比較をすると、台湾と上海が両極で中に工場がくる。中国人の中の比較であるときも、きれいな分離が示される。このときは1次元分離で2次元目は殆ど意味がない。（図表５－５－11）

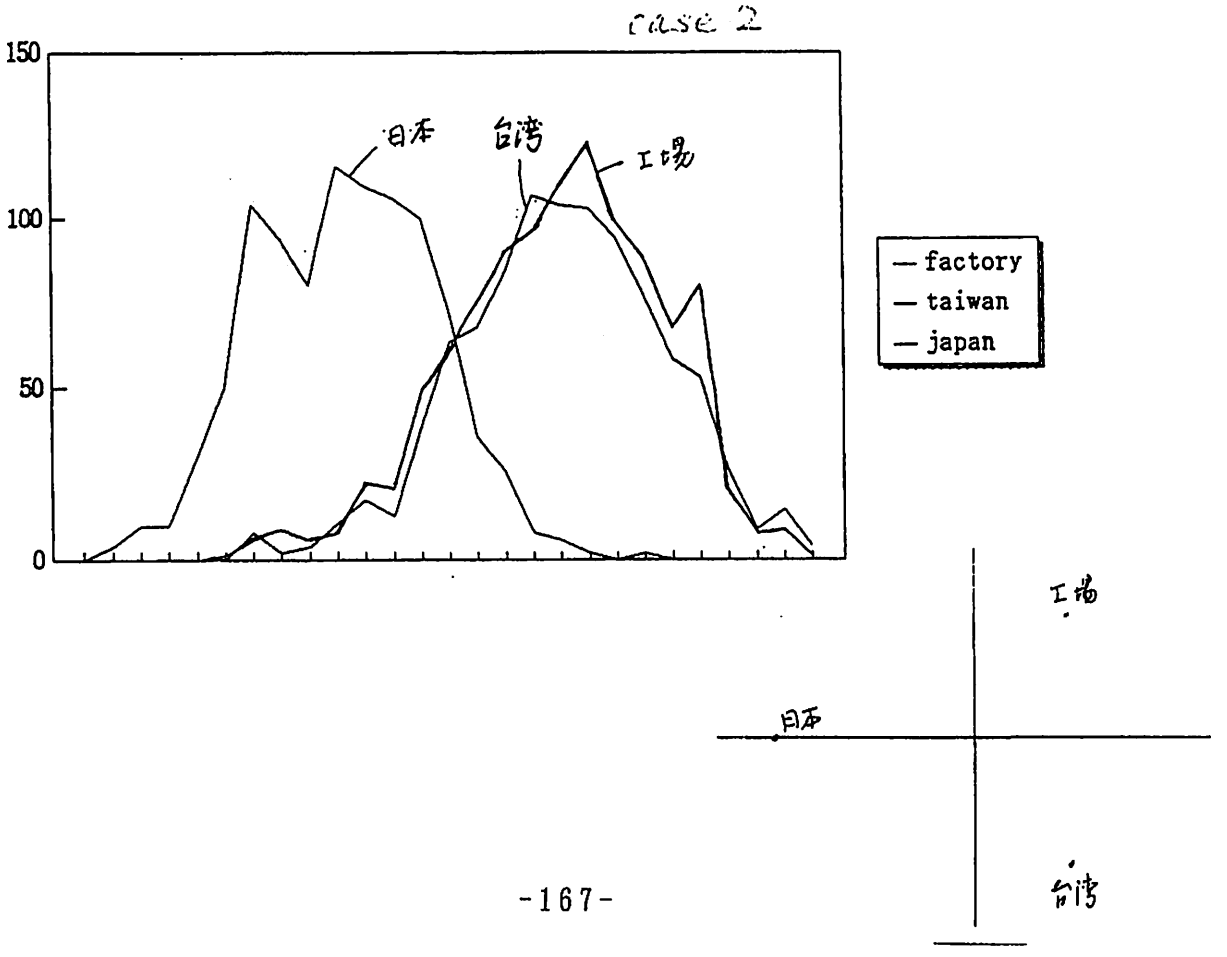
Case 5　台湾・浦東・上海

工場の代わりに上海をいれた場合は、工場の場合と全く同様で浦東が台湾と上海の間にくるのである。（図表５－５－12）。このときも、1次元分離である。

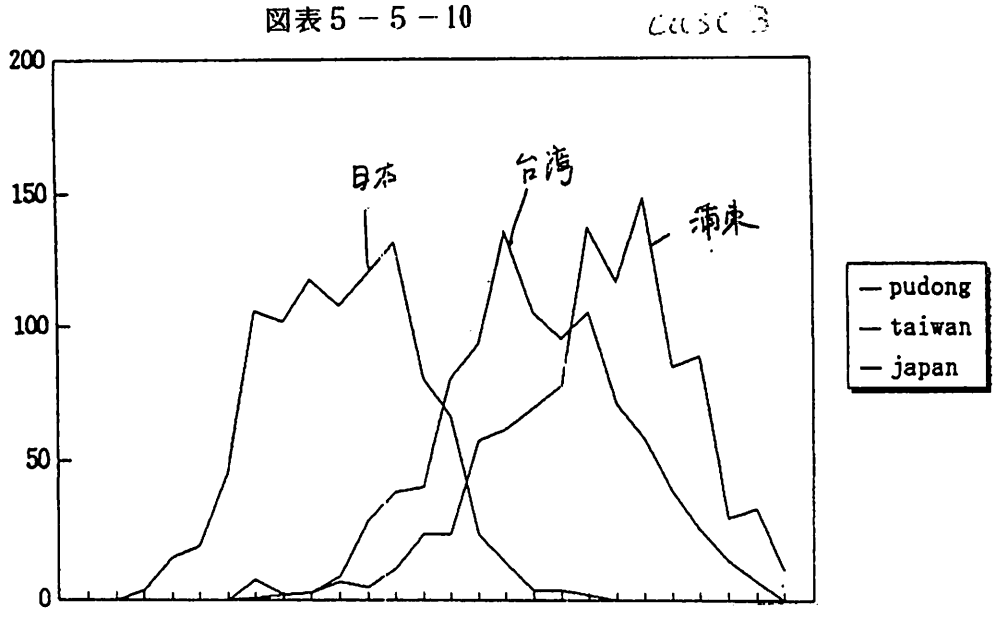
図表５－５－８

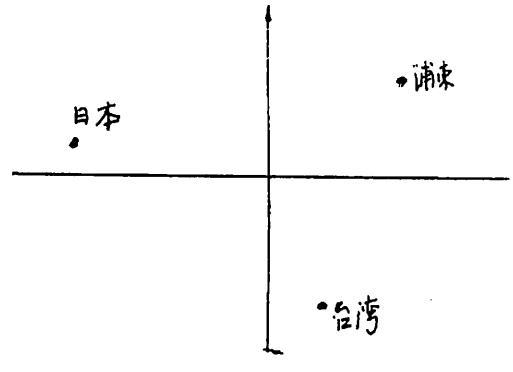


図表５－５－９

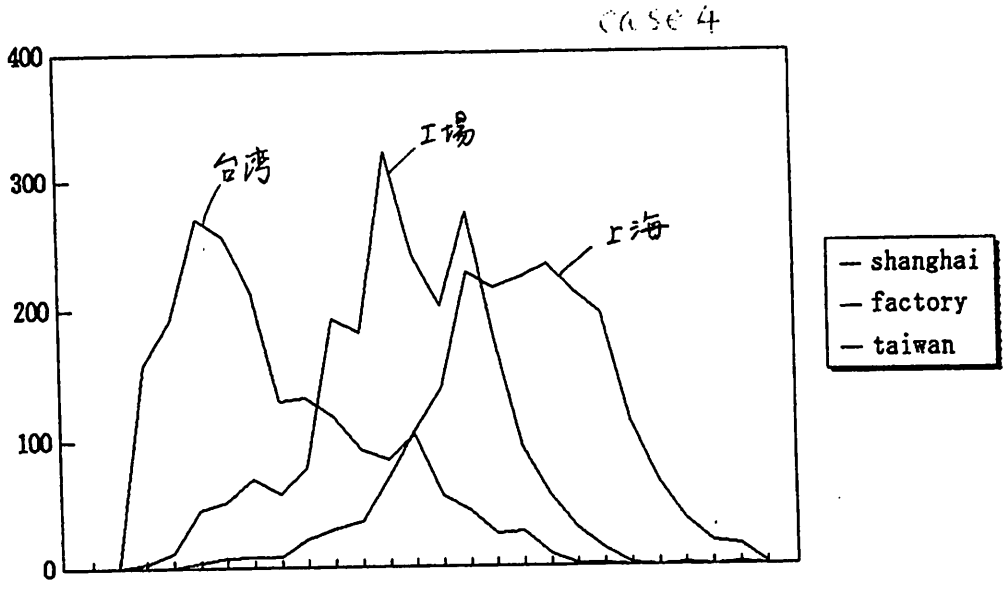


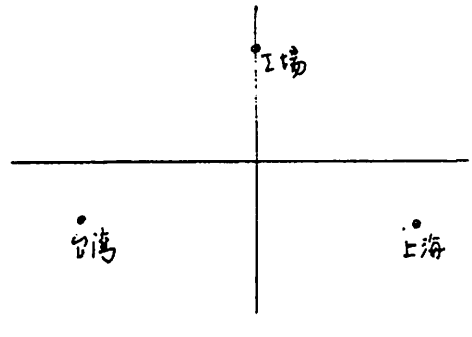
図表５－５－10



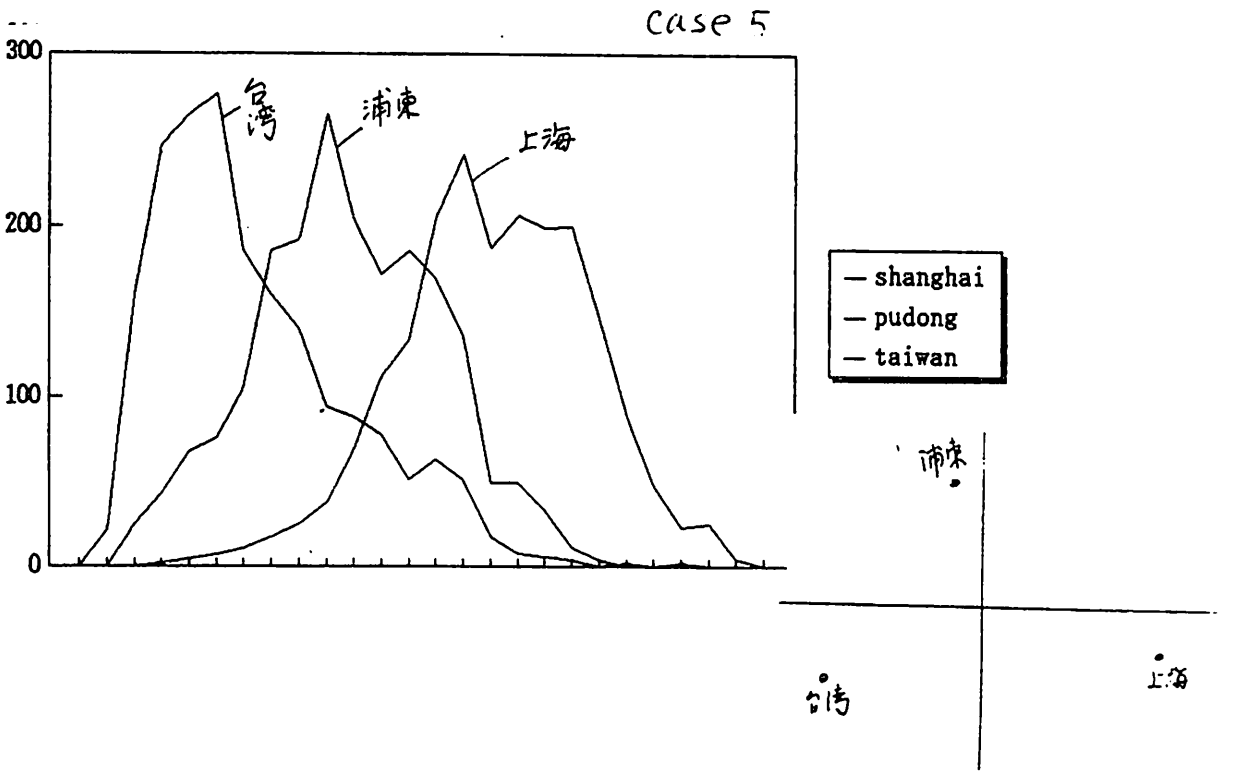


図表５－５－11





図表５－５－12



Case 6　浦東・工場・上海

この場合は図表５－５－13のように、上海と今回の浦東、工場の差がはっきり出てくる。二根目で工場と浦東が分離する。

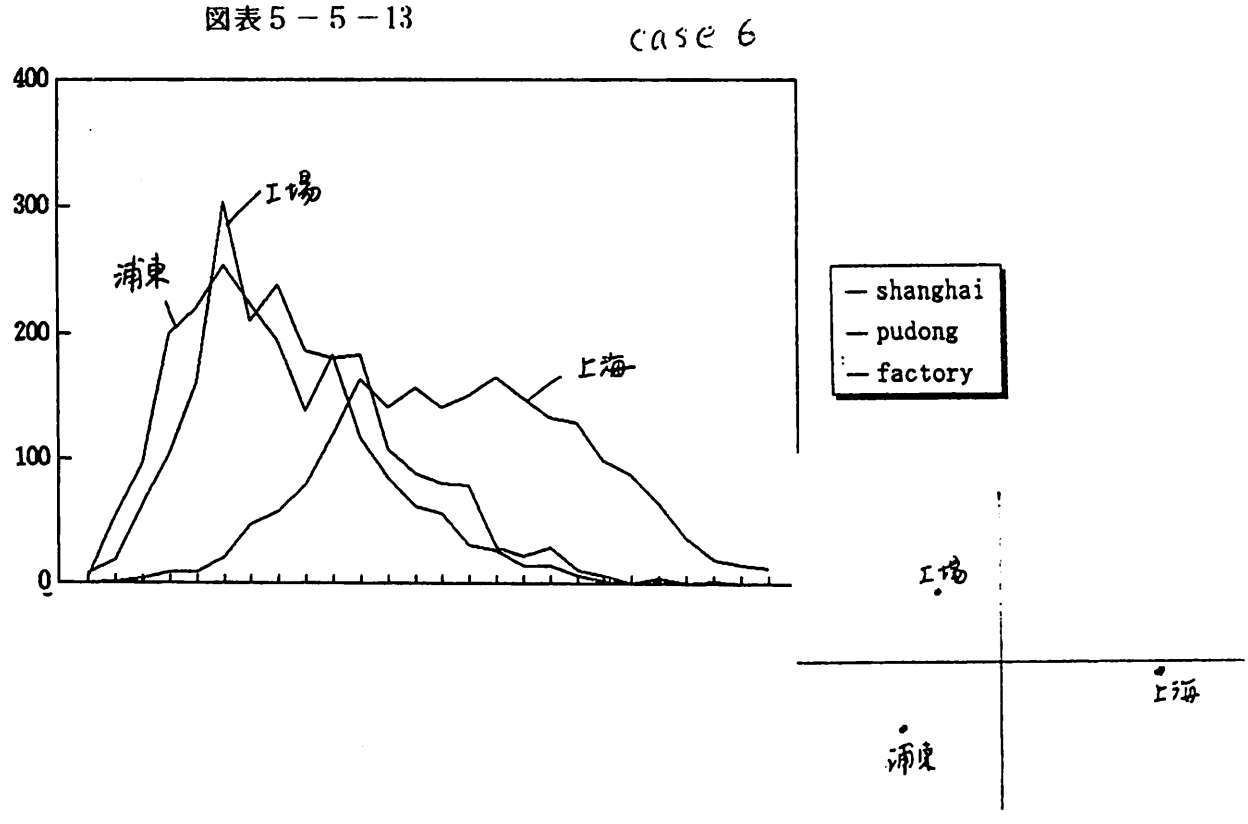
Case 7　台湾・浦東・工場

この場合は、図表５－５－14のように、台湾と今日の浦東・工場が明らかに分離し、台湾とくらべれば、浦東と工場との差はない。 二根目で浦東が分離する。

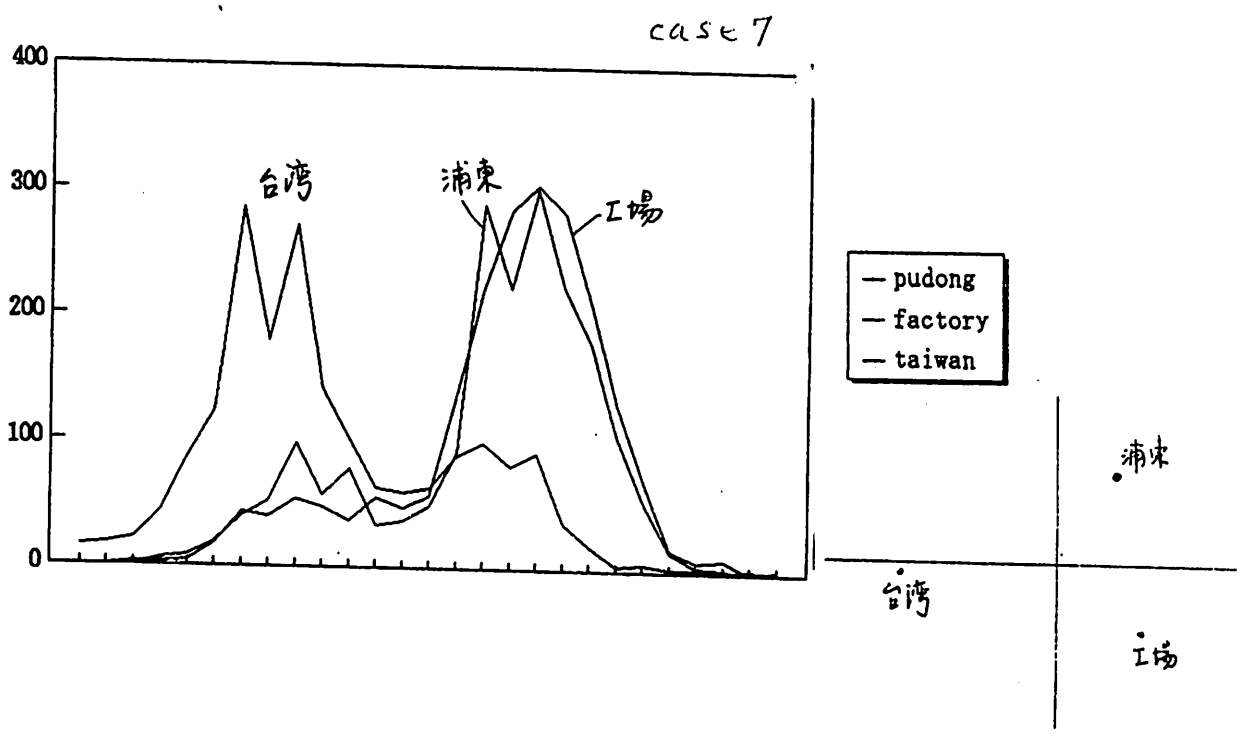
Case 8　台湾・浦東・工場・上海

中国人グループの比較である。図表５－５－15のように台湾と上海が両極で浦東と工場が中央にくる。この両者は二根目でも分離を示さない。この四者を比較し、それぞれの特色を分離するような物指しを作ったところ、浦東と工場は同じに見えてくるのである。しかも、（台湾）（今日の浦東・工場）（旧上海）は分離して見えてくるのである。

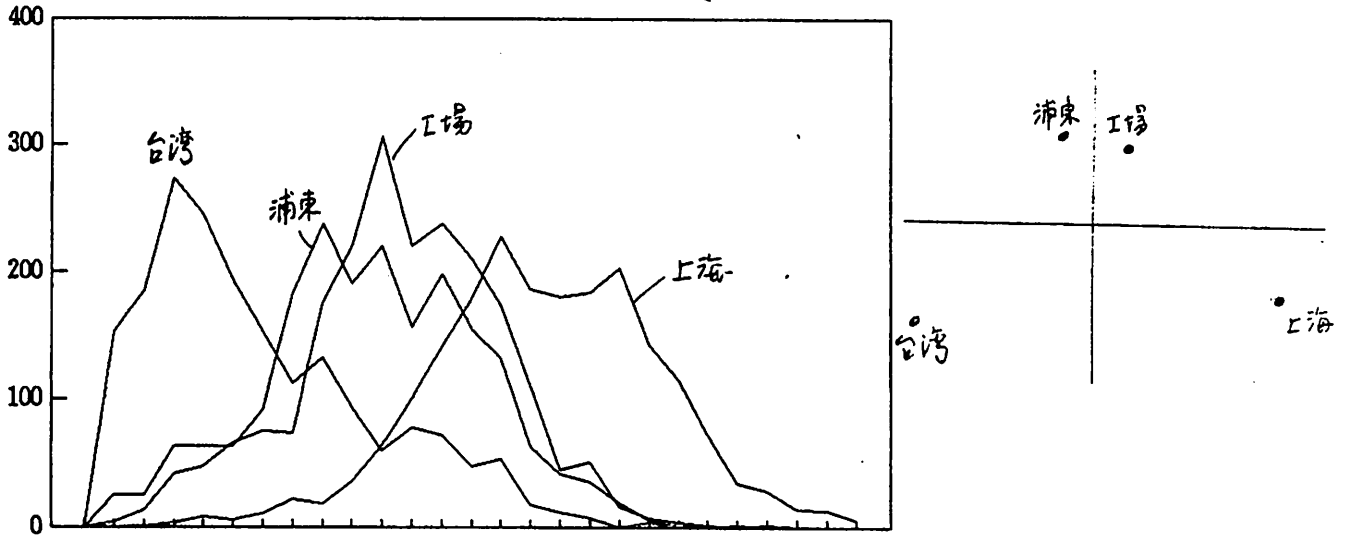
図表５－５－13



図表５－５－14



図表5－5－15　case 8

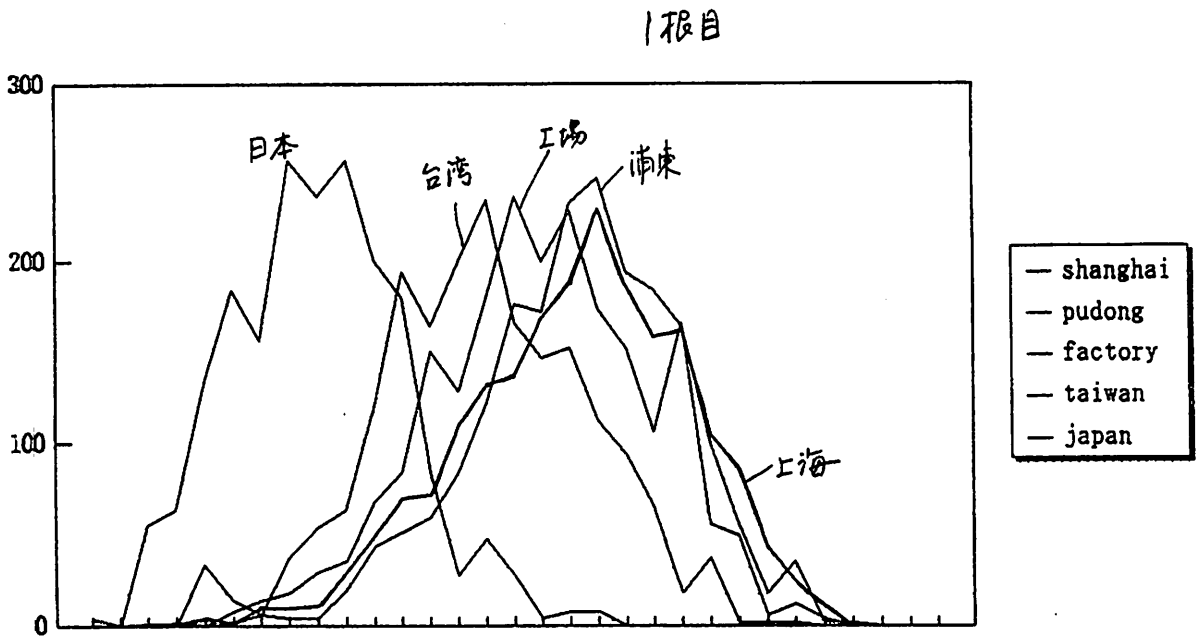


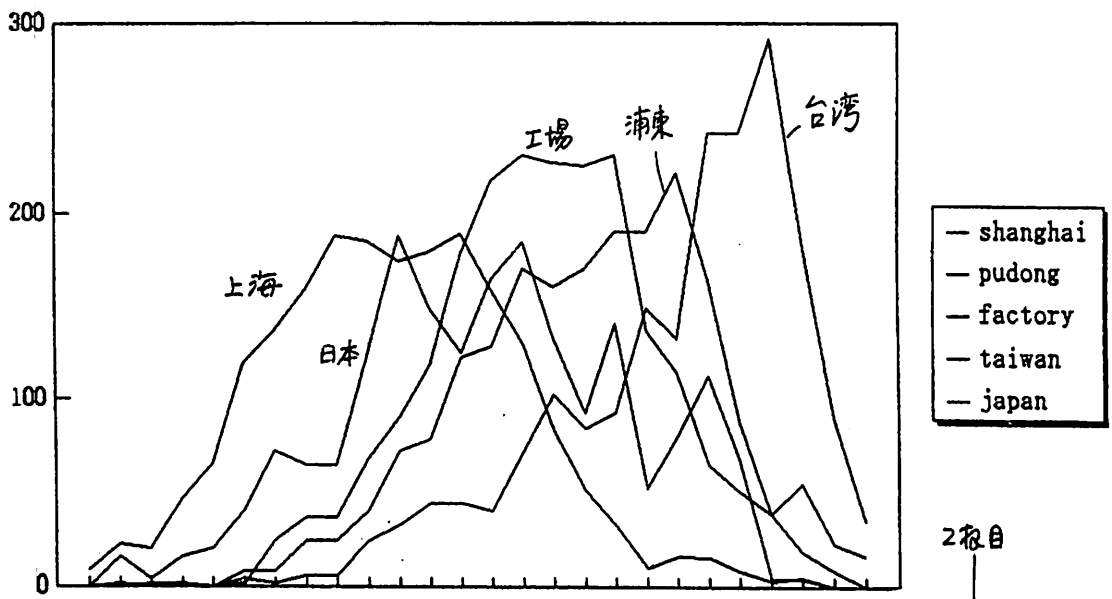
これまで、分析の対象の組み合わせによって、グループの判別をみてきた。これは、とりあげた対象群の性格に応じて比較の物指しが変わってきて、いろいろの特色が見えてくることが解った。日本と中国（台湾を除く）を物指しではかれば、中国グループは一本となる。中国の内部の比較の場合、その群の特色をはっきりさせる物指しを作ることになり、三者は分離することになる。日本と台湾・工場・浦東を比較する物指しだと、台湾と工場は全く同一、浦東は台湾に近くなるというように、物指しの差によるグループ判別の様相を知ることが出来た。

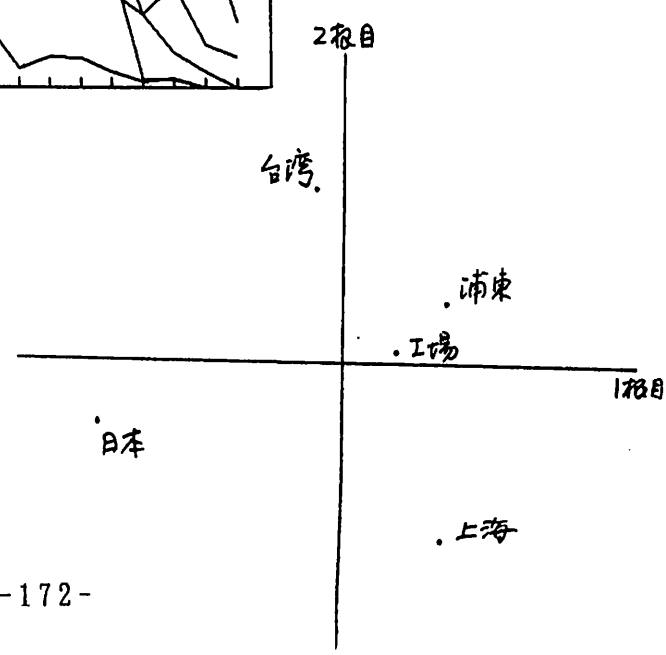
Case 9　全グループ

全グループを用い11類を行ってみると、図表5－5－16のようになり、（日本）、（台湾）、（工場・浦東・上海）の三群にわかれ、二根目で上海と（工場・浦東）は分離する。二根目までの物指しでは、工場と浦東は分離しないのである。

図表５－５－16


1根目
300
200
100
0
日本
台湾
工場
浦東
上海
— shanghai
— pudong
— factory
— taiwan
— japan


300
200
100
0
工場
浦東
台湾
上海
日本
— shanghai
— pudong
— factory
— taiwan
— japan


2根目
台湾
浦東
工場
1根目
日本
上海

5.6 回答選択率の比較からみた国際比較

諸調査間で、同じ質問の回答選択率の比較ができる。国の間の比較は調査の設計が同じであっても、様々な調査上の違いもあり、個々の質問の回答について細かな違いを解釈すると、理解できないこともある。しかし、大きな差については、特徴がよく現れている場合が多い。そこで、国（あるいは地域あるいは種類などの集団区分）についての様々な回答選択肢の違いを総合してみることによって、比較した質問の内容領域に関して、国々の間の同異の様子をみることができる。調査が標本調査であって、領域が生活全般に渡っている場合、このような考え方から分析して、一般的に国々の遠近の関係を表すことになる。このことは、1987年から1991年にかけて行われた７カ国国際比較調査（林知己夫他「国民性の７カ国比較」近刊）で明らかにされている。

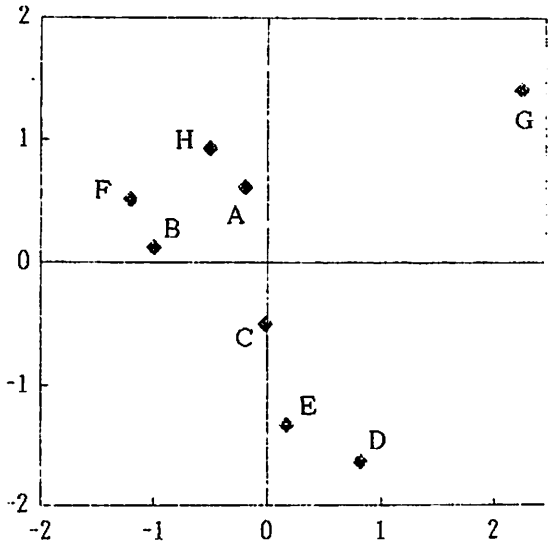
この上海浦東調査はデータの質について多少問題があるが、大きな回答選択率の違いについては、よく特徴を現している。そこで、浦東調査の８地域、工場調査の３つの種類別、1986年の上海調査、1987年の台湾調査、1990年の日本（首都圏）調査間の回答選択率の差異に基づくそれら地域（あるいは種類）間の遠近の関係を現してみた。比較に用いる質問の内容領域によっても、その関係はことなってくることがあるのは当然であり、全てに共通して用いられ、回答選択肢もほぼ同じと判断されたものはそう多くはないが、その範囲で比較し、少しずつ比較の輪をひろげてみた。

まず、浦東調査の８地域の関係は図表5-6-1のようになる。比較に用いた回答肢は、地域としての属性的な特性を現すものを除き、考え方に関する回答である。地域Ａ，Ｂ，Ｆ，Ｈが一つのクラスター、Ｃ，Ｄ，Ｅが一つのクラスターを形成しており、地域Ｇだけが離れている。この関係は、比較する質問を少しずつ変えてもほとんど変わらない。この８地域は地域としての属性の違いが大きく、住宅の構造や浦東転入前の身分などそれぞれに地域差がことなっているが、それらから同様の分析をしたところ、Ｂ，Ｅ，Ｆが一つのクラスター、Ａ，Ｃ，Ｄが一つのクラスター、Ｇ，Ｈが一つのクラスターをなし（図表5-6-2）、地域としての属性的特性による地域の遠近の様子と、回答特性からみた地域の遠近の様子が異なっていることがわかる。

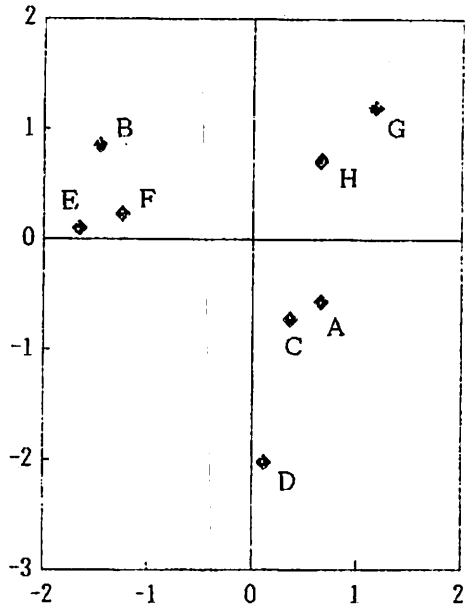
今度は、工場調査の３つの種類別を比較してみたところ、図表5-6-3のように、合資、国有、集体の順になり、合資が特に離れている様子を示している。

次に、浦東調査との共通質問に限って、浦東の８地域と工場調査の種類別とをいっしょに比較した。その結果は図表5-6-4のようになった。工場調査は３つの種類とも浦東調査の（Ａ，Ｂ，Ｇ，Ｈ）グループの外側近くの位置になった。浦東調査のうち職業を工人（工場従業員）のみも１つとして比較に加えたところ、工場調査の３種類とは別に、やはり、浦東調査の中に位置している。

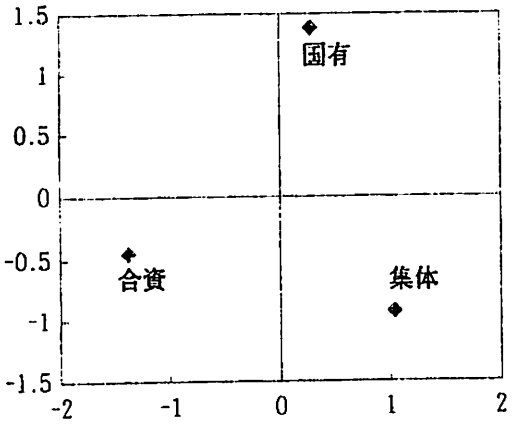
図表5-6-1



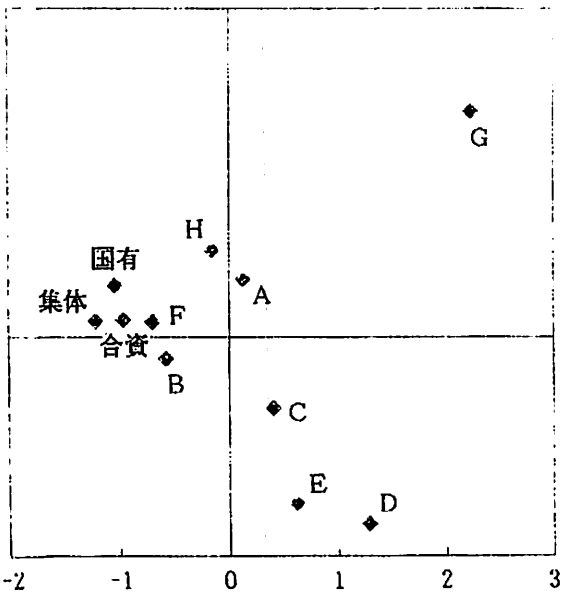
図表5-6-2



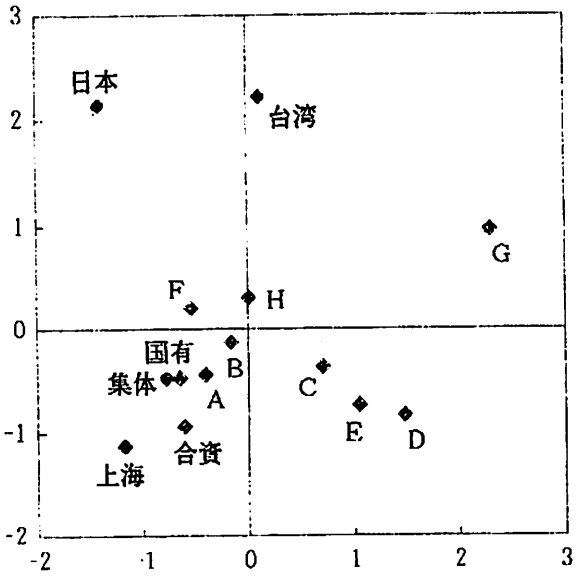
図表5-6-3



図表5-6-4



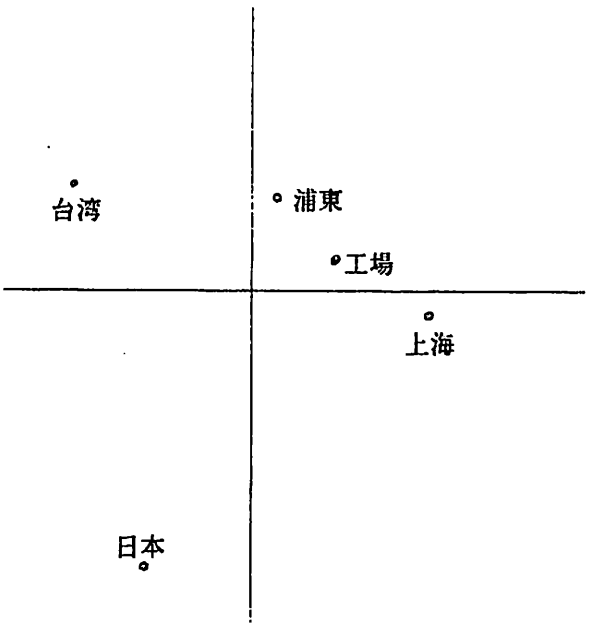
図表5-6-5



さらに、1987年の上海、台湾と日本との関連は共通質問があまり多くなく、用いた質問は、離婚、トラブル、転職の判断基準、よい上司の条件、伝統価値観の質問の回答である。それらの中でも、浦東の8地域は前の例と同様な所に位置し、その回りに近くに1987年上海、離れたところに台湾、1990年日本（首都圏）が位置するかたちとなった（図表5-6-5）。台湾や日本など全く別の調査の違いと、浦東の地域内や工場の種類別などのいわば内部の違いとを、一緒に扱うのは適切でないかもしれないため、浦東調査を一本に、工場調査を一本にまとめたものと、1990年上海、台湾、日本の5つの地域（種類）として、同様に関係を分析したところ、図表5-6-6のような結果となった。これは、それぞれを区分した形で分析したときのほぼ平均的な様子を現しているといえる。

こうしてみると、大きくみれば、1987年上海調査と今回の工場調査の近いこと、日本が最も離れていることなど、常識的ともいえる関係表示が、回答選択率の比較から現されたことは興味深い。

図表5-6-6



第Ⅱ部
ケーススタディにみる浦東住民意識の変化

浦東住民に対するケーススタディは、1995年から1996年にかけて、胡申生と上海大学の学生によって行われた。対象者総計131人は、様々な属性特性や地域特性に亘るように、主に人脈に頼って選ばれた。これら特性によって、対象者の家庭は次に挙げるような 10群に分類される。ここで、ケーススタディの全体を通した報告として、Godwin Chu と鮑戸弘にの研究報告（英文のまま）のほか、呉聖苓、胡申生が、上海の月刊雑誌「社会」に1997年２月から９回に亘って発表したもののうち５編の日本語訳を収める。

ケーススタディ対象者の分類

第一群（12人）浦東大道：元来の建物を壊して建て直したところ。住宅構造は平屋と個人所有の家から多層共同住宅（５階以下）になった。

第二群（10人）伊家園

第三群（ 9人）高層建築（６階以上でエレベーターあり）

第四群（10人）海運学院大学区

第五群（12人）平屋、町の家。尹家園と殆ど同じで、比較的条件の悪い地区。尹家園は一地域に集中したところだが、ここ第五群は分散しており、これも浦東の家庭の状況を映している。

第六群（ 9人）金橋地区：農村家庭

第七群（10人）農村と町の接合部。第六群と第七群は同じく農村家庭だが、２つの違いがある。一つは、第六群の 9戸は１村に集中しており、第七群は異なる地域の農村家庭であること。もう一つは、第六群は純農村家庭であり、第七群は農村と町とのつながるところの家庭を含む。七は、かつては田舎の町といわれていた。

第八群（37人）多層共同住宅。浦西から浦東に引っ越してきた家庭。２つに分けられる。一方（16人）は、家族に大学卒の者のいる家、もう一方（21人）は、大学卒のいない家庭。

第九群（19人）多層共同住宅。もともと浦東に住んでいた家庭。これも第九群と同様に、２つに分けられる。一方（10人）は大学卒の者のいる家庭。もう一方（9人）は大学卒の者のいない家庭。

第十群（ 3人）地方から引っ越してきた家庭。

1．急速な経済発展のインパクト

ー 浦東地区ケーススタディのマクロ・ミクロ重層分析ー

ゴッドウィン　チュー
飽　戸　　弘

本文は英語、以下の通り。

Social Impact of Rapid Economic Development

- Micro and Macro Ramifications of Pudong Case Study -

Godwin C. Chu

East-West Center

Honolulu, Hawaii, U. S. A.

Hiroshi Akuto

University of Tokyo

Tokyo, Japan

Funding for this study was provided by the Japanese Ministry of Education. We gratefully acknowledge the contributions of our Chinese and Japanese collaborators. The views expressed are entirely those of the co-authors, and are not necessarily shared by either the funding agency or our collaborators.

1

Introduction

On April 18, 1990, the government of China announced an ambitious development project to transform Pudong, a sleepy rural community across Huangpu River from Shanghai, into a modern commercial, high technology, and telecommunications center comparable to a second Singapore. The slow ferry services from metropolitan Shanghai to Pudong were to be made obsolete, if not completely replaced, by four high suspension bridges and three tunnels. In what were narrow streets and slum areas along the river would be built a modern banking and telecommunications center, including a gigantic TV tower. A high tech industrial park was planned in vast paddy fields not far from Pudong's old county seat to compete with Silicon Valley. Farm lands would be turned into joint venture factories. An ultra modern international airport would be built to replace the old, crowded Hongqiao Airport on the outshirts of metropolitan Shanghai.

Construction work began almost immediately after the official announcement. Apartment construction was started at the same time to prepare for the relocation of tens of thousands of rural families whose farm land would be acquisitioned to accommodate the new joint venture factories. Construction work was so busy that according to a current saying in Shanghai, one fourth of the world's construction cranes were in operation in Pudong. That might be an exaggeration, but it does tell the incredible story about the Pudong development.

A backward rural community, which had remained dormant for some 180 years since the County of Chuansha was first founded in Pudong in 1810, is being transformed into a modern urban center almost overnight. The transformation is nearly total, from rural farm houses into apartment buildings, from land-based agricultural work to factory jobs, from muddy roads to four-lane highways, from slow, unreliable ferries to suspension bridges and tunnels, and from traditional street corner family groceries to supermarkets. And it is all happening within a matter of a few years. The scope and speed of economic and social transformation are unprecedented anywhere in Asia, and perhaps even in the world.

What is the micro impact of this rapid transformation on Chinese families in Pudong? On their values and aspirations, and on relations within the family as well as relations with neighbors in the local community? What are the macro ramifications on the community as a whole, and even on the larger Chinese society of which Pudong can be viewed as a test case? Hiroshi Akuto, Professor and Dean of the Graduate School of Sociology of the University of Tokyo, and Godwin Chu, Senior Fellow at the East-West Center in Honolulu, got together in the fall of 1994 and prepared a research proposal. Funding was provided by the Japanese Ministry of Education to conduct empirical research in Pudong. Presented in this paper are major findings from an anthropological field study of 131 families in Pudong conducted from late 1995 to early 1996. A statistical analysis based on a sample survey of 1,000 respondents conducted in Pudong in early 1997 is being prepared separately and will not be reported in this paper.

Research Planning

We began with a preliminary planning meeting in Shanghai in May 1995 attended by Akuto, Chu, and two Chinese sociology professors. We agreed on a research conceptualization, that is, an in-depth study of the impact of rapid economic development on Chinese family. After an extensive discussion we opted for an anthropological field study approach as the main body of our research, to be supplemented by a random sample survey. A sample survey alone is inappropriate for assessing change or impact. Using in-depth field interviews, it would be possible to elicit information from the respondents regarding changes in family lives and probe for elaborations. From their experiences and responses, we can assess the ramifications of the Pudong development in a broader societal perspective. However, a sample survey could serve as a benchmark, to be followed by a subsequent survey for a longitudinal comparative analysis. Thus we did plan a random sample survey, although the results will not be reported here.

For the anthropological field study, a tentative research framework was worked out to serve as an operational guideline for pretests. In October 1995, Akuto, Chu, and four Japanese professors, Hirohisa Suzuki, Sumiko Iwao, Fumi Hayashi, and Masako Nakamusa, met in Shanghai with our Chinese research collaborators to review 14 pretests of in-depth family interviews conducted in three locations in Pudong. The pretest findings confirmed the fruitfulness of the anthropological field study approach and suggested ways of refinement. The group worked out a sampling plan for a total of 120 family interviews. Field work began immediately after the October 1995 review session and was completed in February 1996.

Sampling Areas and Interviews

The sampling areas were selected on the basis of (1) geographical locations in Pudong, in terms of proximity to the newly developed urban center along the Huangpu River, (2) housing types, whether old row houses in narrow alleys, mostly in slum areas, traditional rural houses, or recently built apartments, and (3) economic strata, high, medium and low. These criteria were approximations, following the expert advice of one of the Chinese researchers who was a native of Pudong, and local government officials. The criteria overlapped to some extent. For example, families in traditional rural houses lived far away from the new urban center and tended to have low income.

Altogether 131 families were interviewed, including 33 native Pudong families who had recently moved to new apartment buildings, 37 native families who had not moved, 57 families who had relocated from metropolitan Shanghai to apartments in Pudong, and 4 families who had recently moved to Pudong from locations outside Shanghai. The families were selected not on a strictly random basis. In each sample location, the interviews generally began with a family known to one of the researchers or assistants. This way, our field workers were able to gain entry into the neighborhood community without arousing suspicion. This approach was particularly useful in the slum areas where the residents were generally suspicious of any outsiders who came to ask probing questions. From there the field workers branched out in the neighborhood by randomly selecting houses and apartment units. The field worker identified himself or herself as

someone from the university and said he or she had just talked to so and so in the neighborhood about how things were in Pudong, and would like to chat with this family. A small gift was presented. The field worker was generally well received and the interview began. The interviews were conducted either in the evening or on Sundays.

The interviews were conducted with the family unit as a whole, including the parents and teenage children, generally one per family. Some families had no teenage children. Most interviews lasted from three to four hours. A few interviews took more than one session. The Chinese professor who was a native of Pudong did about 30 interviews. The other interviews were conducted by his students in the sociological department, who were also Pudong natives. The interviewers had a topical outline, but let the interview proceed according to the flow of conversation as long as all topics were covered. Typically, one of the parents was more articulate. He or she would do most of the talking, while the spouse and the teenage child would offer an elaboration or an example, and sometimes a disagreement. Most family interview protocals were between 6 and 8 single-spaced typed pages (in Chinese), although a few were only 4 to 5 pages, mostly in families whose members were inarticulate and had relatively little to say.

Major Findings

No statistics were computed for the in-depth family interviews. Because of small sample sizes, comparisons between and among subgroups were not considered meaningful and none were made. Our findings, based on general impressions from the interviews, are organized under three major headings: (1) family living conditions, (2) family relations, and (3) neighborhood relations and community affairs. These findings are presented not as definitive answers to our research questions, but rather to illustrate major trends of change and offer insight and understanding about problems of rapid development in Pudong.

***Family Living Conditions*:**

All families that had moved from rural housing to apartments had occupational changes. They were no longer farmers. Older people retired and lived on subsidies they received from the government through funds provided by the joint venture factories that had taken over their land. It was those factories, not the government, that provided funds for building their apartments. Young people got jobs in factories, as either factory workers or janitors or other low skilled laborers. Nearly all of them preferred their salaried jobs to farming.

We had expected that some of the farmers would miss their agricultural work that had roots in the land. If anyone had that feeling, none revealed it during the interviews. Even the old, retired farmers seemed contented with their current living conditions. It may be noted that those native families that had not yet moved were still living in their old rural houses. They were no longer planting rice. It seemed pointless to do so because they did not know when they would be told to relocate. In fact the surrounding rice fields looked abandoned. Most of these families were already living on subsidies provided by the factories. Others had recently received salaried jobs. They all knew that some of their friends and relatives in neighboring communities had moved into new apartments, and they looked forward to that date with high expectations. Those

families that had moved to Pudong from Shanghai retained their old jobs. In a quite few families the young adult children acquired new jobs in Pudong. All families who had moved had better housing, complete with gas stoves, running water and toilet facilities. Many had bought new furniture, color television sets, and stereo equipment. There was an obvious pride in their new homes.

Income had increased significantly since the late 1980s, especially in the last few years. In one native family, both the husband and the wife were school teachers. Back in 1979 each received Y36 a month. Now their combined wages exceeded Y1,500. Their son had started a chemical supply business in town and was making good money. He gave his parents sometimes Y500 and sometimes Y1,000 a month. He was building a new two-story brick home next to the bungalow which he was renting. He had a van and often took his parents and his wife and pre-school daughter out for a ride in the country on Sunday. The old parents, who were close to retirement, lived rather comfortably in their new apartment. What this family had given up was their ancestral home, handed down to them by their great grandfather but now levelled, and some small plots around that old house. They did not seem to miss that. As the wife put it, "we are quite happy with what we have."

With increased income, many families had bought new appliances, mostly refrigerators and wash machines, but no dryers. About one third of the families had telephones. Nearly all families, except those still living in outlying villages, had ready access to a telephone in the neighborhood. As one family told it, when the government introduced the telephone service about four years ago, few families submitted applications, partly because of the fees, which were rather low during the incentive enrollment period, partly because they did not see why they would need a telephone. What for? This family took up the offer and had a telephone installed. Now most families realized the advantage of having a telephone, but the fees had gone up significantly and there was a long waiting period. People used the telephone a lot, some for business transactions, but mostly for talking to friends and relatives in Pudong and Shanghai. Out of the 131 families interviewed, only one had a computer and a printer. This family had moved to Pudong from Shanghai.

People were spending a smaller percentage of their family income on food in the last few years, although few could say how much less. When pressed for an estimate, the typical answer was "hard to say." Back in the 1970s, nearly the entire family income went for food, with little left for clothings and other expenses. In food expenses, now people spent more money on fruits and vegetables than on meat. In the past, people in villages grew their own vegetables, and rarely had fruits like oranges and apples, which were not readily available on the market and were extremely expensive. Meat was served on special family occasions and festivals. Now fruits have become a common dietary item.

Transportation in Pudong has improved greatly with the construction of main highways and many concrete roads. A trip to Shanghai city center used to take more than two and sometimes three hours, depending on the availability of the ferries across the Huangpu River. Now with the construction of four main bridges and three tunnels, the trip takes less than one hour. Getting across the river used to require one hour or longer. Now it takes about 15 minutes

at most by bus. But the demand of an expanding population has outstripped the improved facilities. People complained about the insufficient public transportation.

With rapid urban expansion, environment has deterioted at an alarming rate. When people were living in rural villages, they used to dump garbage around the house and used it as compost for fertilizer. Now they lived in apartments but their habits had not changed. Garbage pick-up service was inadequate, and garbage was seen piling up around designated pick-up areas next to the apartments, attracting flies and stray dogs. There is a small river near the town of Chuansha, which is the county seat. Local people used to bail water from the river for drinking and cooking. Now the river has become a favorite garbage dump for apartments scattered some distance along the river. Creeks around town were filled with old abandoned barges and garbage. The stagnant water stank.

***Family Relations*:**

Interestingly, most people said the Pudong development had no or little effect on their family life. This is obviously not true, as seen in changes in living conditions which we have discussed above. What our respondents referred to was the close family cohesion which our interviewers observed in practically every family they visited. This close family cohesion did not seem to be something put on for the visitors from the university. The Chinese professor who organized the field work and did some 30 interviews himself and his assistants all reported a warm and close relationship between the parents and their children. In some families young adult children who worked were living with their parents, largely because of lack of housing. They contributed to the family expenses. In a few families, the grandfather or grandmother was living with the family and seemed to be well taken care of. In quite a few families, the wife volunteered the information that the family was sending money to help with their aging parents. Old parents who lived elsewhere in Pudong were regularly visited. The traditional Chinese virtue of filial piety did not seem to be abandoned, although the extended family under one roof has physically disappeared.

The growing demand for running a family business, an increasingly common phenomenon in Pudong in the last few years since development started in 1990, has created a problem of child rearing. Both young parents are busy, and yet there are no reliable facilities for taking care of small children during the day. We mentioned earlier the son of two old school teachers who was managing a successful chemical supply business. He entrusted his pre-school daughter to the care of his mother, who was semi-retired. Another young couple were not that fortunate. The husband had to travel to other cities most of the time, and the wife spent the whole day managing the store. The grandparents were not around and there was no one to look after their son, who was six years old. They approached a relative, a retired university professor who lived in Pudong, and offered him and his wife Y1,500 a month for looking after their boy. Living in the home of a professor, they felt, would be beneficial to the upbringing of the boy. The offer was rather attractive. But after much consideration, the professor declined the offer.

Teenage children enjoyed a high degree of autonomy, possibly a reflection of social change in general, perhaps accelerated by Pudong development, rather than a direct impact.

Almost without exception, parents would let their children choose their own marriage partners, although many would like to be consulted. Also, most parents would like their children to go to college, and would be more than happy to provide financial support. But they would not impose their wish on their children if the children did not want to. Although a college education received high esteem among the parents, many realized that going into business had a much better chance of making money and living a comfortable life. We did not get the impression that a college education was high on the agenda of most teenage children in families our interviewers visited. Typically, young girls would like to get a job in one of the banks or commercial firms in Pudong's newly developed urban area. If getting vocational training would be helpful, they would do it. But few showed an interest in college. Boys were less certain about what they would like to do, and few mentioned going to college.

One impact of the Pudong development on family life was rather obvious. Before 1990, there were no karaoke parlors or disco dance halls in Pudong. There was an old movie theater in town, showing third run movies. People went to Shanghai if they wanted to see a movie. Teenage children rarely went to Shanghai. Now karaoke parlors and disco dance halls were everywhere in town. Several of the new restaurants offered karaoke facilities. These establishment have become favorite places for teenagers to get together on weekends, and sometimes even during the week in the evening. Most parents did not like the idea, but could do little about it. This has become a common source of argument, generally between the mother and the teenage daughter. Boys seemed to have more latitude. If they stayed out late, the mother would say nothing.

Inter-generational differences were commonly observed in the families our interviewers visited. Parents and teenage children differed significantly on dating, marriage, sex mores, divorce, and even on living together before marriage. Most parents, even though themselves relatively young, grew up in years before China opened its door to the West and held somewhat traditional views. They had rather strict sex mores and disapproved pre-marital and extra-marital sexual relations. Dating would be tolerated only as a prelude to marriage, a period of getting acquainted before a couple are married. Marriage is something a couple enter into for life. Even if there are serious contentions, the couple should stay together for the sake of children. Premarital chastity is a serious matter. Living together before marriage is a definite taboo, something considered shameful and unforgivable.

Typically, their teenage children thought differently. To them, traditional sex mores did not seem highly relevant. Dating, known in Chinese as "going out with someone," is simply a get-together between a boy and a girl, with no commitment whatsoever. Perhaps one or the other may have some expectations, but either side can back off. If a young man and a young woman are in love and plan to get married, they see nothing wrong about having sexual relations and even living together. If a husband and a wife could not get along, they felt a divorce would be the right thing to do whether or not they had children. "Why live together and suffer?" as one teenage girl put it. Few teenage children would want to discuss premarital chastity, certainly not to a stranger in front of their parents. A few boys said "it depends" when asked. No girls offered to say anything when this topic was brought up by the interviewers with their parents.

The younger generation also seem to be more independent and assertive than their parents. Some knew their parents disapproved their frequent visits to karaoke parlors and disco dance halls, but they went anyway. If their parents had different opinions about their choice of a marriage partner, they would ignore the parents' objections and do it their own way. Regarding Pudong development, most parents saw more positive than negative sides. Most teenagers showed little interest in problems of Pudong development. Of those who showed an interest, their views were mostly negative and critical.

In daily life, the inter-generational differences came up most pointedly in watching television. Television has become a prominent family pasttime. Every family we visited had a TV set, mostly in color. Quite a few families had two sets, one old black-and-white set which they did not give away, and a new large color TV set. Typically, the father liked to watch sports and news. The mother preferred Chinese soap operas, which their teenager hated. Teenagers wanted to watch MTV. Whenever they were home and not doing home work, they listened to rock music on the stereo set, which drove the parents crazy. Rock music became a constant source of quarrel in the family, but life seemed to go on with it, whether the parents could tolerate it or not.

Inter-generational differences are also reflected in divergent degrees of material aspirations by parents and children. By and large, most parents were quite satisfied with their improved material life. This can be best illustrated by the story told by a retired college professor. During the years of famine after the People's Commune fiasco of 1958, officially known as Three Years of Natural Calamities, the family had barely enough to eat. One day our respondent took his two small children, a boy and a girl, out to visit a relative. He saw a vendor selling tea leaf eggs, a rare sight in those days. The children just stood there, staring at the eggs. They were hungry. So was he. All he had with him was 50 cents, the last cash he had before the next pay day, enough for just two eggs. He bought two eggs, and gave one to each child. They wanted to share with him, but he said he was not hungry. The children ate the eggs while he watched. He said to this day, his children remembered the eggs. His eyes were wet as he told that story. He was so grateful for what he had now, a spacious two-bedroom apartment, nice furniture, a color TV set, appliances, ample time in retirement for reading and writing, and two successful children.

The younger generation did not go through that kind of agonizing experience. They knew nothing about sufferings of the past. They just wanted to enjoy life. They wanted all kinds of material possessions, and could barely wait. Two teenage children of a factory engineer may be typical of this trend. The boy had one year to go before finishing high school. He was not sure what to do next. But one thing he was sure of. When he grew up, he would want a Western style two-story house. And he would want a brand new automobile. His younger sister shared his desire for an automobile, although she was less certain about a Western style house. She seemed more interested in fancy dresses. Neither of them had any idea as to what they must do to achieve their material aspirations.

Neighborhood Relations and Community Life:

Neighborhood relations among Pudong natives have clearly deteriorated. When people were living in a rural neighborhood, they not only saw each other almost daily but also helped

each other whenever a family was in need. Neighbors regularly visited each other to chat, and sometimes brought food to share. Now that they live in apartment buildings, they hardly see each other. Not all former neighbors were assigned to the same buildings. So not all families in a building knew each other. Former neighbors still visited each other, but much less frequently. An interesting phenomenon is that people living on upper floors tend to visit neighbors living on lower floors, not vice versa. Thus the new physical ecology seems to make a difference.

Neighborhood relations in the slum area known as Yin's Family Circle remained close because the residents did not move. It would be years before new developers would want their land and require the slum area residents to move. One reason given was that there were too many families crowded into that congested slum area. It would cost the developers too much money to acquire their land.

Pudong natives used to be looked down upon by residents in metropolitan Shanghai. They were considered ignorant country hicks. In the early 1970s the Shanghai municipal government started to build a few apartment buildings in Pudong in an experiment to move some families away from the congested city. The response was disappointing. A popular saying in Shanghai at that time was: It's better to keep a bed in Shanghai, rather than have a new apartment in Pudong. That was a time when there were no bridges or tunnels, no new roads, and no shopping centers. Those new apartment buildings put up by the municipal government were surrounded by waist high weeds infested with mosquitoes. Electricity and water supply were erratic. The situation today is entirely different. All Pudong natives rejected that popular saying as sheer nonsense. Local residents take pride in the nationally publicized Pudong development. They are particularly proud of a magnificent looking television antenna structure recently constructed on the Pudong side of the Huangpu River. Known as the Pearl of the Orient, it has become an instant tourism attraction.

While people were proud of the new Pudong, they felt that the government was putting too much effort into high rise new office buildings and neglecting the cultural side of life in Pudong. Quite a few respondents complained about the lack of a good library in Pudong. In fact, the one public library in town was so small, and the books were so old that hardly anybody was going there. Others felt that the young people in Pudong would need a modern sports center where they could release their energy in healthy sports, rather than going to disco dances and karaoke parlors. There is still no first class movie theatre in town. Quite a few respondents pointed out that there is no university in Pudong, even though the population is rapidly expanding. There are few good high schools. The lack of a good hospital and health clinics was another complaint. For anything serious, people still have to go to Shanghai to see a doctor. Inadequate public transportation was a common concern for nearly everybody, whether young or old. Taxicabs were plenty, but still too expensive for the local people.

Law and order in Pudong seriously deteriorated in recent years, especially in newly developed urban and semi-urban areas. Thefts were commonplace. Bicycles and small motor bikes were favorite picks. There was a general fear among local people, especially girls and young women, about going out alone in the late evening. Local people blamed migrant construction workers who had come to Pudong in large numbers from other regions. This may or

may not be true. However, two structural changes under the current economic reform policy should be noted.

When Pudong was still a semi-rural community, the neighborhood committees, which the government introduced way back in the 1950s, kept an eye on what was going on in the neighborhoods. The neighborhood committees derived their power largely from the fact that nearly every family in town was on some form of government payroll. The neighborhood committees were the arms of the local government reaching into the lives of ordinary citizens. Now the situation is different. Many people no longer work for the government but make their own living. With change in the economic structure as well as in the political environment, the neighborhood committees were no longer functioning in the way they were, even though they still existed in name. The fact that many people now live in apartment buildings further distances themselves from the defunct neighborhood committees.

Before the People's Communes were abolished in China in the early 1980s and the land leased to the farmers, rural families in Pudong were organized into agricultural production teams, which regulated virtually the entire lives of families within a production team, economically, politically, and even socially. Everybody knew everyone else in the production team, and outsiders were immediately spotted. Now this structural body has vanished. Rural people work and live on their own. There is little to bind them together, except some curtailed kinship ties and what remains of the increasingly distant relations among neighbors. With the agricultural production teams gone, their latent function of maintaining law and order has evaporated.

The negative social impact of these two structural changes is most likely widespread elsewhere in China. The rapid process of development in Pudong has inadvertently made the negative impact more accentuated and more poignantly felt. The limited police manpower in Pudong was simply unprepared to handle the newly created requirements of law and order. This problem seems to be a necessary price to pay as Chinese society moves from tight state control to local autonomy in the process of development.

With deteriorating order and law, there was common dissatisfaction with the Pudong district government. Many respondents openly complained about government inefficiency. Garbage pickup was a common complaint. People missed the clean water in the river of the past, and could not stand the smell coming from the stagnant water in creeks. Their impression was that the government seemed to be perpetually digging up the roads for something, whether to put in water lines or sewerage pipes. There was no planning, as one respondent observed. Several people remarked that if everything was done correctly at one time, then government cadres would have less opportunity to make money. Soon after a new road was completed, holes and cracks appeared almost immediately. Many complained about what they considered to be rampant corruption. "It is just getting out of hand," as one respondent put it, "and nobody seems to care " No one could offer any concrete examples, but several people mentioned the huge amounts of money involved in road construction and the laying of water lines and sewerage pipes. They also suspected that local officials were involved in land purchase before a road was planned. They knew that the farm land value would go up astronomically when a road was built.

What is truly surprising is that many local residents not only seemed knowledgeable about corruption and other problems of Pudong development, but would talk openly to a stranger during a casual interview without any fear of retaliation. When asked how they got to know these things, a common response was: People talked about them when they got together. The central government in Beijing periodically launches an anti-corruption campaign. Occasionally, a big shot was exposed, such as the former mayor of Beijing two years ago. What is lacking in Pudong, and in other places where large projects of development are being undertaken, is an institutionally sanctioned channel for airing public opinions and grassroots complaints. Shortly after the downfall of the Gang of Four in 1976, the *People's Daily* started publishing letters to the editor that criticized government inefficiency and even exposed police brutality (Chu and Chu, 1983) That was during the couple of years when Hua Kuofeng was still in power. It was a brief spell of freedom of speech, possibly engineered to prepare for the return to power by Deng Xiaoping. The *People's Daily* has now lost its prominent place in the life of Chinese people. No such openly critical letters are published any more.

Discussion

We have discussed the impact of Pudong development on Chinese family in a broad context. Our findings touch on not only the family, but also the neighborhood and the community at large in which the family is a basic component. We are interested in Pudong as a test case to gain understanding and insight about what might happen if some day the vast interior regions of China should be economically developed.

When a primarily rural community is transformed into an urban area in the process of rapid economic development, such as the kind we have witnessed in Pudong, one concern is whether the pre-existing social stability might be jeopardized. People who are used to the relatively slow and uncomplicated style of rural life might feel that they have lost their familiar bearings in an urban society. Family cohesion and social stability may suffer. Our research findings suggest that this did not happen in Pudong.

The traditionally close Chinese family seems to hold together very well. It is possible that the age old ties of Chinese family are strong enough to withstand the disruptive forces of change. Perhaps some invisible strength in Chinese culture helps hold Pudong society together during the rapid process of development. If so, we need to ascertain what that invisible strength might be. We can hypothesize, but the findings from this research do not offer more than a clue. But more likely, we think the rural families in Pudong have fared well largely because of the relatively well planned transition from rural housing to apartment living, financed mainly by external developers which have acquired their land. Economically, the rural families not only have not suffered, but in most cases have prospered to some extent. Older people are able to retire, while younger ones have been offered jobs in factories. There is no question that livelihood in Pudong, especially among the rural families who have relocated, has improved significantly. We think it is these highly favorable economic conditions that are largely responsible for maintaining family cohesion and social stability in Pudong during the process of transition. These same conditions may not hold in the vast interior regions, which probably will not be able to induce foreign investors to offer such generous terms. If so, then we may face quite a different scenario.

To say that families in Pudong have remained close does not imply the absence of change. Indeed there have been major changes, most vividly observable in inter-generational differences. The younger generation, including both young adults and teenagers, are clearly more attracted to material goals than their parents. They demonstrate a tendency toward independence and autonomy. They seem to be quite outspoken and assertive. They are much less bound by traditions, especially in male-female relations and marriage. They do not submit to authority, as symbolized by their parents, if there are differences of opinions. Western popular culture, such as rock music, MTV and now karaoke, strongly appeals to them. These impressions confirm the findings from a large survey conducted in 1987 in metropolitan Shanghai and its surrounding rural areas (Chu and Ju, 1993). Whether the assertiveness of the younger generation might some day find its expression in the political arena remains to be seen. It is difficult to say whether these new attitudes and values of the young people are a result of the open door policy initiated in China since the early 1980s, or a reflection of the rapid development in Pudong in the last five years. Most likely, both have played a role. However, Pudong development has probably accelerated the rate of change by physically altering the social and economic environment in which the young people now live.

The main lesson we have learned from Pudong is not the sustaining family cohesion and relative social stability, nor the accelerating attitudinal change among the young people, interesting and important as they are. The main lesson, which we think will be applicable elsewhere in China, can be phrased in one question in a macro perspective. What happens when a locality is given both the resources and some degree of autonomy to develop its economy, seemingly on a grand scale and definitely at an accelerated pace, all in the absence of clearly articulated guidelines from a well-managed central power and effective local and central monitoring? The answer seems to lie in the systemic tension of transition lurking beneath an outward surface of prosperity and social stability. This tension is manifest, as our study has shown, in the widespread complaints about poor urban planning, government inefficiency and, worst of all, what is regarded as rampant corruption.

The problem is centered on the ambiguous roles of the government in a rapidly changing economic, social and political environment in China, from the historically old style of laissez faire, hands-off administration of the traditional past, to the totalitarian revolutionary control under the reign of Mao, and now the sudden outburst of unfamiliar tasks of economic development. Traditional Chinese society was founded on reciprocity in social relations buttressed by familial ethics and moral standards. Such a society was best suited to an agricultural economy, in which commerce and money played a secondary supporting role. The functions of the government were (1) to maintain law and order and (2) to stay out of the way of the morally sanctioned webs of reciprocity. In fact, as long as the government performed these two functions, societal stability would prevail. Corruption was tolerated as a necessary price and persisted throughout Chinese history.

The revolutionary regime of Mao changed all that. The singular role of the government was to engineer radical change in China, in political administration, economic system, social structure, and cultural values. The government, the Party behind it as its brain power, and the

Party-controlled communication media were Mao's main instruments of bringing about a new, revolutionary China. What happened from 1949, when Mao took over power, till his death in 1976 was history (Berstein, 1977; Cell, 1977; Chu, 1977; Chu and Hsu, 1979; Yan and Gao, 1985). The revolutionary role of the government under Mao outdid its traditional predecessor in two important characteristics. It held an unprecedented and tight reign over law and order. And it played down the role of money in society even beyond its rigid confines of the traditional days, to the point of almost total negation. Inspired by revolutionary ferver, government leaders from Mao down lived a sparse life. Senior level cadres enjoyed various kinds of special privileges in comparison to a life of poverty of the general population. But under the watchful eyes of a tightly structured surveillance, corruption was almost unheard of.

The economic reforms introduced by Deng Xiaoping, by abolishing the revolutionary model of Mao, has put the roles of Chinese government to a severe test, as our Pudong research has revealed. The days of laissez faire administration of traditional China had been long banished by some thirty years of class struggle and revolutionary campaigns under Mao. Also gone are the totalitarian controls in the days of Mao. Economic development means change, indeed major changes in the ways of manpower utilization as well as resource allocation. Because the government in China still controls both manpower and resources, it has to take up a vastly complex set of new roles that are totally unfamiliar to decision makers and administrators at various levels.

The road from underdevelopment to development is fraught with pitfalls. Deng's motto is learning by doing. Crossing the river by touching the stepping stones, as he put it. This would be fine as long as "touching the stepping stones" is all there is to it. One learns from one's mistakes and corrects them along the way. What Deng himself did not seem to be aware of is the possibility that a lot of money can be made, and made rather quickly, while one is crossing the river. The influx of foreign investment and huge government loans and subsidies can open the door wide for corruption, if there are no clearly specified rules governing the allocation of resources to provide the necessary check and balance. There must be rules about contract, about banking, about investment, about business licensing, about urban planning, about land acquisition and construction, to name a few. No such rules existed in Maoist China. Under Deng's economic reforms, the People's Congress has been enacting some rules and regulations. Because the current leadership in Beijing still resists a rule of law, these newly enacted rules are not only inadequate but also do not seem to be effectively and uniformly enforced.

When one hears those complaints from Pudong residents, one's immediate reaction is to blame the local officials responsible for implementing and administering the gigantic development projects in Pudong. This is certainly true, but it does not get at the root of the problem. In the absence of clearly spelled out rules and their impartial enforcement, as long as the opportunity for corruption is present, there will be local officials to take advantage of them. This will be true in China or any other developing countries. Blaming or even singling out some local officials for punishment, as we have seen now and then in China, is not the answer. The main lesson we have learned from Pudong development is not so much the rampant corruption by local officials, but rather, the crippling effects imposed by a political leadership which steadfastly refuses to implement a rule of law. What the Pudong experience has shown us is not the general,

commonplace notion about the importance of rule of law. That does not seem to be anything new. What is worth noting in Pudong are the concrete demonstrations of the negative impact, even when development projects are embarked upon under the best circumstances of ample investment and wholehearted government support, if there is an absence of rule of law.

In a macro perspective, this negative impact, disturbing as it seems, may have some positive implications, perhaps unforeseen, for China's future development in the long run. We assume that corruption does exist in Pudong. We further assume that not every one in the Pudong district government is involved in corruption. Indeed it would be reasonable to assume that the majority officials in Pudong are decent and above corruption. If ordinary citizens in Pudong know enough to complain about what they consider to be rampant corruption, then those officials who are not involved most probably suspect that something is going on, or may even know something about it. But they can do nothing. Nor would it be safe for them to say anything in public. They will feel frustrated, and most likely resent what some of their colleagues are doing. This accumulated frustration and resentment would need an outlet somewhere. Among the ordinary people, one outlet to release their frustration is the many cute and sarcastic popular sayings that circulate widely among Chinese people. But government officials probably see the problems in a somewhat different light. They must know that behind the huge loopholes for corruption is the absence of clearly specified rules and regulations and the lack of impartial enforcement. In other words, the root of the problem lies in the absence of rule of law.

We believe this belated recognition of the importance of rule of law is widespread among Chinese government officials at various levels. It is a recognition accentuated by the many problems which have surfaced during the process of economic development in China. An internal document, which was reportedly presented to the Party's Central Committee in December 1997, seems to suggest that problems of inefficiency and corruption at the local levels in recent years are finally generating pressure for political reform.

Entitled "China Needs New Transformation - A Proposed Agenda for Democracy," this was a 7,000 word long document drafted by a group of middle and upper middle government officials who were directly responsible for implementing development projects (Fang, 1998; Hsin, 1998; Liu, 1998). It called for popular elections of People's Representatives at different levels, for freedom of the press, for freedom of assembly, for reducing political interference in economic activities, and above all, for political justice and rule of law. There seems to be considerable credibility in overseas press reports about this document. That this group of middle and upper middle officials decided to draft this document and presented it to the Party's Central Committee suggests a major turning point in political reform in China, if the press reports are indeed true.

We certainly do not mean to suggest that the Pudong development had any direct input in the preparation of this document. Rather, we believe it is the awareness of these widespread problems, as manifested in Pudong and most likely elsewhere as well, that prompted these officials to finally speak out. If so, then the future of China may look quite different from what one may expect from the conventional perspective of a Communist regime.

References

Berstein, Thomas P. (1977) *Up to the Mountain and Down to the Countryside: Transfer of Youth from Urban to Rural China.* New Haven, CT.: Yale University Press.

Cell, Charles P. (1977) *Revolution at Work: Mobilization Campaigns in China.* New York: Academic Press.

Chu, Godwin C. (1977) *Radical Change Through Communication in Mao's China."* Honolulu, HI.: University Press of Hawaii.

Chu, Godwin C. and Leonard L. Chu (1983) "Mass Media and Conflict Resolution: An Analysis of Letters to the Editor," in Godwin C. Chu and Francis L. K. Hsu (eds.) *China's New Social Fabric.* London: Kegan Paul International, pp. 175-224.

Chu, Godwin C. and Francis L. K. Hsu (eds.) (1979) *Moving a Mountain: Cultural Change in China.* Honolulu, HI.: University Press of Hawaii.

Chu, Godwin C. and Yanan Ju (1993) *The Great Wall in Ruins: Communication and Cultural Change in China.* Albany, NY: State University of New York Press.

Fang, Juei (1998) "China Needs a New Transformation - A Proposed Agenda for Democracy," *Weekly Review of World Journal of New York*, No. 723, January 25-31, 1998, pp. 11-13. (Authors' note: Fang Juei, born in 1955 and a graduate of Peking University, was the author who drafted this important document, which was reprinted in full in the *World Journal of New York.* In 1995, Fang resigned from his position as Deputy Director of Fuzhou Municipal Planning Committee in order to assume an independent status to participate in public activities.)

Hsin, Tzai-tai (1998) "Listen to A New Voice within the Chinese Communist Party," *Central Daily News*, Taipei, January 14, 1998, p. 1.

Liu, Qing (1998) "Publication of First Voice Representing Official Opinions," *Weekly Review of World Journal of New York*, No. 723, January 25-31, 1998, p. 12.

Yan, Jiaqi and Gao Gao (1985) *History of the Cultural Revolution.* Tianjin: People's Publishing House.

２．中国側研究者によるケーススタディ分析

呉　聖苓，胡　申生（訳　張　清華）

2.1　「私は浦東人だ」

2.2　「私たちは浦東開発開放の受益者だ」

2.3　「調和安定は浦東新区家庭夫婦関係の実態」

2.4　睦まじい家庭は万事うまくいく

2.5　近隣関係：地域社会の精神文明度を測る物差し

2.6　その他

2.1　私は浦東人だ

「社会」1997年2月号

呉　聖苓
胡　申生

「浦東人」はかつて上海の下町住民

上海市民生活の中で従来から「上只角」（山の手）と「下只角」（下町）という言い方がある。「上只角」とは相対的に居住環境のよい地域を指し、「下只角」とは汚れ、散らかり、劣悪な居住区の代名詞である。浦西地域では「上只角」と「下只角」の境界線がいくらか曖昧という人が居るかも知れないが、しかし過去の相当長い年月において浦東を上海の「下只角」と見なすことにおそらく誰も異議を唱える人が居ないだろう。早くも１９６１年に浦東黄浦江沿いの地域が上海市楊浦区、黄浦区と南市区の一部になったにも係わらず、人々、特に浦西居住の上海人の目には浦東人はずっと田舎ものと映ってしまい、市民の間では「浦東の一室よりむしろ浦西のベッド一台がいい」という言葉が流行っていたほどであった。

ここ十年来上海市政建設の急ピッチの発展と地価の上昇に伴い、大勢の浦西住民が浦東に移り住むようになった。特に１９９０年４月浦東開発の中央政府の政策が発表されて以来、浦西住民が浦東へ移住するのがブームになった。統計によると、１９９４年と１９９５年の二年間浦西から浦東への移住者が107513人に達した。浦東新区自身の大規模な建設も加わって、浦東新区の人口構造と居住地域社会構造が大きく変わった。浦東新区住民の地域社会への帰属意識と自覚もそれ相応に変化した。そうした変化のシンボルの一つは浦東人＝田舎ものという考えが変わったことである。

「浦東人」としての引け目と空しさ

相当長い歳月の間にかなり多くの浦東原住民は「浦東人」だと名乗りたがらなかった。彼らは引け目を感じ、むなしかったようだった。浦東新区役所某部の部長をしている生粋の浦東出身中年男性は楊家渡北沼地のバラックに住んでいる。浦東人の話をするとき、「かなり昔から浦東の立ち後れに大変不満を覚え、心にかすかながら引け目を感じ、どうして俺が浦西に生まれなかったかと悔やんでい

た」と語った。上南五村に住む陳さんも似たような経験を持ち、浦東人について次のように語った。「浦東は川沿いやその周辺を除いて、まるで田舎そのものだ。浦東人として心の中で劣等感を持っていた。浦東生まれはもう変えらない事実だが、息子についてはできるだけ彼を浦西の方に近寄らせようと浦西の学校に入学できるように工夫を凝らした。」かつて東呂路に住んでいた中年女性の余さんが中学時代を思い出して次のように言った。「同じく黄浦区なので、クラスには浦東と浦西の人が半々だった。浦東の人たちはなまりがひどかったので、よく浦西の人から田舎ものだとからかわれていた。だから浦西のクラスメートの前でいつも引け目を感じていた。」

上記のような浦東人としての引け目と空しさは浦東住民全員にあるとは言い切れないにしても、かなり代表的なもので、浦東開発前の浦東住民の帰属意識と自覚が相当弱かったことを物語っている。

浦東人＝田舎もの

一部の浦東原住民が浦東出身を恥じるのは事実だが、様々な原因で、不本意ながら浦東に移住した浦西の原住民の中に浦東人＝田舎ものという偏見を持つ人も数多くいた。灘坊六村に住む陳女史はもともと浦西南市区城皇廟付近に住んでいたが、結婚後浦東新区の住民になった。彼女は当時のことを振り返って言った。「結婚当初浦東に移って、適応できなくて失落感が募るばかりだったわ。結婚前の不安が的中したと思った。恋愛の時、彼は何でもよかったが、ただ一つ浦東人だったのが気に入らなかった。だから長くつきあったのに、なかなか結婚する決心が付かなかったの。」面白いことに、この女性は以前浦西南市に住み、「上只角」とは言えなかったのに浦東人を見下げて、危うくご主人と結ばれないところだった。

上海海運学院のある助教授が浦東で住宅を割り当てられた。引っ越しを巡って家族の意見が分かれてしまった。助教授は落ち着いて研究できるとの理由で即刻引っ越すべきだと主張した。が、妻子は浦東のような田舎にはとても住めないと反対した。お互い譲らないまま、教授は一人で浦東の新居に移り、妻子は浦西の旧居に居座った。そして二年経った後、一家はようやく黄浦江東岸の新居に同居

できるようになったのであった。今私たちは浦東人に対する浦西の人たちの偏見や無知を思い起こすとおかしくて笑ってしまうが、それが当時少なからぬ浦西の人々の本当の考えを反映していたものだった。例えば、長期にわたって、教育に携わっていた陳先生は率直に次のように認めた。「浦東入居前は確かに浦東の一室よりむしろ浦西のベッド一台がいいと考えていた。浦東と浦西はまるで田舎と都市の違いだ。自分も浦東人を田舎ものだと思っていた。」

当然浦東に対する浦西の人たちの不満は偏見によるほかに、過去において、浦東は各方面で、事実立ち後れていたこととも関係があった。「当時延安路トンネルはまだ開通していなくて、交通が不便で、商店が少なく、娯楽施設がもっと少なかった。夜になると行く場所がなかった。浦西に比べて、浦東は田舎臭かった。」と１９８７年に浦東に移住した蒋女史が言った。ある大学で教師をしている孫さんの話によると、彼が浦東に移った時、数人の同僚も同時に同じ浦東で住宅を与えられた。しかし、彼らは浦東の教育レベルが低く、子供の進学に悪いのを理由に、どうしても引っ越したがらなかった。また、民生路海院新村に住む呂さんは１９８３年に浦東に移ってきたが、口喧嘩や殴り合いがしょっちゅうあったと浦東の治安を嘆いていた。こういった話は枚挙に暇がない。浦東人に対する考えは偏見だが、お陰で、浦西からの入居者はなかなか自分が浦東人だと認めたがらなかったのであった。

「浦東人」は地域社会帰属意識と自覚のシンボルマーク

浦東が開発開放の時代列車に乗って、着実にひた走りに走って、早七年になった。今日浦東は急速な発展によって、世界から注目されている。浦西の人の差別を受け、自らも劣等感を持っていた「浦東人」には付加価値が付き、浦東新区の地域社会への帰属と自覚のシンボルマークになった。

浦東の人をださいと思っていた蒋女史は浦東開発の日進月歩の発展を見てプライドを持つようになり、浦東の開発建設に大変関心を寄せ、毎日帰宅すると「新民晩報」のコラム「浦東の今」を必ず読んでいる。

かつて浦東生まれを悔やみ、引け目を感じていた呉さんは浦東は面目が一新した。浦東の人の観念、意識、そして行動様式は大きく変わった。あと二、三年発

展すれば浦西との格差が完全に消えるだろうと自信満々に言い切った。

以前子供をできるだけ浦西に近寄らせようとしていた陳さんは「七年の急成長で、浦東の人の劣等感はとうに消えてしまった。浦東の発展の勢いは凄まじい。ここ数年、市中心の住民が市政の区画で浦東に移り住めるようになったのは本当にラッキーだ。浦東開発の見通しがよく、浦東の地位は昔と比較にならないほど高まった。」と言った。

目下雲台路伊家園に住む住民の居住状況が他の地域に比べ、まだそれほど改善されていないが、しかし、彼らは将来に明るい見通しを持って言っている。「浦東の全体像が大きく改善された。浦東の地位は過去より大きく高まった。以前のような、田舎に住んでいる感じがすっかりなくなった。浦東人の地位が大幅に高くなった。」

私たちのインタビューの中で、多くの住民が浦東人を語るとき誇りという言葉を使った。かつて浦東の人を田舎ものと見なしていた陳さんはとっくに家族とともに浦東に移り住み、浦東の住民として誇りを感じると言っていた。

例の妻に、何でもよかったが、ただ浦東人だけが気に入らないと言われた王さんはインタビューに答えた。「浦東は数年の開発で、交通がだいぶ改善された。商業施設も逐次に整備され、一部ではもう浦西を越えた。例えば、第一ヤオハンがオープンしてから、浦西の人まで買い物に訪れる、新しい観光スポットになっている。過去では全く考えられないことだ。浦東のイメージが変わった。浦東住民の考えも変わった。今浦東の住民として確かに誇りを感じている。」

社会学者が言うには、地域社会の発展を判断する重要なシンボルの一つはその地域社会に対する住民の帰属意識が強いかどうかを見ることだ。地域社会の帰属意識は地域社会形成と発展の重要な要素だといえる。浦東開発七年の実践によって証明されたことだが、浦東在来の地域社会の居住構造と人口構造が大きく変わったにも係わらず、喜ばしいことに、新しい地域社会帰属意識と自覚がすでに形成されつつある。古くから浦東に住んでいる「古参浦東」だろうと、浦西から移住してきた「新米浦東」だろうと、浦東人に対する見方を訪ねられたら、彼らは躊躇なく且つ誇り高く言うであろう。「私は浦東人だ」

「社会」1997年３月号

2.2 「私たちは浦東開発開放の受益者だ」

（上海）呉　聖苓
胡　申生

浦東の開発開放六年余りの間に浦東住民の地位は人々の心の中で、確実に高まった。昔から黄浦江東岸に暮らしてきた「古参浦東」も、浦西から移住してきた「新米浦東」もみな浦東人として誇りを感じている。こうなったのはひとえに浦東住民の家計に大きな変化があり、大概の家庭は浦東の開発開放からメリットを享受し、受益者になっているからである。

統計データーに見る家計の変化

最新の「96年浦東新区社会発展報告書」によると、１９９５年浦東新区住民の所得はいずれも増加した。会社員の賃金総額は80.30億元で、前年より32.2%増え、一人当たりの年収は9995元で、26.4%伸びた。同時期農民の所得総額は20.60億元で、一人当たり4148元で、16.4%の伸び率であった。都市、農村住民の増収につれ、浦東新区銀行の預貯金額は大幅に上昇し、１９９５年末現在住民の預貯金額が182.04億元に達し、年初より65.86%増えた。

同じ結果は私たちが１９９６年８月に行った浦東住民1000所帯に対するアンケート調査にも現れている。

私たちのアンケートの中には「本人と家庭の経済状況は５年前と比べ、変化がありますか?」という設問があった。浦東開発開放と浦東住民の家計の関係を調べるのが目的であった。アンケートの結果によると、「大きな改善があった」と答えたのが107人で、調査対象者数の10.2%を占める。「改善があった」は497人で、49.7%を占め、「大体同じ」は282人で、28.2%を占め、「やや悪くなった」は97人で、9.7%、「だいぶ悪くなった」は17人で、1.7%を占めている。「大きな改善があった」と「改善があった」を合わせると604人で、60.4%を占めることになる。調査結果は浦東新区住民の家計がこの５年間改善され、高くなった現状を反映したと言える。また、浦東住民が自分の家計改善を認めていることも証明した。

家庭所得は新しいステップに

上記の統計はデーター羅列で、無味乾燥の嫌いがあるとすれば、普通の住民がどう言っているか見てみよう。

これは万徳路羅山新村に住む極普通の三人家族で、生粋の浦東原住民なのである。浦東開発の証人として訪ねたら、ご主人は次のように言った。「１９７９年前後、うちは食べるだけで精一杯でした。しかし、浦東開発開放の今では、小康レベルにだんだん近づいています。」そこで、奥さんが付け加えて言った。「１９７９年頃はうちの生活は余裕がなく、清貧という感じでした。夫婦二人の収入は月１２０元ごらいしかなく、家電と言えば１４インチの白黒テレビとラジオだけでした。平日の食卓は精進料理ばかりで、肉や魚は日曜日だけ、お菓子や果物も余り食べられませんでした。しかし、国が改革開放政策を実行して以来、家計は改善され、特に５年前浦東開発開放が発表されてから、家計は大きく変わりました。毎日肉が食べられ、日曜日はもっと豪華になっています。洋服なども色やデザインを好きに選び、白黒テレビとラジオはカラーテレビ、冷蔵庫、エアコンなどのような高級家電に取って代わられました。その上、毎月貯金しています。」大学生の娘が続いて言った。「むかしは祝祭日を楽しみにしてたわ。あたらしい洋服や靴を買ってもらえ、普段食べられないご馳走が食べられていたから。しかし、今はいつでも好きなとき洋服が買えます。ケンタッキーやマクドナルドで外食するのも極普通のことになっています。」家族三人の飾り気のない正直な話は争う余地のない事実であった。

私たちの調査訪問の中で、多くの家庭が素朴な言葉で同様な見方を示した。上南路1551弄に住む施さんは「うちにとって本当の変化は９０年代以降に始まったのでした。収入が大幅に伸びました。電話やエアコンが入って、家計は新しいステップに上りました。」と語った。大学に勤める陸さんは家庭食料品構造の変化から家庭生活の変化を話してくれた。「１９９３年以来、うちの食料品や野菜の支出は数年前の50%から現在の30%に下がりました。逆に果物や軽食品の支出は年々増えています。」また、東寧路に住み、上菱工場に勤めている普通の労働者の羅さんは次のように言った。「私たち夫婦の収入が大幅に増えたのは９０年代に入ってからでした。経済が好転したので、私たちの投資観念も変わりました。家

庭投資は多方面に広がり、銀行貯金の他に株や証券にも一部投資しています。」

家庭の消費構造は徐々に変化

経済学にはエンゲル定義というのがある。すなわち消費者の収入総額が高ければ高いほど、食料品に使われる支出比が少なく、その他、文化、教育を含む消費支出が多くなるというのである。調査では、多くの家庭が家庭消費構造の変化について語ってくれた。上南四村に住む陸さんは某運送会社に勤める普通の社員だが、なかなか問題分析力がある。彼は「以前うちの収入の大半は衣食に使ったが、今はかなり変わりました。家庭消費は基本生活需要の満足から家庭文化生活や娯楽生活需要の満足、生活の質の向上へと変わってきています。だから、うちは収入の中から相当の金額を新聞雑誌や書籍の購入に割り当てています。」陸さんはまた紹介してくれた。「娘はまだ１５歳で、中学校三年生ですが、わたしたちは彼女の趣味と勉学需要を満足させ、学校で学んだ知識を固め、広く教養を付けるためにかなり多くの金を使っています。」東昌路に住む奚さんは「家計の変化は家庭の消費構造に影響し、夫婦二人の趣味も多くなりました。妻は学歴が高くないが、ここ数年来、読書が好きになり、古典や現代の名著セット本も買いました。」という。一方、崂山四村に住む沈さんはある工場で技師をしている。彼は「９０年代浦東が開発開放になって以来、家庭の生活レベルが一段と高くなり、消費観念も変わって、生活の質と活性化を重要視するようになりました。」と言った。

浦東新区１９９５年度住民家庭消費実態統計によると、エンゲル率（収入総額に対する食料品の支出比）は0.491で、（96年浦東新区社会発展報告書を参照）全市の平均水準よりやや高く、まだ衣食中心型消費段階にある。しかし、浦東開発の進展と住民家庭所得の増加につれ、浦東住民の家庭消費が衣食中心型から小康型レベルに近づき、到達する日は必ず近い将来にやってくるであろう。

チャンスと努力

浦東の開発開放は多くの浦東住民の家計改善にチャンスと可能性を提供した。しかし、このチャンスをつかむには一人一人の努力が必要である。私たちの訪問調査では、浦東開発開放の恩恵を受けた家庭はみなこのような体験と感想を話し

てくれた。

徳平路に住む胡さんは今浦東にある広告装飾有限会社の社長をしている。月収が高く、家庭生活も円満である。彼はもともとある国有企業で文芸創作の仕事をしていたが、１９９１年潔く安定した職を辞め、ただ一人で浦東にやって来た。月収３００元の広告会社社員からスタートし、様々な困難を乗り越え、数年間頑張って、ついに会社林立で、競争の激しい浦東新区で成功した。東昌路に住む奚さんは浦東開発開放にもたらされた家庭の大きな変化に話が及ぶと、感無量の様子であった。彼は妻とともに浦東にある工場に勤めていた。１９９３年工場は重荷を減らすため、社員に営業部の請負を呼びかけた。各営業部を請け負った人が損得の責任を負う上、三人分の給料を負担し、そして事前に自社株を三万元買わなければならなかった。奚さんは思い切ってチャレンジした。数年の努力と関係者の協力で業績が伸び、工場の難局打開に貢献したばかりでなく、個人の収入も大幅に増え、家計が急速に改善された。自分の家計変化について、奚さんは「一に浦東開発開放のチャンス、二に自分自身の努力による。もし当時決心しなかったら、今日ほどの生活ができないだろう。」と話した。浦東新区市街区画監査部の呉さんは、もとは街路清掃担当の労働者だったが、その後、合法的な人材交流で現在の勤め先に中途採用で入った。１９９３年以降家計が著しく好転した。それと同時に、仕事と生活は過去よりずっとハードになり、プレッシャーや責任もますます大きくなった。しかし、彼は「このようなチャレンジが好きだ。何故なら、自分が浦東開発開放の受益者だから。」と楽観している。

注意すべき問題ーー貧富の差

浦東の開発開放で、大多数の住民の家計がレベルアップした。しかし一部の住民の家計はそれほど改善されていないのも事実である。浦東1000世帯アンケート調査によると、この五年来、家計が「やや悪くなった」は97人、被調査者総数の9.7%を占め、「だいぶ悪くなった」は17人、1.7%を占める。その原因は次の三つが考えられる。

第一、夫婦とも定年になり、収入が減少した。海運学院の助教授である鄭さんは１９９０年定年になり、２年後奥さんも続いて定年になった。鄭さんは「浦東

開発が公表された後、私ども夫婦は相次いで定年になり、近年の大幅ベースアップのメリットが受けられなかったばかりでなく、支出負担が一向に減らなかった。だから、家計はちょっときつい。」と言った。

第二、子供がまだ未成年で、養育費が高い。浦東大道2639弄に住む沈さんは言った。「１９９１年以降家計が変わり、収入が大幅アップしたが、二人の娘がまだ在学中なので、全体的に見て生活レベルは上海市の平均水準一人当たり５８８元より低い。」上南七村に住む張さんは月収１０００元、奥さんは５００元だが、大学在学中の娘がいるので、生活はどうしても裕福にならないと言う。

第三、家族には下崗（レーオフ）になったのがいる。雲台路尹家園に住む邱さんはアパレル業界の工場労働者だったが、収益悪化により、レーオフに出され、月２００元ぐらいの給料しかもらえない。奥さんが働く工場も赤字経営なので、家計は火の車である。邱さんは「家計は過去より明らかにきつくなりました。そして子供は在学中なので、こればかりの収入で生活を維持するのは至難の業です。」と指摘する一方、「自分や家族に対し、まだ自信があります。何せ、困難は一時的なもので、努力し続ければ、いずれよくなりますよ。」と明るい見通しを示した。

調査結果から見て、家計が「やや悪くなった」と「だいぶ悪くなった」は合計114人、総数の11.4%を占めている。比率が高くはないが、浦東新区の貧富の差が開いている現状を反映したもので、十分注意されるべきである。

「社会」1997年4月号

調和安定は浦東新区家庭夫婦関係の実態

呉　聖芩

胡　申生

家庭関係とは家族同士の関係、つまり家庭内人間関係を指す。夫婦関係は家庭関係の一つだが、家庭関係の核心であり、睦まじく、幸せな家庭を築く基礎である。浦東の開発開放で、浦東は未曾有の変化が起こった。この変化は家庭関係にも現れ、中でも最も注目されるのは夫婦関係の現状と変化である。

夫婦関係は良好

私たちは浦東の家庭について、１０００世帯のアンケート調査と１３０世帯の訪問調査を行ったが、いずれも夫婦関係を重要なテーマとして突っ込んだ調査をした。１０００世帯のアンケート調査中、夫婦同居の家庭は７５８世帯だった。これらの家庭はアンケートで夫婦関係は「良い」と答えたのが合計６３８世帯、被調査者総数の８４．２％を占め、「比較的良い」と答えたのが９９世帯、１３．１％を占める。「普通」と答えたのが２１世帯、２．８％、「余り良くない」はゼロであった。もし「良い」と「比較的良い」を合わせると７３７世帯になり、被調査者総数の９７．３％という高率である。

浦東新区家庭夫婦関係に対するこの調査統計結果は同時に行われた１３０世帯に対する家庭訪問調査によって、充分に立証された。調査された１３０世帯のうち３世帯の単身赴任を除き、１２７世帯は夫婦家庭、子持ち家庭、親同居家庭、いずれも比較的良好な夫婦関係を保っている。調査中、夫婦同席もあれば、両親や子供と一緒にインタビューを受けたのもあった。これらの調査対象者の年齢、職業、学歴、所得等はそれぞれ違いはあるが、彼らの話しと私たちの観察を通して、私たちは彼ら夫婦間の恩愛と家庭内の和やかな雰囲気を感じることができた。調和と安定、これが浦東新区の家庭関係の実態だと言えるのである。

裕福になっても別れない

中国には古くから「裕福になると別れやすい」という言葉があり、夫婦としてつらい生活を共にするのは易しいが、裕福な生活を共にするのは難しいということである。浦東の開発開放で、家庭収入が増えたのはいいことだが、しかし、夫

婦の所得格差が開き、結局仲の良かった夫婦感情にひびが入り、不倫になったりして、ひいては離婚してしまうケースもある。私たちは訪問調査で、このような問題についても数組の夫婦にインタビューした。彼らの見方とやり方を聞いて、私たちは浦東の家庭に対し、新しい認識を得ることができた。

東昌路に住む㊋さんは奥さんとは２０才前から同じ工場で恋愛していた。結婚後、双方とも低所得だったが、夫婦仲が良く、生活が円満である。浦東が開発開放になってから、工場の呼びかけに答えて、㊋さんは大胆にある営業部を請け負った。数年の努力で、収益が著しく、社会地位も個人所得も高くなった。以前毎日一緒だった夫婦は、いろんな面で違いが出てきた。奥さんはインタビューに答えて言った。「ここ数年主人の収入が確かに高くなって、外でのお付き合いも増えたが、夫婦の仲はそれによって影響されることはありません。主人は暇さえあれば前と同じく、買い物や洗濯などの家事を手伝ってくれます。」一方、ご主人は家庭所得の増加が夫婦間の趣味を多様化したという見方をしている。夫婦二人でよくダンスパーティに行っているそうである。㊋さんは「婚姻は要するに夫婦間の感情によって維持されるものだ。生活リズムの加速がかえって夫婦間の心の交流を親密にした。」と強調した。

徳平路に住む胡さんは数年前、ある大手国有企業を退職して、浦東にやってきた。最初は様々な困難があったが、奥さんの内助の功のおかげで、数年の努力で事業が成功した。今では、専用車や携帯電話を備え、羽振りを効かせている。
しかし、かれは妻の昨日の理解と支持がなければ、今日の自分の成功は語れないと強調し、「富豪になってはじめて愚妻のよさが分かった。」と軽口を叩いた。

夫婦付き合いにはこつがある

夫婦は毎日一緒で、同じ鍋のご飯を食べるので、いざこざも珍しくない。俗に言う「上下の歯も喧嘩することがあり、まして生身の人間だ。」したがって、夫婦仲を保ち、睦まじい家庭を築くには夫婦付き合いの芸術（こつ）があるのである。

上南四村に住む陸さんと奥さんは性格も趣味も大きな違いがあるが、仲よい夫婦である。その原因について陸さんは「私たち二人はいつでもどこでも自分の時間や好き嫌いをちょっと捨て、進んで相手の趣味に合わせている。これが夫婦仲

をうまく対処する潤滑油の役割を果たしている。」と言った。陸さんの言葉は性格や趣味の不一致でしょっちゅうもめる夫婦にとってよい参考になるであろう。

現在少なからぬ家庭の夫婦間不調和音は家計などが原因の他に、相手の束縛がきついのも原因になっている。長い間、夫婦間に一定の距離を置くべきかどうか、最適な距離はどれぐらいかを巡って、ずっと議論されてきた。インタビューの中で、海運新村の数人の大学教授達が夫婦共通の分野以外にお互い相手に少し「オアシス」を残すべきだ。この「オアシス」ではお互いかなり大きな自由を保証されると言及したのがとても印象的であった。教授の高先生はこう分析している。「夫婦はそれぞれ自分の事業と社交圏を持ち、生活に対し、自分の見地があり、独立性が比較的に強い。お互いに理解し合ってこそうまく行く。」家庭訪問調査の中でお互いに自由天地を認め合うと主張した家庭はそう多くはなかったが、夫婦関係をうまく対処するヒントとなる方法の一つであるに間違いない。

「夫は外、妻はうち」これまた夫婦付き合いの一つのパターンである。しかし、夫が外で忙しすぎて、長期間家庭を顧みない場合、役割分担で衝突し、ひいては夫婦仲の危機を迎えることにもなる。民生路に住む卜さんはある国有企業の部長をしているが、ふだん、忙しくて家事は殆ど奥さんがするそうである。しかし、卜さんは教えてくれた。「夫は外、妻はうち」というのは大体夫婦双方の仕事の性質によって決まったものだ。家庭の中で、夫婦は絶対平等であるべきだ。というわけで、卜さんは妻を尊重し、休みの日にはできるだけ多く家事をしている。彼の言葉を借りていうと、「普段のつけを返す」のである。この夫婦は長期に亘って、相思相愛を続けられているのは、卜さんの妻に対する理解と尊重とは切り離せないのである。

理想的な「彼」と「彼女」

訪問調査の中で、私たちは現実夫婦関係の他、心の理想像についても訪ねた。大方は素朴な言葉で心の中の理想的な妻や夫が備えるべき品性を話してくれた。

調査結果から見て、夫の理想的な奥さんは「優しくて、真面目」、「思いやりと素直」それに「料理と家事がうまい」という三点に集中し、容貌や経済条件に触れる人は殆どいなかった。一方、妻の理想的なご主人について第一に挙げられたのは、「真面目で正直」、第二は「頭が良く、まめに働く」、第三は「高所得」

であった。人柄は男女双方の目に共に最も重要に映っているのが明らかである。

ある大学で政党の責任者をしている黄さんは理想的なカップルについて独特な考えを持っている。「完ぺきな人はいない。だから夫婦はお互い補うのがベスト。自分の場合、仕事が忙しくて、家庭のことを考える時間があまりないので、妻に多くやってもらっている。」黄さんはまたつけ加えた。「夫婦は片方だけ事業に成功すればよい。相棒にも同じことを要求してはならない。夫婦ともに事業型だと、家庭は大体うまく行かない。」

ある会社で事務職をしている陸さんには幸せな家庭がある。彼は自分より妻の所得が高くなって欲しくないと率直に言った。「キャリアウーマンや自立性の強い女性は敬服されるけれども、大方の男性が求める理想的な奥さんではない。」と陸さんは指摘する。

灘坊六村に住む胡さんはある会社の副社長をしており、高所得で、家庭では絶対的な主導権を握っている。彼はインタビューで、「調和のとれた家庭はふつう夫の所得が多いか、少なくても夫婦同じでなければならない。もし妻の所得が優勢だと、その家庭は大半不安定だ。」と言いきった。同席していた、二人の大学卒の息子さんも父親と同意見であった。

社会の進歩と発展につれ、人々のつれあい選択観も変わりつつある。夫婦平等、相思相愛、尊重し合うというのがだんだん、睦まじく、安定した現代家庭構築の土台になってきている。しかし、夫唱婦随、亭主関白といった伝統的観念が依然として現代都市家庭に存在していることも否定できない事実である。

「社会」1997年５月号

2.4　睦まじい家庭は万事うまくいく

呉　聖苓　　胡　申生

家庭関係の中で夫婦関係がむろん主導の地位を占めるが、その他親と子供、お年寄りと嫁婿、お年寄りと孫、兄弟間の関係等も疎かにされるべきではない。俗に言う「睦まじい家庭は万事うまくいく」の通り、家庭の幸せと円満はまさしく家庭内各関係の調和と親睦の基礎の上に築かれているのである。

一連の家庭関係に関する統計データ

私たちが行った浦東千世帯に対するアンケート調査結果からみて、当面浦東新区住民の家庭関係は総じて言えば比較的にうまく行っていると言える。

調査中、親と子供同居の家庭合計８０１世帯のうち関係が「よい」答えたのは６７３世帯、８４．０２％を占め、「比較的よい」は１０５世帯、１３．１１％、「普通」は２２世帯、２．７５％、「あまりよくない」は１世帯、０．１２％を占めている。

舅姑と嫁同居の家庭１２８世帯のうち関係が「よい」と答えたのは９１世帯、７１．０９％、「比較的よい」は２６世帯、２０．３１％、「普通」は１０世帯、７．８１％、「あまりよくない」は一人、０．７８％を占めている。

義父母と婿同居の家庭４０世帯のうち関係が「よい」と答えたのは３２世帯、８０％、「比較的よい」は８世帯、２０％、「普通」と「あまりよくない」はゼロであった。

祖父母と孫同居の家庭１３７世帯のうち「よい」は１１３世帯、８２．４８％、「比較的よい」は２０世帯、１４．６０％、「ふつう」は４世帯２．９１％、「あまりよくない」はゼロであった。

上記統計の親と子供、舅姑と嫁、義父母と婿、祖父母と孫四種類の関係のうち、「よい」の順位は次に通りである。（１）親と子供、８４．０２％、（２）祖父母と孫、８２．４８％、（３）義父母と婿、８０％、（４）舅姑と嫁、７１．０９％。この結果は当面の上海家庭関係の現状を反映したものだと言えよう。

消費観念は家庭世代間断絶の焦点

親子の間は血縁関係なので、総じて言えば両者間の情が深い。しかし、親子と言えども二世代なので、年齢、趣味、経験と心理、生まれ育つ社会環境等がそれぞれ異なり、世代間のわだかまりと違いが生じるのは避けられない。いわば世代間断絶なのである。

私たちの浦等家庭訪問調査によれば、この世代間断絶は普遍的に存在していると言える。雲台路尹家園に住む徐さんは夫婦とも普通の労働者であり、所得も普通である。ふだん地味な暮らしをし、滅多に外出や買い物には行かず、被服や日用品の出費が少ない。夫婦には二人の娘がおり、上は２１歳、下は１７歳である。徐さんは取材を受けて、「二人の娘はちょうどおしゃれ好きの年齢になったので、出費が大きい。特に上の子はしょっちゅうカラＯＫやディスコに行くから、お金がかかる。」と嘆いた。崂山四村に住む沈さんは技師であり、二人の息子がいる。上の息子はすでに結婚しているが、両親と同居している。老夫婦は勤め以外はほとんど外出せず、余暇は家で新聞を読んだり、テレビを見たりして過ごしている。しかし、二人の息子と一人の嫁は家にじっといられず、よく遊びに出かけ、ボウリング、ダンス、カラＯＫなどして、娯楽消費支出が大変である。沈さんが特に理解できないのは、老夫婦が滅多にない外出の際も込み合うバスを利用し、できるだけ節約し

ているのに、息子や嫁は遊びで行きも帰りも格好を付け、タクシーを利用している。沈さんはこれを思うともったいないと言うが、子供たちから考えが古いと言われているという。金橋郷王家宅に住む李さんは元裁判所役員であり、すでに定年退職している。この老夫婦も息子嫁と同居しているのである。李さんが言うには、ここ数年、浦東住民の暮らし向きが著しく向上し、家庭所得が大幅に増加したのはよいが、家庭生活の中で、喜びの陰に一抹の不安もないわけではない。李さんは「息子と嫁は金の使い方が荒く、四歳の一人子娘のために数え切れないほどおもちゃを買った。中には数十元乃至数百元のおもちゃも多くあり、わずか数日で子供に愛想をつかれてしまう。」また、老夫婦はずっと自分達のための誕生祝いをしないのに、息子や孫娘の誕生日の度にホームパーティを開き、親戚や友人を招待しているという。

親子間の断絶は多方面にわたるが、消費観念やライフスタイルの相違は間違いなく最も代表的なものである。実の親子なので、二世代間の大きな矛盾にはならないが、一歩誤れば、家庭生活にマイナス影響を与えることになりかねない。定水路５０弄に住む、大学に勤める黄先生は「倹約精神を持つ親と快適さを求める子女の間に相違があるのは当たり前なことで、いかに対処するかが鍵である。二世代である以上、強引に一方を服従させてはならない。大同につき小異を残すのがベストである。家庭生活の中で、これができれば、多くの矛盾が簡単に解決されるであろう。」と指摘する。二世代の家庭生活における黄先生の「大同につき、小異を残す」説は私たちにとって、よい参考になるであろう。

嫁姑関係：家庭関係対処のコツ

嫁姑関係は家庭関係の中で最も難しい。俗に言う「嫁は姑の子ではないので、昔から扱いにくい」である。嫁姑の関係悪化は我が国家庭関係の中で突出した問題である。私たちが訪問した浦東家庭の中で、嫁姑関係対処の上で特筆すべき家庭が数世帯あった。

東寧路に住む胡女史は長期間にわたって、舅姑と同居してきたが、十数年来仲がよく、一度も喧嘩したことがない。取材の時、胡女史が紹介してくれたことだが、姑の性格は内向的で、人に迷惑をかけたがらず、人から邪魔されるのも嫌なのである。たとえそれが息子、嫁でも同じだ。胡女史は姑の個性を熟知しているので、付き合い上必要な礼儀以外、なるべく姑を煩わないようにしてきた。ふだん姑とは別々に料理を作り、ご主人が残業で家で夕飯を食べないとき、彼女は会社を終わって、子供を連れて、実家に帰って晩御飯を食べたりして、決して姑に迷惑をかけない。私たちは胡女史の姑さんにも話を伺った。彼女もお嫁さんとの十数年の付き合いに満足している。この組の嫁姑はお互い交流は少ないが、まさしくこの「距離」感が仲良く付き合う土台になっているのである。

潍坊六村に住む陳女史も長期間舅姑と一緒に暮らしている。若夫婦はふだん仕事が忙しく、家事と育児の重荷は舅姑の肩に掛かっていた。私たちの取材の際、陳女史はちょうどレイオフで休んでいた。急いで新しい仕事を見つけようとしない彼女は「これまで姑にはいろいろ迷惑をかけすぎた。嫁として借りた多くの借りをこの際せっかくの休みを利用して返すつもりで、よく舅姑に仕えたいと思う。」と気持ちを表した。陳女史の話はまだ続いた。舅姑の暮らし向きはよいが、彼女とご主人は常に気を使って、衣類や靴などを買ってあげたりしている。大した金額ではないが、毎度舅姑は心温まる思いがしたという。嫁としてこのような考えと孝行心があると、嫁姑間がうまく行くのも当然である。

浦三路お住まいの趙女史とその姑はともに大家族の担い手なので、日常生活では、いざこざが絶えなかった。その上旧式の住宅街に住んでいるので、近隣の噂が元々緊張した嫁姑関係に火に油を注ぐことになり、矛盾が深刻化し、家庭が崩壊寸前になった。趙女史の紹介によると、そのとき家族が緩衝材や潤滑油の役割を果たした。中でも特に重要なのはご主人である。姑の息子でもあるご主人は他人には代替できない役割を果たした。彼が血縁と婚姻両関係をうまく利用し、正しく「息子」と「夫」という役を演じることができたからこそ、有効に嫁姑関係が調整され、共同生活の基礎の上で、逐次に認識の一致に達したのである。比較的長い期間の努力を経て、趙女史と姑の関係はついに日増しに調和がとれるようになった。嫁姑の矛盾では息子兼夫は板挟みにされ、立場が苦しいとよく言われるが、全部がそうだとは限らない。要は「息子」と「夫」という両役目を正しく演じられるかどうかである。

特殊家庭の特殊関係

家庭訪問の中で私たちは特殊な状況下にある家庭を数世帯見た。彼らの家庭関係の対処はもっと称賛すべきだと思う。

浦東大道１４６０弄お住まいの程先生は上海海運学院の教師である。この家庭の特殊な状況とは彼女のお姉さんこと、実の兄嫁である。七十六歳の未亡人で、ずっと無職であった。長年来程さんとご主人は親切に面倒を見、家族中子供を含めて、全員このお年寄りと仲良く付き合い、至れり尽くせりの世話をしてあげているので、お年寄りは何不自由なく、安定した晩年を送っている。地元民生部門はこの家庭を敬老モデル家庭に指定し、祝祭日には必ず慰問に訪れている。

臨沂路８１弄に住む王さんは今年２４歳である。母親は数年前に病死し、父親は再婚した。継母が中学生の息子を連れて家庭に入ってきた。取材を受けて、王さんは「父と継母は新しい家庭を築くために大きな犠牲を払い、心血を注いだ。父と継母は相思相愛、尊重しあい、平等に接し合っている。二人のよい関係が自分と弟との関係にも好影響を与えてくれた。」と言った。自分と弟の間には少しも血縁がなく、年齢が離れ、違う家庭で育ったので、短期間で兄弟の情を培うのは不可能に近いと王さんは認める。まして、彼も弟も過去の家庭への懐古と新家族への抵抗があったのである。特に未成年の弟は母親の再婚に大きなショックを受けたようだった。しかし、父親と継母の熱心に調整に励む努力が王さんを感動させた。父の息子として、多少年長なので、父と継母の苦心を理解してあげなければならないと王さんは言う。彼は辛抱強く弟を説得した。家族全員の共同努力により、適応期間を経て、違う背景、異なる生活体験を持つ二つの家庭は遂に一つの幸せな家庭になったのであった。

「社会」1997年６月号

2.5　近隣関係：地域社会の精神文明度を測る物差し

呉　聖苓　　胡　申生

近隣関係は地縁を媒介とする人間関係である。この関係の親密と疎遠は直接地域社会の帰属意識、アイデンティティの強弱と結びつき、これまた地域社会の精神文明度を測る物差しである。浦東が開発開放になって以来、地域社会の位置構造の変化につれ、浦東の近隣関係にも特徴が現れた。この側面から我々は浦東新区地域社会の文化建設と発展の現状を垣間見ることができる。

近隣関係に関する調査統計データ

私たちが行った浦東新区住民家庭１０００世帯アンケートには「五年前に比べて近隣間の助け合いに変化はありましたか」という設問があった。これに対し、「大きく改善された」は６０世帯、被調査総数の６％、「いくらか改善された」は３２７世帯、３２．７％、「あまり変わらない」は５２３世帯、５２．３％、「ちょっと悪くなった」は８３世帯、８．３％、「大変悪くなった」は７世帯、０．７％を占めている。前の両者を合わせると「改善された」は３８７世帯で、３８．７％、後の両者を合わせると、「悪くなった」は９０世帯、９％を占めることになる。これは浦東開発開放の五年来、近隣関係に大きな変化がないことを立証した。比調査総数の半数以上は五年前に比べ、近隣間の助け合いが「あまり変わらない」と表明した。

しかし、近隣関係の形成と変化は住民の住宅構造、居住環境及び住民の年齢、学歴等の要素と密接に関わる。我々はもし浦東家庭の近隣関係を上記の要素から考察すれば、浦東新区近隣関係の新しい特徴に気づくであろう。

住宅様式と近隣関係

調査中分かったことだが、近隣関係に最も大きな影響を与えているのは居住環境と住宅様式である。１０００世帯調査で私たちは浦東の代表的な住宅を平屋（旧式住宅街、バラックを含む)、新村住宅、高層住宅という三種類に分けた。統計結果で明らかになったが、近隣関係が「改善された」とした世帯のうち、首位は新村住宅の住民、４３．５％、二位は平屋住民、３６．３％、下位は高層住宅の住民、２６．８％を占める。一方、「悪くなった」とした世帯のうち、首位は高層住宅住民、２０．５％、二位は新村住宅住民、７．４％、下位は平屋住民、７％を占める。このような結果は違う三種類の住宅住民の近隣関係の現状に合致すると思われる。

東昌路２２７弄は典型的な里弄住宅街である。そこの住民である奚さんは私たちの取材を受けて次のように語った。親密な近隣関係はこの地域の一大特徴であり、住宅様式はこの特徴形成の重要な要素である。ここには公用施設が多く、共用場も多い。同じ客間、台所を二、三世帯で共用するのは普通である。過去の相当長い期間には水道さえ共用していた。これが近隣間往来の頻繁と密接を決定した。特に夏夕方になると、各家庭はめいめい寝椅子や腰掛けを持ち出し、納涼しながらおしゃべりに花を咲かせる。この時間は近隣間コミュニケーションが最も密接で、熱が入るときである。同時に近隣間の矛盾も往々にしてこうしたうわさ話の中から密かに生まれるのである。でも、奚さんは現在の近隣関係にだいたい満足しているといった。往来や交流の乏しい集合住宅住民と違って、ここには生活の趣向と人間味があるからだという。

楊家渡北草沼はバラック地域である。ここに住む呉さんの紹介によると、ここの近隣関係は非常に親密であり、お互いに助け合ったり、協力し合ったりしていると同時に、矛盾も多く、過度の親密故に家庭のプライバシーが守られにくいのである。

一方、潍坊地域の高層ビルに住む陸さんが言うには、ここに移って、もうかなり長いが、隣近所間は往来がなく、お互い知らない。顔見知りとはエレベーターの中で会釈しかせず、相手の名前が言えない。浦電路の高層住宅お住まいの陳先生も同様の見方を示した。ビル内の人付き合いは少なく、同じフロアに住む上司と少し交流があるだけで、他の隣近所とは本当に近くにいながら千里も遠く離れたような関係である。

年齢層と近隣関係

調査で明らかになったが、違う年齢層の近隣関係に対する見方も違うのである。近隣関係が「改善された」とした住民のうち、首位は５０－－５９歳の年齢層であり、５０％、二位は６０歳以上、４７％、三位は４０－－４９歳、３５．１％、四位は３０－－３９歳、３４．８％、最下位は２９歳以下で、３１％を占める。一方、近隣関係が「悪くなった」とした住民のうち、首位は３０－－３９歳の年齢層であり、１１．３％、二位は４０－－４９歳、１０．５％、三位は２９歳以下、１０．３％、四位は５０－－５９歳、６．３％、最下位は６０歳以上、４．１％を占める。つまり年長者ほど近隣関係の現状に対する満足度が高いのである。この結果は年長年齢層の人たちが近所付き合いに熱心で、積極的に参加していることと直接関係がある。

上南路１５５１弄に住む將女史は夫婦共働きで、出かけが早く、帰りが遅いので、本来、近所付き合いの暇も気力もないが、「同じフロアにはお年寄りが多く、母がよく彼らとおしゃべりやトランプ遊びをしたりしているので、各家庭間の交流を促し、関係が比較的親しく、祝祭日にはお互いに自慢の料理をあげたりしている。」と將女史は言う。「主として母が重要な役割を果たした。」と將女史は強調した。

徳州路３００弄に住む花さんは、高層住宅は住居構造の制限で近所付き合いが旧い住宅街に比べ、ずっと少ないと私たちに言及する際、「大変残念だ」と言った。しかし、そばで一緒に取材を受けていた２９歳の息子さんはお父さんの意見に賛同せず、「このような近所交流や協力は自分にはあまり意味がない」との見方を示した。近所交流の面でも明らかに世代間の断絶があることが伺えた。

学歴と近隣関係

近所付き合いで、もう一つ軽視を許さない要素は学歴である。調査に際して、私たちは学歴層を「中卒またはそれ以下」、「高卒」、「大卒以上」という三つのランクに分けた。近隣関係が「改善された」とした住民のうち、首位は中卒またはそれ以下の学歴層で、４１．９％、二位は高卒学歴層、４０．１％、下位は大卒、２６．２％を占める。それにひきかえ、近隣関係が「悪くなった」とした住民の学歴順位は大卒、１８．３％、高卒７．５％、中卒またはそれ以下、７％であった。学歴と近隣関係が反比例するのが上記データーでよく分かる。近所付き合いの熱心さは学歴の高い住民ほど低く、反対に、学歴の低い住民ほど高いのである。

このことは上海海運学院の教師が集中する海運新村にも明らかに反映されている。目下、近隣関係はよいが、親密ではなく、遠慮がちな付き合いである。知識人だから付き合いが

浅く、お互い訪問し合うことも少なく、すれ違っても礼儀上挨拶を交わす程度である。熊先生は、みな表面的な付き合いしかないので、今の近隣関係は家庭にとって、重要な意味がないと話した。教授の呂さんは取材の際、こちらでは大方近所付き合いは少ない。1フロアには2世帯しか住んでいないし、過度の親密や頻繁な行き来を好まない教師家庭ばかりだからと言った。また、同じく教授の鄭さんは、海運新村に移る前、雑居平屋住宅に住み、数世帯で水道を共用し、各家庭の子供達が庭中を走り回ったりし、自分のような、落ち着いて学問をする静かな環境を必要とする教師には向かなかった。今の住宅は閉鎖性構造で、自分から他家を訪問せず、人も訪ねて来ない。絶対自分の子供を勝手に隣近所に行かせないと話し、近所付き合いは自分のような家庭にはあまり役立たないときっぱり言った。

近所付き合いの原則

近所付き合いで親密と疎遠、いったいどっちがベターかは社会学者の間でずっと議論されている問題である。今回調査された新居入居待機中のバラック地域住民は、集合住宅入居間近の期待と喜びを抱える一方、やがて失ってしまうであろう親密な近隣関係に対する惜しみも拭えない。雲台路お住まいの張さんは自分の居住環境には大変不満だが、隣近所とは十数年の付き合いで、親しみ深く、集合住宅のような疎遠は全然ない。引っ越した後もこの付き合いを続けられたら、これに超したことがないと話した。同地域に住む楼さんや徐さんもほぼ同意見を述べた。

しかし、同じバラック地域に住む呉さんはこの緊密すぎる近隣関係に対する不満を隠さず、近隣間の必要以上の心配りは猜疑、誤解、嫉妬といった人間の弱点を余すところなく暴露しているという認識を示した上、理想的な近隣関係の原則とは「適切な付き合い、団結と協調」であると断言した。上南五村に住む陳さんは、近所付き合いはお年寄りには必要かも知れないが、自分にはさして重要ではない。理想的な近所付き合いは疎遠すぎず、親密すぎずを心がけ、「相互尊重、適切交際」が原則であると認識を話した。浦電路に住む陳先生も、近隣は正常な人間関係を目指すべきで、自分は「君子の交、淡々とした水の如し」の原則を信奉する。近所間の正常な付き合いは必要だが、お互い尊重し合い、親密すぎることはしない。さもなければ、逆効果になると指摘する。

「千金かけて隣人を選ぶ」という諺があるが、古代人が如何に隣人を重視するかが分かる。しかし、浦東新区の近隣関係の現状を見る限り、中国の伝統的隣人選択観がひっそりと変わりつつある。未来の地域社会で、近隣関係はどんな姿になるのか、我々が検討、研究を重ねるべき課題である。

2.6 その他

以上の5編に続いて発表された4編は、以下のものである。題名と、内容の概略のみを記す。

(1) 成龍成鳳：子女に期待する悲喜劇　「社会」1997年7月号

年齢が高いほど、学歴が低いほど、「先祖の名を汚さない」という考えをしている。ケーススタディからみると、この考えが強く、子供への期待が大きく、親の学歴は低くても子供の教育にお金をかける例、子供には立派になって欲しいが、力不足だとあきらめる例、と、子供にはあまり期待せず、親はなにもしてやれないので、子供にまかせるという例、がある。

(2) 亦喜亦忱：浦東新区の住民の心の中での社区建設　「社会」1997年8月号

ここ数年で商業の面は大変改善された。しかし住民は、公共サービスはあまりよくないと感じている。文化施設（図書館、公園、映画館など）の建設は進んでいない。本屋も少ないなどの不満を持っている。

(3) 厚養薄墓：家庭の養老観　「社会」1997年9月号

歳とった親の面倒を見るのは中国の伝統である。葬式を派手にやるより、生きている内に親孝行をするのがよいという考えの人がある。しかし、葬式を派手にしたくないが、世間の目を恐れて、不孝の罪を負うよりはお金を出して派手にするという人もある。「人は土に入って安らぎが得られる」という観念は徐々に薄れてはいるが、お墓を買うブームは未だに続いている。また、旧来の観念に挑戦し、灰は海にまこうと考えている人（大学教授）もある。

(4) 浦東居民的離婚観　「社会」1997年10月号

浦東住民の離婚率は上昇している。離婚の自由は社会の進んでいることを示す。合わなければ分かれればよいと考える人もあるが、子供のために我慢するべきだと考える人もある。夫婦の仲が悪ければ子供にも悪影響で、どちらも問題だろう。

「結婚は軽々しく、離婚も軽々しく」の考えが増えていて、この結果、離婚率が上昇している。今後の変化は観察が必要だ。

資料編

浦東住民調査質問票日本語簡訳と単純集計

上海工場調査質問票日本語簡訳と単純集計

調査質問票オリジナル　浦東住民調査

工場従業員調査

浦東住民調査質問票日本語簡訳と単純集計

N＝１０００

一　浦東に何年に転入しましたか？　（　　）年

～1949	8.3%	1970～1979	4.8%
1950～1959	11.9%	1980～1989	28.5%
1960～1969	6.4%	1990～	40.2%

二　転入以前の身分は？

1　地元の農民　11.6%　2　浦西の住民　30.0　3　浦東の町の住民　50.7
4　他の省の住民　4.2　5　その他　3.1

三　同居する家族と親密度はいかがですか？

	同居情況		親密度				
	はい	いいえ	よい	比較的よい	ふつう	あまりよくない	よくない
(1) 配偶者	75.8%	23.4%	63.8%	9.9%	2.1%		%
(2) 両親	35.0	64.2	26.7	6.2	1.8	0.3	
(3) 息子	45.0	54.2	37.4	6.2	1.4		
(4) 嫁	12.8	86.4	9.1	2.6	1.0	0.1	
(5) 娘	35.1	64.1	29.9	4.3	0.8	0.1	
(6) 婿	4.0	95.2	3.2	0.8			
(7) 兄弟姉妹	9.1	90.1	6.3	1.6	1.1	0.1	
(8) 孫	13.7	85.5	11.3	2.0	0.4		
(9) 親友	1.9	97.3	1.3	0.5	0.1		

四　現在の住まいの部屋数と広さは

部屋の数（間）		延べ面積（平方米）		一人あたりの居住面積（平方米）	
1	22.1%	6～14	4.8%	2～4	12.1%
2	54.8	15～19	13.8	5～7	35.1
3	14.7	20～24	16.2	8～10	31.0
4	5.8	25～29	31.8	11～13	11.0
5	1.4	30～39	16.1	14～19	7.7
6	0.6	40～49	6.2	20～	3.1
7	0.5	50～59	4.5		
		60～	6.6		

五　住まいの形態は

1 長屋　1.1%　2 平屋　35.4　3 団地　49.7　4 高層ｱﾊﾟｰﾄ　12.7
5 仮設住宅　0.4　6 その他　0.3

六　下記の設備や電気製品がありますか。

	五年前	現在
	あり　なし	あり　なし
(1) 水道	~~99.7~~ 97.7%	99.8%
(2) ガス/ＬＰガス	55.1	93.9
(3) 浴室	34.9	62.5
(4) トイレ	44.3	66.4
(5) 空調	6.4	33.3
(6) テレビ	96.3	99.2
(7) 冷蔵庫	91.2	97.6
(8) ラジカセ	82.8	88.5
(9) 洗濯機	83.5	92.4
(10) ビデオ	46.1	64.1
(11) 電話	14.9	65.8

七　最近の５年間に下記の変化がありましたか？

	あり　なし
(1) 転出入	33.7%
(2) 家族構成員の減少	18.1
(3) 家族が集まる回数の増減	24.5
(4) 友人、隣人とつきあう回数の増減	26.8
(5) 本人または家族の者が大学に入学した	13.9
(6) 本人または家族の者が転職した	26.4
(7) 旅行をした	50.6
(8) 冠婚葬祭のやり方が変わった	21.2

八　現在と５年前とを比較していかがですか？

	大きく改善した	ある程度改善した	変わらない	悪くなった	相当悪くなった
(1) 交通事情	~~44.1~~ 47.1%	40.2%	14.3%	4.1%	0.3%
(2) 治安	11.3	37.9	27.9	20.9	2.0
(3) 本人と家庭の家計	10.7	49.7	28.2	9.7	1.7
(4) 住居	12.5	29.6	39.1	15.6	3.2
(5) 住居の周辺の商店	17.1	45.9	28.8	7.4	0.8
(6) 学校の入学条件、教育の質	8.4	32.4	51.7	6.5	0.9
(7) 家庭に対する公的サービス	4.5	26.4	56.7	10.8	1.3
(8) 隣人との助け合い	6.0	32.7	52.3	8.3	0.7
(9) 封建的風潮、迷信	5.5	26.5	44.2	20.6	2.8
(10) 浦東地区の文化施設	13.1	33.7	30.9	19.9	2.2

九　家庭円満の重要な要素は何ですか？（すべての項目について回答すること）

	非常に重要だ	やや重要	あまり重要でない	まったく重要でない
(1) 夫婦に共通の生活、趣味、友人	48.6%	40.6%	9.8%	0.6%
(2) 愛があること	75.8	21.9	1.9	0.1
(3) 結婚後も愛しあっている	74.4	23.3	2.1	
(4) 子供がいる	63.7	26.8	8.5	0.8
(5) 子供の教育に関する考え方が一致していること	62.2	31.5	5.7	0.3
(6) 性の一致	52.1	40.4	6.7	0.4
(7) 不倫しないこと	81.8	16.6	0.9	0.3
(8) お金の使い方に関して考え方が一致していること	38.6	51.6	9.0	0.5
(9) 収入が安定していること	61.1	33.9	4.0	0.7
(10) 夫婦の労働、職業、育ちが似ていること	20.9	46.0	29.9	2.9
(11) 夫婦の間に会話があること	61.8	34.3	3.2	0.4
(12) 相手が毎日何をしているかを知っていること	16.1	41.7	33.3	8.6
(13) 家庭生活にユーモアがあること	32.1	50.8	15.2	1.6
(14) 相手の欠点を認めること	53.0	41.2	5.1	0.4
(15) プライバシーを認めること	41.5	46.6	10.4	1.2

十　子供のいる夫婦の離婚について、どう思いますか？（１つ選択して回答）

1 離婚すべき　23.5%　　2 離婚すべきでない　16.5
3 まず調停すべきだ　53.2　　4 子供の年齢にもよる　5.1　　5 その他　1.5

十一　親戚や友人の中で比較的に多く見られるトラブルは何ですか？

1 住居　45.1%　　2 嫁と姑　~~48.9~~ 42.9　　3 婿と舅　1.8　　4 子供の教育　24.8
5 お金の使い方　31.8　　6 両親の扶養　22.9　　7 娯楽　12.2
8 性格不一致　26.0　　9 財産問題、相続問題　15.1　　10 生活様式　~~22.9~~ 20.4

十二　トラブルの解決方法は？（一つ選ぶ）

1 話し合い　80.2%　　2 年長者や一族の中の実力者に調停してもらう　2.0
3 町内会による仲介　5.4　　4 職場の上司による仲介　3.2
5 司法解決をめざす　1.9　　6 その他　0.8

十三　転職の際の判断基準は何ですか？

1 個人の趣味と一致　12.6%　　2 自分の才能が発揮できそう　18.8
3 高収入　36.7　　4 余暇が多い　1.4　　5 仕事が楽　7.9
6 同僚と上下関係　5.8　　7 通勤の便　5.8　　8 昇進の機会が多い　3.5
9 その他　1.3

十四　職を探す時にうまくいかなかった場合、以下に挙げる人に頼みに行きますか？

	はい　いいえ
(1) 会ったこともないいとこ	8.4%
(2) 同じ町、同じ村の人でかつて会ったことのない人	5.1
(3) 中学、高校の先輩（見知らぬ人	6.7
(4) 町行政の労働案内所（パートの仕事の紹介）	53.3
(5) 区の労働管理行政の職業紹介所（職業の紹介）	61.5

十五　下記の意見には賛成しますか？　その考えはだれの影響ですか？

	賛成するか					だれの影響					
	大賛成	ある程度賛成	あまり賛成できない	まったく賛成できない	わからない	両親の教え	両親の行動	マスコミ	学校教育	何ともいえない	その他
(1) 金さえあれば何でもできる	26.3	28.0	26.4	15.1	4.2	10.2	5.0	43.9	9.1	21.7	9.9
(2) 人は他人の恩恵を忘れてはいけない	71.9	22.0	4.4	0.6	1.1	41.5	17.8	18.1	6.4	9.3	6.7
(3) 仕事に必要であれば、家族に嘘を言ってもよい	7.9	25.2	28.3	16.8	11.4	10.5	8.8	20.4	10.3	34.8	14.5
(4) 社会のため、ある程度個人利益を犠牲にすべきだ	39.8	39.6	12.7	1.7	6.1	7.0	5.9	28.5	34.0	18.2	6.2
(5) 今の社会では、最も重要なのは、人間はこの世で数十年しか生きられないのだから、できるだけ楽しむべきだ	9.1	26.9	44.6	13.0	6.3	9.3	9.4	26.7	13.0	28.5	12.9
(6) 個人の衣食住の確保で、困っている人のことをかまうことではない	3.7	14.8	48.6	28.9	3.9	10.1	8.7	32.9	22.5	16.3	9.2
(7) できるだけ多く稼ぐこと。そうすれば、よい生活が得られる。だから稼ぐ手段を考えなくてもよい	5.2	12.0	35.6	42.4	4.8	9.6	6.6	32.8	24.8	17.8	8.1
(8) 庶民は金を多く稼ぎ自分の生活だけ考えればよく、政治のことを心配する必要はない	7.4	22.2	44.2	21.4	4.6	5.3	5.7	33.6	23.6	21.7	9.7
(9) 稼いだお金は自分で使うべきで、家族のことをかまわなくてもよい	1.7	4.1	41.8	50.1	2.2	25.2	26.5	16.2	9.6	13.8	8.3
(10) 結婚後もっとも大事なことは、子供の楽しみを考えることで、両親のことには、あまり関心を寄せなくてもよい	2.2	5.2	40.4	49.7	2.4	21.8	30.2	17.2	8.1	14.8	7.6
(11) カラオケ、ロックは刺激をもたらしてくれるので若者は好きなように聞けばよい人の評価を気にしなくてよい	7.8	16.7	37.4	21.4	16.7	3.9	3.9	31.7	6.4	37.5	16.4
(12) 若者がセックスを楽しむのは、当たり前のことで、あまり干渉する必要がない	3.8	11.7	32.8	40.9	10.7	7.5	3.0	29.6	11.8	37.5	10.3
(13) 結婚後、うわきをしたら離婚させるべきで、干渉する必要はない	11.6	17.1	35.1	16.9	19.2	4.1	2.0	28.8	4.6	45.8	14.5

十六　下記の人物像について、ご自分に似ているのはどれで似ていないのはどれか

	当てはまる	当てはまるところがある	当てはまらない
(1) 一所懸命に仕事をし、昇進をめざ	33.9	45.0	21.1
(2) どんなに大変であろうと、業績を上げる	39.9	46.4	13.7
(3) 短期間で有名になる	6.3	11.7	82.0
(4) 生活様式が変わっており、独特である	8.7	22.4	68.8
(5) 生活そのものが普通の人と変わっている	7.7	24.9	67.3
(6) 生活が他人と同じでたいくつだ	9.3	33.9 ~~39.3~~	56.7
(7) 人生を他のしくのが昇級よりも大	20.1	46.0	33.8
(8) たとえお金がなくても、楽しければそれどよい	42.2	39.1	18.6
(9) 今の生活がよければよい。将来のことを考えなくてもよい	7.4	15.7	76.8
(10) 人に喜ばれることをする	35.2	56.7	8.0
(11) 社会へ貢献できるよう努力する	41.0	52.8	6.1
(12) 困っている人を助けるべきだ	59.9	37.1	2.9
(13) すべて自分でやる、他人には頼れない	57.1	33.5	9.3
(14) 何をやっても自分が決める、他人には頼らない	64.0	32.3	3.6
(15) 自分が正しいと思うことについては、他人のいうことを気にしない	62.5	32.1	5.3
(16) 好きなスポーツや趣味がある、しかもよくやる	39.4	33.3	27.2
(17) スポーツでストレスを解消する	27.7	32.8	39.4
(18) 変わった服装で自己表現をする	6.4	18.7	74.8
(19) 金や時間をかけて変わった服装を探し求める	6.3	16.3	77.3
(20) 新製品が発表されると他人に話す、または他人と論評する	11.6	35.2	53.1
(21) 新しい映画や新しい本があると他人に話す、または他人と論評する	12.1	31.8	56.0

十七　よい上司はどうあるべきか、最も重要なもの三つと、最も重要でないもの三つを選んで下さい

	最も重要なもの	最も重要でないもの
(1) 専門技術のレベル	48.3	~~3.8~~ 6.6
(2) 公平に部下を扱う	57.4	3.7
(3) 部下に尊敬される、愛される	37.6	4.6
(4) 仕事がまじめである	28.7	5.4
(5) コネが多い、知り合いが多い	9.0	67.5
(6) 同僚とは誠意をもってつきあう	18.5	5.8
(7) 決断が早い	23.8	4.5
(8) 判断能力が高い	15.4	6.4
(9) 部下に実益を与える	58.0	3.4
(10) 地位が高い、経験が豊か、学歴も高い	1.7	93.8
(11) 出身階級がよい、地位の高い両親がいる	1.3	91.9

十八　下に挙げる中国伝統社会の価値観について、「誇りに思う」か、「なくしてしまいたい」か「わからない」かのうち、どれですか。

	誇りに思う	なくしたい	わからない	
(1) 明哲保身	20.0	45.4	34.5	分別
(2) 三従四徳	22.5	64.4	12.8	三従四徳
(3) 勤労節倹	96.2	1.9	1.9	勤勉と質素
(4) 中庸之道	21.9	35.2	42.7	中庸の道
(5) 父慈子孝	92.9	2.3	4.7	親の慈悲深さと子の孝行
(6) 男女有別	15.0	68.2	16.6	男女の差別
(7) 子孫満堂	19.0	63.8	17.1	子孫繁栄
(8) 容認礼譲	87.8	3.8	8.2	寛容と礼節
(9) 光宗耀祖	41.2	37.6	21.0	先祖の名を汚さない
(10) 重農軽商	8.5	69.2	22.3	農業を尊び商業を卑しむ
(11) 以和為尊	90.3	3.3	6.3	和をもって貴しとなす
(12) 仁義道徳	91.9	2.9	5.0	仁義道徳
(13) 従順尊重	76.7	8.2	14.9	年長者への敬意と従順
(14) 精忠報国	82.6	4.7	12.7	国家への忠誠
(15) 迎合上意	12.7	64.5	22.7	権威への服従
(16) 婦女貞節	54.4	24.1	21.5	女性の貞操
(17) 己所不欲、勿施于人	62.7	16.0	21.1	cf. 工場調査問十九(18)
(18) 礼尚往来	86.3	6.9	6.6	(17)
(19) 人不為己、天珠地灰	9.7	71.4	18.8	(19)

十九　性別　　1. 男　49.9%　　2. 女　49.9%　　無回答　0.3%

二十　年齢

1	20歳未満	3.1%	2	20-29歳	12.4	3	30-39歳 22.1
4	40-49歳	31.3	5	50-59歳	14.2	6	60歳以上 16.9

二十一　職業

1	勤め人	33.8	2	公務員	3.8	3	教師	4.3	4 医師 2.1
5	技術者	3.1	6	芸能人	0	7	司法関係	0.8	8 個人経営 2.0
9	軍人	0	10	店員	6.8	11	学生	4.3	12 退職休職 19.2
13	管理者	11.6	15	その他	8.3				

二十二　学歴

1	なし	4.6	2	小学卒	10.4	3	初等中学卒 33.9
4	高等中学卒	34.7	5	大学卒以上	16.4		

上海工場調査質問簡訳と単純集計

N＝１０５４

一　あなたは結婚していますか？

1　未婚　~~36.9~~ 36.1　　2　既婚　62.5　　3　離別・死別　0.6

二　一般的に言って、こどもとはどのような存在だと思いますか。次のそれぞれについて、そう思うか、そう思わないかをお答えください。

	1 そう思う	2 どちらともいえない	3 そうは思わない
(1) 子どもは家を継ぐもの	63.8	16.0	20.0
(2) 子どもは次の社会をになうものだ	70.0	17.8	11.9
(3) 子どもはお金のかかる存在だ	76.8	7.3	15.8
(4) 子どもは家族の稼ぎ手として役に立つ存在だ	31.6	42.7	25.3
(5) 子どもは老後の経済的な支えになるものだ	35.6	36.8	27.5
(6) 子どもは老後の精神的な支えになるものだ	79.1	13.6	7.3

三　夫と妻がうまくやって行くのが非常に難しくなり、彼らの間にもし子どもがいるとしたら、離婚すべきだと思いますか。それとも離婚してはいけないと思いますか。

1　離婚すべきである　22.5　　2　離婚してはいけない　16.5　　3　まず調停すべきだ　51.8

4　子どもが成人していればよい　6.8　　5　その他（記入）　1.2

四　次のうち、若者が結婚相手を選ぶ時に重要なことはどれだと思いますか。３つまであげて下さい

1　外見　22.0　　2　学歴　42.4　　3　職業　26.8　　4　仕事の能力　20.8

5　家族の経済的状況　21.0　　6　家族の社会的地位　6.2　　7　趣味が合うこと　36.5

8　気が合うこと　50.3　　9　道徳的にしっかりしていること　41.9　　10　愛情　19.4

11　年齢　8.3　　12　その他（記入）　0.8

五　ある男女が愛し合っているのですが、正式に結婚届けを出す前に同棲しています。あなたはそれをどう思いますか。よくないことだと思いますか、別に構わないと思いますか。

1　別に構わない　25.9　　2　よくないことだ　70.0　　3　その他（記入）　3.2

六　だれでも結婚が円満にいくことを望みます。下にあげることは、円満な結婚の条件として、あなたはどう思いますか。“非常に重要”から“全く重要でない”のどれに当たりますか。

	1 非常に重要	2 ある程度重要	3 あまり重要でない	4 全く重要でない
(1) 双方に共通の生活と活動及び友人がある	27.6	37.1	30.9	3.9
(2) 愛情基礎のある婚姻	72.6	22.0	4.1	0.9
(3) 結婚後相思相愛が続く	76.3	19.7	3.1	0.5
(4) 子供がいる	47.5	29.8	17.8	4.4
(5) 子育てに対する一致した考え	57.7	28.5	10.8	2.6
(6) 性生活がうまくいく	39.3	41.7	14.0	2.9
(7) 夫婦互いに忠実で、不倫しない	78.2	15.1	4.8	1.6
(8) 財産管理、消費方式に対する一致した考え	27.0	42.7	24.2	5.3
(9) 経済条件の安定	50.4	33.0	11.7	4.3
(10) 夫婦の学歴、職業、家庭等の背景の類似	15.7	35.4	35.4	13.1
(11) コミュニケーションがうまくいく	64.5	27.1	6.3	1.8
(12) お互いの日課への了解と助言	7.7	18.7	44.8	28.3
(13) 家庭性格にユーモアがある	19.2	39.0	33.4	7.5
(14) 相手の欠点を受け入れる	43.6	38.7	14.2	2.7
(15) 相手のプライベートを許す	30.3	39.0	20.7	9.6

（中国語からの直訳、元の日本語調査質問文は浦東調査の問九参照）

七　近頃、恋愛すると性関係を持つ若い人が少なくないですが、どう思いますか。

1 個人の問題であり、干渉する必要はない　26.9
2 社会道徳に反することであり、反対すべき　52.0
3 愛さえあればよい　13.4
4 わからない　7.3

八　年とった親は子どもが見るべきだと思いますか、それとも自分でなんとかするべきだと思いますか。

1 子どもが面倒を見るべき　48.9　　2 親が自分でなんとかすべき　3.5
3 どちらともいえない　3.4　　4 状況による　43.9

九　結婚後の理想的な居住方式についてどう思いますか。

1 夫婦は独立して住む　24.2　　2 父母（義父母）と同居する　20.1
3 父母と別に住むが、近くにする　55.3

十　あなたの現在の家庭の居住状況はどちらですか。

1 独立して住んでいる　42.7　　2 父母（義父母）と同居している　53.9

3 その他（記入）　3.0

十一　お宅ではお金の管理は主にどなたがしていますか。未婚者は結婚した場合にどうしたいかを答えて下さい。

1 全て妻　8.9　　2 主に妻　14.1　　3 夫婦二人で　58.3

4 主に夫　7.9　　5 全て夫　3.9　　6 その他（記入）　6.3

十二　家庭での重大なこと、例えばマイホームや家電購入のことなど、たいてい誰が決めますか。

1 妻（母）が決める　2.6　　2 夫（父）が決める　6.7

3 夫婦（父と母）が相談して決める　40.5　　4 家族全員で相談して決める　48.6

5 その他（記入）　1.3

十三　家庭の中で、もめごとがあるのは避けがたいことです。あなたの親戚や友達の間では、どんなことで問題が多く起こるでしょうか（5つまで選んでください）

1 住居問題　44.4　2 嫁、姑問題　57.0　3 夫婦間の感情のもめごと　49.1

4 子どもの教育　42.0　5 親子間のもめ事　26.6　6 日々の支出　32.2

5 年老いた親の面倒　42.8　8 娯楽　20.5　9 生活の仕方　30.0

10 性格の不一致　47.7　11 財産　~~27.0~~ 25.7

十四　子どもに成功してほしいと考える親もあれば、ただよい人間であってくれればよいと考える親もあります。あなたにとってどちらが重要でしょうか。

1 成功　48.0　　2 よい人間であること　51.7

十五　現在の社会では男性であることと女性であることと、どちらが有利だと思いますか。

1 男性が有利　28.6　2 女性が有利　8.7　3 どちらが有利とういことはない　62.7

十六　まとまったお金があるとます。どう使いますか（一つ選んで下さい）

1 高級品　4.0　　2 子どもの結婚式に使う　7.0　　3 子どもの教育に使う　34.8

4 家を建てる 14.2　5 いざというときに備える 30.4　6 貸して利子を得る　3.6

6 その他（記入）　6.0

十七　子どもを育てるときには、次のどちらが重要でしょうか。

1 できるだけのびのび育てる　43.2　　2 規則を守ることを教える　56.5

十八　あなたは次のどちらに賛成しますか。

1 公の利益を守るために、時には個人の権利が犠牲になっても仕方がない　90.3

2 個人の権利を守るために、時には公の利益が犠牲になっても仕方ない　7.8

十九　次にわが国の伝統文化をいくつかあげてみました。それぞれについて、「誇りに感じる」「なくしてしまいたい」「どちらともいえない」のいずれかでお答え下さい。

	1 誇りに感じる	2 どちらともいえない	3 なくしてしまいたい
(1) 分別 "明哲保身"	18.9	42.7	38.1
(2) 女性は嫁ぐ前には父に、嫁いだら夫に、夫が死んだら子に従う三従と、四つの美徳をもつ "三従四徳"	30.1	25.8	43.9
(3) 勤勉と質素 "勤労節倹"	91.5	6.6	1.5
(4) 中庸の道 "中庸之道"	15.7	50.0	32.6
(5) 親の慈悲深さと子孝行 "父慈子孝"	84.4	13.1	2.2
(6) 男女の差別 "男女有別"	14.0	34.5	50.9
(7) 子孫繁栄 "子孫満堂"	26.3	36.1	37.3
(8) 寛容と礼節 "容認礼譲"	76.4	18.7	4.5
(9) 先祖の名を汚さない "光宗耀祖"	29.6	42.3	27.5
(10) 農業を尊び商業をいやしむ "重農軽商"	7.9	49.3	41.7
(11) 和をもって貴しとなす "以和為貴"	75.3	19.3	4.9
(12) 仁義道徳 "仁義道徳"	86.1	11.4	2.4
(13) 年長者への敬意と従順 "従順尊重"	55.8	36.7	7.3
(14) 国家への忠誠 "精忠報国"	76.4	22.1	1.4
(15) 権威への服従 "迎合上意"	10.3	48.7	40.1
(16) 女性の貞操 "婦女貞節"	45.4	32.0	22.4
(17) 礼を受ければ、礼を返す "礼尚往来"	61.4	27.6	10.7
(18) 自分のいやなことを人に強いるな "己所不欲，勿施于人"	32.4	40.0	26.8
(19) 自分中心・利己主義でないと天罰を受ける "人不為己，天誅地火"	7.8	31.2	60.5

二十　人間は本来善だと思いますか、それとも悪だと思いますか。この中から選んで下さい。

1 善　30.5　　2 悪　1.9　　3 善でもあり悪でもある　52.3

4 善でも悪でもない　15.2

二十一　法律に関しての２つの考え方があります。あなたの意見はどちらに近いですか。

1 法律は人々が互いとうまくやって行くためのものだ　~~17.8~~ 17.1

2 法律は社会に公平と正義をもたらすものだ　82.8

二十二　公の問題は影響力も経験もある人に任せるべきだと思いますか、それともそのような問題は、決定される前に人々で議論すべきだと思いますか。

1 影響力も経験もあるべき人に任せるべきだ　13.0

2 人々で議論すべきだ　86.9

二十三　リーダーとして次のどちらの人がいいですか。

1 年輩で尊敬される人　13.2

2 若くて有能な人　69.9

3 どちらでもよい　16.6

二十四　次に挙げるような人を理解できますか、理解できませんか。あるいは、そのような人に賛同しますか、賛同しませんか。

	1 理解 または賛同	2 不理解 または不賛同
(1) 安定職を脱サラする人	76.4	23.1
(2) 安定職を転職する人	50.1	49.4
(3) 金もうけのため時には違法も辞さない人	5.0	94.5
(4) 愛し合えば不倫しても構わないと思う人	13.2	86.4
(5) 西側のロックやジャズに夢中になる人	15.7	83.3
(6) ポルノやエロチックな雑誌や小説を愛読する人	3.7	95.7
(7) エロやグロのビデオや映画が好きな人	8.1	91.4
(8) 安定職を持たず、気の向くままアルバイトをする人	33.5	65.8
(9) 有名のためなら手段を選ばない人	5.5	94.1
(10) 成金になって、派手に金を浪費する人	4.2	95.4
(11) 麻雀やギャンブルが好きな人	3.5	96.0
(12) 同性愛者	8.5	90.8
(13) 麻薬常習者	0.8	99.0

二十五　信仰をもつことは必要だと思いますか。

1 はい　38.4　　2 いいえ　18.7　　3 どうともいえない　42.3

二十六　人生がうまくいかない人がいるとしたら、その原因は何だと思いますか。

1 本人の努力不足のため　59.1

2 他の人に不公平に扱われているため　12.0

3 その人の運命　27.9

二十七　自分の能力は適切な機会を見つけて人に示すべきだと思いますか、それとも人がわかってくれるまで、そのままにして置くべきだと思いますか。

1 人に能力を示すべきだ　60.3

1 人に能力を見つけてもらうべきだ　34.6

3 その他（記入）　4.4

二十八　あなたにとって次のどちらが重要ですか。

1 時間を惜しみ、一生懸命働くこと　86.1

2 人生は短いので、できるだけ楽しむこと　9.3

二十九　あなたが人生で最も手にいれたいのは何ですか（５つまで選んで下さい）。

1 仕事上の業　55.8　2 豊かな生活　47.7　3 暖かい家庭　81.1

4 国につくすこと　18.0　5 友情　~~37.0~~ 36.7　6 教育　26.8　7 学歴　5.9

8 愛情　47.9　9 よい人間関係　46.1　10 子どもが立身出世すること　60.6

11 海外留学　~~6.5~~ 5.8　12 自分で事業を始めること　26.0

13 危険を冒して成功すること　3.4　14 家を建てること　17.0

三十　以下に挙げることは、自分にあてはまりますか、あてはまりませんか。

	1 私らしい	2 少し私らしい	3 私らしくない
(1) 一所懸命仕事をし、昇進を勝ち取る	29.0	48.5	22.0
(2) どんなに困難が大きくても、仕事で成果を上げたい	~~37.8~~ 39.7	50.7	9.1
(3) 短期間で名を挙げたい	4.6	13.9	80.7
(4) ライフスタイルは人と違って個性的だ	11.9	24.5	62.4
(5) 生活は普通の人と異なる	9.9	29.0	60.6
(6) 生活は無味乾燥だ	8.4	22.1	68.9
(7) 人生を楽しむのは昇進より重要	~~17.4~~ 17.1	32.7	48.9
(8) 金が多くなくても心配なく楽しければ満足する	43.1	35.0	21.4
(9) 目先の生活がよければ、将来を心配しなくてよい	6.4	13.9	79.4
(10) 大勢の人に喜んでもらえることがしたい	39.0	50.6	10.0
(11) 社会に貢献したい	39.4	52.4	7.6
(12) 困っている人がいたら助ける	58.0	39.4	2.2
(13) すべて自分に頼り、人を当てにしない	48.2	34.6	16.5
(14) 如何なることも自分で決め、人に頼らない	59.1	33.7	6.9
(15) これと思ったら、とやかく言われても気にしない	58.5	26.1	15.0
(16) 好きな運動や趣味を持ち、よく楽しむ	29.7	42.3	27.5
(17) 運動を通じてストレス解消をする	21.3	42.1	36.0
(18) ファッションを着て自己表現をする	4.1	19.8	75.6
(19) ファッション購入に金と時間を惜しまない	5.3	15.7	78.3
(20) 新製品が出たら、人に教え、議論する	11.7	33.7	54.2
(21) 封切り映画や新書があったら人に教え、議論する	16.6	42.7	40.4

三十九　今の職場に満足ですか

1 非常に満足　9.9　　2 満足　39.9　　3 どちらともいえない　33.7

4 不満足　12.0　　5 大変不満足　4.3

四十　次の2つの仕事のうち、どちらが好きですか（1つだけ選んで下さい）。

1 退屈だが給料のよい仕事　58.7　　2 面白いが給料のよくない仕事　39.8

四十一　他の仕事を選ぶ機会があったら、何を一番重視しますか（1つだけ選んで下さい）。

1 興味が持てること　12.1　　2 才能を表せるチャンス　20.7　　3 収入がよいこと　51.4

4 余暇時間が多いこと　4.6　　5 仕事仲間とうまくやれること　5.4

6 昇進の機会が多いこと　3.7　　7 その他（記入）　1.8

四十二　昇進のための条件のうち、最も重要と考えられるもの2つと、最も重要でないと考えられるもの2つを、次の中から選んで下さい。

	最も重要	最も重要でない	
1. 勤勉努力	76.9	3.1	(勤勉・努力)*
2. 成績優秀	33.0	25.4	(目立った業績)*
3. 同僚とうまくいく	23.2	11.7	(仕事仲間とのよい関係)*
4. 上司部下関係	18.4	41.3	(上司や部下とのよい関係)*
5. 熱心に人の世話をする	32.2	12.6	(他の人をよく手伝うこと)*
6. まじめに政治を勉強する	~~6.0~~ 6.8	36.5	(政治を真剣に学習していること)*
7. キャリアが豊富	7.6	59.1	(資格・学歴)*

注）＊は1990年の日本調査の質問文

四十三　職場での昇進の機会はいかがですか。

1 機会は多い　6.0　　2 機会は普通　50.1　　3 機会は少ない　20.7　　4 機会はない　~~22.4~~ 22.8

四十四　職場での昇進についてどう感じていますか。

1 非常に公平　4.4　　2 公平　23.6　　3 わからない　52.9

4 不公平　10.9　　5 非常に不公平　7.8

四十五　もしあなたの仕事仲間の一人が怠け者で、働きたがらなかったら、あなたならどうしますか。この中から1つ選んで下さい。

1 上司に報告する　5.0　　(上司にその人のことを報告する)*

2 アドバイスする　66.9　　(その人に忠告する)*

3 同調する　1.0　　(私も一緒に怠ける)*

4 その人の仕事を助ける　7.8　　(その人の仕事を手伝う)*

5 自然にまかせる　19.1　　(放っておく)*

注）＊は1990年の日本調査の質問文

四十六　仕事仲間としてはどういう人が最もいいでしょうか。（１つだけ選んで下さい。）

1 友好的で、うまくやって行きやすい人　44.9

2 責任感が強く、仕事をやりとげる人　38.1

3 高潔な人格で、人から尊敬されている人　16.8

四十七　職場の同僚とはうまくいっていますか。

1 非常にうまくいっている　16.6　2 比較的うまくいっている　44.7　3 普通　37.5

4 あまりうまくいっていない　0.5　5 全くうまくいっていない　0.4

四十八　班長などグループリーダー（工場長）とうまくいっていますか

1 非常にうまくいっている　8.5　2 比較的うまくいっている　37.8　3 普通　51.9

4 あまりうまくいっていない　0.4　5 全くうまくいっていない　0.7

四十九　あなたの職場では良きリーダーはどんな資質を持っているべきでしょうか。最も重要なもの３つと、最も重要でないもの３つを、次の中から選んで下さい。

	最も重要なもの	最も重要でないもの	
(1) 専門技術レベル	45.4	10.4	(技術的に優れていること)*
(2) 従業員に公平である	60.5	4.8	(部下を公平に扱うこと)*
(3) 従業員に尊敬される	27.5	9.4	(部下に尊敬され、好かれていること)*
(4) 勤務態度がまじめである	34.9	6.9	(真剣に仕事に取り組むこと)*
(5) コネと人脈がある	5.8	59.6	(人間関係がよい、顔が広いこと)*
(6) 同僚と誠実につき合う	22.2	7.8	(仕事仲間に誠心誠意、接すること)*
(7) 決断力がある	33.0.	9.6	(決断力がある、断固としていること)*
(8) 判断力が鋭い	18.7	6.5	(判断力が優れていること)*
(9) 従業員に実利をもたらす	47.6	4.6	(部下に利益をもたらす)*
(10) キャリアがある	1.0	86.9	(年功を積んでいること)*
(11) バックが強い	2.0	82.6	(よい階級の出身であること)*

注）＊は1990年の日本調査の質問文

五十　あなたの体験として、次に挙げることがあてはまりますか。

	1 はい	2 わからない	3 いいえ
(1) 同僚と仕事でお互いに助け合える	90.8	8.7	0.4
(2) 病気の時同僚が見舞いに来る	66.4	30.9	2.1
(3) 上司がよく自分と話をする	27.5	35.2	36.8
(4) 職場で、いつも気に食わない人がいる	17.5	41.1	40.4
(5) 困ったとき同僚に助けてもらえる	60.9	33.3	5.2
(6) 職場でいつも自分に嫌な思いをさせる人がいる	7.4	34.5	57.0
(7) トラブルがあるとき、同僚が相談に乗ってくれる	75.4	21.9	2.4
(8) 上司を信頼している	54.9	36.2	7.6
(9) 職場で話すとき意地悪な人を警戒する	24.7	43.5	31.1
(10) 職場でよく人の噂をする	25.2	41.8	~~38.4~~ 32.4

五十一　会社で重大な生産事故が発生して深刻な被害を被ったとき、あなたはどう思いますか。

1 大変残念に思う　62.2
2 どこの会社でも同じ様なこと、どうでもよい　6.5
3 会社の問題で、自分の知ったことではない　2.3
4 会社の損失は我が家の損失と同じ　28.5

五十二　会社の制度に違反する同僚がいたら、あなたはどうしますか。

1 上司に報告する　21.9　　2 面と向かって批判する　50.4
3 知らないふりをする　18.5　　4 その他（記入）　8.9

五十三　あなたの会社の状況から、もし子供の能力や教育程度が自分と似ていて、また、就職が自由に決められる立場だったら、自分の企業で働いて欲しいと思いますか。

1 はい　25.5　　2 いいえ　73.6

五十四　次にあげることに賛成ですか。賛成の程度を回答して下さい。

	1 大変賛成	2 賛成	3 わからない	4 不賛成	5 全く不賛成
(1) 会社のために全力を尽くしたい	25.6	59.3	12.9	1.5	0.5
(2) よく親戚や友人に自分の会社を自慢する	5.1	29.5	35.2	25.2	4.4
(3) 会社のためなら何でもする	7.1	32.4	36.2	19.0	4.6
(4) 会社の前途に関心がある	23.0	55.9	16.8	3.2	0.7
(5) ずっとこの会社に勤めたら成果なしに終わる	3.4	10.3	40.5	37.1	8.3

次頁に続く

前頁からの続き（五十四）

(6) この会社に入ったことを後悔する	1.9	9.5	26.9	50.2	10.8
(7) 機会があったら、転職したい	5.9	21.5	40.6	26.5	4.6
(8) この会社で自分の能力が発揮できる	2.9	26.1	48.6	18.4	3.2
(9) 会社の多くの政策決定は自分の考えに合致する	3.8	25.8	49.8	15.7	4.5
(10) 会社の今年度の目標を知っている	8.2	44.8	31.2	12.0	3.4

五十五　一日の仕事を終わった後の気持ちはいかがですか。

1 特にない 28.1　　2 明日は明日の風が吹く 3.3

3 少しきついが、意義ある仕事だ 52.1　　4 平凡で、つまらない 14.4

5 その他（記入）1.9

五十六　現在のあなたの収入は普通従業員とくらべていかがですか。

1 普通よりずっと多い 6.8　　2 普通よりいくらか増し 24.4

3 普通と変わらない 54.0　　4 普通よりいくらか少ない 9.1

5 普通よりずっと少ない 5.2

五十七

性別　1 男 39.4　　2 女 60.6

年齢　〇〇才　20歳未満 7.7　20-29歳 38.0　30-39歳 19.4　40-49歳 25.6　50歳以上 7.3　無回答 2.0

学歴　1 小学校以下 11.0　2 中学校 53.3　3 高校 21.3　4 大学以上 13.9

職業　1 企業重役 0.6　2 部課役員 9.7　3 普通職員 28.5　4 専門技術者 8.6　4 普通労働者 51.4　5 その他（記入） 1.0

企業種類　1 国有企業 33.6　2 集体企業 33.2　3 中外合資企業 33.2　4 その他（記入）0

月収（1996年の平均）

1 300元以下 13.3　2 301-400元 21.5　3 401-500元 18.3

4 501-1000元 21.2　5 1001-1500元 16.9　6 1501-2000元 4.2

7 2001-2500元 2.0　8 2501-3000元 1.5　9 3000元以上 0.9

入社年　〇〇年　1979年以前 15.3　1980～1989年 20.0　1990年～1994年 21.8　1995年以降 41.8　無回答 1.1

浦东新区市民家庭调查表

尊敬的朋友：

您好！浦东开发开放已经五年了，浦东建设的成就凝聚着您的辛勤劳动和奉献。为了进一步发展浦东的各项社会经济事业，我们需要听取您的意见。本次调查采取不记名方法，资料输入电脑进行统计分析，请您在填写过程中坦率反映您的真实情况。在填写问卷时请注意下列问题。

1. 回答问题除注明以外，一般每题只选一项在（ ）内打上“✓”。
2. 凡要求填写数字的问题，请按要求予以准确填上。
3. 每项右侧竖线旁的编码一栏，是供计算机输入用的，您不必填写。

谢谢您的热情合作！

一、您是哪一年迁入本址的？_____年

二、迁入本址前，您是

1. 本地农民（ ） 2. 浦西居民（ ）
3. 浦东城镇居民（ ） 4. 外省市居民（ ）
5. 其他（请注明）_____

三、目前与您住在一起有哪些家庭成员，您与他们相处得如何？

	是否住在一起		相处如何				
	是	否	很好	比较好	一般	不太好	不好
1. 配偶							
2. 父母							
3. 儿子							
4. 媳妇							
5. 女儿							
6. 女婿							
7. 兄弟姐妹							
8. 孙辈							
9. 亲朋好友							

四、您家目前的住房情况

房间_____间 总共_____平方米 人均_____平方米

五、您家的房屋属于哪类结构

1. 里弄（　　）2. 平房（　　）3. 新村（　　）4. 高层（　　）
5. 简屋（　　）6. 其他（请注明）_____

六、您家里有下列设施和家用电器吗？五年前有吗？

	五年前		目 前	
	有	没有	有	没有
1. 自来水				
2. 煤气／液化气				
3. 浴　室				
4. 厕　所				
5. 冷气／暖气				
6. 电视机				
7. 电冰箱				
8. 收录机				
9. 洗衣机				
10. 录像机				
11. 电　话				

七、在过去的五年中，您的生活中有没有发生过以下情况？

	有	没有
1. 搬家迁居		
2. 家庭成员减少		
3. 家庭聚会次数改变		
4. 与朋友、邻居联系次数改变		
5. 本人或家人上了大学		
6. 本人或家人调换工作单位		
7. 外出旅游		
8. 红白喜事操办方式变化了		

八、您认为下列各种事情，现在的状况与五年前相比，有没有变化？

	有很大改善	有些改善	差不多	较差	差得很多
1. 交通状况					
2. 社会治安状况					
3. 本人与家庭的经济状况					
4. 住房条件					
5. 居住地区邻近的商业网点					
6. 学校的教育条件与质量					
7. 社区对家庭提供的服务					
8. 邻里之间的互帮互助					
9. 社会上封建迷信的风气					
10. 浦东的文化设施					

九、您认为要使婚姻美满，下列因素重要吗？（对每项作判断）

	非常重要	有些重要	不太重要	完全不重要
1. 双方有共同的生活、活动及朋友				
2. 婚姻有爱情基础				
3. 婚后能维持相爱的感情				
4. 有孩子				
5. 对教养子女有一致看法				
6. 性生活和谐				
7. 夫妻间相互忠实，无外遇				
8. 对家庭理财、消费方式有一致看法				
9. 经济条件稳定				
10. 夫妻的教育、职业、家庭等背景相似				
11. 相互之间可以交谈沟通				
12. 彼此了解对方每天在干什么				
13. 家庭生活中有幽默感				
14. 能容纳对方的缺点				
15. 允许对方保留一块个人天地				

十、如果夫妻之间极难相处，但已有子女，您认为他们是否应该离婚？（选择一项）

1. 应该离婚（　　）　2. 不应离婚（　　）　3. 应先调解（　　）
4. 看孩子年龄（　　）　5. 其他（请注明）_____

十一、家庭中难免要发生一些纠纷，在您的亲戚朋友中，相对讲发生得较多的是哪些纠纷？（不超过五项）

1. 住房纠纷（　　）　2. 婆媳纠纷（　　）
3. 翁婿纠纷（　　）　4. 子女教育引起的纠纷（　　）
5. 日常支出中出现的纠纷（　　）　6. 赡养老人引起的纠纷（　　）
7. 娱乐方式引起的纠纷（　　）　8. 性格不同引起的纠纷（　　）
9. 财产纠纷（　　）　10. 生活方式引起的纠纷（　　）

十二、如发生了纠纷，一般是怎样解决的？（选择一项）

1. 家人自行协商（　　）　2. 请长辈或家中有权威者调解（　　）
3. 请居委或邻居调解（　　）　4. 找单位领导解决（　　）
5. 找司法部门解决（　　）　6. 其他（请注明）_____

十三、如果有机会让您重新选择工作，您最看重下列哪个择业标准？（选择一项）

1. 与个人兴趣相吻合（　　）　2. 表现个人才能机会多（　　）
3. 收入高（　　）　4. 空闲时间多（　　）
5. 工作轻松（　　）　6. 同事或上下级关系较好（　　）
7. 上下班交通便利（　　）　8. 晋升机会较多（　　）
9. 其他_____

十四、如果您在找工作时遇到困难，是否会到下列人员处请求帮忙？

	会	不会
1. 从未见过面的表兄妹		
2. 同住一个镇或一个村但从未见过面的人		
3. 同一个中学毕业但从未见过面的人		
4. 街道劳动服务所		
5. 区劳务管理中心职业介绍部		

十五、您同意下列说法吗？您的想法是受谁的影响的？

	同意与否					受谁影响					
	完全同意	有点同意	不大同意	完全不同意	说不清楚	父母教的	父母行为影响	大众传媒	学校教育	难说	其他
1. 只要你有钱，什么事都办得到											
2. 一个人不可以忘记别人给的恩惠											
3. 假如工作有需要可以对家人失信											
4. 为了社会，一个人该牺牲自己某些利益											
5. 人生在世，不过几十年，要尽量享受才有意思											
6. 如今在社会上，最要紧的是个人求温饱，不要管别人困难											
7. 尽量多挣钱，生活才能过得好，不必太顾虑赚钱手段											
8. 一般老百姓，只管多赚钱过好日子，不必去操心国家大事											
9. 赚钱应自己花，不必管家人											
10. 婚后最重要的是让孩子快乐，父母的生活不必过于关心											
11. 卡拉 OK，摇滚乐能带来刺激，青年人尽管享受，不必理会别人评价											
12. 青年男女搞两性乐趣是正常的，不必过多干涉											
13. 婚后有外遇，应准其离婚，不必阻拦											

十六、下列各种人，哪些像您，哪些不像您？

	我就是这样	我有点这样	我不是这样
1. 努力工作，求得晋升			
2. 不管困难有多大，也要在工作上有成就			
3. 希望在短期内出名			
4. 生活方式与众不同，是独特的			
5. 过的生活与一般人有所不同			
6. 生活得和别人一样是枯燥乏味的			
7. 享受人生比晋升更重要			
8. 即使没什么钱，只要快活无虑就满足了			
9. 只要眼前生活好，不用为将来打算			
10. 要做些事让很多人快乐			
11. 要为社会做些贡献			
12. 别人有困难应去帮忙			
13. 一切靠自己，别人靠不住			
14. 凡做事要由自己决定而不依赖别人			
15. 只要自己认准理，不必理会别人说三道四			
16. 有一项喜欢的运动或消遣，并经常去做			
17. 通过运动来消除紧张			
18. 穿时髦衣着来表现自己			
19. 舍得花钱和时间去买时髦衣着			
20. 一件新产品上市，会告诉别人或与人议论			
21. 有新影片上映或新书上柜会告诉别人或与人议论			

十七、您认为在单位中，一个好的领导该具备怎样的条件？在下列特点中选择三项您认为最重要的和三项您认为最不重要的。

	最重要	最不重要
1. 专业技术水平		
2. 公平对待职工		
3. 受职工们的尊敬和喜爱		
4. 工作态度严肃认真		
5. 外面关系多，人头熟		
6. 和同事以诚相见		
7. 决策果断		
8. 判断能力强		
9. 能为职工带来实利		
10. 资格老		
11. 背景硬		

十八、对下列的中国传统社会的价值观念，您认为哪些值得发扬，哪些应抛弃，哪些判断不准？

	值得发扬	应该抛弃	判断不准
1. 明哲保身			
2. 三从四德			
3. 勤劳节俭			
4. 中庸之道			
5. 父慈子孝			
6. 男女有别			
7. 子孙满堂			
8. 容忍礼让			
9. 光宗耀祖			
10. 重农轻商			
11. 以和为贵			
12. 仁义道德			
13. 顺从尊长			
14. 精忠报国			
15. 迎合上意			
16. 妇女贞节			
17. 己所不欲，勿施于人			
18. 礼尚往来			
19. 人不为己，天诛地灭			

十九、您的性别：

1.男（　　）　　2.女（　　）

二十、您的年龄：

1. 20岁以下（　　）　2. 20～29岁（　　）
3. 30～39岁（　　）　4. 40～49岁（　　）
5. 50～59岁（　　）　6. 60岁以上（　　）

二十一、您的职业：

1. 工　　人（　　）2. 公务人员（　　）3. 教师　　（　　）
4. 医务人员（　　）5. 科技人员（　　）6. 文艺工作者（　　）
7. 司法人员（　　）8. 个 体 户（　　）9. 军人　　（　　）
10.商服人员（　　）11.学　　生（　　）12.离退休人员（　　）
13.管理人员（　　）14.其　　他（请注明）_____

二十二、您的文化程度：

1.不识字（　　）　2.小学（　　）　3.初中（　　）
4.高　中（　　）　5.大学及大学以上　　（　　）

工場従業員調査調査票オリジナル

上海职工人生观、价值观、凝聚力调查问卷

尊敬的职工：

您好，近几年来，上海的改革开放取得了前所未有的进步，在计划经济向社会主义市场经济转变过程中，人们的人生观、价值观发生了深刻的变化，企业内部的人际关系、凝聚力也表现出与过去不同的特点，人们的生活水平也在逐步提高。我们想通过调查了解企业职工对于企业现状、社会现象有哪些想法，您的看法不存在对或错，您怎样想的，就怎样说，我们将对您提供的资料给予保密。衷心地希望您能回答问卷中列出的问题，并感谢您对我们工作的支持。

上海大学文学院社会学系
1997年1月

一、您的婚姻状况： a1　　个案编号

未婚 1.☐　已婚 2.☐　离婚或丧偶 3.☐　　1-4

二、无论您现在有无孩子，您认为养育孩子是为了什么，您是否同意下列说法：　　5

	1. 同意	2. 说不准	3. 不同意	
养育孩子是为了让家庭继续下去				6
养育孩子是为了对社会承担责任				7
养育孩子是要花钱的				8
养育孩子可以在将来帮助家庭经济				9
养育孩子是为了自己在年老后得到他们在经济上的帮助				10
养育孩子可以自己年老后在心理有一个依靠				11

三、如果夫妻之间极难相处，但已有子女，您认为他们是否应该离婚　　12

应该离婚 1.☐　不应离婚 2.☐　应先调解 3.☐

若孩子成年可离婚 4.☐　其他（请注明）_____ 5.☐

四、您认为现在青年人择偶中，下列因素哪三个起重要作用？

外貌 1.☐　文化程度 2.☐　职业 3.☐　　13-14

工作能力 4.☐　家庭经济条件 5.☐　家庭社会地位 6.☐　　15-16

志趣相同 7.☐　感情融洽 8.☐　道德高尚 9.☐　　17-18

爱情 10.☐　年龄 11.☐　其他（请说明）_____ 12.☐

五、如果一男一女相爱，在登记结婚前就同居了，您认为是否可以？

可以 1.☐　不可以 2.☐　其他（请说明）_____ 3.☐　19 __

六、每个人都期望婚姻美满，您是如何评价下列婚姻美满的因素，并对每种说法在"非常重要"到"完全不重要"中选择您认为恰当的答案：

	1. 非常重要	2. 有些重要	3. 不太重要	4. 完全不重要	
双方有共同的生活，活动及朋友					20 __
婚姻有爱情基础					21 __
婚后能维持相爱的感情					22 __
有孩子					23 __
对教养子女有一致的看法					24 __
性生活和谐					25 __
夫妻间相互忠实，无外遇					26 __
对家庭理财，消费方式有一致看法					27 __
经济条件稳定					28 __
夫妻的教育程度、职业、家庭等背景相似					29 __
相互之间能够交流沟通					30 __
彼此了解对方每天在干什么					31 __
家庭生活中有幽默感					32 __
能容纳对方的缺点					33 __
允许对方保留一块个人天地					34 __

七、现在不少青年人在恋爱时就发生性关系，您是如何看的？

这是个人私事，无须干涉 1.□ 只要有爱就可以了 3.□ 35 __

违反社会的道德观念，要反对 2.□ 无所谓 4.□

八、您认为父母年老是由子女照料，还是自己照料自己？

子女照料 1.□

父母自己照料 2.□ 36 __

拿不准 3.□

视具体情况而定 4.□

九、无论婚否，您认为自己结婚后，理想的居住方式是：

小夫妻独立居住 1.□ 和父母（公婆）共同居住 2.□ 37 __

和父母分开住，但离得近些 3.□

十、您现在的家庭居住方式是怎样的？

独立居住 1.□ 和父母（公婆）共同居住 2.□ 38 __

其他（请注明）_____ 3.□

十一、在您家里，是由谁管钱？

完全由妻子（母亲）管 1.□ 大部分由妻子（母亲）管 2.□

丈夫妻子（父母）共管 3.□ 大部分由丈夫（父亲）管 4.□ 39 __

完全由丈夫（父亲）管 5.□ 其他（请说明）_____ 6.□

十二、您家里的重大事务，例如购房、买家电等，一般是由谁决定的

妻子（母亲）决定 1.□ 丈夫（父亲）决定 2.□

夫妻（父母）商量决定 3.□ 家庭成员共同商量决定 4.□ 40 __

其他（请说明）_____ 5.□

十三、家庭中难免要发生一些纠纷，在您的亲戚朋友或左邻右舍中，最易发生或发生较多的纠纷是什么？（限选五项）

住房纠纷 1.□ 婆媳（翁婿）纠纷 2.□ 41-42 __ __

夫妻感情纠纷 3.□ 子女教育纠纷 4.□ 43-44 __ __

父母和子女纠纷 5.□ 日常生活支出中的纠纷 6.□ 45-46 __ __

赡养老人中的纠纷 7.□ 娱乐方式引起的纠纷 8.□ 47-48 __ __

生活方式引起的纠纷 9.□ 性格不合引起的纠纷 10.□ 49-50 __ __

财产纠纷 11.□

十四、有些人希望子女有所成就，有些人希望子女做个清清白白的好人，您认为两者相比哪个更重要？ 51 __

事业成就 1.□ 做个清清白白的好人 2.□

十五、做人是做男人好，还是做女人好？

做男人好 1.□　　做女人好 2.□　　52 __

无所谓 3.□

十六、假如您有一笔存款，您打算派什么用场？（限选一项）

购买高档消费品 1.□　　子女结婚 2.□

子女教育 3.□　　购房或造房 4.□　　53 __

备急用 5.□　　吃利息 6.□

其他（请说明）_____ 7.□

十七、您认为教养孩子中的两个方面，哪个更重要？

让孩子尽量自由发展 1.□　　教导孩子懂规矩 2.□　　54 __

十八、下面两种看法，您同意哪一种？

为了维护公众利益，即使牺牲个人利益也应该 1.□　　55 __

为了维护个人利益，即使牺牲公众利益也应该 2.□

十九、对下列中国传统社会的价值观念，您认为哪些值得发扬，哪些应该抛弃，哪些还说不准？

	1. 值得发扬	2. 说不准	3. 应该抛弃	
明哲保身				56 __
三从四德				57 __
勤劳节俭				58 __
中庸之道				59 __
父慈子孝				60 __
男女有别				61 __
子孙满堂				62 __
容忍礼让				63 __
光宗耀祖				64 __
重农轻商				65 __
以和为贵				66 __
仁义道德				67 __

（转下页）

	1. 值得发扬	2. 说不准	3. 应该抛弃	
顺从尊长				68 __
精忠报国				69 __
迎合上意				70 __
好女贞节				71 __
礼尚往来				72 __
己所不欲，勿施于人				73 __
人不为己，天诛地灭				74 __

二十、您觉得人性是善还是恶？ 75 __

人性本来是善 1.□　　人性本来是恶 2.□

人性有善的一面，也有恶的一面 3.□

人性无所谓善和恶 4.□

二十一、人们对法律有两种看法，您觉得哪一种对您更重要？ 76

法律能让一般人相安相处 1.□

法律给社会带来公平正义 2.□

二十二、您认为公家的事情应该让一些有影响，有经验的人说了算，还是应该让大家参加讨论？ 77 __

让有影响、有经验的人说了算 1.□

让大家参加讨论 2.□

二十三、您愿选谁为领导？ 78 __

年高德劭的 1.□　　年轻有为的 2.□

随便哪一个都行 3.□

二十四、您对以下的人是同情（赞成）还是不同情（不赞成）？

	1. 同情或赞成	2. 不同情或不赞成	
辞去稳定工作去开办新行业的人			79 –
辞去稳定工作去寻找新职业的人			80 –
为赚很多钱而不惜有时违反法令的人			81 –
那些相信只要彼此相爱即使婚外恋也无妨的人			82 –
对西方摇滚乐和爵士乐疯狂的人			83 –
喜欢看黄色和色情杂志或小说的人			84 –
喜欢看色情和暴力录像或电影的人			85 –
没有固定职业而随心所欲打临时工的人			86 –
为了成名而不择手段的人			87 –
赚了大钱而摆阔的人			88 –
喜欢打麻将和赌博的人			89 –
同性恋者			90 –
经常吸毒的人			91 –

二十五、您认为人是否要有宗教信仰？

是 1.☐　　否 2.☐　　不清楚 3.☐　　92 –

二十六、某人一生不得志，您认为他是由于：

努力不够 1.☐　　别人待他不公 2.☐　　93 –

命不好 3.☐

二十七、您认为您应该在适当的机会向别人表现自己的能力还是让别人来发现？

表现自己的能力 1.☐　　让别人来发现 2.☐　　94 –

其他（请说明）_____ 3.☐

二十八、您认为以下何者更主要？

珍惜时间尽力工作 1.☐　　人生短暂及时享受 2.☐　　95 –

二十九、您生活中最想得到的是什么？（限选五项）

工作成就	1.☐	生活富足	2.☐	家庭温暖	3.☐	96-97 --
报效国家	4.☐	知己友谊	5.☐	知识文化	6.☐	98-99 --
文凭学位	7.☐	真正爱情	8.☐	和睦相处	9.☐	100-101 --
子女成才	10.☐	出国深造	11.☐	开创事业	12.☐	102-103 --
冒险进取	13.☐	建房或购房	14.☐			104-105 --

二十、下列各种情况，哪些象您，哪些不象您？

	1. 我就是这样	2. 我有点这样	3. 我不是这样	
努力工作，求得晋升				106 __
不管困难有多大，也要在工作上有成就				107 __
希望在短期内出名				108 __
生活方式与众不同，是独特的				109 __
过的生活与一般人有所不同				110 __
生活枯燥无味				111 __
享受人生比晋升更重要				112 __
即使没什么钱，只要快活无忧就满足了				113 __
只要眼前生活好，不用为将来打算				114 __
要做些事让很多人快乐				115 __
要为社会做些贡献				116 __
别人困难应去帮忙				117 __
一切靠自己，别人靠不住				118 __
凡做事要由自己决定而不依赖别人				119 __
只要自己认准理，不必理会别人说三道四				120 __
有一项喜欢的运动或消遣，并经常去做				121 __
通过运动来消除紧张				122 __
穿时髦衣着来表现自己				123 __
舍得花钱和时间去买时髦衣着				124 __
一件新产品上市，会告诉别人或与人议论				125 __
有新影片上映或新书上柜会告诉别人或与人议论				126 __

二十一、您是否相信您今后的生活将越来越好？ 127 __

是 1.□　　否 2.□　　说不准 3.□

二十二、您认为在现在社会上影响人与人之间的关系主要是什么？

（限选一项） 128 __

友谊 1.□　　公众利益 2.□

情面 3.□　　金钱 4.□

地位 5.□　　其他（请说明）_____ 6.□

三十三、在中国社会中，面子很重要，您是怎样看待的？ 129 __

面子非常重要 1.□　　面子比较重要 2.□

面子有点重要 3.□　　面子不太重要 4.□

面子一点也不重要 5.□

三十四、如果您有一个困难，按正常途径要拖很长时间才能解决，而且结果不一定满意，您是否认为应该先通通关系呢？ 130 __

应该先通通关系 1.□　　不应通关系 2.□

不清楚 3.□　　视情况而定 4.□

三十五、假如您能再出生一次，您是要做男人，还是要做女人？ 131 __

做男人 1.□　　做女人 2.□

三十六、您是否有这样的想法：我可能会下岗或失业？ 132 __

是 1.□　　否 2.□　　很难说 3.□

三十七、您是否同意下列说法，您的想法主要是受谁的影响？

	同意与否					受谁影响						
	1. 很同意	2. 同意	3. 说不准	4. 不同意	5. 很不同意	1. 父母教育	父母行为影响	3. 大众传媒	4. 学校教育	5. 理论	6. 其他	
只要你有钱，什么事都办得到												133-134
一个人不能忘记别人给予的恩惠												135-136
假如工作需要，可以失信于家人												137-138
为了社会，个人应牺牲自己的利益												139-140
生命苦短，理应及时行乐												141-142
在如今社会上，最要紧的是个人求温饱，不要去管他人困难												143-144
人不为己，天诛地灭在现在仍有意义												145-146
只要多挣钱，生活过得好，可以不择手段												147-148
老百姓只管多赚钱，过好日子，不必去操心国家大事												149-150
挣钱应自己花，不必管家人												151-152
婚后最重要的是让孩子快乐，父母生活不必过于关心												153-154
卡拉OK摇滚乐能带来刺激青年人尽管享受，不必理会别人评价												155-156
青年男女追求性快乐是正常的，不必过多干涉												157-158
婚后有外遇，应准其离婚，不必阻拦												159-160

三十八、您是怎样对待工作的？

想做多少，就做多少 1.☐　　别人做多少我也做多少 2.☐

比别人稍多做些 3.☐　　尽量比别人多做些 4.☐　　161

按照规定的工作量去做 5.☐

三十九、您对目前的工作满意吗？ 162

很满意 1.□　满意 2.□　很难说 3.□
不满意 4.□　很不满意 5.□

四十、您喜欢哪一种工作？（限选一项） 163 __

枯燥但报酬高的工作 1.□
有乐趣但报酬较低的工作 2.□

四十一、如果有机会重新选择工作，您将以什么为首要标准？（限选一项） 164 __

关趣 1.□　表现才能的机会多 2.□
收入高 3.□　业余时间多 4.□
关系较好 5.□　晋升机会多 6.□
其他（请说明）_____ 7.□

四十二、在下列晋级标准中，请您各选择两项您认为最重要和最不重要的晋级标准。

	最重要	最不重要
1. 工作勤奋努力		
2. 表现出色		
3. 同事关系好		
4. 上下级关系		
5. 热心为大家服务		
6. 认真学习政治		
7. 资历高		

165-166 __ 167-168 __

四十三、您觉得在厂里工作晋升机会如何？ 169 __

机会很多 1.□　机会一般 2.□
机会很少 3.□　机会几乎没有 4.□

四十四、您觉得厂里对工人的晋升心理如何？ 170 __

很公平 1.□　公平 2.□　很难说 3.□
不公平 4.□　很不公平 5.□

四十五、如果和您合作的一位职工懒惰不肯干活，您怎么办？ 171 __

向上级报告 1.□　劝劝他 2.□
大家都不做 3.□　帮他干活 4.□
听其自然 5.□

四十六、您认为您的同事最应具备下列哪种特点？（限选一项） 172 __

待人友好，容易相处 1.□　责任心强，完成本职工作 2.□
品格高尚，受人尊敬 3.□

四十七、您和班组中的同事相处如何？

非常好 1.□　比较好 2.□　一般 3.□　173 __

不太好 4.□　很不好 5.□

四十八、您和班组组长或领班（工段长）相处如何？

非常好 1.□　比较好 2.□　一般 3.□　174 __

不太好 4.□　很不好 5.□

四十九、您认为一个单位的好领导应该具备什么条件？请您在下列条件中分别选择您认为最重要的和最不重要的三个条件。

	最重要	最不重要	
1. 专业技术水平			
2. 公平对待职工			175-176 ____
3. 受职工尊敬喜爱			177-178 ____
4. 工作态度严肃认真			179-180 ____
5. 外面关系多，人头熟			181-182 ____
6. 和同事以诚相见			183-184 ____
7. 决策果断			185-186 ____
8. 判断能力强			
9. 能为职工带来实利			
10. 资格老			
11. 背景硬			

五十、根据您的体会，请对下列说法作出正确的回答：

	1. 是	2. 很难说	3. 否	
我和同事在工作中能相互帮助				187 __
当我生病时，同事会来探望我				188 __
领导（主任、科长）经常和我聊天				189 __
班组（科室）总有我看不顺眼的人				190 __
当我遇到困难时，能等到同事的帮助				191 __
班组（科室）总有人与我过不去				192 __
遇到矛盾时，同事间能协商解决				193 __
我信赖我的领导				194 __
在班组（科室）讲话要当心有人传话				195 __
同事之间往往在背后议论他人				196 __

二十一、如果您的企业发生重大生产事故，遭受重大损失，您的心情如何？

感到痛惜 1.□　　其他企业也有这种情况，无所谓 2.□　　197 __

反正是公家的，跟我无关 3.□　　企业受损如同自己家受损 4.□

二十二、同事在企业中有违反企业制度行为，您将如何对待？

向上级反映 1.□　　当面批评 2.□　　196 __

不理不睬 3.□　　其他（请说明）_____ 4.□

二十三、根据贵企业的经营情况和前景，假如你的子女无论在能力、教育程度都跟您相似，并且子女的工作完全由您决定，您是否愿意让他在您的企业中工作？　　199 __

是 1.□　　否 2.□

二十四、您是否同意下列说法，并根据同意与否的程度作出回答。

	1. 很同意	2. 同意	3. 很难说	4. 不同意	5. 很不同意	
我愿意尽心尽力为本企业工作						200 __
我常常对亲友赞扬我的企业						201 __
为了在本企业工作，我愿做任何事						202 __
我很关心本企业的前途						203 __
我如果一直在本企业工作，我将一事无成						204 __
我后悔到本企业工作						205 __
如果有机会，我要调离本单位						206 __
在本企业，我的才能得到发挥						207 __
企业的很多决策和我的想法是一致的						208 __
我知道企业今年应该完成的任务						209 __

五十五、您在厂里工作一天回来后，心情如何？

没什么特别心情 1.☐　做一天和尚撞一天钟 2.☐　210 __

有点辛苦，但工作有意义 3.☐　平平淡淡，没什么意思 4.☐

其他（请说明）_____ 5.☐

五十六、您认为您现在收入和您单位一般工人相比是：

比一般工人好得多 1.☐　比一般工人好一些 2.☐　211 __

和一般工人差不多 3.☐　比一般工人差一些 4.☐

比一般工人差很多 5.☐

五十七、a. 性别：　男 1.☐　女 2.☐　212 __

b. 年龄 _____ 周岁　213-214 ___

c. 教育程度：

小学及以下 1.☐　初中 2.☐　215 __

高中（中专）3.☐　大专及以上 4.☐

d. 职业：

企业主要负责人 1.☐　部门主要负责人 2.☐　216 __

普通职员 3.☐　专业技术人员 4.☐

普通工人或职工 5.☐　其他（请说明）_____ 6.☐

e. 企业性质：

国有单位 1.☐　集体企业 2.☐　217 __

中外合资企业 3.☐　其他（请说明）_____ 4.☐

f. 1996年平均每月个人收入大致是：

<300元 1.☐　301--400元 2.☐　218 __

401--500元 3.☐　501--1000元 4.☐

1001--1500元 5.☐　1501--2000元 6.☐

2001--2500元 7.☐　2501--3000元 8.☐

>3001元 9.☐

g. 您是从 _____ 年到本厂工作的。　219-220 ___

谢谢合作！

调查对象姓名 _____　电话 _____

调查时间 _____　调查员姓名 _____

連絡
〒226-0015
横浜市緑区三保町３２
東洋英和女学院大学
飽　戸　　弘